東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

活動報告書
2020-2021

東京大学 高齢社会総合研究機構
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

機構長ごあいさつ
個人と地域の両面からの
産学官民協働まちづくり戦略 …… 01

IOGとは …… 02

IOGメンバー …… 08

リサーチビジョン …… 13

個別研究プロジェクト …… 30

産学連携プロジェクト …… 64

Special Session 産業界×IOG
アカデミアと産業界が共創する高齢社会の未来 …… 65

IOGの業績 …… 96

WINGS-GLAFS …… 124

インフォメーション …… 146

個人と地域の両面からの産学官民協働まちづくり戦略

「人生100年時代」と言われる中で、どの世代の方々にも、日々の生活を通して生きがいと幸せを感じてもらえる人生を送って頂きたい。また、老いは避けられない中で、健康長寿を実現し、自助・互助が軸となる地域づくりが全国で展開され、個々の国民が生き切った人生を送れるようにするために、地域社会を実情に合った形で再構築していきたい。それらを実現するためには、なぜこのような状況に陥っているのかという現状評価や課題認識、さらには仮説設定も求められます。一方で、先を見据えた将来（未来）ビジョンをクリアに描き、そこにエネルギッシュに推し進めていくパワーとパッションも必要でしょう。

我々、東京大学高齢社会総合研究機構（Institute of Gerontology：IOG）は、分野横断型の学際的な総合知を活かし、全国の数多くのモデルフィールドを持ちながら、まさに社会地域連携を基盤とする課題解決型実証研究（アクションリサーチ）を展開しております。

わが国の加速する少子高齢化を背景とし、地域社会およびそこに住む国民一人ひとりのあるべき姿の将来ビジョンを描き、産官学民協働でネットワークを構築し、総合的な知識を体系的に体得して、「エビデンスに基づく政策提言」、さらには「新たなビジネスモデルのチャレンジも可能にする住民主体の活力あるまちづくり」を戦略的に狙っていく研究に取り組んでおります。

今回は「2020−2021年」の活動報告書として、様々な出来事のあった2年間だったと振り返ります。2020年春に新機構長として着任し、IOGがまさに連携研究機構へと改組しました。そこには未来ビジョン研究センターと先端科学技術研究センターの新たな仲間も新規に参画して頂きました。元々ジェロントロジー分野の産学連携には力を入れてきましたが、さらに質を高めるべく、「ジェロントロジー・アカデミー」の開設も行い、多くの産業界の方々と学び、交流を深めております。そして、IOGが新たな一歩を踏み出す同時期に、まさにコロナ・パンデミックと直面することとなり、このコロナ禍で悩みながらも、創意工夫を重ねてきた2年間であったのでしょう。また、全学としてはUTokyo Compassも2021年9月に公表され、その打ち出された方向性に対して、我々IOGは幅広い視点で貢献できていると自負しております。

最後に、IOGの地域連携は、すでに100か所を超える自治体との連携となっており、研究者が集っているだけではなく、全国に数多くの行政メンバーや一般地域住民と、そして産業界も数多くの企業様がジェロントロジーの一員となって下さっており、全員でビジョンを共有しています。まさに「産学官民協働を軸とするジェロントロジー・ファミリー」により、多角的かつ立体的に超高齢社会の課題解決を取り組んでおります。我々の研究成果をより多くの方々に知っていただき、ともに考え、そして新しい日本を創る一助となれば幸いです。

東京大学 高齢社会総合研究機構 機構長
東京大学 未来ビジョン研究センター 教授
飯島 勝矢

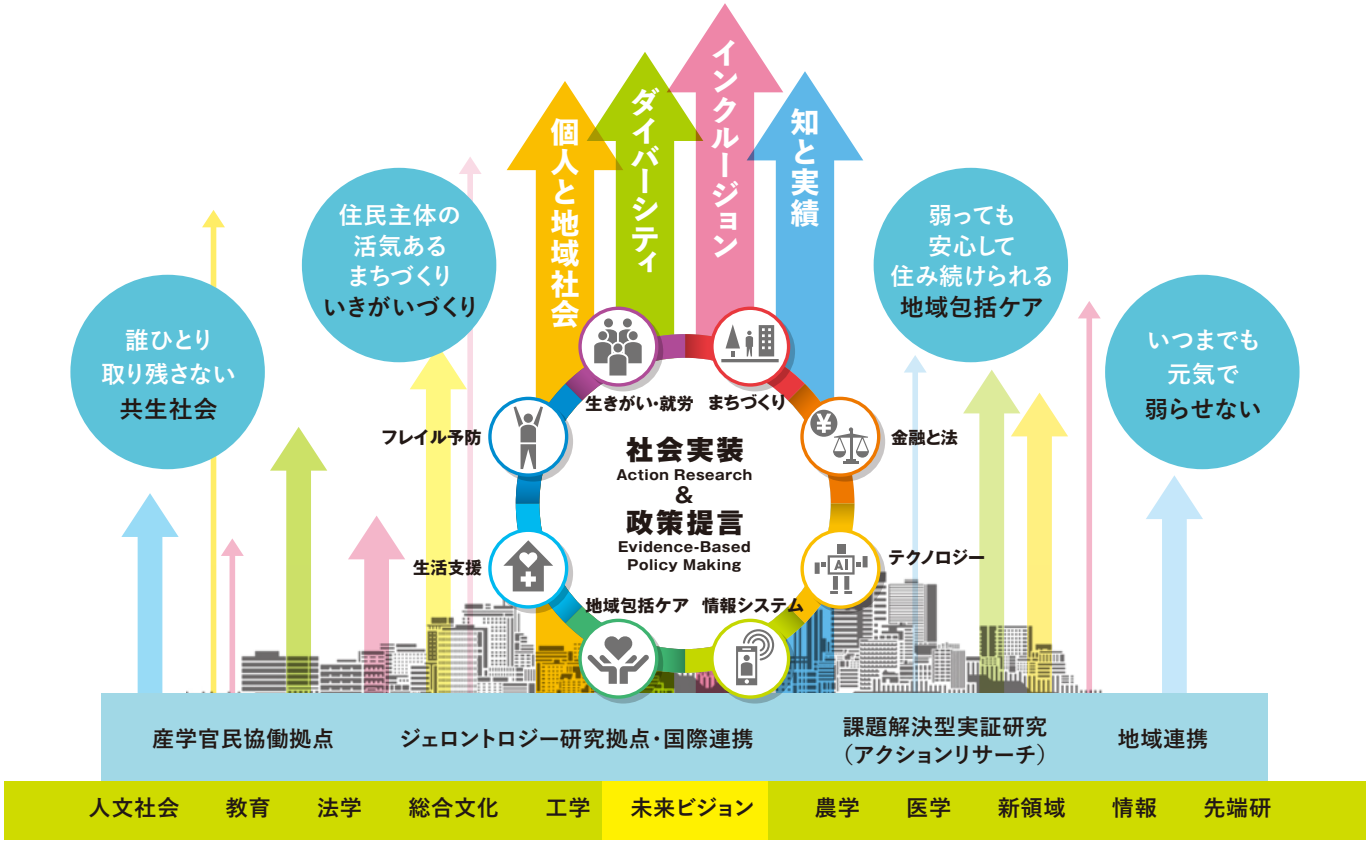
地域活力と多様性のある
高齢化社会の実現に向けて

Gerontology（ジェロントロジー）すなわち「個（個人のエイジング：加齢）」と「地域社会」の両面から諸問題の解決に取り組むために、学際的・総合的・実践的な知の体系【総合知】を創成し、分野横断型の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）によって新たな知識と技術を地域社会に還元/実装する研究機構。

少子高齢化を基盤とする超高齢社会に対して、新たな地域社会の在り方をエビデンスベースの政策提言も行います。

また、地域連携・産官学民協働・国際連携にも重きを置き、その卓越性のある総合知から変革を駆動できるジェロントロジー研究拠点として、「地域活力のある、及び多様性のある超高齢社会の実現」に向けて国内外に発信することを目指します。

“Chōju” と “Ikigai” を自己実現できる新たな価値を感じる地域コミュニティを



ビジョンおよびミッション

Gerontology（ジェロントロジー）すなわち「個（個人のエイジング：加齢）」と「地域社会」の両面から諸問題の解決に取り組むために、学際的・総合的・実践的な知の体系【総合知】を創成し、分野横断型の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）によって新たな知識と技術を地域社会に還元/実装する研究機構。
少子高齢化を基盤とする超高齢社会に対して、新たな地域社会の在り方をエビデンスベースの政策提言も行います。
また、地域連携・産官学民協働・国際連携にも重きを置き、その卓越性のある総合知から変革を駆動できるジェロントロジー研究拠点として、「地域活力のある、及び多様性のある超高齢社会の実現」に向けて国内外に発信することを目指します。

アクションリサーチ

IOGは全国各地の地域社会でアクションリサーチを行い、エビデンスに基づく知識と技術を還元・実装して高齢化社会全体の課題解決を目指しています。

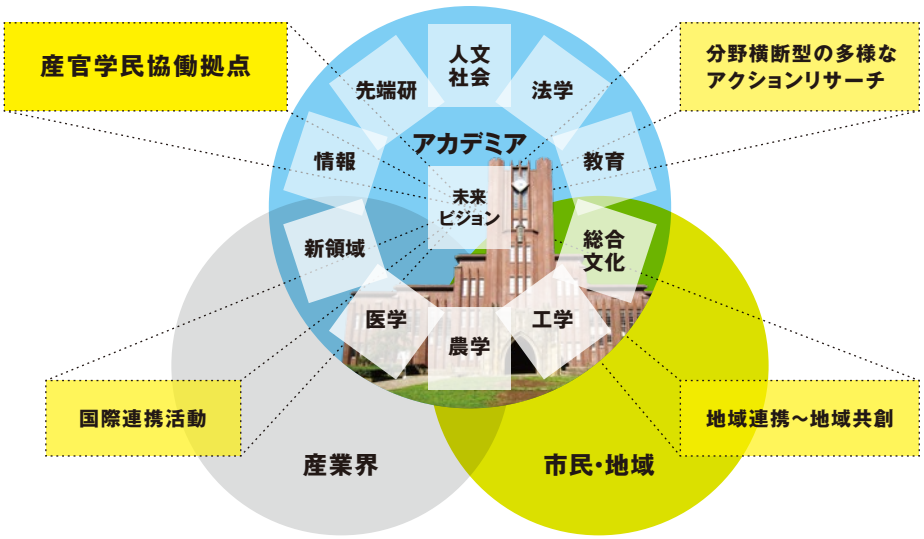
IOGの研究領域

IOGでは下記の8つのテーマを掲げています。各プロジェクトでは複数のテーマを横断しながら研究活動を行っています。

IOGの研究基盤

IOGは東大の9研究科・2センターの知を結集し、産学官民（産業界／地域・市民／行政）連携で超高齢社会の諸課題に分野横断で取り組んでいます。多様な学問領域を融合した研究基盤を生かして、全国のモデル自治体と協働して社会課題の解決に向けた実証研究（アクションリサーチ）を行うなど、その活動は多くの成果を上げてきました。それらの研究成果を社会に還元することにより、SDGsの目標達成やSociety5.0の実現に貢献し、持続可能な社会の形成を目指しています。

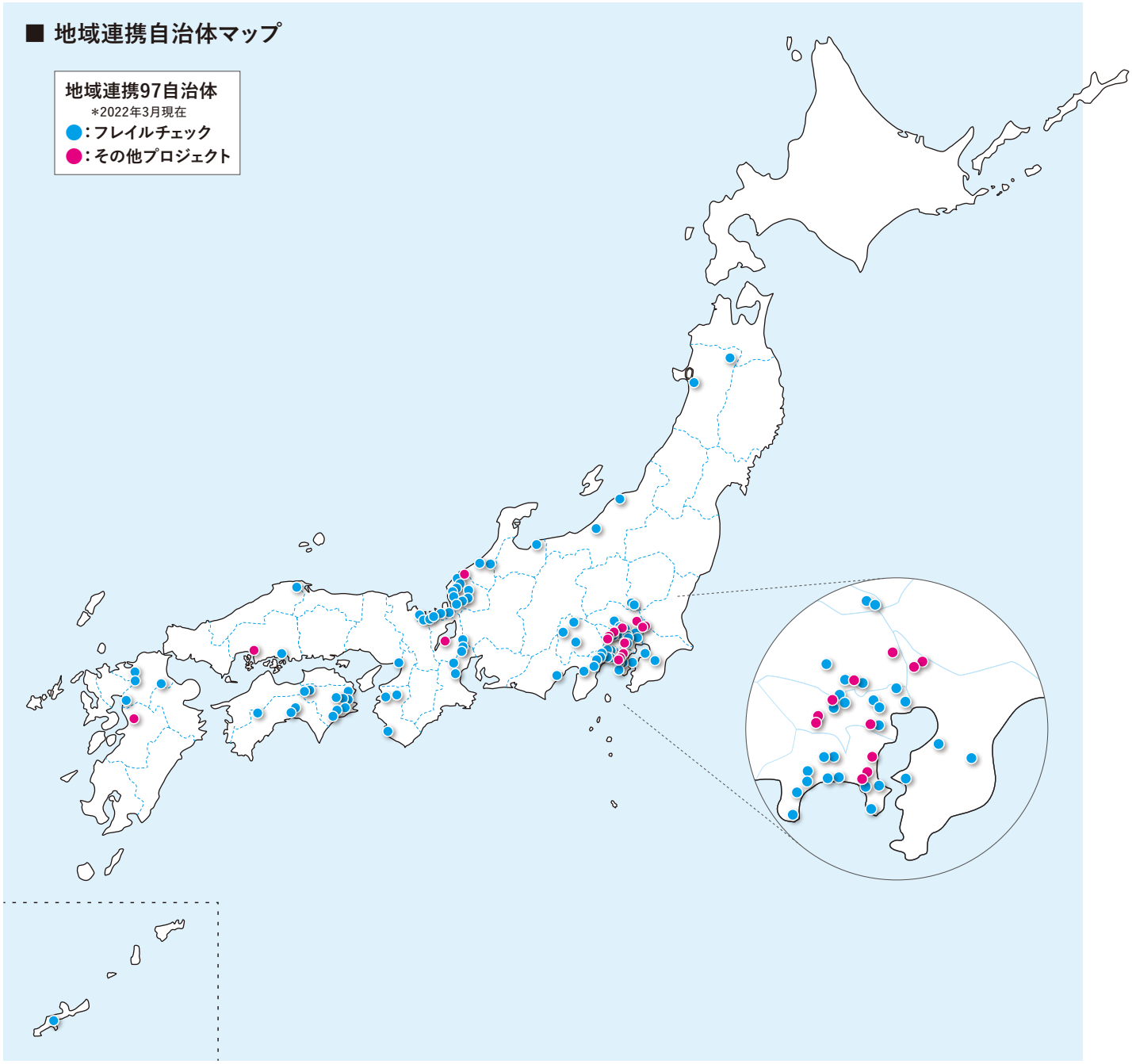
■IOGの研究・組織基盤



IOGの地域連携プロジェクト

IOGは全国各地の自治体と連携して、フレイル予防に関するアクションリサーチやフレイルチェックなどの啓発活動、高齢社会に対応したまちづくりなど、さまざまなプロジェクトを推進しています。

■ 地域連携自治体マップ



■ IOGと地域連携プロジェクトに取り組んでいる主な自治体

秋田県秋田市、群馬県、千葉県柏市、神奈川県、神奈川県鎌倉市、福井県、滋賀県近江八幡市

超高齢大国という未曽有の状況のなか フロントランナーとして社会を革新する

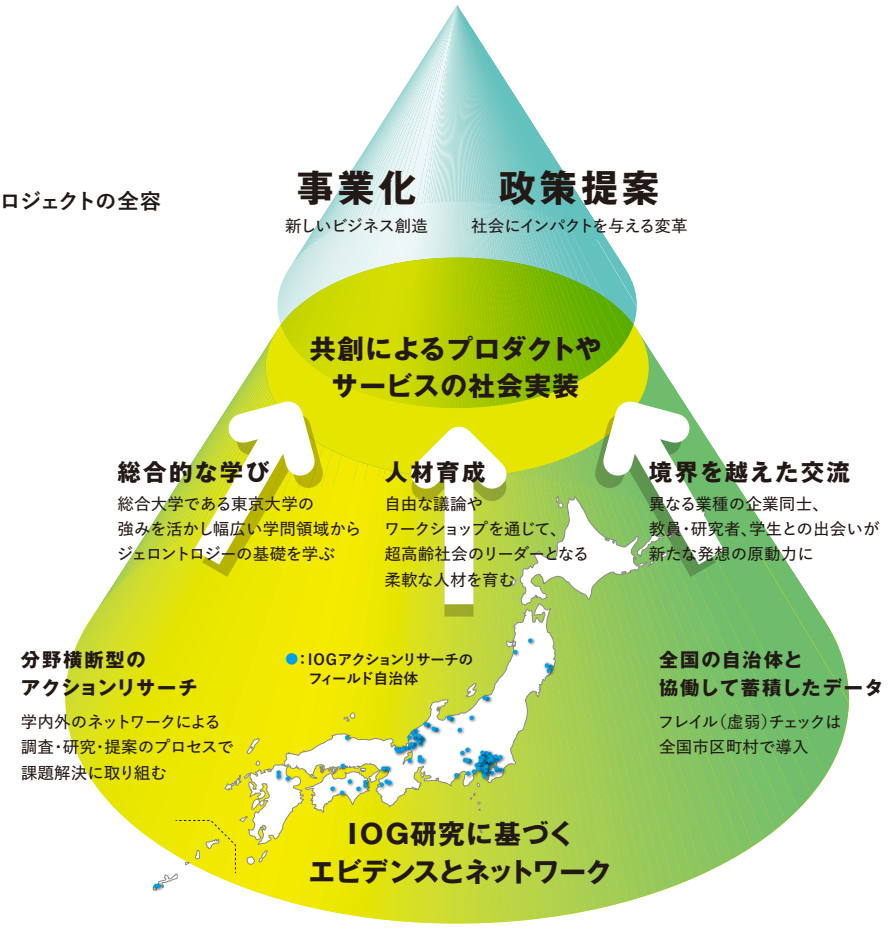
日本は有史以来、人類が経験したことのない超高齢大国というフェーズに突入しました。世界に先駆けて高齢化した私たちの社会には範とするべき前例がなく、新しい社会システムへの道を自ら切り拓く必要があります。

私たちIOGは、アクションリサーチによる研究成果に基づいて政策提言を行うとともに、共同研究のパートナーである企業がプロダクトやサービスを事業化して、より早く広く社会実装することを目指しています。全国各地の自治体や地域住民との連携と並んで、産学連携プロジェクトによるさまざまな個別テーマの研究は、IOGが注力している柱の一つです。今後、多くの国々が直面する超高齢化のフロントランナーとして社会を革新し、最適化するための知見を産官民学で共有することが、豊かな未来へと続く道にほかなりません。

IOGの産学連携プロジェクトが参加企業にもたらす価値

IOGは豊かな超高齢社会を目指して社会システムのイノベーションや新たなライフスタイルへのシフトを実現すべく学際的な調査・研究に取り組んでいます。「最先端の総合知」が境界を超えて結集し、全国各地の自治体と協働して行っている課題解決型実証研究（アクションリサーチ）の成果は、IOGの大きな資産です。IOGの産学連携プロジェクトに参加する企業は、ジェロントロジーという総合的な新しい学問を学び、まさに地域実装も含んだ アクションリサーチの現場を体験し、新規のビジネスモデル創生にチャレンジする機会を得ることができます。本プロジェクトでの協働そして挑戦は、超高齢社会において成長を持続し、事業を通じて社会に貢献しようとする企業に大きな価値をもたらします。

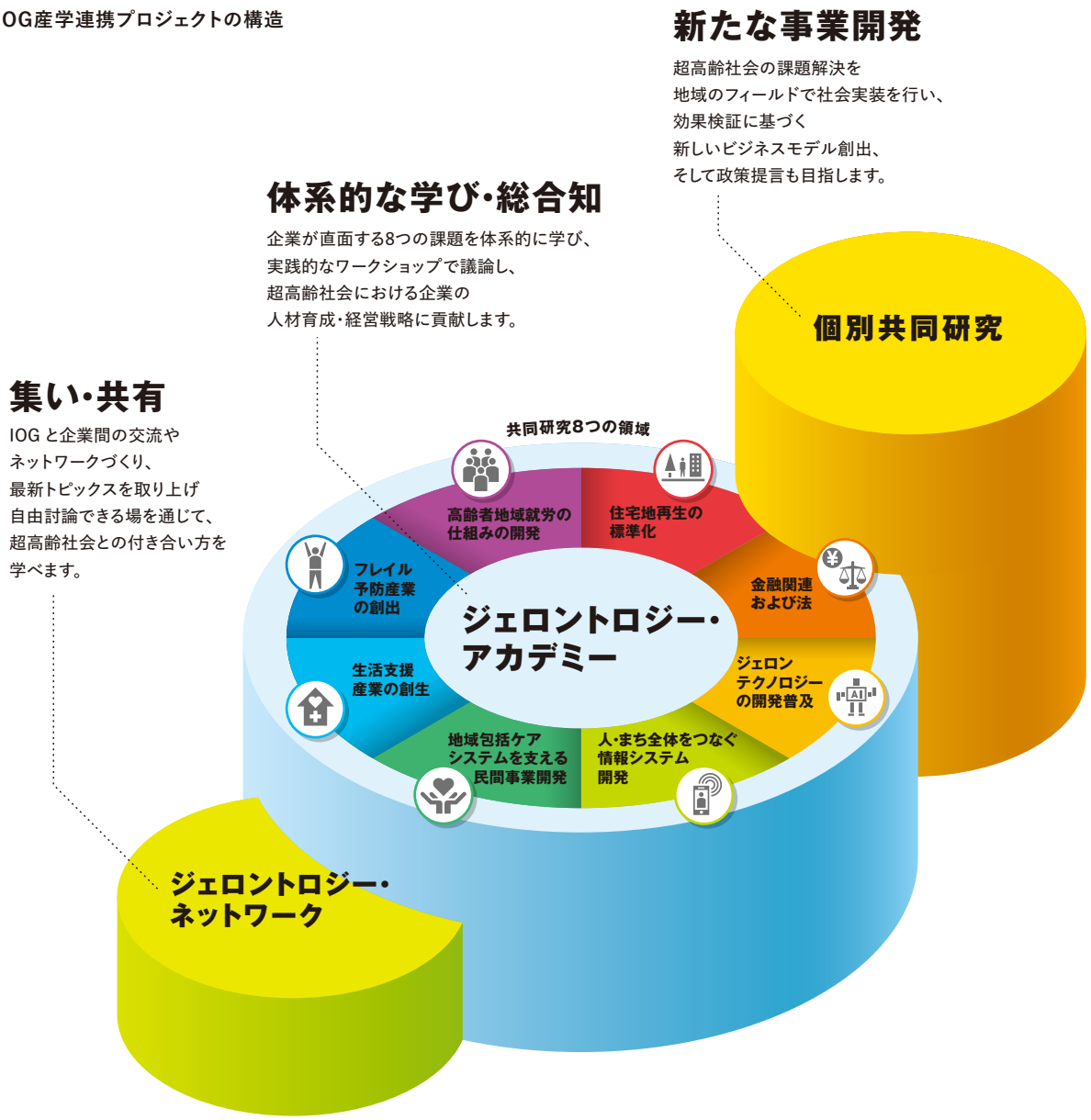
■東大IOG産学連携プロジェクトの全容



IOGの産学連携プロジェクトには3つのステージがあります

世界に先駆けて超高齢化する日本でトップランナーになるために東大教員と交流し、分野・業種の枠を超えた企業間のネットワークを生む「ジェロントロジー・ネットワーク」。学問分野を越境する8つのテーマから超高齢社会に取り組む「ジェロントロジー・アカデミー」。さらに、研究の社会実装・効果検証により政策提言までをも目指す「個別共同研究」では、個々の企業の課題に沿って研究テーマを設定し、より強固なパートナーシップで取り組みます。ネットワークから、アカデミー、そして個別共同研究へとステップアップして、よりインパクトの高い研究開発を行うことが目的です。

■東大IOG産学連携プロジェクトの構造



IOGメンバー

コアメンバー

＊:研究戦略会議メンバー　五十音順(氏名または出向元)　2022年3月1日現在

飯島 勝矢*

高齢社会総合研究機構 機構長
未来ビジョン研究センター 教授
専門：老年医学、在宅医療、虚弱予防、医学教育

大月 敏雄*

高齢社会総合研究機構 副機構長
大学院工学系研究科 建築学専攻 教授
専門：建築計画、住宅計画

祐成 保志*(2021年度より副機構長)

高齢社会総合研究機構　副機構長
大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 准教授
専門：社会学

二瓶 美里*

大学院新領域創成科学研究科 人間環境学専攻 准教授
専門：生活支援工学、リハビリテーション工学

檜山　敦*

先端科学技術研究センター 身体情報学分野 特任教授
専門：統合現実感、ヒューマンインターフェース、
ジェロンテクノロジー

松田 雄二*

大学院工学系研究科 建築学専攻 准教授
専門：建築計画

菅原 育子*(2020年度)

未来ビジョン研究センター　特任講師
専門：社会心理学、社会老年学

孫　輔卿*

未来ビジョン研究センター 特任講師
専門：老年医学

秋山 弘子

未来ビジョン研究センター 客員教授
東京大学名誉教授
専門：老年学

辻　哲夫

未来ビジョン研究センター 客員研究員
専門：在宅医療、ケア政策、社会保障政策

田中 敏明

先端科学技術研究センター 特任研究員（シニアアドバイザー）
専門：福祉工学、理学療法学、人間工学、病態運動学

梅本 大輔

先端科学技術研究センター 特任研究員
専門：住まい環境計画、コミュニティ再生

高瀬 麻以

特任研究員
専門：海洋科学、分子生物学、臨床栄養学

田中 友規

特任研究員
専門：老年医学、健康マネジメント学
テーマ：フレイル予防

中村 美緒

新領域創成科学研究科 特任研究員
専門：福祉用具学、生活リハビリテーション

藪 謙一郎

先端科学技術研究センター 特任研究員
専門：福祉工学、音声信号処理、情報支援機器、
バリアフリー

担当分野：生きがい・就労　フレイル予防　生活支援　地域包括ケア　情報システム　テクノロジー　金融と法　まちづくり

コアメンバー

五十音順(氏名または出向元)　2022年3月1日現在

神谷 哲朗

学術専門職員
専門：ケア政策、在宅医療、虚弱予防

田中 康夫

学術専門職員
専門：産学連携

松本 佳子（2020年度）

学術専門職員
専門：健康社会学、在宅ケア

吉田 涼子

学術専門職員
専門：リビングラボ研究

乾　裕之

(イオン株式会社より出向)
学術専門職員
専門：産学連携、虚弱予防

遠藤 良顕（2020年度）

(春日部市より出向)
学術専門職員
専門：政策形成

関根 伸弘（2021年度）

(春日部市より出向)
学術専門職員
専門：政策形成

細萱 一立（2021年度）

(鎌倉市より出向)
学術支援職員
専門：社会福祉政策

沖田 征也（2020年度）

(呉市より出向)
学術支援職員
専門：社会福祉政策

礒本 勇人（2021年度）

(呉市より出向)
学術専門職員
専門：社会福祉政策

鶴岡 佑樹

(日本年金機構より出向)
学術専門職員
専門：社会保障政策

中村 達也（2021年度）

(日本年金機構より出向)
学術専門職員
専門：社会保障政策

小林 寛範（2020年度）

(東大阪市より出向)
学術専門職員
専門：社会福祉政策

井上 結梨（2020 年度）

(東大和市より出向)
学術専門職員
専門：社会福祉政策

久保　梢（2021年度）

(東大和市より出向)
学術専門職員
専門：社会福祉政策

佐藤 雄太

(富士見市より出向)
学術専門職員
専門：社会福祉政策

担当分野：生きがい・就労　フレイル予防　生活支援　地域包括ケア　情報システム　テクノロジー　金融と法　まちづくり

コアメンバー

五十音順(氏名または出向元)　2022年3月1日現在

川村　淳

(株式会社ロッテより出向)
学術専門職員
専門：食品科学

榊原 拓磨

(株式会社NTTドコモより出向)
共同研究員
専門：産学連携、情報通信

内山 奈美

(キユーピー株式会社より出向)
協力研究員
専門：産学連携、食品科学、虚弱予防

永谷 美幸

(サンスター株式会社より出向)
協力研究員
専門：口腔保健学

田中 紀之

(大和ハウス工業株式会社より出向)
協力研究員
専門：居住計画、住宅地再生

泉　綾子（2020年度）

(株式会社フードケアより出向)
協力研究員
専門：食品科学、栄養学

高木 麻祐子

(株式会社フードケアより出向)
協力研究員
専門：食品科学、栄養学

事務局

五十音順　2022年3月1日現在

名和 淳子	学術専門職員
福田 綾子	学術専門職員
宮原 章子	学術専門職員
林 奈美子	特任専門職員
大屋　綾	事務補佐員
櫻井 絵里	事務補佐員
関野 友子	事務補佐員
井口 智子	事務スタッフ
瀧川 明子	事務スタッフ

担当分野：生きがい・就労　フレイル予防　生活支援　地域包括ケア　情報システム　テクノロジー　金融と法　まちづくり

参画教員

＊:運営委員　2022年3月1日現在

飯島 勝矢＊
高齢社会総合研究機構 機構長
未来ビジョン研究センター 教授

大月 敏雄＊
高齢社会総合研究機構 副機構長
大学院工学系研究科 建築学専攻 教授

祐成 保志＊
高齢社会総合研究機構　副機構長
大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 准教授

染谷 隆夫
大学院工学系研究科 研究科長
大学院工学系研究科 電気系工学専攻 教授

大久保 達也
副学長
大学院工学系研究科 化学システム工学専攻 教授

伊藤 大知
大学院工学系研究科 化学システム工学専攻 教授

松田 雄二＊
大学院工学系研究科 建築学専攻 准教授

淺間　一＊
大学院工学系研究科 精密工学専攻 教授

太田　順
大学院工学系研究科 人工物工学研究センター 教授

加藤 淳子
大学院法学政治学研究科 総合法政専攻 教授

米村 滋人＊
大学院法学政治学研究科 法曹養成専攻 教授

橋本 英樹
大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 教授

秋下 雅弘
大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻 教授

鈴木 基文（2020年度）
大学院医学系研究科 外科学専攻 准教授

山本 則子＊
大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 教授

井口 高志＊
大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 准教授

三坂　巧
大学院農学生命科学研究科 応用生命化学専攻 准教授

八木 洋憲＊
大学院農学生命科学研究科
農業・資源経済学専攻 准教授

太田 邦史（2020年度）
大学院総合文化研究科 研究科長
大学院総合文化研究科 広域科学専攻 教授

森山　工（2021年度）
大学院総合文化研究科 研究科長
大学院総合文化研究科 地域文化研究専攻 教授

横山 ゆりか＊
大学院総合文化研究科 広域科学専攻 教授

牧野　篤
大学院教育学研究科 総合教育科学専攻 教授

高橋 美保＊
大学院教育学研究科 総合教育科学専攻 教授

堀　洋一（2020年度）
大学院新領域創成科学研究科
先端エネルギー工学専攻 教授

鎌田　実（2020年度）
大学院新領域創成科学研究科 人間環境学専攻 教授

割澤 伸一（2021年度）
大学院新領域創成科学研究科 人間環境学専攻 教授

二瓶 美里＊
大学院新領域創成科学研究科 人間環境学専攻 准教授

葛岡 英明
大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻 教授

鳴海 拓志＊
大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻 准教授

小泉 秀樹
先端科学技術研究センター 共創まちづくり分野 教授

檜山　敦＊
先端科学技術研究センター 身体情報学分野 特任准教授

熊谷 晋一郎
先端科学技術研究センター 当事者研究分野 准教授

坂田 一郎
未来ビジョン研究センター 教授

統括運営委員

順不同　2022年3月1日現在

染谷 隆夫
統括運営委員会 委員長
大学院工学系研究科 研究科長

大澤　裕
大学院法学政治学研究科 研究科長

齊藤 延人（2020年度）
大学院医学系研究科 研究科長

岡部 繁男（2021年度）
大学院医学系研究科 研究科長

大西 克也（2020年度）
大学院人文社会系研究科 研究科長

秋山　聰（2021年度）
大学院人文社会系研究科 研究科長

堤　伸浩
大学院農学生命科学研究科 研究科長

太田 邦史（2020年度）
大学院総合文化研究科 研究科長

森山　工（2021年度）
大学院総合文化研究科 研究科長

秋田 喜代美（2020年度）
大学院教育学研究科 研究科長

小玉 重夫（2021年度）
大学院教育学研究科 研究科長

大崎 博之（2020年度）
大学院新領域創成科学研究科 研究科長

出口　敦（2021年度）
大学院新領域創成科学研究科 研究科長

須田 礼仁
大学院情報理工学系研究科 研究科長

神崎 亮平
先端科学技術研究センター 所長

藤原 帰一（2020年度）
未来ビジョン研究センター センター長

城山 英明（2021年度）
未来ビジョン研究センター センター長

統括運営委員（オブザーバー）
順不同　2022年3月1日現在

飯島 勝矢
未来ビジョン研究センター 教授
高齢社会総合研究機構 機構長

大月 敏雄
大学院工学系研究科 建築学専攻 教授
高齢社会総合研究機構 副機構長

祐成 保志（2021年度）
大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 准教授
高齢社会総合研究機構 副機構長

客員教員
五十音順　2022年3月1日現在

秋山 弘子
客員教授

伊福部 達
研究顧問

内山 瑛美子
客員研究員

荻野 亮吾
客員研究員

木全 真理
客員研究員

木村 清一
客員研究員

後藤　純
客員研究員

菅原 育子
客員研究員

高橋　競
客員研究員

舘　暲
客員研究員

辻　哲夫
客員研究員

藤﨑 万裕
客員研究員

三浦 貴大
客員研究員

村山 洋史
客員研究員

吉江　悟
客員研究員

吉澤 裕世
客員研究員

ジェロントロジー 産学連携プロジェクト担当教員
五十音順　2022年3月1日現在

飯島勝矢　プロジェクト代表者

秋山弘子

伊福部達

大月敏雄

小泉秀樹

税所真也（2021 年度）

菅原育子（2020 年度）

孫輔卿

辻哲夫

二瓶美里

樋口範雄（2021 年度）

檜山敦

廣瀬通孝

松田雄二

リサーチビジョン

IOGは、分野横断型の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）という手法を駆使して、多面的な研究開発を推進しています。IOGの目指すジェロントロジー研究のリサーチビジョンについてご紹介します。

リサーチビジョン …… 14

フレイル予防研究 …… 16

オーラルフレイル研究 …… 18

人生100年時代の
フレイル予防産業創生に向けた取り組み …… 20

フレイル予防におけるテクノロジー研究 …… 21

生活支援体制整備と
地域型ICTネットワークシステム構築研究 …… 23

地域包括ケアシステム構築に関する研究 …… 25

長寿時代の高齢者地域就労に関する研究 …… 27

ジェロンテクノロジー研究 …… 28

まちづくり総合研究 …… 29

リサーチビジョン

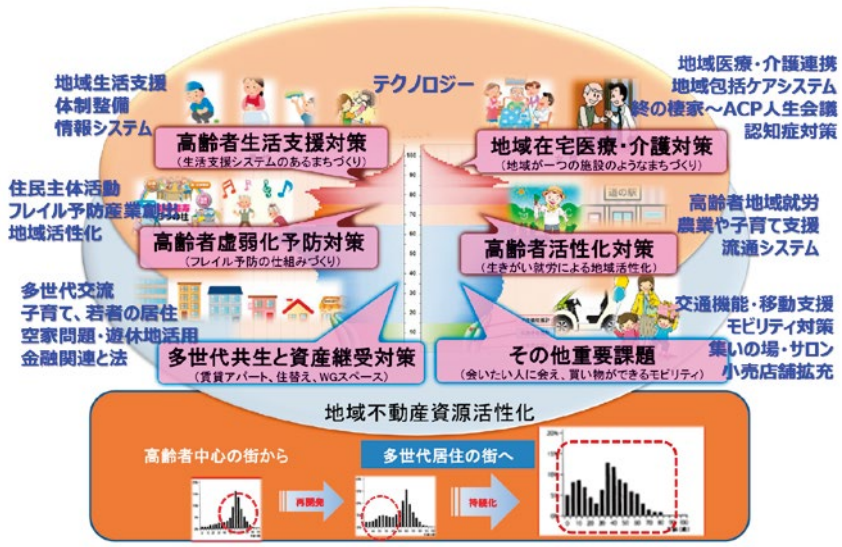
高齢社会総合研究機構はGerontology（ジェロントロジー）という学問体系に則っており、多面的な研究開発を推し進めている。具体的には、「個（個人のエイジング：加齢）」と「地域社会」の両面から諸問題の解決に取り組むために、学際的・総合的・実践的な知の体系（総合知）を創成し、分野横断型の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）を行っている。少子高齢化を基盤とする超高齢社会に対して、多様な問題が山積されており、それらに対して多角的視点から焦点を当て、新たな知識と技術を地域社会に還元し、さらに実装する研究を推し進めている。特に、地域連携・産官学民協働・国際連携にも重きを置きながら、新たな地域社会の在り方を新たな知見を生み出し、エビデンスベースの政策提言も行う。また、その卓越性のある総合知から変革を駆動できるジェロントロジー研究拠点として、地域活力のある、及び多様性のある次世代型の超高齢社会の実現に向けて、我々の新知見を国内外に発信することを目指している。

高齢者も「社会の支え手」となり、長生きを喜べる長寿社会へ

わが国は世界の他のどの国も経験したことのない超高齢社会に向かっており、しかも高齢者が増加するなかで、特に75歳以上の後期高齢者が急増していくことも予測されている。具体的に見てみると、2005年から2030年までには後期高齢者人口が倍増し、同時に認知症や独居高齢者も激増していきながら多死時代にも突入する。その多死時代は2039 ～ 2040年頃がピークとも推計されている。この少子高齢化がわが国で進んでいる中で、急激な人口構成の変化に対応し、医療/介護を含む社会保障、居住環境、社会的インフラ、就業形態、そして住民同士のつながり（自助互助も含む）をはじめとした「地域コミュニティのあり方」を再考し、社会システム全体を組み替える必要性が目前に迫っている。健康長寿社会の実現に向けて、わが国は大きな分岐点に立っているのだろう。行政主導の公的財源によるヘルスケア施策にはある程度の限界も来ており、長生きを喜べる長寿社会を実現するために、住民活力を中心とした自助・互助の地域づくりを再度強化する必要がある。そのためには、住民自身への再認識を促し、モデル性の高い主体的な住民活動の風土づくりも必要であり、産官学民協働によるこだわったパラダイム転換も求められる。また、経済活動・地域活動への参加を促すことによって高齢者も「社会の支え手」とする新しい社会システムを追い求めたい。

5つの視点によるまちづくりが「Aging in Place」を実現

コミュニティをリデザインするために、図に示した対策が解決すべき課題は、個々の高齢者の課題でもあると同時に、その手前の世代にも当てはまる話なのかもしれない。さらには、全ての住民を抱えたコミュニティそのものが抱えている大きな課題と言っても過言ではない。その意味では、わが国は大きな転換期を迎えている。一人ひとりの「個」に対して何を改めて伝え、意識変容や行動変容に移って頂くのか、そして同時に、住民が生活している各自治体およびその地域において、いわゆる「受け皿」として多様な選択肢が存在するまちづくりをどう具現化していくのか、そのまちづくりを産官学民協働によりリデザインしていくのか、まだまだ課題は山積している。これらを実現していくにあたり、特に高齢期における働きながら輝ける場、たとえ弱っても地域とつながり続けられる場、お互いに支え合える風土、自己実現にもつながる地域なども必要で



出典：東京大学高齢社会総合研究機構・産学連携 まちづくり標準化PJ 作成のスライドを飯島勝矢が引用改変

ある。わが国が新たなステージに入るために、新旧のエビデンスを十分踏まえた上で、「まちぐるみでの包括的アプローチ」をいかに有効的に持続可能な形で達成するのかが鍵になるのであろう。ジェロントロジー総合まちづくり研究として、特にこの5つの視点（分野横断、産学連携、地域連携、社会実装、政策提言）に重きを置き進めたい。それを実現し各地域に根付くことが出来れば、最終的には我々の追い求める「Aging in Place」につながると確信している。

【ジェロントロジー総合研究】
高齢社会対応のまちづくり

プロジェクトの連携から生まれる、次世代型の地域のあり方

当機構は全国の多くの自治体も出るフィールドを活用し、以下の多様な視点に立って産官学協働によるアクションリサーチを実践している。

1. **【生涯現役】：**セカンドライフ生きがい地域就労、GBER（ジョブマッチング・アプリ）
2. **【フレイル予防（健康増進・介護予防）】：**大規模高齢者コホート研究、住民主体フレイルチェック活動、フレイル予防検知テクノロジー開発
3. **【生活支援】：**住民主体の支え合い機能、移動支援含む
4. **【地域包括ケアシステム～医療介護連携】：**多職種協働（Inter-professional work: IPW）、かかりつけ医機能（医師会と行政の協働）、24時間の訪問看護機能、介護の科学化
5. **【ジェロンテクノロジー】：**介護支援ロボット、技術開発、移動支援・モビリティ開発
6. **【情報システムネットワーク】**
7. **【まちづくり】：**住環境・住まい、住みこなし、次世代型の郊外住宅

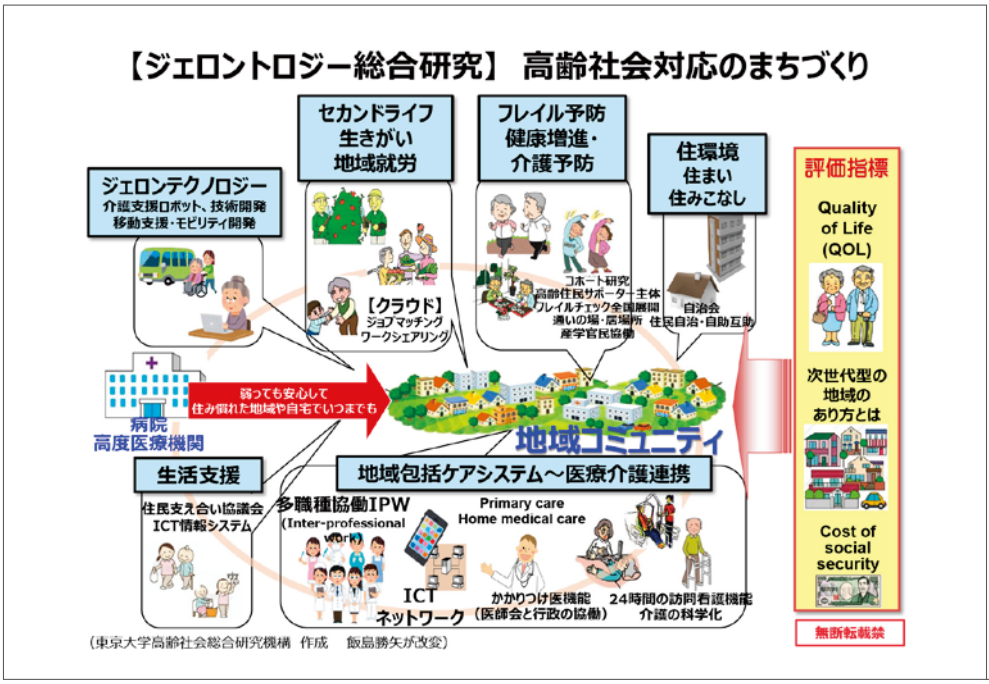
忘れてならないのは、各研究プロジェクトがバラバラで独立せず、一つの地域に複数のプロジェクトが存在し、有機的に連携し合う（立体的に構築：総合知によるまちづくりのイメージ）ように戦略的に組むべきである。さらに、評価指標として、個々人のQuality of Life（QOL）だけに留まらず、次世代型の地域のあり方（すなわちQuality of Community(QOC)）や経済的評価を示す方向性の指標も必要となる。このように包括的な戦略性および評価も行い、単なる研究だけではなく、その創出された知見を地域に還元した場合の全体評価を心掛けたい。

持続可能な包括的アプローチで
「総合知によるまちづくり」を目指す

最後に、地域連携・産官学民協働を軸にしながらの分野横断型の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）を推し進めるにあたり、以下の視点を目指して欲しい。

1 新規のモデル性と全国の自治体への広域展開を視野に入れた汎用性
2 多分野における既存制度もよく吟味した上での、具現化された産官学民協働によるチャレンジングな実行性（インパクト、メッセージ性、目新しさ）
3 研究のための研究に陥らず、全国の地域で活用されるエビデンス、国民の心に響くエビデンスをイメージし、切れ味のある研究デザインを構築した上での国内外への積極的な発信
4 産官学民協働の合同チーム（スクラム）だからこそなし得る業

以上を踏まえ、「総合知によるまちづくり」を目指しながら、新旧のエビデンスを十分踏まえた上での包括的アプローチをいかに有効的に持続可能な形で達成するのかが重要な課題となる。また、それを達成することが最終的には我々の追い求める「Aging in Place」につながると確信している。



フレイル予防研究

健康長寿社会の実現に向けて、わが国は大きな分岐点に立っている。行政主導の公的財源によるヘルスケア施策にはある程度の限界も来ており、住民活力を中心とした自助互助の地域づくりを再度強化する必要がある。

背景および狙い

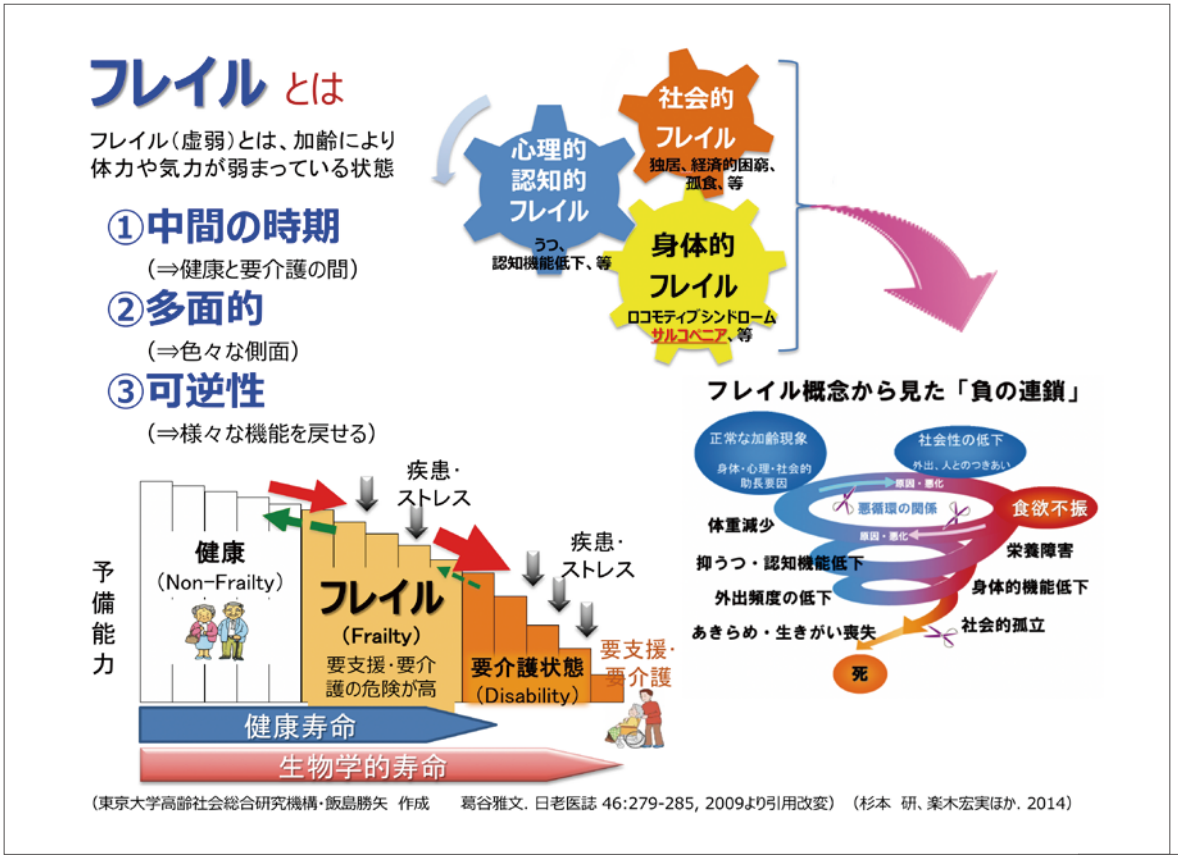
わが国では2020年には100歳以上の高齢者が8万人を超え、さらに2025年には高齢化率が30%を超えていく。この社会的背景のなか、地域コミュニティにおける将来像として、「住民自身が地域を創り、支え合って、守っていく」という原点の考えも包含し、持続可能な次世代型まちづくりを構築していかなければならない。しかし、平均寿命と健康寿命の差は約10年（男女平均）とされており、直近15年を見てもこの差が顕著に短縮できていない。経済財政運営と改革の基本方針（骨太の方針）として、2040年までに健康寿命を男女とも3歳以上延ばすというビジョンが掲げられ、厚生労働省からも健康寿命延伸プランが2019年に出ている。

生き生き快活な高齢期を送るには、身体が健康であるだけでは不十分であり、生きがい・社会参加・地域貢献・多世代交流などの活力を生む活動が地域の中で求められる。そのためには目前に迫った高齢化の問題を、医療面だけでなく、心理面や社会・人間関係、生きがいを持った就労や経済活動、ひいては地域活性化などの視点も重要になってくる。すなわち、多面的な視点での「総合知によるまちづくり」として捉える必要がある。そして今こそ日本のヘルスケアの底上げのために、エビデンス創出とそれに基づいた政策立案も求められ、まさに産官学民協働によるさらなる健康長寿社会への挑戦の一歩を踏み出す時期である。

フレイルとは

ヒトは加齢が進むに従って徐々に心身の機能が低下し、日常生活活動や自立度の低下を経て、要介護に状態に陥っていく。この心身機能の（平均値を超えた）著明な低下を示す者を「虚弱」（frailty）と一般的に呼んでおり、要介護の原因として非常に重要であり、複数の要因によって要介護状態に至る病態と考えられている。全国民への予防意識を高めるため、2014年にわれわれ日本老年医学会から虚弱のことを『フレイル』と呼ぶことを提唱され、この新概念には次なる3つの視点が含まれている（図1参照）。

1. **【中間の時期】**：健康な状態と要介護状態の中間地点
2. **【可逆性】**：しかるべき適切な介入により機能（予備能力・残存機能）を戻すことができる時期
3. **【多面的】**：骨格筋を中心とした身体の虚弱（フィジカル・フレイル）だけではなく、こころ／認知の虚弱（メンタル／コグニティブ・フレイル）、及び社会性の虚弱（ソーシャル・フレイル）が存在する



多様な研究アプローチ

フレイル予防研究におけるマルチアプローチを推進しており、エビデンスとともに地域を動かす（産官学民協働）ことを目指している。

以下の多様な取り組みを進めている。

1. 柏スタディ：縦断追跡調査研究によるフレイル関連の最新エビデンス創出
2. オーラルフレイル概念構築および全国普及
3. サルコペニアの簡易スクリーニング構築
4. 全国に広がる「高齢住民主体のフレイルチェック活動」
5. オンライン版全国フレイルチェックの集い開催およびニュースレター
6. フレイル予防産業界の活性化：多様な業態の横断的取り組み
7. フレイル研究におけるテクノロジー技術開発：フレイル予兆検知
8. 新たな価値を含む生きがい研究：フレイルサポーターによる地域貢献活動
9. 厚生労働省・新施策「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施」におけるフレイル対策のモデル化
10. 食事性炎症指数も盛り込んだ食支援まちづくり
11. 1964年オリンピック選手と一般地域在住高齢者の比較研究
12. 顔表情のアルツハイマー型認知症の予測能
13. 孤食と社会性の研究

※上記のフレイル予防研究における全体像を図2，図3で示す。

特に、千葉県柏市をフィールドとする「柏スタディ」（高齢者大規模フレイル予防研究：主に自立高齢者が対象とし、住民基本台帳から無作為抽出。開始時平均年齢73歳、男女比1：1）を2012年から展開し、縦断追跡を行っている。これはサルコペニアの視点を軸に、「些細な老いの兆候」を多角的側面から評価する形で推し進め、より早期の気づきを与えることにより住民自身に自分事化させ、どのように意識変容～行動変容してもらうことを狙いとして出発した（一人の対象者に対して約260項目）。我々のエビデンスにより、健康長寿（フレイル予防）のための3つの柱として、「栄養（食・口腔機能）」「身体活動（運動など）」「社会参加（就労、余暇活動、ボランテイアなど）」の3つに集約し、全国でフレイルサポーター養成研修を実践しながら、多くの自治体にフレイルチェックを実施している。このように、高齢住民フレイルサポーター達の新たな地域貢献を狙いながら、より早期からの包括的フレイル予防を実現している。

個々の健康寿命を延伸し、快活なまちづくりを目指す中で、サルコペニア研究を基盤としながら、多面的な要素で進行するフレイルに対する早期予防や対策は非常に重要である。そのためには、基礎研究から臨床応用へ、そして患者様へのフィードバック、さらには地域コミュニティへのポピュレーションアプローチ（すなわちFrom Bench toCommunity）の一連の流れが必要となり、われわれ東京大学高齢社会総合研究機構の中のフレイル予防研究チームが一丸となって新エビデンスを創出している。

オーラルフレイル研究

高齢期の『食力』とは

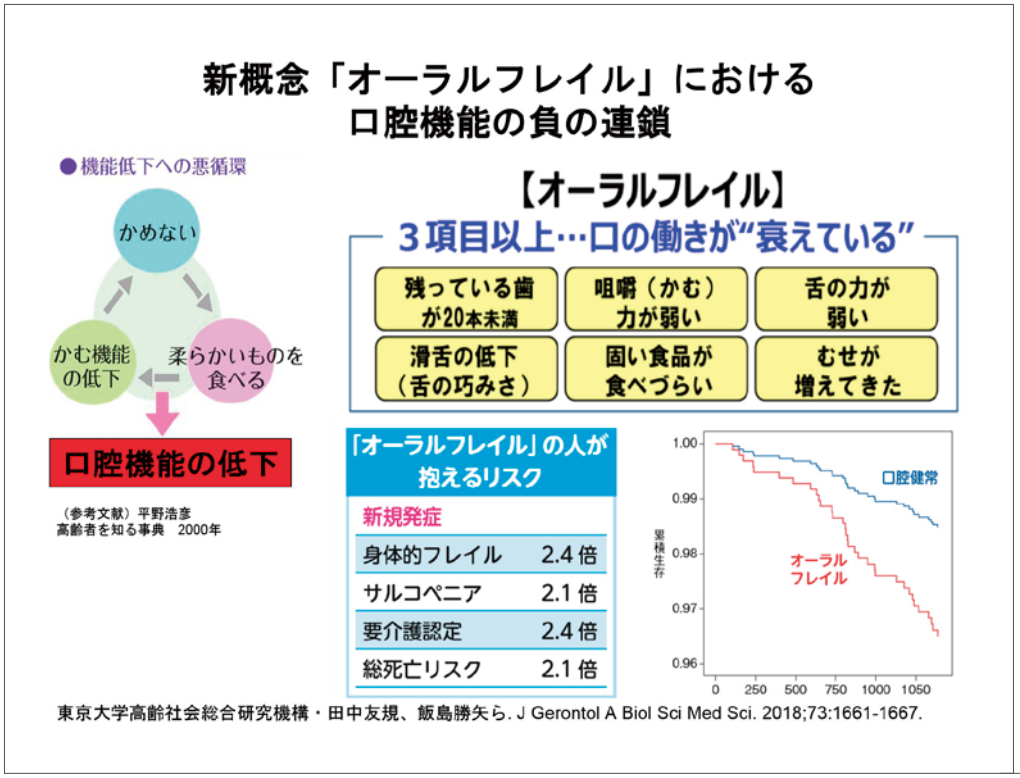
フレイル（虚弱）の最大なる要因として、栄養の偏りや低栄養を基盤として進行するサルコペニア（筋肉減弱）が大きな課題であり、そこには原点である「いつまでもしっかりと食べられる、すなわち口腔機能の重要性」を改めて国民に意識変容を促す必要がある。

高齢者の食の安定性、すなわち「食力」がどのような要素によって下支えされているのかを再考してみると、歯科口腔機能（残存歯数や咀嚼力、嚥下機能、咬合支持など）が一番重要であると同時に、複数の基礎疾患（多病）やそれに付随する多剤併用（ポリファーマシー）、全身やお口のサルコペニア、さらには栄養問題（栄養摂取バランスの偏り等に加え、食に対する誤認識も）などの要素も関与は大きい。さらに、社会性・心理面・認知・経済的問題等の要素も軽視できない。その中には孤食などの食環境の変化も含まれる。

以上のように、高齢者の食を考え直してみると、高齢者が低栄養に傾いてしまう原因は多岐にわたる。そのなかで、どの高齢者に対して安定した食生活を、そして最期の時期まで自分の口で食べられるように、早い段階から国民に啓発したい。この食支援および口腔機能の視点は、今後フレイル予防を進める中で非常に重要な鍵になる。

オーラルフレイルの概念

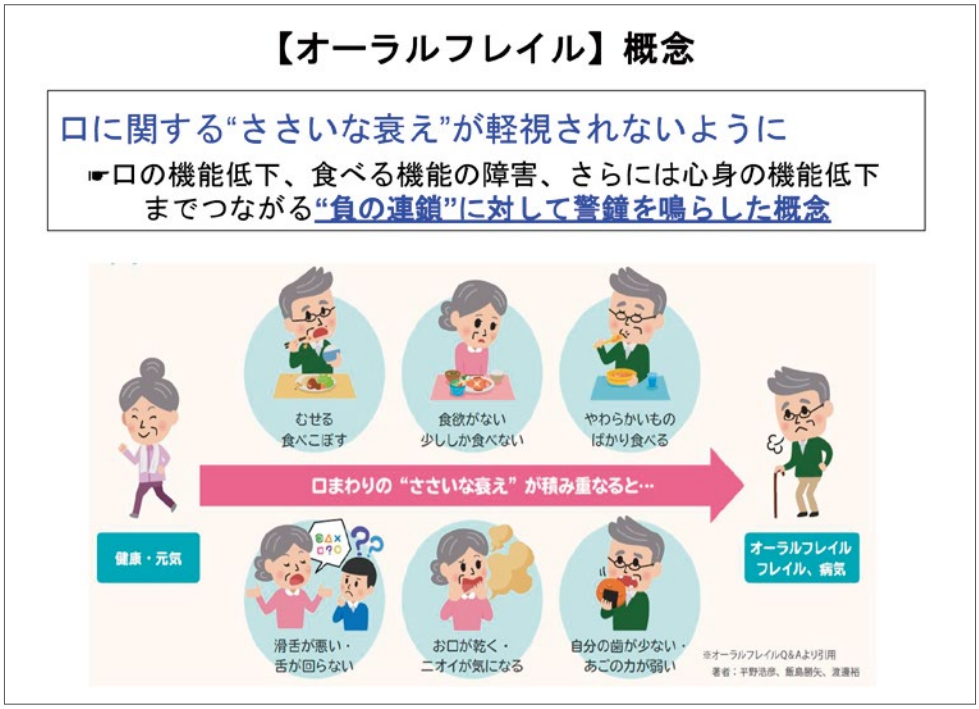
オーラルフレイルは、日本で考案された概念である。従来、軽視しがちな口腔機能の虚弱化（オーラルフレイル）をより早い段階で評価し、早期に気づき・行動変容につなげ、さらに然るべき必要な介入を施すことが健康長寿の達成に向けても寄与することが期待される。東京大学高齢社会総合研究機構が実施している高齢者コホート研究（柏スタディ）において、歯科口腔機能や口腔衛生状態の全16指標を評価し、そのなかで、客観的指標4項目（①残存歯数が20本未満、②ガムによる総合咀嚼力、③最大の舌圧、④滑舌）と主観的指標2項目（⑤半年前と比べて堅いものが食べにくい、⑥お茶や汁物でむせる）の6項目のうち3項目以上において軽微な衰えとして基準値を下回った方々をオーラルフレイル群と位置付けてみると、4年間の追跡調査により、身体的フレイルやサルコペニアの新規発症がそれぞれ2.41倍と2.13倍、要介護の新規認定が2.35倍、総死亡が2.09倍になることが判明した（図1：文献1）。また、オーラルフレイルには社会的フレイルにも当てはまる高齢者が多いことも明らかとなってきた。オーラルフレイルは身体的な衰えのみならず、社会的フレイルをも呼び起こし高齢期の生きがいをも奪ってしまっている可能性もある。口に関するささいな衰えを放置したり、適切な対応を行わないままにしたりすることで、口の機能低下、食べる機能の障がい、さらには心身の機能低下まで繋がる負の連鎖が生じてしまうことに対して警鐘を鳴らした概念である（図2）。

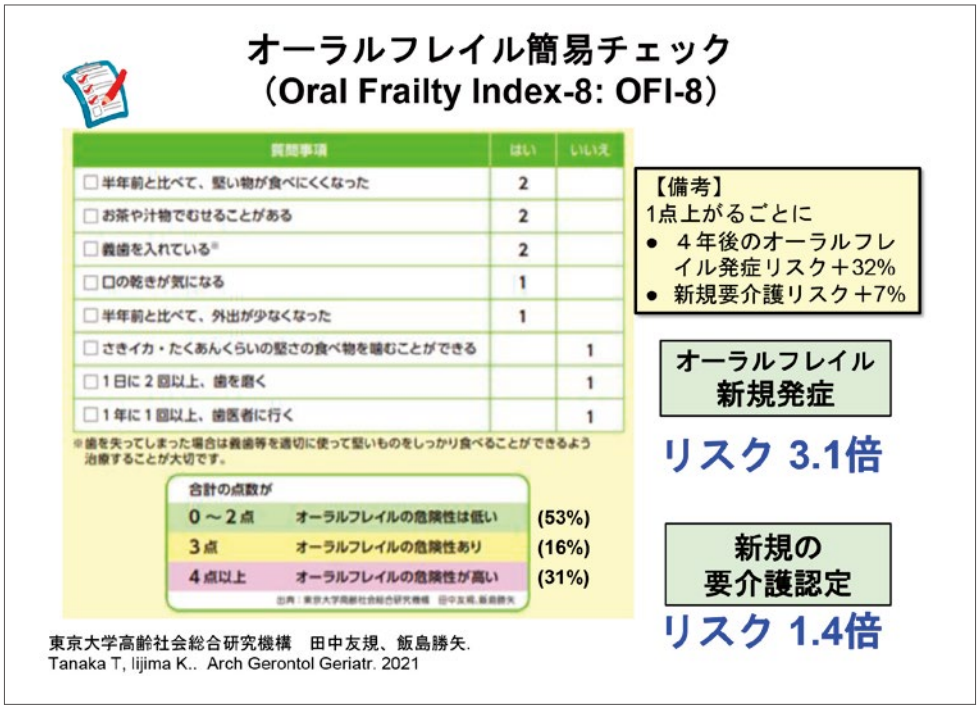


オーラルフレイル研究の今後とその期待

フレイル予防による健康長寿実現のためには、「栄養（食・口腔機能）」「身体活動（運動など）」「人とのつながりや社会参加」の3つの柱が重要である。そこには社会や人とのつながりが非常に重要であることも再認識すべきである。そして、オーラルフレイル段階での早期発見・早期介入は重要な意味をもち、フレイルの負の連鎖をより早期から断ち切る戦略として期待が高い。東京大学高齢社会総合研究機構の中のフレイル予防研究チームでは、歯科専門職が不在の状況（例：地域コミュニティの地域サロン・通いの場など）において、簡単にオーラルフレイルの危険度が判定できる簡易スクリーニング質問票（Oral Frailty Index-8: OFI-8）をすでに公表している（文献2）。いかに国民が取り組みやすく、自己評価ができるのか、いかに口腔機能に対して新たな意識を持ってもらうのか、さらには医科歯科連携も含めた多職種連携をいかに加速させられるか、等の重要な方向性が重要となる。

文献1：Tanaka T, Iijima K,他 Oral Frailty as a Risk Factor for Physical Frailty and Mortality in Community-Dwelling Elderly. J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2018;73:1661-1667
文献2：Tanaka T, Iijima K,他. Oral Frailty Index-8 in the risk assessment of new-onset oral frailty and functional disability among community-dwelling older adults. Arch Gerontol Geriatr. May-Jun 2021;94:104340. doi: 10.1016/j.archger.2021.104340. Epub 2021 Jan 19.





人生100年時代の
フレイル予防産業創生に向けた取り組み

わが国は人類が直面したことのない超高齢社会に突入しており、特に高齢期の適正な食習慣の維持は健康な身体を構成する上で重要な課題である。高齢者の「食・食習慣」を守るための新しい食文化の形成、社会性と学びを伴う新たな食の場の構築においては、食品産業界には大きな役割があり、製造業による商品開発、小売店舗やコミュニティにおけるサービス提供などと併せて不断の努力が欠かせないものとなる。

東大ジェロントロジー産学連携コンソーシアムの中での最も大きな活動となっている「食の在り方研究会」においては、商品・サービスの開発および改良から、高齢期の食に関係するエビデンスの活用、同業種・異業種間との連携など、新しい視点からのビジネス創出も視野に入れて取り組み始めている。分野を越えた企業間での連携では、フレイル予防の3つの柱「栄養」「身体活動」「社会参加」の三位一体となった形で、「食」をフレイル予防産業の入口とし、ここに新たに運動や社会参加の要素が加わり、今後は旅行やフィットネスなど、フレイル予防に資する様々な産業の発掘と健全な育成に展開していくことが期待される。そのなかでも、高齢期は人とのつながりの中で一緒に食べる、いわゆる「共食」が重要な視点として位置付けている。それこそ共食サービス産業の創生なども戦略的に検討されている。全国への汎用性を目的として、これらの取り組みを標準化し、従来の一次予防のアプローチ（啓発）だけではなく、「環境側を塗り替えていく、いわゆる『ゼロ次予防』」として、フレイル予防に資する新しい生活習慣やまちづくりとして根付かせ、地域の住民が日常の生活を永く続けられる仕組みを拡げていくことを目指していく。

フレイル予防に資するポピュレーションアプローチにおいては、産学官民連携による総合知を包含した取り組みを行っていくことが重要になると考えるが、そのなかでも食品業界が牽引者となり、果たせる役割は多い。しかも、食は全ての人間にとって原点であり、無関心層等にも情報を届かせるためにも食品業界の担っている役割は大きいのであろう。これまでも、そしてこれからも、国民のくらしの中で「食」は生きる上で欠かすことができないものである。だからこそ、単なる栄養摂取の情報提供にとどまらず、食そのものを楽しむことや食を通したコミュニティづくりとしても重要な役割がある。食品業界の多くの企業が、具体的な食提案と健康長寿の3つの柱「栄養」「身体活動」「社会参加」の三位一体の取り組みを軸に業種業態を超えて地域の一員として、地域に根差した食と健康の取り組みを推進していくことを展望する。

フレイル予防におけるテクノロジー研究

人生100年時代に入り、高齢期であってもいかに生活の質を保ち、人生を生き切ることができるかという時代の要請に対して、ジェロントロジー総合研究として応えていく必要がある。ヒトは自然の老いのなかで「健康⇒フレイル⇒要介護⇒終末期⇒看取り」という一連の流れを辿っていくのだが、避けられない老いの過程の中で、2つの視点が重要となる。1つ目として、住民（特に高齢者）自身がどのように気づき、何に気を付けて行動変容していけるのか。そして2つ目として、住んでいる環境側をアレンジしていくことである。その中には、住んでいるだけで結果的に地域交流が進み、かつ身体を動かしているなどの環境整備も必要であろう。それと同時に、住環境の中で本人の老いのサインを見える化したり、オンライン技術で地域交流が推進されることも非常に重要である。

もう一回り詳細に述べれば、以下の研究デザインの方向性が必要であろう。健康長寿を実現するための具体的方策を考えてみると、改めて国民の一人ひとりが気づきを得て、自分事化した後に、意識変容や行動変容に促すことも当然ながら重要である。それと同時に、国民が住んでいる地域コミュニティのあり方、および住環境の要素も非常に重要な視点である。

健康のためにそれに資することを実践するだけではなく、多様なスタイルで日常生活を過ごしていると、結果的に健康に資することにつながるという環境側の整備や工夫も大きく影響するのであろう。その住環境要素の中でも、単に身体機能低下を持ち合わせるご高齢の方がどのような住宅に住むのか、という単一の視点だけではなく、最新テクノロジー技術も兼ね備わった住まいで、どのように早期の段階でフレイル（＝多面的な老い）の兆候を見出し、本人や家族に早期の警鐘を鳴らせる機能も兼ね備えた住宅なのか、等の先進的な開発も大きく期待される。

そこで、我々の「フレイル予防におけるテクノロジー研究」として、以下の内容を走らせている。

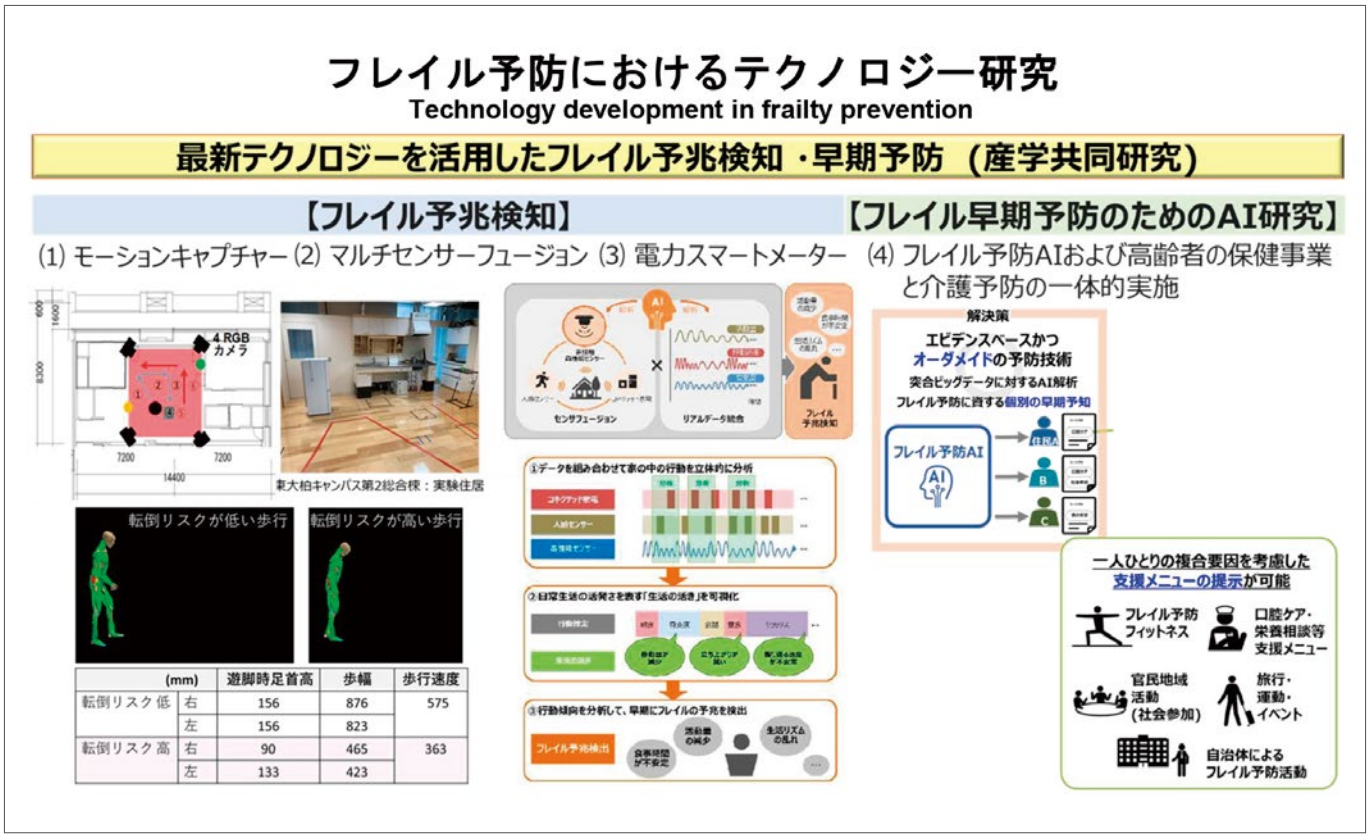
【1】転倒骨折に関するモーションキャプチャー動作解析
- 模擬住居を活用したカメラ型モーションキャプチャー動作解析
- 着衣型モーションキャプチャー動作解析

【2】マルチセンサーフージョンによるフレイル予兆検知

【3】電力スマートメーターからのAI解析を活用したフレイル予兆検知

【4】フレイル早期予防のためのビッグデータAI解析
＜日立東大ラボ＞

【5】postコロナ社会を見据えた「次世代ハイブリッド型地域コミュニケーション」開発



	(mm)	遊脚時足首高	歩幅	歩行速度
転倒リスク低	右	156	876	575
	左	156	823	
転倒リスク高	右	90	465	363
	左	133	423	

オンライン型フレイルチェック

特に、非接触型の安心見守り（監視）システムは重要であり、かつ一定以上のニーズが存在する。しかし、倒れて動かない状態なのか等、かなり重篤な状態やシビアな状況に陥ったケースが多い傾向にある。また、行政による介護予防事業等の公的な取り組みも進んでいるとはいえ、地域在住高齢者の参加者数もなかなか裾広がりになりにくい現状もあり、健康状態を維持するためには多角的な支援が求められる。そこで、我々の研究デザインとして、「もっと早期の段階で、そして日常生活の中でちょっとした老いのサインを『フレイル予兆』として検知すること」に狙いを定め、多様かつユニークな産学共同研究を推進している。

本研究で中心的に取り上げている「フレイル」は、身体的、精神・心理的そして社会的な多面的な要素からなり、健常な状態よりは虚弱化が進行しているが、いわゆる身体機能障害（disability）」とは異なり、適切な介入によって健常状態に回復することが可能な状態である。現在加速している高齢社会にあって、フレイルに対する早期からの適切な対策が必要不可欠であり、そのための科学的根拠の構築が必須である。我々のジェロントロジー総合研究の一環として、地域在住高齢者の日常生活における「普段からしている行動」をいかに科学的根拠として客観的データとして取得し、簡易なアセスメントが出来るのか、精力的に開発している。

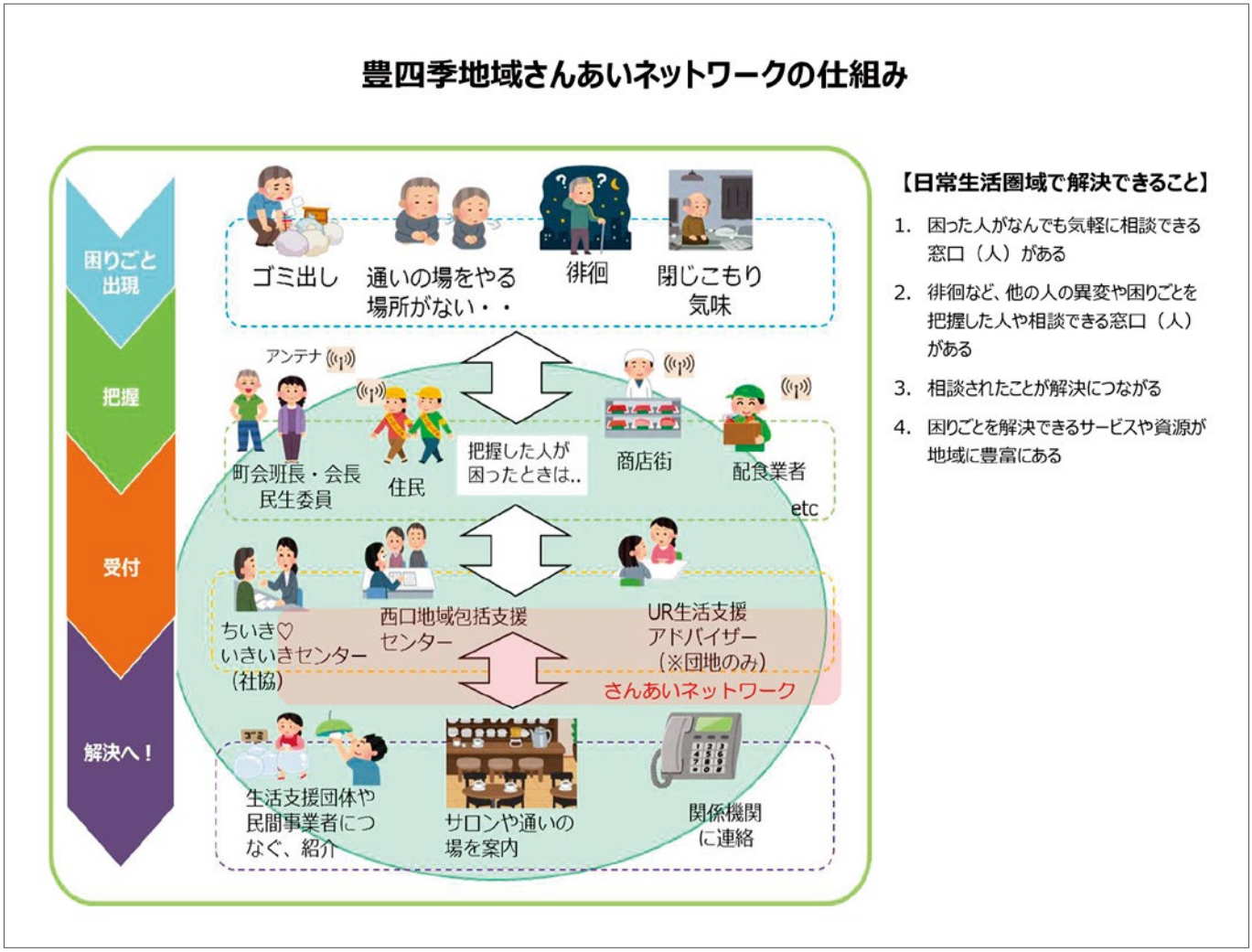
さらに、コロナ感染の問題が3年目に入り、postコロナ社会を見据えた新たな地域像を考えなければならない。フレイル予防・対策のためには、新型コロナ問題の有無にかかわらず、「栄養（食と口腔機能）、身体活動（運動、非運動性活動も）、社会参加（人とのつながりが特に重要）」の3つの柱をいかに三位一体として底上げし、日常生活の中に継続的に盛り込めるのかが鍵になる。そこには、①個人へどう情報を届け、意識変容・行動変容してもらうか、そして②住民活動休止状態の地域をどう前向きに再構築していくのか、この2つの視点が重要になる。高齢者にはこの感染症に対して「正しく恐れる、賢く恐れる」ことを促しながら、悪影響を早々に改善してもらいたい。すなわち、感染予防の対策だけを強調するのではなく、それ以上に、生活不活発及び人とのつながりも含めた社会性の低下に関する予防の重要性もしっかりと伝えるべきである。また、人とのつながり（社会交流）を維持するためには、次なる時代を見据えたオンライン技術へさらに一歩踏み出す必要もある。身体がたとえ離れていても、心は近づいており安心して交流が出来る地域社会を構築したい。そのような背景から、postコロナ社会を見据えた「次世代ハイブリッド型地域コミュニケーション」開発に着手し、まずはオンライン型フレイルチェック開発から行い、都内のモデル自治体2か所にで地域実装されている。

以上により、「安心」ある地域および住まい、そして「絆」を構築できる地域コミュニティを目指し、フレイル予防におけるテクノロジー研究を推進している。

生活支援体制整備と地域型ICTネットワークシステム構築研究

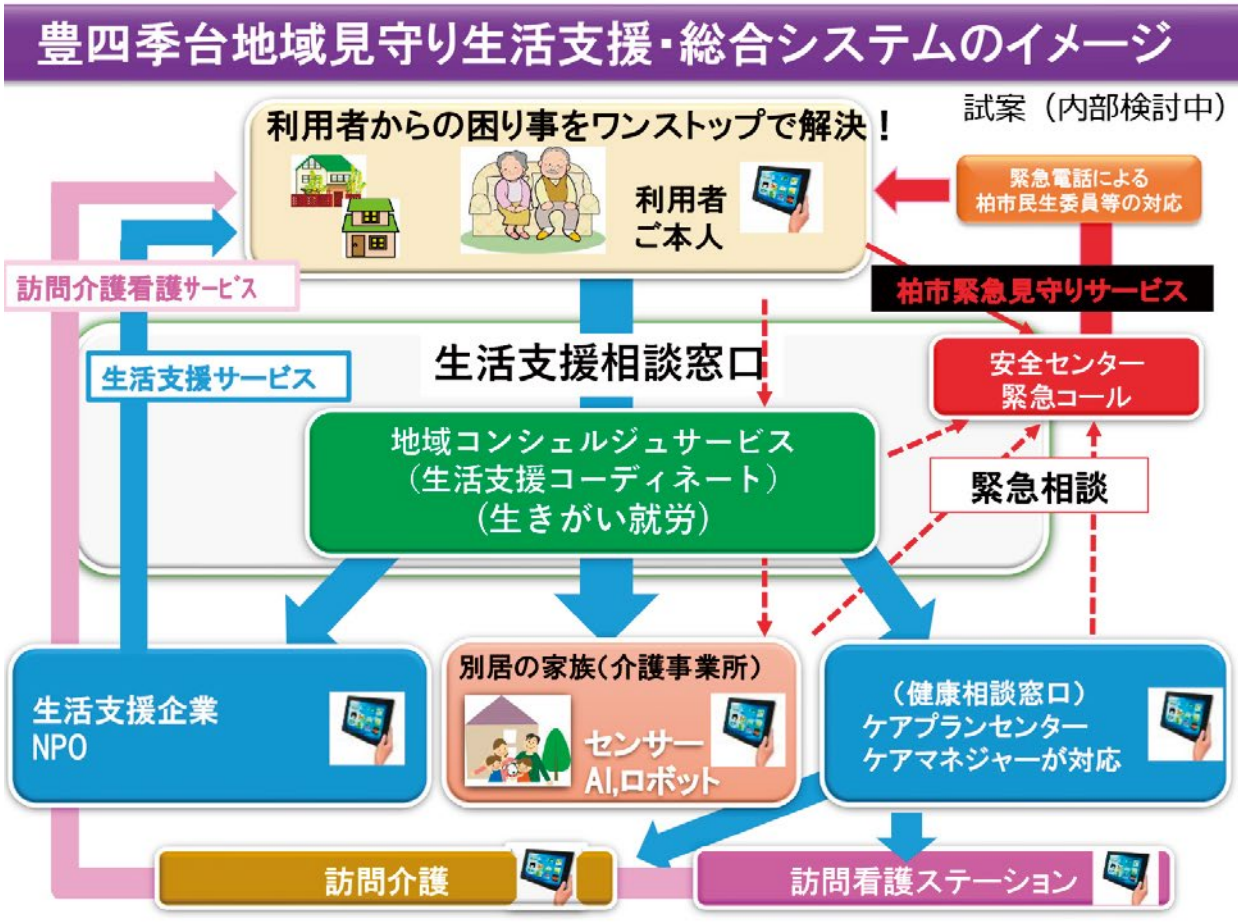
ヒトは大半の方々が、健康な状態から老いの坂道を下り、要介護状態までの虚弱化プロセスを辿る。しかし、高齢になればなるほど個人差が大きいいため、地域在住の方々のなかには多様な状態の方々が混在して存続する。また、特に首都圏においては、2025年以降、生活習慣病を含む様々な疾患を併せ持つだけではなく、身体機能低下、認知機能低下、うつ状態、独居や孤立などに諸課題を有する高齢者が激増することも明らかである。わが国は平成24２年度から地域支援事業において、要支援者および2次予防事業対象者向けの介護予防・日常生活支援に資する生活支援体制整備事業を施行し、全国の自治体でコーディネーターの配置、協議体の設置等が行われ実施されるに至っている。日常のちょっとした困りごと（足腰が弱ってきて一人で買い物に行けない、通院困難、ゴミ出しできない、電球の交換ができない等）を手助けしてほしいというニーズへの対応として、強い「互助」のシステムを期待したい。そのために、現在、千葉県柏市のなかの豊四季台エリアをモデルフィールドとして「豊四季地域さんあいネットワーク」の仕組みを構築中である。

住み慣れた地域で自分らしい暮らしを継続するための仕組みとしての地域包括ケアシステムは、在宅医療や介護サービスの専門職による多職種連携の強化と同時に、フレイル期においての日常生活の維持をするための生活支援体制の確保が重要な役割となる。フレイルの進行はその段階において適切な生活支援



の投入がなされれば、その方の日常生活を普通に送り続けることが可能となる。生活支援の体制の強化はフレイル予防対策と表裏一体の体制整備構造といっても良い。

そのためには、ICT（Information Communication Technology）情報システムのさらなる利活用、並びにAI情報処理能力を駆使し、高齢者自身への自立支援と介護サービス、在宅医療までのシームレスな連携を行える環境を構築することが必要となってくる。この生活支援機能付き防災タブレットが各家庭に公共インフラとして導入されることで、地域包括ケアシステムのプラットフォーム上で、日常生活圏を基礎単位とする「地域コンセルジュ」が介在した地域型ICTネットワークシステムが構築されることを狙っている。さらに、その発展した介護予防・生活支援から在宅医療・介護連携までの一体的な運用により、社会を支える情報基盤システムの一つとして有用なツールになると考えている。



地域包括ケアシステム構築に関する研究

社会構造の変化

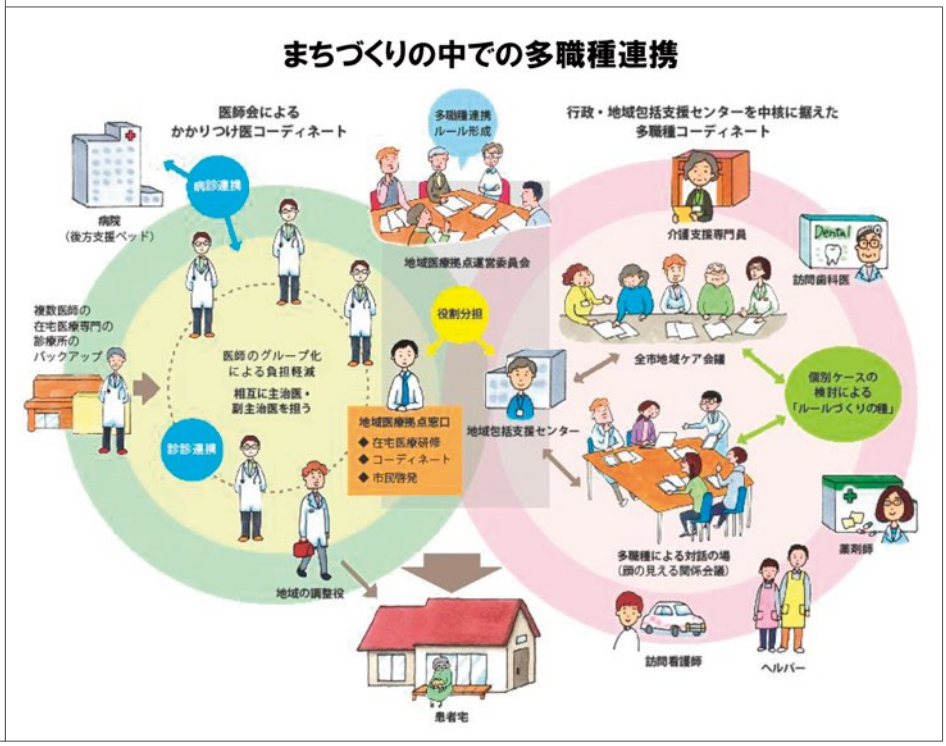
わが国の超高齢化が進むなかで、特に75歳以上の後期高齢者（なかでも85歳以上の超高齢者）が急増していくことも予測されている。具体的に見てみると、2005年から2030年までには後期高齢者人口が倍増し、同時に認知症や独居高齢者も激増していきながら多死時代にも突入する。その多死時代は2039 ～ 2040年頃がピークとも推計されている。

その超高齢化の流れに加え、医療の高度化、そして疾病構造も大きく変化し、疾患や障害を持ち合わせながら長期に療養する患者が増える時代に突入している。個々の症例の抱える問題も多様化・重層化し、日々の臨床業務の中で頭を悩ます事例も少なくない。さらに、在院日数の短縮化と在宅医療の高度化に伴い、医療ニーズの高い患者が病院から早期に退院するようになってきている。その現状を踏まえ、円滑な療養場所の移行のための多職種・多機関の連携の底上げが各地域単位で改めて求められる。言い換えれば、我が国の医療政策が問い直されており、幅広い視点から医療・介護提供体制を大きく進化させていく時期に来ている。

地域完結型医療のなかでの在宅医療新時代：連携から統合へ

国の方針としての「地域包括ケアシステム」が打ち立てられ、10年強の年数が経過した（図1）。要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい生活を最期まで続けることができるように地域内で助け合う体制のことを指す。特に、それぞれの地域の実情に合った医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される体制を目指している。

なかでも在宅医療を軸とした地域医療の底上げと介護連携に重きを置き、全国の各地域で進めてきた訳だが、地域ごとの進捗や気運の醸成の具合を聞いてみると、当然ながら幅がある。高齢期であってもいかに生活の質（Quality of Life：QOL）を保ち、よく生き切って人生を閉じることができるかという時代の要請に応える医療が今まさに求められている。そこには「病人である前に『生活者』である」という理念の下に、住み慣れた街全体で生から死までを地域全体で支え、みて（診て・看て）いくという地域完結型の医療への進化、そして機能分化型のシステム型医療へのパラダイム転換が求められる。すなわち従来の「治す医療」から『治し支える医療』という原点に立ち返る必要があり、その象徴的存在がまさに在宅医療である。さらに強調するならば、医師も中心人物の一人となって、全職種によるシームレス（切れ目のない）な現場を作り上げ、まさに今まで培ってきた「連携」から『統合』へギアを上げ、セカンドステージに入っていくことが望まれる。



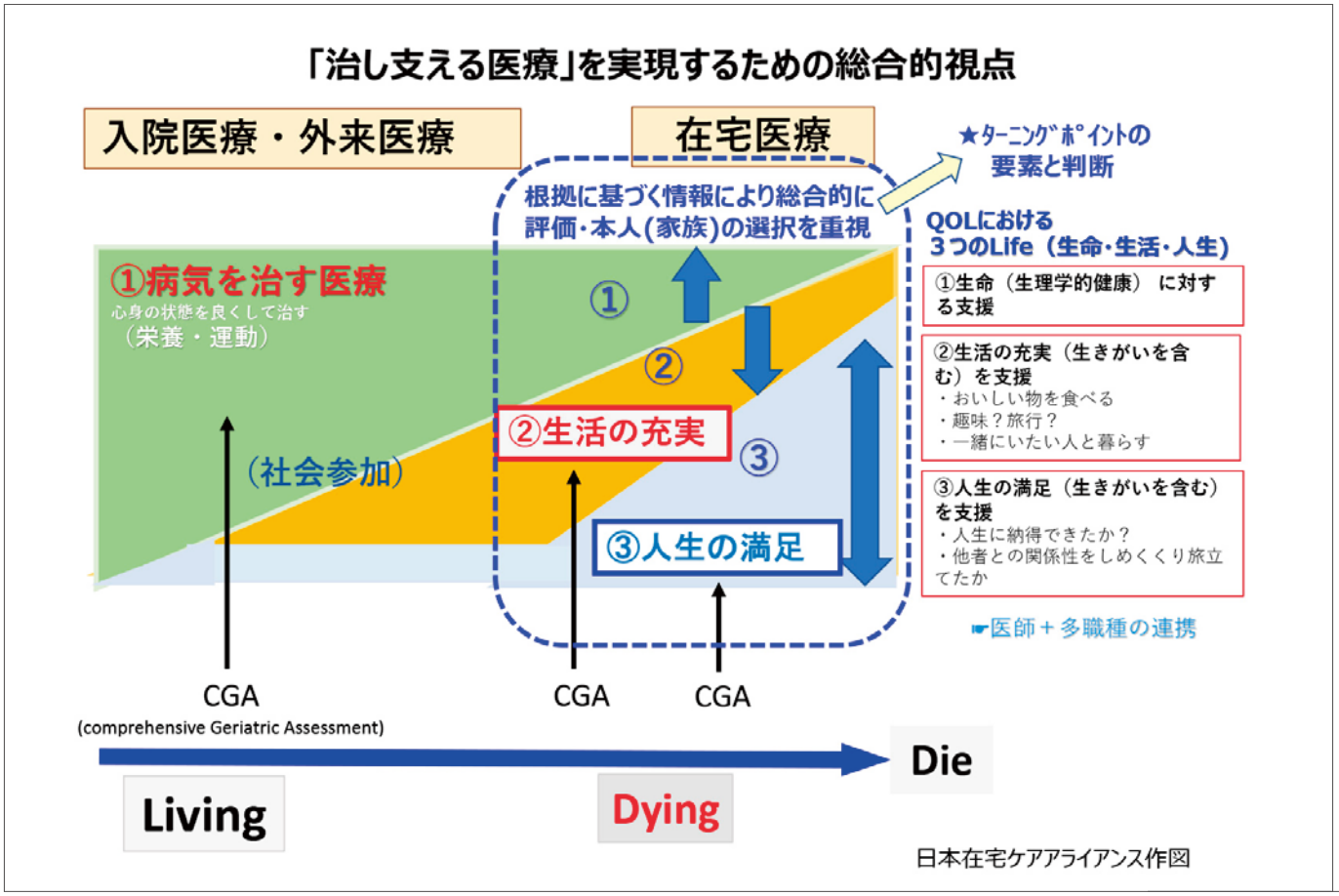
多職種連携/協働の重要性およびケアチーム構築

本研究で目指している「多職種協働(inter-professional working: IPW)」を示す。症例ごとにさまざまな背景と異なる経過が予想され、多様な専門職を必要とするケースも少なくない。多職種・多機関での連携が円滑に行われ、必要な情報が迅速かつ適切に共有されることは、医療安全、ケアの効果的な提供、患者や家族の満足度向上等、さまざまな点で非常に効果的である。さらに、個々の従事者のモチベーションアップにもつながり、ケアの質向上にも連動していく好循環を生み出す。

地域包括ケアシステムの普及が時代の急務であるが、とりわけ今後は重度化した高齢者も生活の場で継続的にケアをすることを考慮すると在宅医療が不可欠である。地域包括ケアの願いである『Aging in Place』(弱っても安心して住み慣れたまちに住み続ける)をモットーとしながら、在宅医療推進のモデルづくりにはいくつもの視点に工夫が必要である(図2)。本研究では、特に千葉県柏市をフィールドとして、以下の視点にも焦点を当てながら進めている。

1. 24時間を見守るシステム開発
2. 多職種協働(inter-professional working: IPW)
3. 地区医師会と自治体行政の連携
4. 在宅医療・在宅ケアへの教育システム構築:on the jobトレーニング「在宅医療推進のための地域における多職種連携研修会」を開発
5. 多職種協働や住民啓発における行政側の役割
6. 情報共有システム(information and communication technology:ICT)を活用した多職種間の情報連携
7. 医療・介護レセプトデータからのエビデンス創出

真の地域包括ケアの鍵となる在宅医療の普及を通して医療改革が進み、生活者としての患者本位で、外来機能や入院機能をもつ病院医療と在宅医療の強い連携と調和が求められている。すなわち、どの医療従事者も「『治し支える医療』を実現するための総合的視点」を持つことが重要である(図3)。我々がよく使用するQOLという言葉におけるlifeには、「①生命、②生活、③人生」という3つの意味を含んでいる。①生命(生理学的健康)に対する支援だけではなく、②生活の充実(生きがいを含む)を支援すること、さらには③人生の満足(生きがいを含む)を支援することも必要となる。どんな場面であれ、この3つのlifeの意味が実現されて欲しい。そして、多職種・多機関での連携が円滑に行われ、必要な情報が迅速かつ適切に共有されることは、医療安全、ケアの効果的な提供、そして最終的には患者や家族の満足度向上等、さまざまな点で非常に効果的である。さらに、個々の従事者のモチベーションアップにもつながり、ケアの質向上にも連動していく好循環を生み出す。患者・家族中心のケアを実現するには、地域医療を守る円滑な多職種連携、そしてこだわりを持った多職種連携チームの存在が必要であり、そのチーム力が問われている。まさにそのチーム力の結集はその地域ごとの「地域力」と言っても過言ではないのであろう。



長寿時代の高齢者地域就労に関する研究 ～セカンドライフの生きがいづくりに向けて

「人生100年時代」という言葉が喧伝されるなか、その人生を最期までより良く生き抜いていくためにどうすればよいか、個人も社会も、また企業も大きな関心を寄せている。定年のある会社員の多くは、60歳あるいは65歳でリタイアしても、30-40年という人生が残される（期待される）。この期間はもはや余生と呼べるほど短いものではない。リタイアしても社会の中でまだまだ活躍できる、活躍したいと考えている高齢者は非常に多いが、例えば、65 ～ 69歳の労働力人口比率が2020年には51.0%であるように、約半分の高齢者は活躍場所を見い出せないままである。東京大学高齢社会総合研究機構（IOG）としてはこの状況を「セカンドライフの空洞化問題」と称して捉える中で、これまで問題解決に向けた研究を進めてきた。

国の政策としては、2021年に70歳までの就業確保に向けた努力義務化がはかられたが、IOGが目指す問題解決に向けた理想のモデルは、70歳に止まらず、特に「地域」の中で活躍し続けられるモデルである。65歳までは生計のために就労する「生計就労」から、リタイアした後は、年金という経済基盤を確保した上で、健康や生きがいなどのために活躍し続ける「生きがい就労」への移行モデルである。

IOGではそのモデルの具現化に向けて、2009年より千葉県柏市で「生きがい就労事業」の創成に取り組み（「長寿社会のまちづくり」の一環）、一定のモデルを確立するに至っている。この成果はその後、厚生労働省の政策（2016年～生涯現役促進地域連携事業、2022年～生涯現役地域づくり環境整備事業）に引き継がれている。

高齢者が地域の中で活躍し続けることは、「地域力の強化」、「人手不足の解消」、そして高齢者本人にとって、「フレイル・認知症予防、健康寿命・資産寿命の延伸」等につながることであるだけに、IOGとしてはこれからも当該研究をさらに深化させ、未来社会に貢献していく所存である。

ジェロンテクノロジー研究

日本には高い心身機能と意欲を持ち様々な新しい活動に挑戦する高齢者もいれば，心身機能の減退や生きがいの喪失に直面し生活に様々な支援を必要とする人もおり，支援ニーズもさまざまである．また，その多様性を受けて高齢者の暮らしを支援する技術も，社会参加から介護現場の支援まで非常に多様なものが求められている．

高齢社会総合研究機構（IOG）では，学際的な組織ならではの多様な専門性を活かし，AIやXR、ICT，ロボティクスなどの新技術を開発し，自治体や企業等での運用，社会参加を促進する分野横断研究を行っている．また，地域のキーパーソンとともに安全な生活をサポートする見守りシステムや自己管理支援システム，日常の移動を支援するパーソナルモビリティやMaaS，地域での自立した生活を維持するための福祉用具を含めた支援機器の活用促進に加え，疾患や個人特性に合わせた介護・リハビリ技術の研究開発も進めている．さらに，それらの機器やシステムを普及するための制度や政策についての産官学連携の議論も行っている．

これからの健康長寿に向けた豊かな高齢社会づくりには，高齢当事者や家族に限らず，より多くの世代との接点を増やし，地域全体の課題として取り組む工夫が必要であり，テクノロジーの貢献が期待される．例えば，ライフログやトリップデータ等を用いた各世代の行動特性の分析は，地方地域交通におけるフレキシブルな時空間活用や世代分断の進む都市部における多世代で共有する場の設計への応用が期待できる．また，多世代が交流する中でそれぞれのニーズ，関わり方，テクノロジーの使い方などを日常生活の中で学ぶことができれば，高齢者を含むすべての人々に配慮したコミュニティーや文化の育成につながると考えられる．

IOGでは，今後私たちが直面する人口減少に備え，限られた社会資源の中でテクノロジーとともに生きる将来像について活発に議論し，地域住民と共に考えるインクルーシブな社会実現に向けたテクノロジーの活用やコミュニティーづくりの促進を目指している．

まちづくり総合研究

日本が世界に先駆けて突入しつつある、誰しもが未だ見たことのない世界である超高齢社会における「住まいまちづくり」のビジョンを描き、地域の特性ごとに、そのビジョンを実現するための社会の仕組みを攻究し、多様なるプレイヤーとともにアクションリサーチをベースに実現していくことが、IOG における「まちづくり総合研究」の目的である。

この研究フィールドの特徴は、研究におけるズーム機能、フィルター機能を重視していることである。

ズーム機能とは、対象とする現象をミクロレベルからマクロレベルまでシームレスに理解するための意志と知見を備えた研究組織としての能力のことである。人間の身体動作やそれと深く関連する空間の設えや住宅や施設の間取りに関わる、1：1 の当寸大・原寸大レベルの現象理解とそこでの課題解決を目指すと同時に、1：10,000 くらいで表現される地域社会における多様な人間と居住空間・サービス提供拠点の分布、それらをつなぐ各種地域インフラの配置、それらの間を移動する人間やサービスのモビリティ確保、の課題解決が目指されなければならない。さらにその間に存在する、1：100 レベルの住宅や施設の各種性能確保、1：200 レベルの住宅間、住宅と公共空間の間のコミュニケーション空間のデザイン、1：500 レベルの近隣コミュニティのマネジメントデザインといった領域も、独立現象としてではなく同時存在現象として観察するズーム機能を重視しながら研究を進めている。

またフィルター機能とは、上述の空間縮尺レベルをソフトからハード、システムまで分野横断的に総合化・統合化して課題解決を図るという研究組織としての能力のことである。医学、保健学、社会学、経済学、法学、工学、デザイン学といった各種の専門家が同じフィールドに同じ気持ちで参加すること重要視しながら研究を進めている。

▲駄菓子屋

▲めじろ台駅前ショッピングセンター 春祭り

個別研究プロジェクト

IOGは企業や自治体とともに、さまざまなフィールドでアクションリサーチによる調査研究を行い、成果の社会実装を目的とした研究プロジェクトを進めています。その個別研究プロジェクトの内容や目的、参加メンバーについてご紹介します。

新価値 'IKIGAI' 駆動による社会貢献活動の個人最適化 …… 31

鎌倉リビングラボ …… 32

大規模フレイル予防研究「栄養とからだの健康増進調査(柏スタディ)」 …… 33

フレイル啓発に関わる地域特性の把握と
フレイル予防活動につながる意識・行動変容のモデル化 …… 34

フレイル予防を通した健康長寿のまちづくり …… 35

フレイルチェックデータを活用した介護予測システムの構築 …… 36

後期高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施を見据えたフレイル対策 … 37

JST-SCORP 日本ースウェーデン共同研究 …… 38

産官学民で取り組むフレイル予防啓産業の活性化 …… 39

食の在り方研究会 食を起点とするフレイル予防産業の創生 …… 40

オーラルフレイル予防推進研究会
"食べられる口"を維持するためのオーラルフレイル予防産業の創生 …… 41

大規模コホート研究(柏スタディ)から見る咀嚼習慣の重要性 …… 42

AIを活用した効果的なフレイル予防の実現に向けた基盤研究 …… 43

住宅内センサフュージョンを用いたフレイル検知技術の研究 …… 44

カムカム戦略を軸とした全世代型食支援まちづくり …… 45

柏市・豊四季台地域における高齢社会対応のまちづくり …… 46

転倒・骨折後も安心して住み続けられる住環境のデザイン …… 47

地域包括ケアにおけるICTインフラの整備 …… 48

超高齢者の地域生活を支える技術、人、制度による支援に関する研究 …… 49

近江八幡市における生涯活躍のまち(日本版CCRC)構想に関する
助言・調査協力 …… 50

まちづくり標準化研究会:既存住宅団地における少子高齢化対応手法の
実証研究およびまちづくり認証制度に向けたまちづくり評価手法研究 …… 51

100年人生対応の包摂型地域創出のための
統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究 …… 52

八王子市めじろ台におけるポスト超高齢社会まちづくりの実践 …… 53

武里団地フレイル予防プロジェクト …… 54

住民主体の高齢社会のまちづくり活動、情報機器・技術を活用した
地域のつながりづくり:布施新町みらいプロジェクト …… 55

おうち時間を楽しく健康にすごす知恵「おうちえ」 …… 56

その他の個別研究プロジェクト …… 57

自治体等出向者のコメント …… 58

新価値 'IKIGAI' 駆動による社会貢献活動の個人最適化

地域活動を通じた生きがいとフレイル予防

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

大月敏雄、孫輔卿、田中友規、菅原育子、三浦貴大、
藪謙一郎、佐藤雄太、関根伸弘、中村達也、内山瑛美子、
角川由香、松田弥花、馬場絢子、ベンチャージェンチャン、
中澤公孝

■ **研究期間**

2021年～2023年

■ **関連予算**

JST未来社会創造事業

■ **研究概要**

活力ある超高齢社会の創造には、高齢者の支え手の醸成は必須かつ急務である。地域貢献活動を行っている【支え手側】の生きがいを最適化することを目的として、自己実現を中心とした従来の生きがい概念に加え、「Comfortability」と「他者との関わり・貢献による喜び」を付加する新価値'IKIGAI'を定義し、活動を通して生きがいを感じる様々な場面や状況において音声、表情や姿勢、会話などの行動情報を計測、多様な要因の特徴量を抽出・探索することで、定量的に評価可能な「IKIGAIマップ」として可視化・最適化する。さらに、様々な社会活動を通して感じる「多様な生きがい」を最適化することで、誰もが幸福感を実感できる未来社会を実現する。

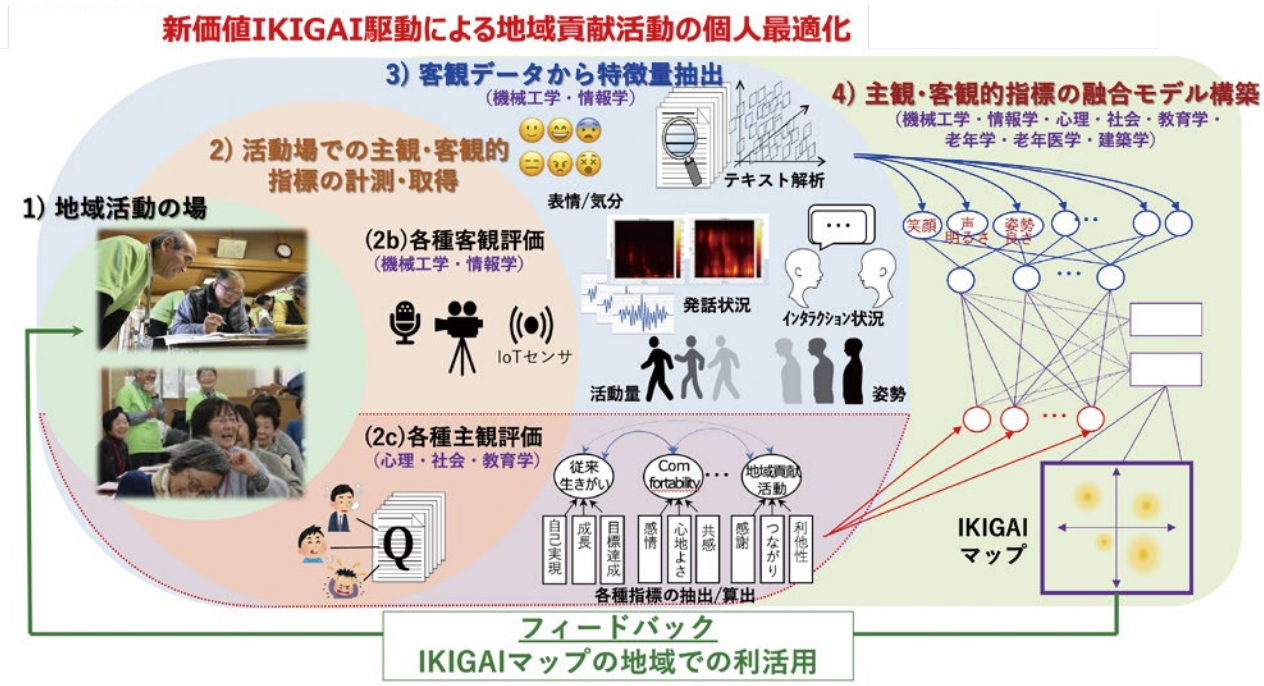
■ **研究目的**

地域貢献活動を行っている【支え手側】の生きがいを最適化することを目的として、自己実現を中心とした従来の生きがい概念に加え、「Comfortability」と「他者との関わり・貢献による喜び」を付加する新価値'IKIGAI'を定義し、社会活動を通して生きがいを感じる様々な場面や状況において音声、表情や姿勢、会話などの行動情報を計測、多様な要因の特徴量を抽出・探索することで、定量的に評価可能な「IKIGAIマップ」として可視化・最適化し、日常生活の活性化に応用することを目的とする。

■ **進捗状況**

地域貢献活動における「地域高齢住民の支え手側」の生きがい感を、①目的・動機づけや達成感、②継続性を生む本人の快適さや居心地良さ、③他者とのつながりを基盤とする地域貢献感の3要素を含む「新価値IKIGAI」として、文献調査に基づき主観尺度の整理を行い、IKIGAIモデル仮説を構築した。また、代表事例であるフレイルサポーターの活動を通じて生きがいを感じる場面やその達成感・地域貢献感を詳細解析するために、全国フレイルサポーターを対象に多様な体験談を調査した。さらに、モデル地域のフレイルサポーターを対象にインタビュー調査を行い、その地域貢献活動に参加するまでの経験や活動継続の促進・阻害要因などを6つのカテゴリー(計32サブカテゴリー)に類型化した。

生きがいの客観化・定量化に関しては、行動情報からの客観データとして①音声、②表情、③姿勢、④活動量、⑤会話量及び発言内容、⑥インタラクション状況を想定し、まず若年者を対象として①～③の予備基礎計測を実施、数種の計測機器を選定した。また、モデル地域のフレイルサポーターの行動計測に向けた研究説明会を行い、官学民連携の研究協力体制を構築した。



鎌倉リビングラボ

産学官民共創によるオープンイノベーションプラットフォーム

■ **プロジェクト代表者**

秋山弘子

■ **参画メンバー**

伊福部達、菅原育子、二瓶美里、藤﨑万裕、藪謙一郎、吉田涼子、沖田征也、井上結梨、細萱一立、佐藤雄太、遠藤良顕、小林寛範、久保梢、磯本勇人、関根伸弘、前田展弘、福沢愛、伊藤研一郎

■ **研究期間**

2016年～

■ **関連予算**

2016年度～2018年度JST国際科学技術共同研究推進事業（戦略的国際共同研究プログラム）日－瑞共同研究「活力ある高齢社会の実現に向けた「国際連携型リビング・ラボ」の創設」

2019年度～未来社会共創センター共同研究

2020年度～2023年度　科学研究費助成事業　基盤研究（B）「リビングラボを拠点としたIoT開発と運用による高齢者支援エコシステムモデルの構築」

2020年度　国会図書館令和2年度　科学技術に関する調査プロジェクト「高齢者を支える技術と社会的課題」

■ **パートナー企業・団体**

鎌倉市、NPO法人タウンサポート鎌倉今泉台、今泉台町内会、玉縄台自治会、布施新町みらいプロジェクト、一般社団法人未来社会共創センター、日本生命保険相互会社、大和ハウス工業株式会社、セコム株式会社、株式会社三井住友フィナンシャルグループ、三菱電機株式会社、株式会社イトーキ、株式会社Helte、川崎重工業株式会社、日立グローバルライフソリューションズ株式会社、パナソニック株式会社、日本コカ･コーラ株式会社、野村不動産ホールディングス株式会社 他

■ **プロジェクト概要**

リビングラボとは、開発プロセスの初期段階から生活者が主体として参加し、企業、大学、行政などの多様なステークホルダーが強みを持ち寄って、新しいものやサービスや社会のしくみを共に創っていく場や活動のことです。

鎌倉リビングラボは高齢化著しい鎌倉市今泉台等の生活の場を実験室（ラボ）として、生活者のニーズに適う質の高い解決策（ものやサービス、仕組み）を創出するとともに、共創手法、マルチステークホルダー体制構築、住民参加のあり方やイノベーションのメカニズム等を体系化、理論化することで日本版リビングラボのモデル創出を目指します。

鎌倉リビングラボHP

https://www.kamakurall.cc-aa.or.jp/

■ **進捗状況**

・「Work&Life&Learn」が融合した新しい働き方、生き方、社会のあり方創出に向けた複数企業参画による共創活動
・鎌倉市が推進するスマートシティ実現のための住民主体のデジタルデバイド対策
・「シニア活躍」「子育てママサポート」「自立期間延伸」「働きがい」等多様なテーマの鎌倉リビングラボプロジェクトを通した共創手法、体制、プロセス等の洗練化
・ICT・IoT活用による高齢者支援エコシステムモデル構築に向けた調査研究では、アーリープロトタイプを作成し模擬住宅で検証、評価実施
・日本版リビングラボモデル構築、日本のリビングラボネットワーク化に向けた研究交流会等の開催
・海外のリビングラボ事例調査、交流
・リビングラボ普及に向けた広報活動、講演・ヒアリング調査対応
・「Work&Life&Learn」が融合した“人生100　年時代”のオープンイノベーション実践イベント「Kamakura Living Lab Day2022」企画始動
・鎌倉市が推進するスマートシティ実現のためのデジタルデバイド対策プロジェクトが住民と研究チームの共同プロジェクトとして継続中
・「シニア活躍」「子育てママサポート」「自立期間延伸」「働きがい」「新コンセプトモビリティ」等多様なテーマの鎌倉リビングラボプロジェクトを通して共創手法、体制、プロセス等の洗練化
・ICT・IoT活用による高齢者支援エコシステムモデル構築に向けた調査研究では、検証、評価実施、学会発表等
・日本版リビングラボモデル構築、日本のリビングラボネットワーク化に向けた研究交流会等の開催（2021年度はリビングラボ研究交流会ウェビナー2回開催、第4回リビングラボネットワーク会議共催）
・国内外のリビングラボ事例調査、実践者との交流
・リビングラボ普及に向けた広報活動、講演・ヒアリング調査対応

フレイル予防に資する介入の探索

大規模フレイル予防研究「栄養とからだの健康増進調査（柏スタディ）」

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

孫輔卿、田中友規、吉澤裕世、神谷哲朗、乾裕之、川村淳、内山奈美、永谷美幸、高木麻祐子、呂偉達

■ **研究期間**

2012年～

■ **関連予算**

厚生労働科学研究費補助金、文部科学省科学研究費助成事業

■ **研究概要**

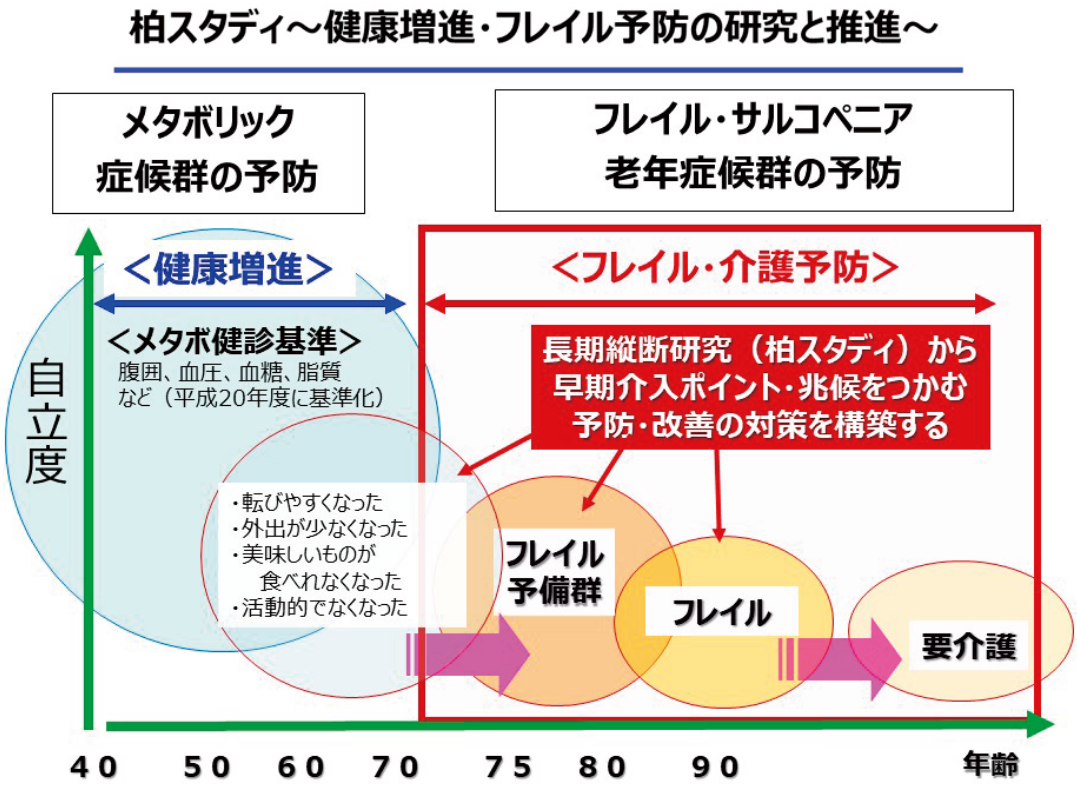
地域在住高齢者のフレイル予防に資するエビデンス構築を目的に、千葉県柏市在住高齢者（自立／要支援2,044名を対象とした前むきコホート研究（柏スタディ）を経年的に実施している。柏スタディでは、高齢者の健康状態、身体の構造と機能、活動、社会参加、心理及び認知機能等の精緻なデータ収集及び解析を行い、フレイルやフレイルの最大の原因であるサルコペニアの早期介入ポイントの探索および新たな簡易評価法についての研究成果を国内外に発信している。

■ **研究目的**

地域在住高齢者のフレイル・サルコペニアに対する早期介入ポイントを多面的な側面から探索し、高齢者が容易に実施できる簡易評価法を開発すること

■ **進捗状況**

柏スタディは2012年に初回調査が行われ、2020年度10月現在までに第5次調査まで実施した。これまで、フレイルやサルコペニアの新たな簡易評価法、フレイルやサルコペニアの発症機序として口腔機能や社会性など、多面的要因の影響等についての研究結果をまとめている。2021年度9月から11月にかけて、第6次調査を実施し、経年的に追跡してきた2,044名に加えて新たに対象者を追加した。現状、データセットの構築を進めており、更なるエビデンス創出を目指す予定である。



フレイル啓発に関わる地域特性の把握と フレイル予防活動につながる意識・行動変容のモデル化

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

孫輔卿、田中友規、吉澤裕世、呂偉達

■ **研究期間**

2015年～

■ **パートナー企業・団体**

千葉県柏市、東京都西東京市　健康福祉部　高齢者支援課

■ **研究概要**

従来の観察研究の多くは健康意識の高い限られた高齢者のデータが多くを占めるなど、高齢者の代表性に課題が付きまとう。本研究では、協力関係にある自治体が実施した介護予防悉皆調査データを分析し、地域別の特徴（地域診断にも応用）やその地域特性に即した持続可能な健康増進活動への実現を目指す。具体的には、地域ごとのフレイルの実態と社会的・物理的環境要因との関連を明確にしたうえで、現在の地域資源を活かし、地域特性に即した持続可能な健康増進活動・介護予防事業のあり方について検討することを目的とする。

■ **研究目的**

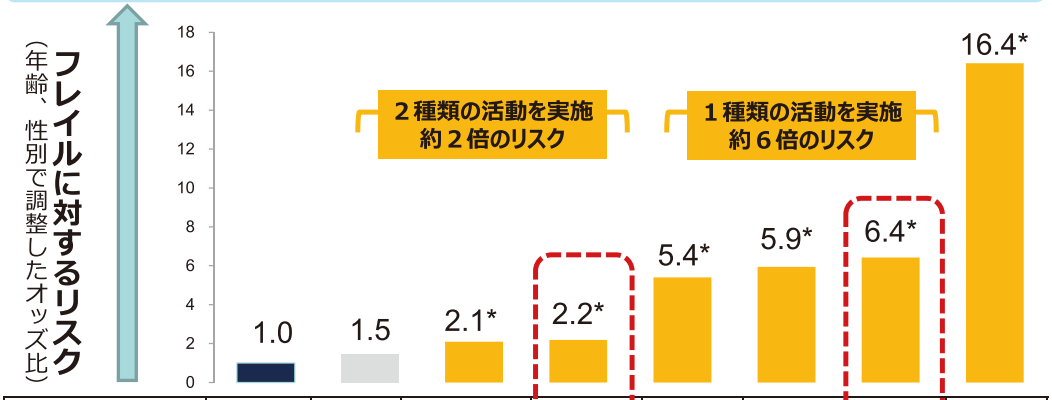
自治体が収集した悉皆パネルデータを二次分析することで、地域に潜むフレイルの実態を明らかにするとともに、フレイル予防に資する個人特性・地域特性を同定し、持続可能なフレイル予防施策につなげる。

■ **進捗状況**

現状、2自治体の悉皆調査データを解析し、結果を報告している。(1)千葉県柏市において2015年に実施した介護予防悉皆調査約6万人分のデータを活用し、地域全体のフレイルの有症率と特に、高齢者の日常生活行動を運動関連、文化・趣味関連、ボランティア等の地域活動の3種類に分けた際のフレイルの有症率との関連を検討し、地域活動や文化活動の重要性を報告した。(2)東京都西東京市において2015年および2018年に実施した後期高齢者生活状況実態調査の悉皆パネルデータを用いて、3年間の後期高齢者におけるフレイルの有症率や新規発症・改善率、介護死亡等の発生率の代表値を明らかにした。同時にフレイルの認知度に地域格差が認められ、その地域差がフレイルの新規発症・介護等への重症化に関連する可能性を見出している。(2)に関しては、2021年度も同様のパネル調査を実施した。今後、より長期縦断追跡データを解析していく予定である。

様々な活動の複数実施とフレイルへのリスク
～自立高齢者に対する悉皆調査から（49,238人）～

身体活動はフレイル予防に重要ですが、身体活動だけよりも文化活動やボランティア・地域活動など、複数実施することがよりフレイル予防につながります。



人数	5,212	385	22,688	1,476	246	9,411	4,150	5,670
身体活動（運動習慣）	○	○	○	×	×	×	○	×
文化活動	○	×	○	○	×	○	×	×
ボランティア・地域活動	○	○	×	○	○	×	×	×

*p<0.001

（吉澤裕世、田中友規、飯島勝矢ら．2019年　日本公衆衛生雑誌）vol.66 ,306-316

フレイル予防を通した健康長寿のまちづくり

市民主導の新たな包括的フレイル予防プログラムを通した快活な街づくりのモデル構築

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

辻哲夫、神谷哲朗、孫輔卿、田中友規、佐藤雄太、関根伸弘、中村達也、吉澤裕世、呂偉達

■ **研究期間**

2015年～

■ **パートナー企業・団体**

フレイルチェック導入自治体、全国フレイルサポーター連絡会連合会

■ **研究概要**

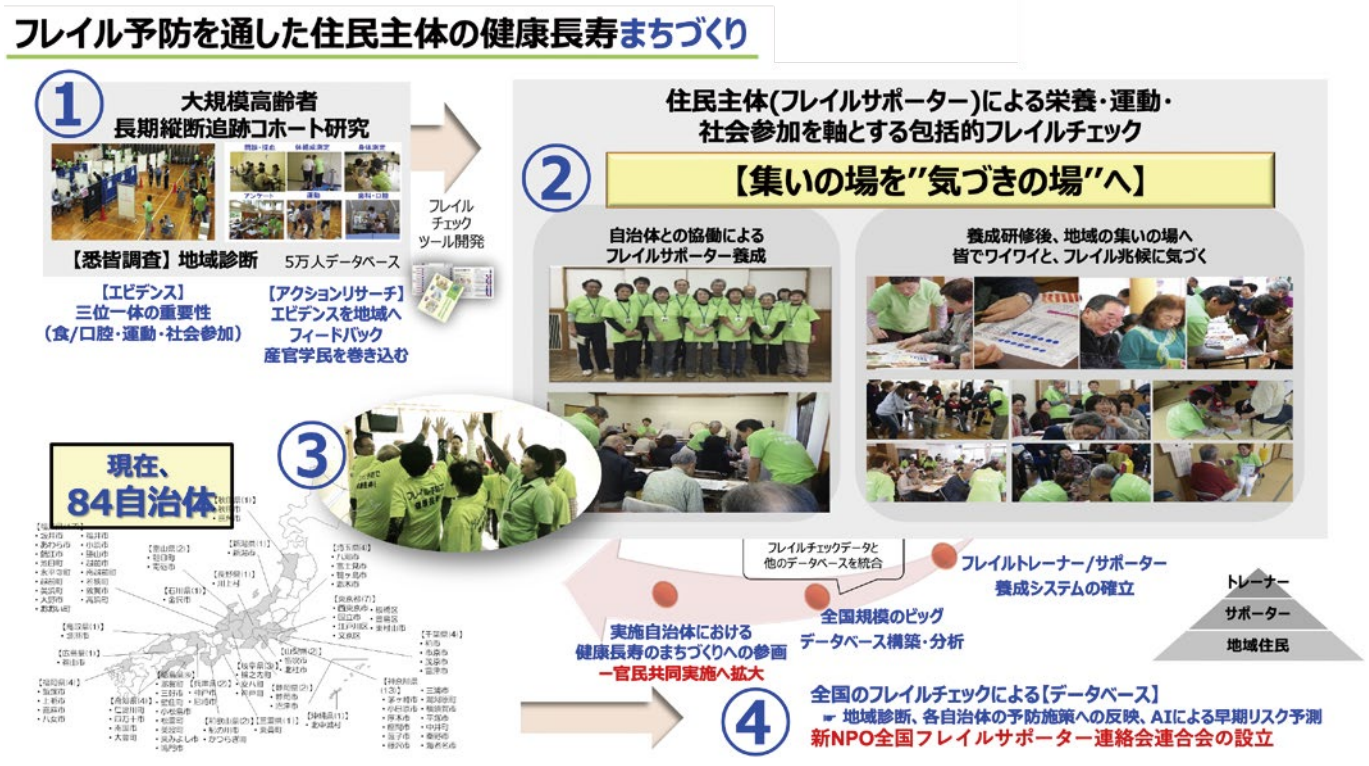
フレイル予防を通じた健康寿命のまちづくりを達成すべく、本機構ではフレイル予防に資するエビデンスを構築し続け、住民主体（フレイルサポーター）による栄養・運動・社会参加を軸とした包括的フレイルチェックを開発した。フレイルチェックは全国84自治体が導入し、今や全国規模のフレイル予防プログラムとなっている。全国から集まったデータからビックデータを構築し、地域診断やフレイル予防施策、まちづくりに応用できるような地域還元も行っていく。本研究を通じて、フレイル予防の人的資源の拡充や、地域全土でのフレイル予防の機運醸成、受け皿体制の整備につながることで、住民主体の健康寿命のまちづくりを目指す。

研究目的

住民主導の包括的フレイル予防プログラム（フレイルチェック）を基軸とした、健康寿命の達成できる快活なまちづくりを目指し、本プロジェクトでは、次の4段階で研究を進めてきた。まず、（1）フレイル予防に資するエビデンスを疫学調査等のデータを用いて創出する。具体的には、千葉県柏市在住の前向きコホート研究（柏スタディ）などのデータにより、フレイルの早期介入ポイント、簡易指標を検討する。次に、（2）エビデンスベースドかつ有識者会議から、高齢住民フレイルサポーターによる栄養・運動・社会参加を軸とした包括的フレイルチェックの開発し、（3）フレイルトレーナー制度（医療専門職の指導者、調律者）による日本全国への面展開を行い、全国からのフレイルチェックデータの構築、そしてそこか得られたエビデンスを地域還元しながら、（4）フレイルチェックを基盤として、各自治体が多種多様かつ独自の予防施策につなげることで、フレイル予防を通じた健康寿命のまちづくりを達成する。

■ **進捗状況**

フレイルチェック導入自治体は現在、88自治体にも上り、全国規模でのフレイルチェックデータを突合しビックデータを構築してきた。今後、AI技術などを応用した形で早期リスク予測や地域診断などに応用していく。さらに、新NPOとして全国フレイルサポーター連絡会連合会を発足させ、全国自治体のフレイルチェックの調整等を担っていく予定である。また、2021年度には柏スタディ第6次調査も実施したことで、コホートデータから更なるエビデンス構築を進め、フレイル予防施策に反映できるよう地域還元していく。



フレイルチェックデータを活用した介護予測システムの構築

複数自治体連携によるエビデンス構築から全国導入自治体へ

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

田中友規、孫輔卿、吉澤裕世、辻哲夫、神谷哲朗、呂偉達

■ **研究期間**

2015年～

■ **パートナー企業・団体**

フレイルチェック導入モデル自治体

■ **研究概要**

フレイル予防を通じた健康寿命のまちづくりを達成すべく、本機構ではフレイル予防に資するエビデンスから住民主体（フレイルサポーター）による栄養・運動・社会参加を軸とした包括的フレイルチェックを開発した。フレイルチェックは全国84自治体が導入しているが、本プロジェクトでは、その中でも有数のフレイルチェック導入モデル自治体との産官民連携により、高齢住民が評価したフレイルチェックデータと、自治体の介護レセプトデータの連携データを構築する。その上で、フレイルチェックの結果が将来の介護予測に有用か否かを検討することで、フレイルチェックの結果と介護認定状況や将来の新規認定との関連、ハイリスク基準などを明らかにすることで、全国フレイルチェック導入自治体で活用できる介護予測システムを構築する。

■ **研究目的**

地域貢献活動を行っている【支え手側】の生きがいを最適化するフレイルチェック導入モデル自治体（具体的には、千葉県柏市、東京都西東京市、神奈川県平塚市、他）のマルチフィールドデータを活用して、フレイルチェックデータと介護レセプトデータの連結したデータセットを構築する。この構築データを二次利用することで、(1)フレイルチェックの結果が将来の介護認定や死亡等のアウトカムを予測し得るのか、どの程度のインパクトがあるのか、(2)フレイルチェックの全22項目でどの項目が介護認定等のアウトカムにより強く関連するのか、地域差はあるのか、(3)介入対象者の基準（ハイリスク基準）の構築、そして(4)介護認定を受けにくい者の特徴などを明らかにする。

■ **進捗状況**

フレイルチェック導入モデル自治体の内、フレイルチェックと介護認定レセプトデータとの連結データセットを、千葉県柏市を中心に構築した。その結果として、フレイルチェック赤信号数は将来の要介護や死亡を予測し得ることがわかった。今後は、さらに複数自治体のデータも含めることで、全国フレイルチェック導入自治体に提案できるエビデンスを構築、地域へ還元していく。

フレイルチェックの結果は将来の自立喪失を予測する

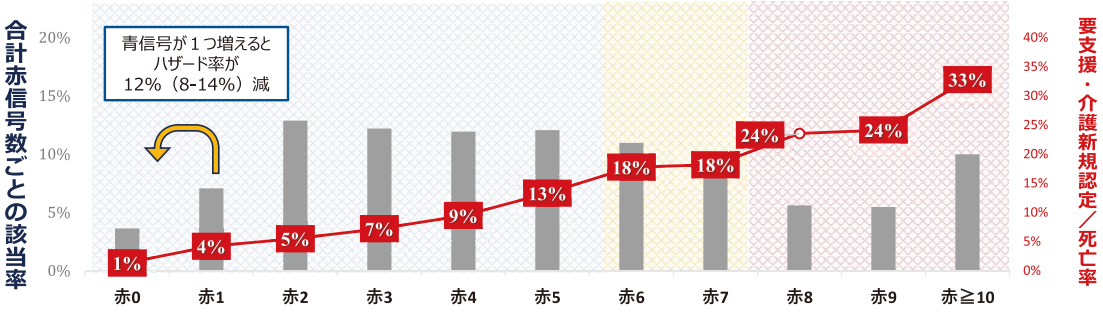
フレイルチェックの
●信号、介護リスクは変わるのか？

低度リスク群
●≦5 (60%)
性・年齢調整ハザード比
1.0 (Ref.)

中度リスク群
●6-7 (20%)
性・年齢調整ハザード比
1.7 (1.2–2.4)

高度リスク群
●≧8 (20%)
性・年齢調整ハザード比
2.6 (1.9–3.3)

優先すべき項目
- 握力、椅子立ち上がり
- ふくらはぎ周囲
- 滑舌（ta音）
- 外出頻度
- 支え合い



デザイン ：前向きコホート研究　（追跡日数中央値［4分位範囲］＝948［498-1381］日）最大1781日
対　象 ：千葉県柏市・東京都西東京市在住65歳以上高齢者 2098名（平均75.5±5.7歳、女性76.5%）
アウトカム：追跡期間中の自立喪失（要支援、要介護新規認定、死亡）　294名（14.0%）

田中友規、飯島勝矢ら
（第64回日本老年医学会学術集会）

後期高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施を見据えたフレイル対策

フレイルチェックとの融合・集いの場におけるアウトリーチ体制整備

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

田中友規、吉澤裕世

■ **研究期間**

2019年～2023年

■ **パートナー企業・団体**

フレイルチェック導入モデル自治体

■ **研究概要**

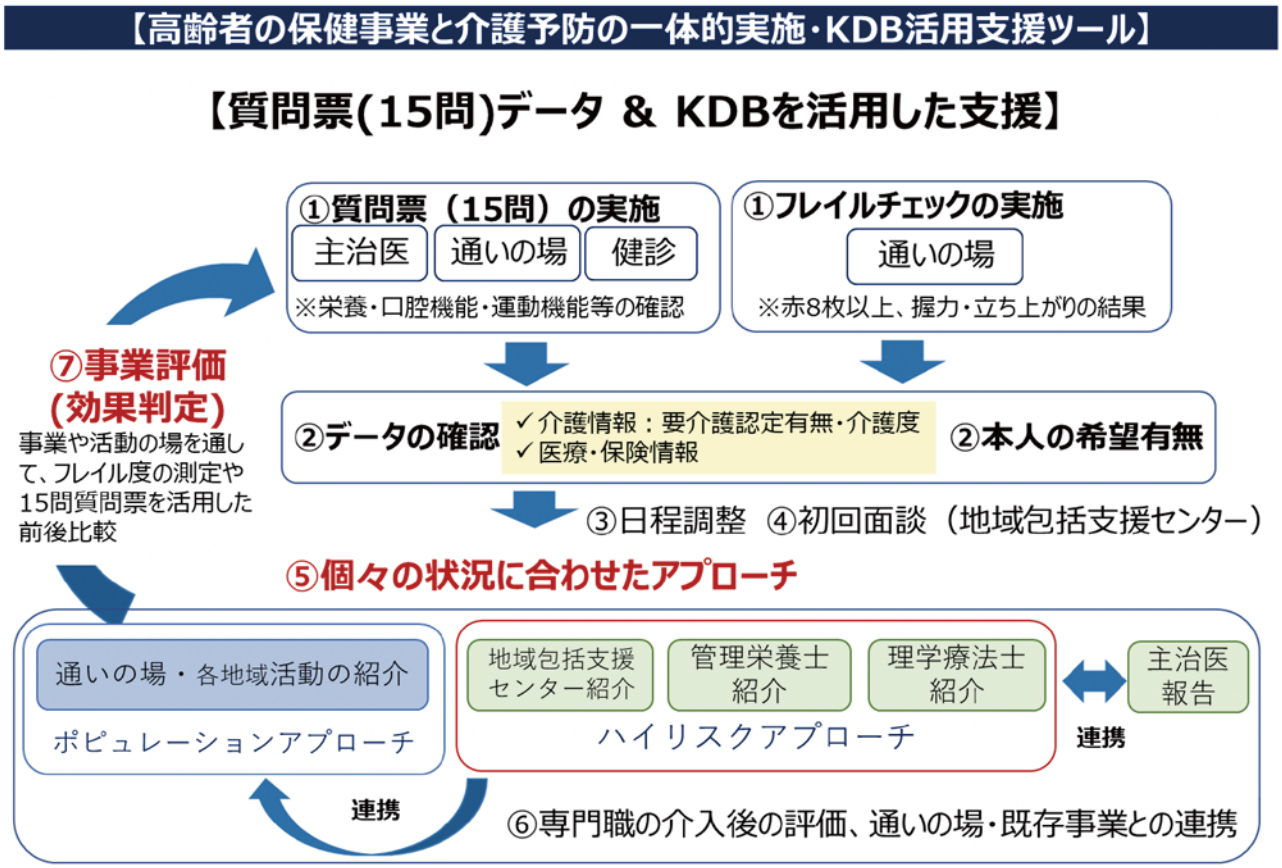
健康寿命の延伸にむけたフレイル対策、生活習慣病対策による高齢者の予防・健康づくりの推進は、中心的な国家戦略である。厚生労働省は従来、実施主体が異なっていた保健事業と介護予防事業に対して、疾病予防・重症化予防とフレイル対策の一体的実施という新たな枠組みを構築し、高齢者に対して包括的な予防・健康づくりの推進を提供すべく具体的な準備を進めている。その中心戦略として、保健・介護予防事業の双方のエッセンスを集約した「後期高齢者のための質問票（フレイル要素による）」を開発した。本プロジェクトでは、この保健事業と介護予防の一体的実施によるフレイル対策を見据え、国保データベース（KDB）から後期高齢者の質問票によるフレイル評価の妥当性を検証し、フレイルチェック導入自治体において、このKDBデータの利活用法の構築からのハイリスクへのアウトリーチ体制の構築を目指す。

■ **研究目的**

本プロジェクトでは、保健事業と介護予防の一体的実施を見据えたフレイル対策を構築すべく、フレイルチェック導入自治体をフィールドに（1）国保データベース（KDB）から後期高齢者の質問票によるフレイル評価の妥当性を要介護新規認定リスクとの関連性から明らかにした上で、（2）KDBデータを活用した地域診断、ハイリスク者の選定方法を自治体と協働で行い、（3）フレイルチェックや集いの場への参加勧奨、専門職の直接介入などハイリスク者のアウトリーチ体制の構築を検討する。

■ **進捗状況**

フレイルチェック導入自治体の国保データベース（KDB）を活用し、後期高齢者の質問票を活用したフレイル状態の把握と全身疾患状況が短期間の要介護新規認定リスクと関連することが分かった。今後、KDBとフレイルチェックを活用したフロー体制を地域で実際に検証していく予定である。



JST-SCORP　日本ースウェーデン共同研究

高齢者の食事に関する日本とスウェーデンの共同研究

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

田中友規、高木麻祐子

■ **研究期間**

2021年～2023年

■ **関連予算**

JST-SCORP

■ **パートナー企業・団体**

神奈川県平塚市、株式会社フードケア

■ **研究概要**

本研究プロジェクトでは、日本とスウェーデンの活動を融合し、高齢者の食欲不振とフレイルを軽減するための食品、技術、流通システムを開発し、高齢者の自立と社会参加を促すことを目指している。日本チームでは、東京医科歯科大学、松本歯科大学、東京大学（高齢社会総合研究機構・未来ビジョン研究センター）および株式会社フードケアで構成されている。日本チームは口腔機能（主に咀嚼機能）の維持・改善を目指して、「カムカム概念（しっかりと噛み応えのある食材・調理方法で工夫して、栄養バランスの取れた食生活を）」を提唱し、「カムカム弁当」を中心とした介入効果の検証や橋渡し研究、咀嚼機能を評価する機器開発を実践している。一方、スウェーデンチームは嚥下に焦点を当て研究を進め、互いに連携してプロジェクトを推進している。

参考URL：https://www.goindependent.jp/

■ **研究目的**

本研究プロジェクトにおいて本学では、「カムカム概念」の地域展開を目指して、フレイル予防活動「フレイルチェック」と「カムカム概念」を融合させた「住民主体のフレイル・オーラルフレイル予防プログラム：　カムカム教室」を開発した。本研究の目的は、①フレイルチェックの導入モデル自治体（神奈川県　平塚市）にて、地域在住高齢者に対する介入効果を検証した上で、②日本全土へ面展開するためにも、他自治体でも導入できるような資材を開発することである。

■ **進捗状況**

本学が中心となり、フレイルチェック導入モデル自治体（神奈川県平塚市）の行政担当者および住民（フレイルサポーター）、株式会社フードケアと産学官民連携による議論を重ね、「カムカム教室テイスト」等を開発し、実際のフレイルチェック参加者に対する介入研究（非無作為化比較試験）を実施している。2022年度に向けて、介入効果検証と他自治体への説明資料の開発等を行う予定である。

オーラルフレイルを軸としたフレイル予防・改善プログラム「カムカム教室」

フレイルチェックとカムカム教室で「栄養・運動・社会参加・カムカム」を学ぶ様々な体験も

- テキストの活用
- サポーターが講和、自身の体験をおりまぜて説明
- 体操（口腔、運動）やカムカムおつまみ試食も

カムカム教室で学ぶこと

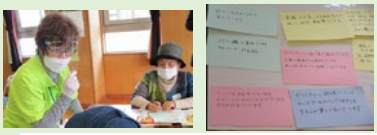
カムカム教室テキスト

カムカム食材の紹介、試食

体操（口腔、運動）

グループワークで目標づくり「わたしだけのカムカムチャレンジ」「チームのみんなでカムカムチャレンジ」

- サポーターがファシリテーターでグループワーク
- 自身の現状把握と言語化、目標の設定と共有
- 2回の教室で行動を振替り、強化する



グループワークで現状把握、目標設定

わたしだけのチャレンジシート

テキストに貼り付け

チェキ撮影と貼り付け

後日送付のニュースレター「他の地域のカムカムチャレンジを知る」「サポーターさんの工夫も掲載」

- 他の参加者のカムカムチャレンジを掲載
- サポーターの実体験集でさらなる学びを
- 次回のフレイルチェックへの参加勧奨

ニュースレター
シーズン、自治体別で
表紙の写真を変更可能

栄養・運動・社会参加・
それぞれでみんなの
チャレンジを掲載

住民主体！
フレイルサポーターが講和や説明、グループワークにも積極参加

産官学民で取り組むフレイル予防産業の活性化

民間商業施設におけるフレイル予防

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **実務担当責任者**

乾　裕之

■ **参画メンバー**

辻哲夫、孫輔卿、神谷哲朗、田中友規、内山奈美、永谷美幸、川村淳、高木麻祐子、田中康夫、榊原拓磨、吉澤裕世

■ **研究期間**

2018年～

■ **研究概要**

①フレイル予防について、地域の生活者に気づきの機会を提供する。

フレイル予防は社会課題ではあるが、個人の需要として顕在化してはいない。継続的な啓発により、フレイル予防の機運の醸成を目指す。認知、意識変容、行動変容からその継続にいたる過程において、フレイル予防をじぶんごと化する大きなきっかけとしてIOGの開発したフレイルチェックがある。行政や特に民間商業施設と協力することで、フレイルチェック事業の拡大およびデータ取り扱いのスキーム構築を目指す。

②フレイル予防サービスガイドラインの作成

食の在り方研究会の活動と連動し、フレイル予防に資する可能性のある商品やサービスを、フレイル予防に資するかたちで届ける方策について必要な要件を整理し、標準化する。

■ **研究目的**

早期介護予防として国家的課題となるフレイル予防について、自助互助の領域にて、民間の力を生かしたポピュレーションアプローチを実践する。

■ **進捗状況**

アクションリサーチの社会実装フェーズに向け、現場実践の下地作りを進めている。21年10月にはモデル地域で試行を実施した。神奈川県未病産業研究会においてフレイル分科会も設立された。食の在り方研究会では実行体制確立のため、毎月の定例と分科会の場で議論を進めている。メンバー拡大に向けた調整も22年3月末までにできる見込みである。

食の在り方研究会　食を起点とする フレイル予防産業の創生

人生100年時代の「食の在り方」とフレイル予防産業創生

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **実務担当責任者**

内山奈美

■ **参画メンバー**

辻哲夫、孫輔卿、神谷哲朗、田中友規、吉澤裕世、乾裕之、永谷美幸、高木麻祐子、榊原拓磨、井上結梨

■ **研究期間**

2019年～

■ **パートナー企業・団体**

イオン株式会社、キユーピー株式会社、サンスター株式会社、東京ガス株式会社、株式会社フードケア、マルタマフーズ株式会社、株式会社アグリインキュベーター、ハウス食品株式会社、UNITED FOODS INTERNATIONAL株式会社

■ **研究概要**

①食関連フレイル予防産業ガイドラインの策定と国の政策への提言を目指す

フレイルの関する知見を学び、食関連フレイル予防産業の振興策を研究し、振興策のたたき台（食関連フレイル予防産業の育成のための自主ガイドラインと認証制度の構築についての草案）を取りまとめ、国の政策（経産省次世代ヘルスケア産業協議会「ヘルスケアサービスガイドライン等のあり方」）の考え方に沿った政策推進の土台を構築する

②フレイル予防食品、フレイル予防レストラン、フレイル予防サービス等に向けたエビデンス構築

食を中心にアカデミア発のフレイル予防に繋がるエビデンスに基づいたフレイル予防商品・サービスの概念の確立とフレイル予防広報戦略（飯島教授監修）との連携の構図を確立する

③業界自主ガイドラインと認証制度の草案作成

参加企業の先行利益を尊重しつつ、業界自主ガイドラインの策定と認証制度の確立を目指す。

食関連をスタート台に据えてフレイル予防産業政策に展望を築く

■ **研究目的**

生活習慣病対策は既に国の政策として推進中であるが、介護予防の政策体系は、まだ構築途上にある。日本老年医学会は、要介護になる手前の徐々に虚弱になる過程を「フレイル」と定義した。現在までの政策の主流であった要支援段階での介護予防よりもより早期の可逆性の高い段階でのフレイル予防政策を普及させることが国家的課題である。人生100歳時代の「食の在り方」対策は、より早期からの対応として、本人はもとより、地域そのものを虚弱化させないためのまちづくりの一環として、先駆けて取り組む必要がある。

その中では民間事業者の役割が大きく、産官学連携の取り組みでフレイル予防産業の創生をめざす。

■ **進捗状況**

2021年4～7月　事務局MTG開催
8月　第6回研究会開催
10月　第7回研究会開催
11月　第8回研究会開催
12月　第9回研究会開催
1月　第10回研究会開催
3月　第11回研究会開催

出典：東京大学高齢社会総合研究機構神谷哲朗ら作成

オーラルフレイル予防推進研究会
”食べられる口”を維持するためのオーラルフレイル予防産業の創生

早期のオーラルフレイル予防により「食べたいものをおいしく食べ続ける口を維持する」

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **実務担当責任者**

永谷美幸、川村淳

■ **参画メンバー**

辻哲夫、神谷哲朗、孫輔卿、田中友規、乾裕之、内山奈美、高木麻祐子

■ **研究期間**

2020年～

■ **パートナー企業・団体**

イオン株式会社、キユーピー株式会社、サンスター株式会社、株式会社フードケア、株式会社ロッテ

■ **研究概要**

オーラルフレイル予防の意義とその手段について、アカデミアと連動しエビデンス構築を行い、オーラルフレイル予防が健康寿命の延伸に重要であることを証明するとともに、その予防に資する商品・サービスを定義づけし、産学連携でオーラルフレイル予防の仕組みの社会実装、産業構築を目指す。

■ **研究目的**

オーラルフレイルは、フレイルの中でも早期に顕在化し、それ単体で要介護認定や死亡のリスク因子となるため、より早期のオーラルフレイル予防を行い、食べたいものを美味しく食べられる口腔を維持することが重要である。

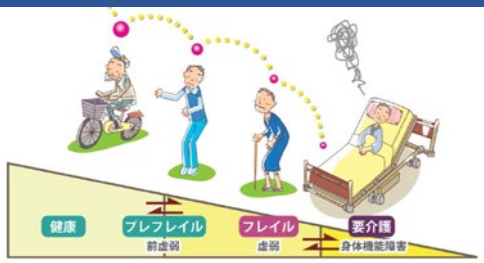
一方で、オーラルフレイルの中でも、口腔機能低下症となる手前の早期のオーラルフレイルにおいては、「自助」を想定したソリューション提供が重要であり、産業界の活用が必要となる。

本研究会では、エビデンス構築をベースに、産学連携でオーラルフレイルの早期予防の仕組みづくりに取り組む。

■ **進捗状況**

2020年12月、2021年7月に研究会を開催。オーラルフレイルの啓発に向けた議論を実施。

オーラルフレイル予防推進研究会　発足の背景



早期のオーラルフレイル予防、対策により健康寿命の延伸を目指す

“食べたいものをおいしく食べ続ける口を維持する”
がキーワード

課題 85歳以上の急激な人口増加（15年後に1000万人）→ **オーラルフレイル人口の増加** → **フレイル人口の増加** → **介護人口の増加**

①0次予防（環境整備）
➡口の健康リテラシーの向上
啓発活動　オーラルケア

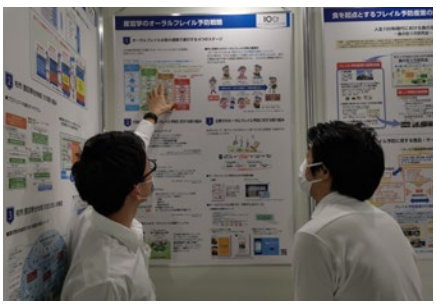
②1次予防（市民への働きかけ）
➡口のささいなトラブルの予防
気づきの場　ソリューション提供　▶ おいしく食べられるお口

オーラルフレイル予防推進研究会

連携 ⇄ **食の在り方研究会**

啓発活動
気づきの場、データ活用
認証制度　etc.

“エビデンス構築”と“啓発活動”を経て、高齢期における
オーラルフレイル予防の“仕組みの社会実装”と“産業構築”を目指す



大規模コホート研究（柏スタディ）から見る咀嚼習慣の重要性

オーラルフレイルの早期発見法、予防法の探索

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **実務担当責任者**

川村淳

■ **参画メンバー**

孫輔卿、田中友規

■ **研究期間**

2021年～

■ **パートナー企業・団体**

株式会社ロッテ

■ **研究概要**

オーラルフレイルの早期発見法と予防法について、柏スタディのデータを解析することで探索し、アカデミアと連携することでエビデンスの構築を行う。また、探索によって見いだされた早期発見法と予防法について、対応する商品、サービスについて定義づけを行い、産学連携でのオーラルフレイル予防の仕組みを社会実装することを目指す。

■ **研究目的**

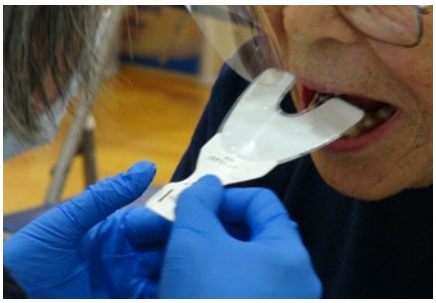
オーラルフレイルは、フレイルの中でも早期に顕在化し、要介護や死亡のリスク因子となることが柏スタディで明らかにされている。一方で、現在のオーラルフレイルの対策としては、失った歯の補綴を行うなど、重度な状況での治療的な対策が大半である。このような現状から、より初期でのオーラルフレイルの発見および対策を行うことが求められている。そこで本研究においては、柏スタディの膨大なデータを解析することにより、オーラルフレイル、そしてフレイルに至る変化の実態解明を行っていく。

人のQOLを維持するためには、初期のオーラルフレイルを自覚することが重要と考えられる。そこで、柏スタディでも使用されている「咀嚼チェックガム」を活用した、より簡便なオーラルフレイルの評価方法を探索する。

また、初期のオーラルフレイルの対策として、「噛むこと」の意識、行動がどのように影響を与えるかについて明らかにし、エビデンスに基づいた簡便なオーラルフレイル予防法を提供することを本研究の目的とする。

■ **進捗状況**

2021年度の柏スタディの項目で咀嚼習慣についてアンケートを取り、現在データ解析中。



AIを活用した効果的なフレイル予防の実現に向けた基盤研究

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

孫輔卿、田中友規、吉澤裕世、辻哲夫、神谷哲朗

■ 研究期間

2020年～

■ パートナー企業・団体

株式会社日立製作所

■ 研究概要

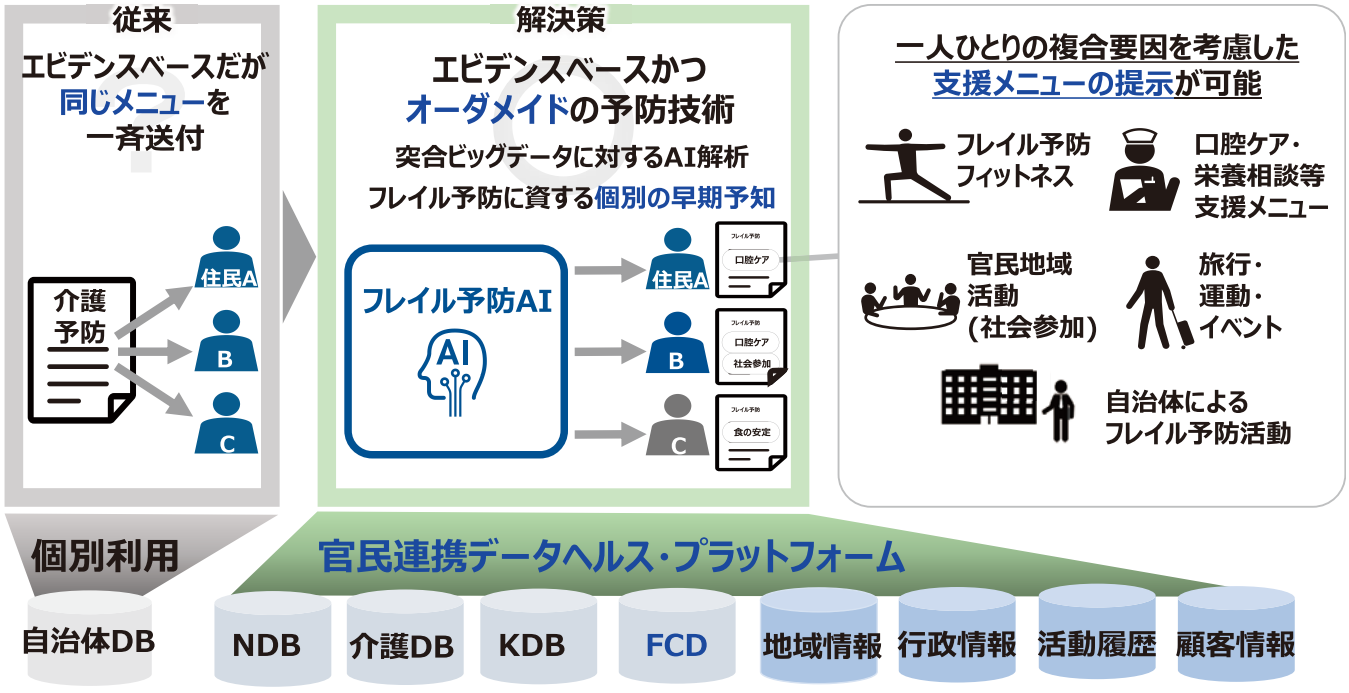
高齢者の虚弱化（フレイル）をより早期から予防し、真の健康寿命の延伸を図るため、行政の健康づくり事業の拡充を目的として、早期介護予防、フレイル予防効果が高い施策を打つためのAI（人工知能）を活用した仕組みの実現性を検証する。具体的には、本研究では、IOGが推し進めているフレイルチェックデータと、千葉県柏市が保有するKDB（国保データベース）に登録されている情報（特定健診・特定保健指導、医療（後期高齢者医療含む）、介護保険等）を用いて、(1)高齢者ひとり一人の介護リスクもしくはフレイルリスク推定の精度検証、(2)AIが出力するリスク特徴量（リスク因子）の妥当性検証、(3)原課での用途検証、等を実施する。これらの取り組みを通じて、健診案内への介護/フレイルリスクと因子の封入による受診促進、保健指導における高齢者の健康状態把握支援等、高齢者の健康づくり及び関連する柏市事業KPI改善に資するAI用途の確立を目指す。

■ 研究目的

千葉県柏市が保有するフレイルチェックデータとKDBデータを連結することで、(1)高齢者ひとり一人の介護リスクもしくはフレイルリスク推定の精度、(2)AIが出力するリスク特徴量（リスク因子）の妥当性、(3)原課での適切な用途を明らかとする。

■ 進捗状況

解析の基盤となるビックデータを取得する基盤を構築した。現状、柏市・東京大学高齢社会総合研究機構が匿名化処理等のデータ提供・受取準備を進めている。また、データの有効活用法について株式会社日立製作所を含めた三者で協議し、具体的な解析プランを構築した。今後、解析プランに沿って、ビックデータのAI解析を進めていく予定である。



AI: Artificial Intelligence, DB: DataBase, NDB: National DataBase, KDB: Kokuho DataBase, FCD: Frailty Check Data

7月17日 柏の葉スマートシティ　オンラインフォーラム

住宅内センサフュージョンを用いたフレイル検知技術の研究

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

孫輔卿、田中友規、呂偉達

■ **研究期間**

2020年～

■ **パートナー企業・団体**

株式会社日立製作所、
株式会社日立グローバルライフソリューションズ

■ **研究概要**

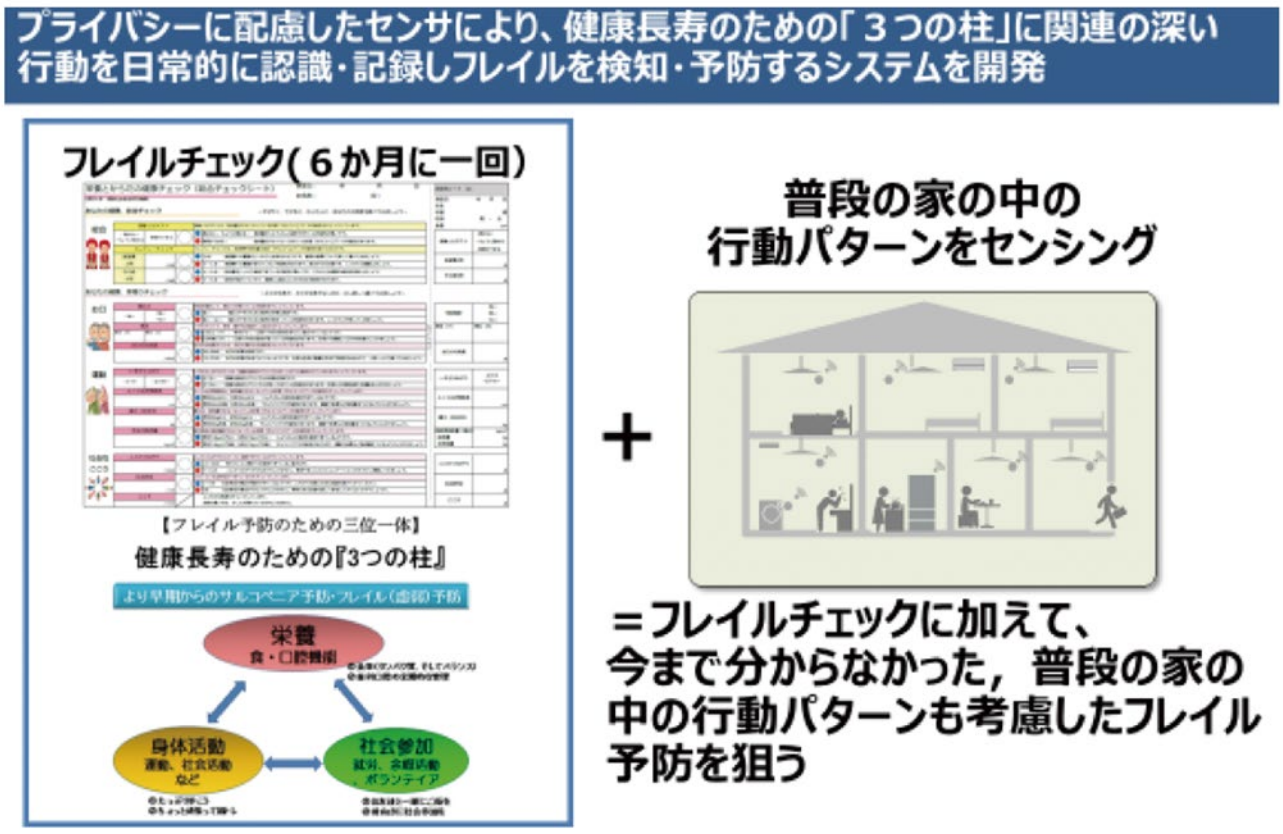
フレイル予防や早期発見、経年的な変化を日常生活の中で把握することは、健康寿命の延伸に寄与することが期待できる。本プロジェクトでは、株式会社日立製作所との共同のもと、家庭内のコネクテッド家電やセンサによって得られた情報を活用したフレイル予兆検知システムの開発を目的としてて、フレイルとセンサによって取得される情報との関係について整理し、センサによるフレイルや生活の活きの測定方法について検討していく。

■ **研究目的**

センサフュージョンによるフレイル予兆検知システム構築が本研究の目的である。具体的には、ミリ波センサにより測定できるデータから、フレイル検知に関係する行動を抽出し、フレイルに関係する「生活の活き」を検知し、普段の生活をさりげなく見守り、既存の測定では得られない行動の経時変化を検知するシステムを開発する。

■ **進捗状況**

センサフュージョンによるフレイル予兆検知方法を検討した。(1)フレイル予兆検知ソリューションのコンセプトを検討し、センサフュージョンにより普段の生活をさりげなく見守り、既存の測定では得られない行動の経時変化を検知することで、フレイルに関係する「生活の活き」を検知するシステムを開発した。(2)ソリューションの特徴としては、「非接触センサによるさりげない測定」により「生活総合評価」「行動のリズム」「行動のキレ」を総合的に測定することにした。(3)フレイル検知に関係する行動を抽出し、生活の活き可視化システムの要件を定義し、システムを開発した。また要件定義に関連して、検証するシナリオ行動を設定した。(4)ミリ波センサにより測定できるデータから、エネルギー、キレの導出方法を定義し、シナリオ行動の測定から、高齢者装具で模擬した身体能力の低下を検出できることを確認した。



カムカム戦略を軸とした全世代型食支援まちづくり

高齢者フィールドでインパクトのあるエビデンスづくりから全世代へ

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

田中友規、高木麻祐子、永谷美幸

■ **研究期間**

2021年～

■ **関連予算**

JST-SICORP

■ **パートナー企業・団体**

神奈川県平塚市、株式会社フードケア、サンスター株式会社

■ **研究概要**

オーラルフレイルを軸としたフレイル予防の推進に向けては、地域全土へのポピュレーション・アプローチが重要である。本プロジェクトでは、ライフコース・アプローチの視点をさらに加えることで、高齢者フィールドを中心としつつも、全世代型の食支援まちづくりを目指す。具体的には、フレイルチェック導入モデル自治体において、カムカム概念（しっかりと噛み応えのある食材・調理方法で工夫して、栄養バランスの取れた食生活を）を基盤としたフレイル予防の推進（フレイルチェックとカムカム概念の融合：カムカム教室の実践）、地域全土の意識変容に向けたオーラルフレイル啓発の推進、さらにはカムカム概念に振れやすい生活環境整備（買い物の場面や学校給食、歯科健診など）を実現させる。

■ **研究目的**

本研究では、フレイルチェック導入モデル自治体である神奈川県平塚市をフィールドとして、①　フレイル予防活動「フレイルチェック」を融合させた「住民主体のフレイル・オーラルフレイル予防プログラム：　カムカム教室」の、地域在住高齢者に対する介入効果を検証する。さらに、②　モデル自治体の特定地域に対して、集中的に「口腔機能訓練や口腔ケア、フレイル・オーラルフレイル予防」の啓発を行うことで、口腔保健行動に対する意識・行動変容や、フレイル・オーラルフレイルの認知度向上を検討する。

■ **進捗状況**

モデル自治体に対して、関係性作りを進めながらも、産学官民連携により「カムカム教室」の自治体独自の地域資源を加味して内容や資材を構築した。実際のフレイルチェック参加者に対する介入研究（非無作為化比較試験）を実施している。さらに、2022年度に向けてカムカム教室の介入効果の検証と、特定地域に対する集中的な啓発活動を展開し、地域全土への介入効果を検証していく。これらを通じて、さらなる生活環境の構築も目指していく。

柏市・豊四季台地域における高齢社会対応のまちづくり

住み慣れたまちで自分らしく老いることのできるまちづくり

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

秋山弘子、辻哲夫、菅原育子、孫輔卿、梅本大輔、内山奈美、榊原拓磨、神谷哲朗、乾裕之、遠藤良顕、鶴岡祐樹、小林寛範、細萱一立、佐藤雄太、井上結梨、泉綾子、木村誠一、関根伸弘、中村達也

■ **研究期間**

2009年～

■ **パートナー企業・団体**

柏市、柏市社会福祉協議会、UR都市機構

■ **研究概要**

東京大学高齢社会総合研究機構と独立行政法人都市再生機構、柏市は、2010年に協定を結び、柏市社会福祉協議会とも連携しながら千葉県柏市豊四季台地域において下記の項目について取組みを実施してきた。

〈いつまでも在宅で安心した生活が送れるまち〉

(1)在宅医療の推進

(2)地域包括ケアシステムのモデル拠点の整備

(3)生活支援サービス

〈いつまでも元気に活躍できるまち〉

(1)生きがい就労・生きがい支援

(2)外出・移動・交流・地域活動をうながす環境づくり

(3)健康づくり・介護予防

詳細については、「豊四季台地域高齢社会総合研究会の成果と今後の取り組みについて」の通りです。

〈いつまでも元気に活躍できるまち〉(1)生きがい就労・生きがい支援に位置付けられる②地域の食のプロジェクトの「コミュニティ食堂」は、2019年10月に事業者が決定しました。現在工事中であり、目下、2022年秋頃にコミュニティ食堂を含めた複合施設の開業を目指しています。地域ニーズを汲み取り、コミュニティを構築できる場を目指して協働で準備を進めています。「地域活動館(仮)」の具体的な取り組みについては、「豊四季台団地・地域活動館プロジェクト」をご参照下さい。

豊四季台地域における「生活支援サービス」の最新の取組み状況については、「地域包括ケアにおけるICTインフラの整備」をご参照下さい。

■ **研究目的**

柏市豊四季台地域、特に地域内にある団地を中心に、下記の3つの個別テーマに分かれて研究を実践している。

「在宅で安心して生活できる医療・看護・介護システムの開発と普及」

「いつまでも地域で活躍できる生きがい就労の創成」

「長寿社会に対応したまちの設計、移動システム」

本研究では、これらによるAging in Placeのまちづくり完成モデルの構築を目指す。

■ **進捗状況**

2010年5月から2015年5月までの第1フェーズの間、基礎固めとして「在宅医療の推進」や「地域包括ケアシステムのモデル拠点の整備」、「生きがい就労・生きがい支援」、「外出・移動・交流・地域活動をうながす環境づくり」を掲げて研究を実施してきた。2015年5月から3年間の第2フェーズにおいては、試行と実践、定着を図り、これらの取組みの拡充と定着を目指して今日まで研究を継続している。

第1フェーズ中後期までの取組み状況については、「地域包括ケアのすすめ-在宅医療推進のための多職種連携の試み」(東京大学高齢社会総合研究機構編、2014、東京大学出版会、http://www.utp.or.jp/book/b306655.html)に取りまとめている。また、第2フェーズから「生活支援サービス」と「健康づくり・介護予防」(2012年度より実施)の項目を協定内で強化し、10年を超えた昨今において、「住み慣れた場所で自分らしく老いることのできるまちづくり:Aging in Place」のアウトカムのフェーズに移行している。2020年10月には、これらの取組みを「地域包括ケアのまちづくり-老いても安心して住み続けられる地域を目指す総合的な試み」(東京大学高齢社会総合研究機構編、2020、東京大学出版会、http://www.utp.or.jp/book/b517264.html)に取りまとめている。

2020年度から2021年度においては、各項目に対して横断的で総合的なアウトカムや実装の段階にきており、より一層のブラッシュアップした次のフェーズに向かうべく研究活動を実施している。

(各項目の最新の取組み状況は、研究概要のurlに記載している。)

転倒・骨折後も安心して住み続けられる住環境のデザイン

高齢者・障害者の生活支援ための健康・医療・福祉機器開発研究について

■ **プロジェクト代表者**

田中敏明

■ **研究概要**

超高齢社会において、高齢者が地域社会で出来るだけ自立し、充実した人生を過ごせるための研究が必要である。本研究では、高齢者・障害者の日常生活を支援するリハビリテーション、健康医療福祉機器の開発を実施する。

■ **研究目的**

高齢者の転倒を予防するため、遠隔ヘルスリハビリテーションシステムを構築する。具体的には、ICTおよびバーチャルリアリティVR技術を用いたトレーニングゲームの開発、高齢者や障害者のバリアーを理解するためVRを用いてそのバリアーの課題を解決する支援システムの開発

■ **進捗状況**

2021年10月までに遠隔リハビリ用ゲームを試作開発し、11月より、病院、施設等で患者、障害者児を対称として、VRリハビリゲームの効果検証を実施中。

地域包括ケアにおけるICTインフラの整備

地域包括ケア政策と連動したシステム展開とICT活用

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **実務担当責任者**

榊原拓磨

■ **参画メンバー**

辻哲夫、神谷哲朗

■ **研究期間**

2020年～

■ **パートナー企業・団体**

株式会社NTTドコモ

■ **研究概要**

柏市豊四季台地域で進めている生活支援体制事業において、多様化している高齢者の生活相談（買い物、ゴミ出し等の困りごと、健康・医療相談）に対応するICTネットワークを構築し、地域のNPO団体や民間企業等のサービス、地域医療・介護サービス等との連携体制に向けての研究を行う。

■ **研究目的**

フレイル対策、生活支援体制、在宅ケア、在宅医療におけるICTインフラの整備に向けて、地域、民間、自治体協働によるICTインフラの整備と情報システムを基軸とする高齢社会に適応した新しいビジネスモデル構築に向けての情報基盤を構築する。

■ **進捗状況**

2019年度末実施予定の「高齢者の困りごとを解消する地域コンシェルジュ機能が備わったICT端末（プロトタイプ）」のフィールド実証実験がコロナ禍により延期となったため、PJ再始動に向けた検討を再開。

柏市豊四季台地域（住民／支援団体）と連携し、フィールド実証実験の企画と併せて、従来のICTシステムには無かったコロナ禍特有のICTニーズも確認しながら、新時代のICTインフラになり得る新たなICTシステムを企画中。

2020年度：21年度の実証事業に向けた活動準備、実証企画

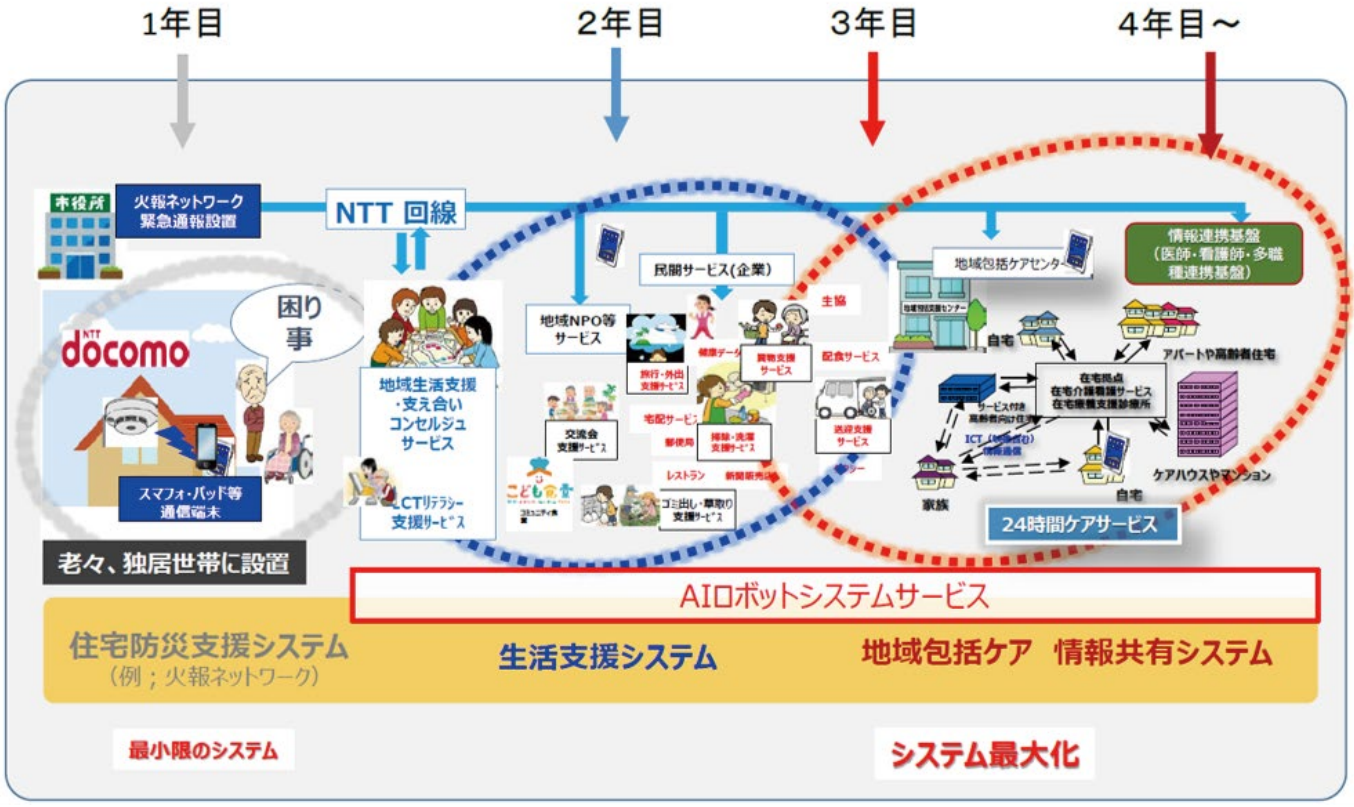
2021年度：

4～7月：令和3年度老人保健事業推進費等補助金
（老人保健健康増進等事業分）への申請手続き

8～11月：実証計画、機材準備、コンテンツ収集

12月：住民説明会、機器配布

12～2月末：豊四季台地域におけるICT利活用実証研究
（ICTを活用した支え合いシステムの
効果・効率向上の可能性検証）



超高齢者の地域生活を支える技術、人、制度による支援に関する研究

■ **プロジェクト代表者**

二瓶美里

■ **参画メンバー**

菅原育子、檜山敦、秋山弘子

■ **研究期間**

2018年～

■ **関連予算**

WHO神戸センター委託研究、国立国会図書館委託研究

■ **パートナー企業・団体**

千葉県柏市

■ **研究概要**

世界規模で平均寿命が延伸し、85歳や90歳を超える超高齢人口が増加しているなかで、自宅や地域での自立した生活を維持するための支援機器の役割は大きい。本プロジェクトでは、超高齢者の支援機器利用の実態を調査するとともに、機器利用の技術的、社会的な促進・阻害要因の検討を行う。

国立国会図書館　高齢者を支える技術と社会的課題（令和2年度科学技術に関する調査プロジェクト）報告書へのリンクはこちら：
https://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/document/2021/index.html

■ **研究目的**

日本を始め世界では超高齢者人口が急増している。高齢になるほど心身機能の低下、慢性疾患や障害を持つ割合が高くなることから、自宅や住み慣れた地域での暮らしを維持するためには支援機器・技術の役割が今後さらに重要になると考えられる。

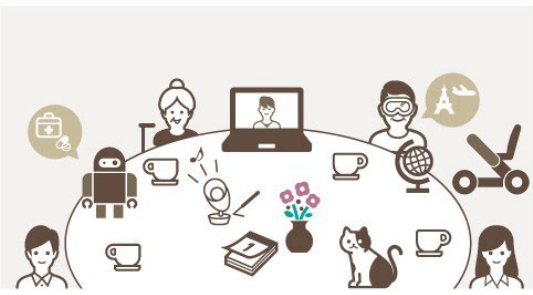
機器の導入や活用においては、機器の技術的要素のみならず、機器利用を支援する人やコミュニティの役割、介護保険制度をはじめとする社会制度の役割も含めて議論することが必要である。

本プロジェクトでは、第一段階として千葉県柏市の90歳以上住民への調査により支援機器の利用実態を調査（柏90study）し、機器の利用が高齢者にもたらす影響や、機器の導入を促進・疎外する要因を検討する。さらにその知見を踏まえて、高齢者の暮らしを支える技術の展望、技術の導入と普及をめぐる倫理的、法的、社会的、文化的な課題を検討する。

■ **進捗状況**

2018-2019年にWHO神戸センターの共同研究で実施した柏90studyにより、柏市で在宅生活を営む90歳以上の97.3%が1つ以上の支援機器を使用していること、機器使用には家族構成や介護保険制度の利用等が関連していること等が明らかになった。

その結果を踏まえ、2020-2021年には国立国会図書館の委託研究で、法学、倫理学、政策科学のメンバーを加え、国際比較研究の視点も含め、支援技術をめぐる社会的課題や倫理的、法的課題についてまとめる活動に取り組んだ。



World Health Organization
Centre for Health Development

Experiences of Assistive Products Use among Older People in Japan

Lead Research Institution: The University of Tokyo
Principal Investigator (PI): Dr Misato Nihei, Lecturer, Graduate School of Frontier Sciences

Budget: US$ 100,000
Project start: February 2018; **Mail survey and screening:** February-May 2018; **Semi-structured interview survey:** June-October 2018; **In-depth interview survey:** November-December 2018; **Final project report:** February 2019

Overview and Aim

The use of assistive products can reduce the effects of several types of impairment, allowing older people to live more comfortably at home and remain active and engaged members of society. The very old population of Japan offers a unique source of information about the use of assistive products in later life. In this study, we will conduct a survey of non-institutionalized individuals, 90 years old and above, about their experiences with assistive products. The aim is to provide important insights to service providers in Japan and globally about strategies for the optimal provision of assistive products to older populations.

Background

Improvements in healthcare and lifestyles have allowed more people to live longer than ever. Japan, for example, has approximately 67 000 centenarians – more than in any other country in the world. Increasing age, however, is associated with increases in frailty, cognitive decline, chronic illness and other impairments, and the use of assistive products becomes essential to live comfortably and autonomously in one's home. With the number of older people worldwide forecast to increase substantially, the global demand for assistive technology is sure to increase.

Methods

The study participants will be Japanese, 90 years old and above, and current users of an assistive product, who are living in residential settings. The sample will be selected from residents of Kashiwa City, Chiba prefecture (site of the Kashiwa90 Study) and participants of the ongoing Septuagenarian, Octogenarian, Nonagenarian Investigation with Centenarian, Japan (SONIC) Study. The research will involve (1) a mail survey to assess assistive product use in the target population and to screen for eligibility for subsequent interviews, (2) a semi-structured interview with eligible participants on their use of assistive products and the impact on their daily living activities, and (3) a semi-structured, in-depth interview with a sub-set of the participants about the psychological effects of using assistive products and the utilization of community services to support the use of assistive products.

Questionnaire Survey 1 (Screening)	Questionnaire Survey 2 (Interview)	Questionnaire Survey 3 (In-depth interview)
Method : Mail survey **Eligibility** : Men and women, 90 years or older, included in the Kashiwa90 Study and SONIC Study sampling frames **Survey topics** : Use of AP, Living arrangement; level of independence; possibility of participation in the study	**Method** : Semi-structured interview **Eligibility** : Current use of assistive products, living in residential setting (from Survey 1) **Survey topics** : Daily use of assistive products and its impact on daily life activities	**Method** : Semi-structured interview **Eligibility** : Centenarians (from Survey 2) **Survey topics** : Experiences with assistive products; psychological impact; utilization of community-based support services

Research Objectives

1. Identify the age at which different types of assistive products are commonly used.
2. Identify what types of assistive products tend to commonly be used together.
3. Explore how assistive product use influences the daily living activities of users.
4. Identify users' experience of factors that facilitate or inhibit their use of assistive products.
5. Explore users' experience of and views about the services available to support their use of assistive products in the community.
6. Document older people's insights about their use of assistive products, including self-perceptions, feelings of stigma and empowerment.

Research Team Members

Lead Institution: The University of Tokyo
Misato Nihei (PI), Lecturer, Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo
Ikuko Sugawara, Project Lecturer, Institute of Gerontology, The University of Tokyo
Yasuyuki Gondo, Associate Professor, Graduate School of Human Sciences, Osaka University
Yukie Masui, Researcher, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology
Hiroki Inagaki, Researcher, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology
<Advisers>
Takenobu Inoue, Director, Department of Assistive Technology, Research Institute of National Rehabilitation Centre for Persons with Disabilities
Malcolm MacLachlan, Professor of Psychology and Social Inclusion, ALL (Assisting Living & Learning) Institute, Maynooth University, Ireland
Eilish McAuliffe, Professor of Health Systems, University College Dublin, Ireland
Megumi Rosenberg, Technical Officer, WHO Kobe Centre

WHO Centre for Health Development　http://www.who.int/kobe_centre/en/

近江八幡市における生涯活躍のまち（日本版CCRC）構想に関する助言・調査協力

コミュニティで支える「住まい」・「活躍」・「ケア」+「移住」

■ **プロジェクト代表者**

大月敏雄

■ **実務担当責任者**

梅本大輔

■ **参画メンバー**

荻野亮吾、高瀬麻以、似内遼一

■ **研究期間**

2016年～

■ **パートナー企業・団体**

近江八幡市

■ **研究概要**

「近江八幡市安寧のまちづくり基本構想」等に掲げられている「レイクサイドの暮らし」、「静かな水辺で暮らす」、「晴耕雨読の暮らし」、「新世代アーバンビレッジ」、「まちなかの古民家で暮らす」の5つのテーマに沿って日本版CCRCのまちづくりを推進するもの。これまで、地域住民を交えて行政と協力しながらまちづくりワークショップの実施やセミナー、アイデアコンペの開催などを初めとし、アンケートの結果などから地域の課題を行政や地域住民と共有するとともに将来像を描きながら、近江八幡市またはその地域ならではの日本版CCRCのあり方と進め方を模索している。

■ **研究目的**

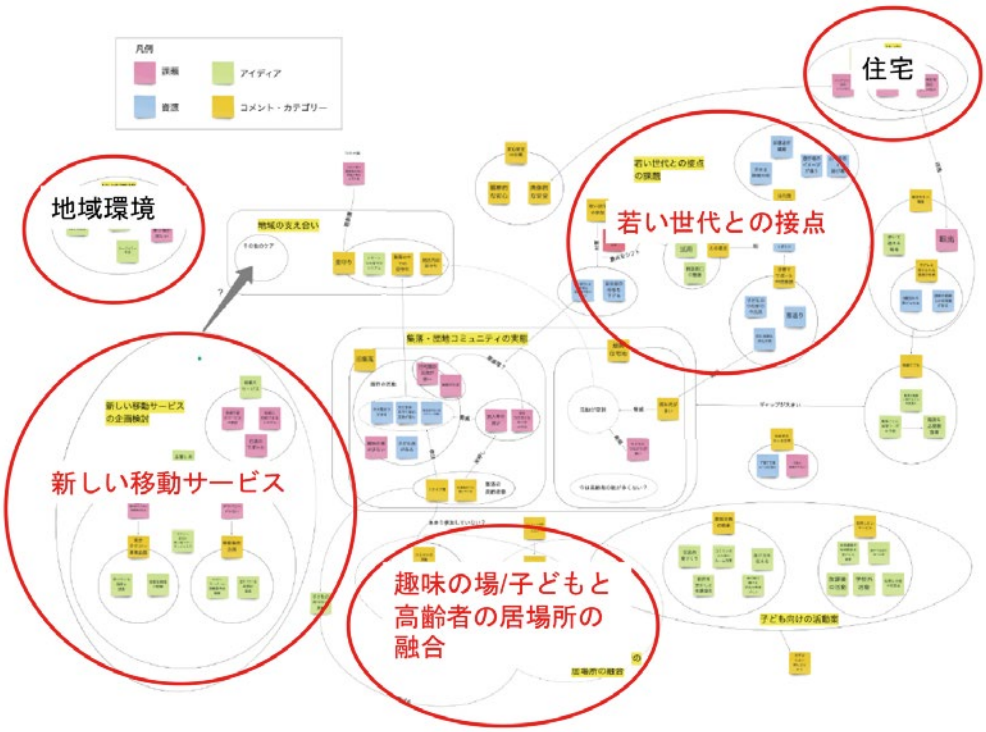
東京や大阪などを初めとした大都市圏のリタイアした高齢者が希望に応じて地方などに移り住み、長年の夢をかなえ、多様な世代の地域住民と交流しながら健康でアクティブな生活を送り、必要に応じて医療・介護を受けらるような地域づくりである日本版CCRCの実装を地域住民とともに目指すもの。

■ **進捗状況**

「近江八幡市安寧のまちづくり基本構想」内の一つのテーマの「晴耕雨読の暮らし」の対象地である老蘇学区にて、2018年度からワークショップやセミナーを開催するとともに、2019年12月にアンケートを配布した。

これらの結果を踏まえて2020年6月に住民が主体となった老蘇学区安寧のまちづくり推進委員会（以下、「委員会」という。）にて「新しい移動サービスの開発」と「趣味の場/子どもと高齢者の居場所の融合」、「若い世代との接点の形成」のテーマを中心に据えてまちづくりの支援を行ってきた。2021年3月には、委員会が中心となってこれらのテーマに沿って「老蘇学区まちづくりプラン-いつまでも住み続けたい老蘇を目指して」（以下、「アクション・プラン」という。）が策定された。

2021年度には、新型コロナ禍の影響もありながら10月から委員会を再開し、アクション・プランの実装を目指してきた。2021度の到達点として、アクション・プランに掲げた「楽しく外出ができる」や「あらゆる世代が気軽に出会い、交流できる」、「若い世代が生き生きと活動できる」、「コミュニティの輪で安心して暮らし続ける」のテーマのもと分科会を設置し、具体的には、社会実験や地域活動の企画の立ち上げ、地域連携の体制づくりなどを目指して支援を行っている。



まちづくり標準化研究会：既存住宅団地における少子高齢化対応手法の実証研究およびまちづくり認証制度に向けたまちづくり評価手法研究

既存団地の持続可能なまちづくりの計画策定と実現方策を実践・実証し、マネジメントシステムの認証制度提案を目指す

■ **プロジェクト代表者**

辻哲夫

■ **参画メンバー**

辻哲夫、飯島勝矢、神谷哲朗、田中康夫、田中紀之、遠藤良顕

■ **研究期間**

2020年～

■ **関連予算**

ジェロントロジー産学連携共同研究

■ **パートナー企業・団体**

UR都市機構、大和ハウス工業株式会社、株式会社東急不動産R&Dセンター、ミサワホーム株式会社（株式会社マザアス）、イオン株式会社　他

■ **研究概要**

1950年代より団塊の世代等をターゲットにして開発が進んだニュータウンは、現在のような少子高齢化を想定せずに計画されているケースが多いほか、今後さらなる少子高齢化が進んだ場合には、次世代の入居が進まないことによる空き家の増加や人口の減少、医療・介護・生活支援体制の不足、コミュニティマネジメント体制の崩壊など様々な課題が想定される。そのようなニュータウンは全国に3000か所も存在するといわれており、そこでの課題解決は社会的にも急務である。ニュータウンにおいて今後さらに加速すると想定される少子高齢化や空き家問題等を含めた地域課題の解決に向け、これまでの柏PJなどをはじめとするIOGの知見や各社のノウハウ等を実際のフィールドで実践・実証し、さらにはそのノウハウを標準化し社会に広げていくことを狙っている。

主な取組み内容は以下の通り

・既存団地をモデルとした持続可能なまちづくりの計画策定とその実現方策の検討

・当該計画と実現方策の標準化を行い、それを全国の住宅地（団地）に適用可能とするマネジメントシステムの認証制度（必要な制度改革を含む）の提案を目指す

・当該認証制度の普及のための幅広い関係者の連携体制の構築を目指す

■ **研究目的**

今後首都圏等で想定される郊外等の住宅地域（団地）の急速な高齢化による地域の衰退を防止し、持続可能な地域（団地）として再生するまちづくりの方策を策定する。

■ **進捗状況**

2020年度

4～6月 ：事務局ミーティング開催（モデル地区データ整理等）計4回

6月：第1回研究会開催

7月：実務者会議開催

8月：IOG合同研究会参画

9月：国交省サ高住懇談会対応MTG開催

12～1月：分科会立ち上げミーティング開催

3月：第2回研究会開催

3月：IOG合同研究会参画

3月：分散型サ高住分科会開催（第1回～第2回）

2021年度

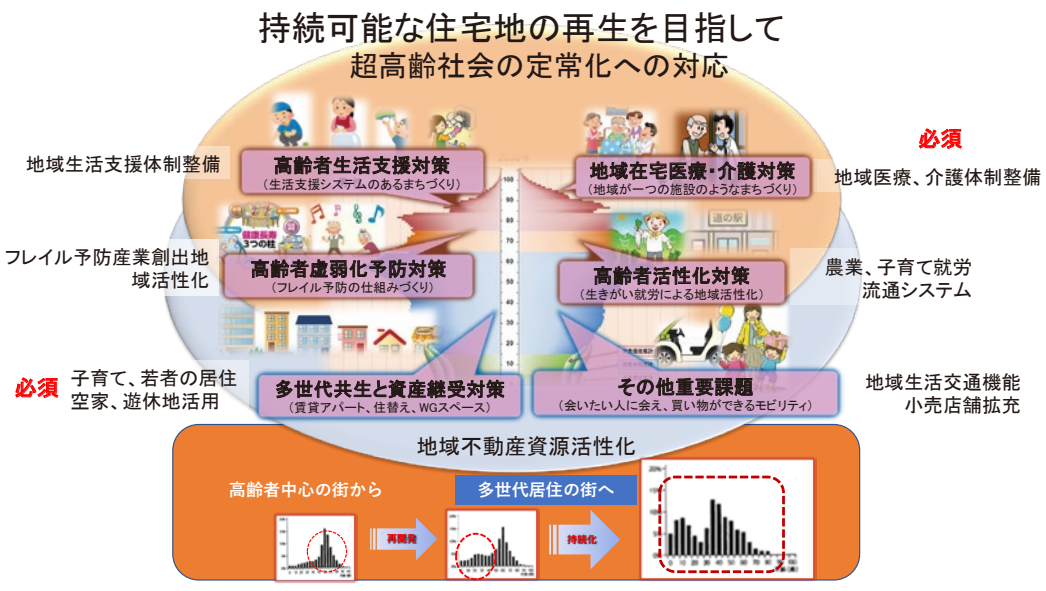
4月～10月：分散型サ高住分科会開催（第3回～第9回）

9月：IOG前期活動総括会参画

11月～2月：郊外住宅団地モデル分科会（第1回～第2回）

3月：IOG後期活動総括会参画（予定）

（3月にて検討中）第3回研究会



100年人生対応の包摂型地域創出のための統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究

■ **プロジェクト代表者**

大月敏雄

■ **研究期間**

2021年～

■ **関連予算**

文部科学省科学研究費基盤（A）「100年人生対応の包摂型地域創出のための統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究」（主査：大月敏雄）

■ **研究概要**

① 90歳以上、100歳以上の超高齢社会の地域生活上の個人特性を評価する

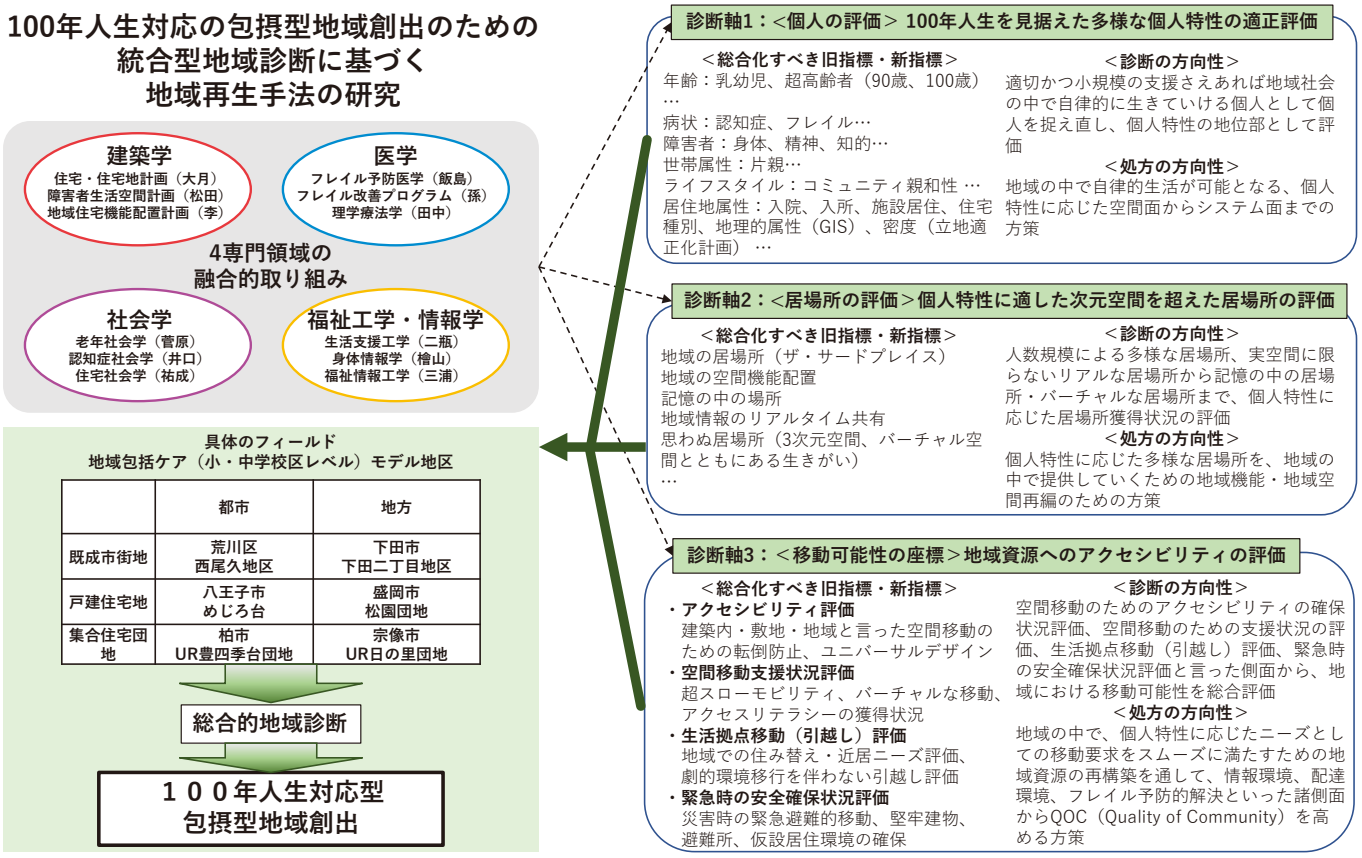
② あわせて、子ども、障害者、疾病保有、ひとり親世帯等の多様な地域居住者の個人特性を等価に評価する。

③ 建築学、医学、社会学、福祉工学・情報学といった既存の4専門領域の融合的取り組みとして、上記評価、診断、再生手法を提案する。

④ 上記をふまえ、「都市・地方」「既成市街地、戸建住宅地、集合住宅団地」の属性をもつ6類型の地域包括ケア単位の地域を対象として、統合型地域診断法とそれぞれの地域再生手法を提案する。

■ **研究目的**

超齢高齢者の地域生活上の個人特性の評価にあわせ、従来福祉対象となる属性を持つ地域居住者の個人特性をも等価に評価する指標の創設を通して、建築学、医学、社会学、福祉工学・情報学といった既存の4専門領域の合的取り組みとして、「市・地方」「既成市街地、戸建住宅地、合住宅団地」の属性をもつ類型の地域包括ケア単位の地域を対象として、統合型地域診断法とそれぞれの地域再生手法を提案する。



八王子市めじろ台におけるポスト超高齢社会まちづくりの実践
めじろ台まちづくりプロジェクト

■ **プロジェクト代表者**
大月敏雄

■ **参画メンバー**
井上結梨、細萱一立、李ヨングン

■ **研究期間**
2018年～

■ **関連予算**
文部科学省科学研究費基盤(A)「100年人生対応の包摂型地域創出のための統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究」(主査:大月敏雄)

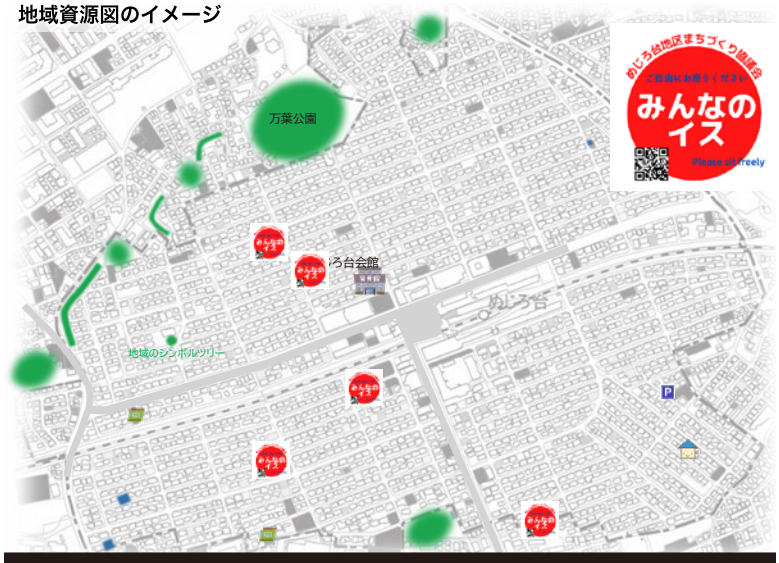
■ **パートナー企業・団体**
日本都市計画家協会、八王子市

■ **研究概要**
今後急速な超高齢化によって町の持続性が損なわれる可能性のある郊外戸建住宅団地を対象に、町の持続性を担保するための住民主体のまちづくり活動が、どのような契機によって促進、実現されていくのかを明らかにするとともに、アクションリサーチとして住民とともにまちづくり活動を実施する。
めじろ台地区まちづくり協議会HPのリンクはこちら→
https://mejirodai.tokyo/

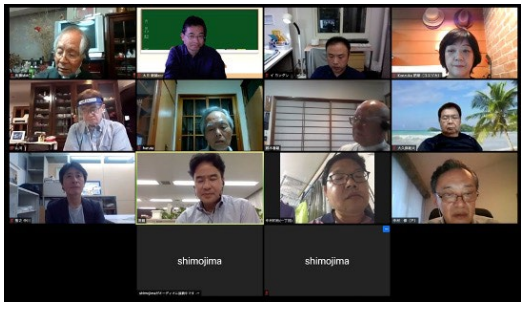
■ **研究目的**
郊外戸建住宅団地の持続性獲得のための要件の解明。

■ **進捗状況**
2019年度からまちづくり協議会(準備会)というかたちで2020年度まで活動し、住民をはじめとする関係者の意見収集を通して、まちづくり憲章を作成した。さらに、2021年度からは八王子市地区まちづくり条例に基づく「まちづくり協議会」の位置づけとなり、複数の分科会を立ち上げ、駅前広場活性化、商業機能活性化、多世代交流、住宅・住宅地のバージョンアップという課題を中心に、具体のプロジェクトを推進するための議論を進行中。

地域資源図のイメージ



めじろ台地区まちづくり基本方針2021



武里団地フレイル予防プロジェクト

フレイル予防からつなぐ生活支援

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

関根伸弘、遠藤良顕、佐藤雄太

■ **研究期間**

2021年～

■ **パートナー企業・団体**

春日部市健康保険部介護保険課、春日部市健康保険部健康課、春日部市総合政策部政策課

■ **研究概要**

令和3年度より実施される春日部市フレイル予防事業について、IOGの研究活動で明らかにされた知見を基に、事業実施にかかる助言、関係者調整の支援を行う。この場合、まちづくりの視点が重要であることから、今後のまちづくりの重要項目であるコミュニティ単位の「生活支援」システムとの連携に留意する。

先進的にフレイル予防事業を展開している自治体について、事業展開の方法、導入前後の効果、今後の展開（ウィズコロナ、アフターコロナの意識等）を整理する。

春日部市において特に高齢化が進んでいる「武里団地」をフィールドに、生活支援システムとフレイル予防事業との関係、フレイル予防事業導入前後の高齢者の健康状態や生活感、地域への愛着、地域の変化等を調査し、フレイル予防事業導入の効果を分析する。

武里団地における試みは、市内における横展開を前提に議論を進めることとなるが、武里団地と同じ第6圏域の高齢化の著しい一戸建て住宅団地や武里団地と隣接する第6圏域以外の生活圏域との連携などにつき、拠点である武里団地のまちづくりに関わるURも関与する中で、研究を行う。

フレイル予防事業を担う積極的な市民の発掘を行うとともに、アフターコロナを見据えたこれからのフレイル予防事業（さらには生活支援体制整備事業）への展開につなげる。

■ **研究目的**

春日部市の高齢化率は31.0%（令和3年4月1日現在）となっており、全国平均28.4%（令和元年10月1日現在）、埼玉県平均26.2%（令和2年1月1日現在）を上回る早さで進行している。特に市内にある「武里団地」では高齢化率49.3%（令和3年4月1日現在）となっている。（※武里団地での75歳以上人口の割合は28.2%、85歳以上人口の割合は7.1%となっている。（いずれも令和3年4月1日現在））新型コロナウイルス感染症の拡大と対策の長期化により、コロナフレイルのリスクを抱えた高齢者も増加している。このような状況において、高齢者のフレイル予防、介護リスク、認知症リスクへの対応は、いつまでの健康でいきいきと暮らせるまちの実現と持続可能な行政運営に向けて喫緊の課題である。また、コロナ禍によって自粛生活が長期化し、食事の偏り、運動不足、人とのつながりの希薄化によるコロナフレイルのリスクが増大しており、高齢者のフレイル予防を直ちに実施することが極めて重要である。

このような春日部市の現状から、フレイル予防研究の最先端を走るIOGの知見をもって、迅速な事業展開を支援する必要がある。特に高齢化が進行している武里団地の状況に注目し、フレイル予防事業に関わる市民の発掘やフレイル予防事業かかるデータ収集、分析を行う。

武里団地におけるフレイル予防の取組の分析結果から、アフターコロナを見据えたフレイル予防事業の展開を検討する。また、これからの高齢者のフレイル予防（さらには生活支援体制整備事業）につなげることができる仕組みを検討する。

■ **進捗状況**

武里団地見学会、IOG内意見交換会、春日部市×IOG合同意見交換会を実施

住民主体の高齢社会のまちづくり活動、情報機器・技術を活用した地域のつながりづくり：布施新町みらいプロジェクト

■ **プロジェクト代表者**

菅原育子

■ **参画メンバー**

吉田涼子、木村清一、榊原拓磨、福沢愛、細萱一立、秋山弘子、藤崎万裕、三浦貴大、藪謙一郎、長島洋介、伊藤研一郎

■ **研究期間**

2016年～

■ **関連予算**

JST-RISTEX統合実装、文部科研費

■ **パートナー企業・団体**

柏市布施新町いきいきネットワーク（みらいプロジェクト）、柏市社会福祉協議会、柏市

■ **研究概要**

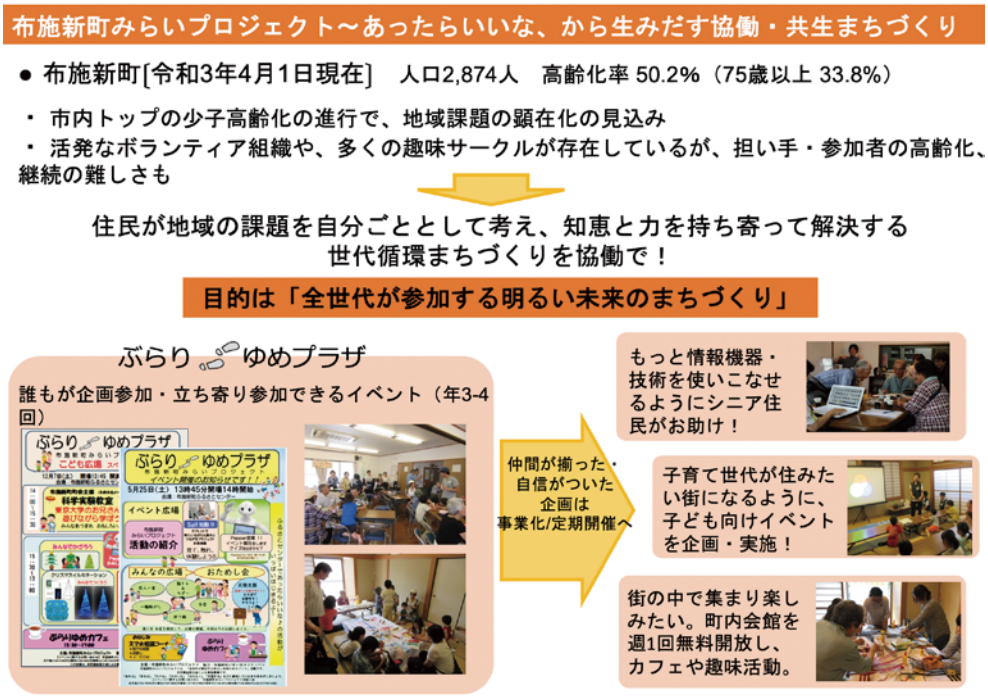
深刻な高齢化に直面している郊外戸建住宅地において住民が地域生活の課題に自分ごととして取り組み、楽しみも共有しながら活動を展開する「住民主体のまちづくり」を2016年に開始した。2017年に住民メンバーによる「みらいプロジェクト」が発足し、住民の誰もが地域とつながるまちの実現を目標に様々な地域活動を展開している。2020年4月以降は「布施新町ICTプロジェクト」を発足し、ICTを用いたつながりづくり、地域活動支援、地域情報網の構築、高齢者のICT機器活用を支援する活動等に取り組んでいる。

■ **研究目的**

大都市郊外に20世紀後半に開発され、現在高齢化率が5割を超える戸建住宅地は、住民の高齢化に伴い、地域生活維持の危機に瀕していると同時に、課題解決に向けて主体となって活動する人材の不足に直面している。各地で見られるこの問題に対するコミュニティ支援手法の開発を目的に、千葉県柏市の布施新町にてプロジェクトを発足した。3年間のプロジェクト期間を経て地域住民による「みらいプロジェクト」が自立したことで、プロジェクトの目的は住民活動の支援に移行した。2020年、COVID-19の拡大に伴い、プロジェクトの一部であった「ICTによる地域のつながりづくり」を拡大した「布施新町ICTプロジェクト」を発足した。この活動の目的は、高齢化の進むコミュニティにおけるICT,IoTの利用促進阻害要因の解明、地域活動へのICT導入と支援手法の開発である。

■ **進捗状況**

2017年に発足した「みらいプロジェクト」は住民メンバーによる運営会議が中心となって運営されている。地域住民による、「あったらいいな」や「解決したい」を検討し事業化する基盤（プラットフォーム）として、地域の多世代が参加するイベントの企画開催、テーマ別ワークショップの開催等を行っている。2020年4月からは、コロナ禍で住民のつながりを維持するため、ICTを活用したまちづくり活動に取り組んでいる。これら地域での活動支援をとおして、COVID-19が地域生活に与えた影響、高齢者の技術受容メカニズムの検討、Age-friendlyなICT,IoTのデザイン、地域活動におけるICTの役割分析やその導入支援プロセスの検討等の研究を展開している。
同時に、2021年からは、まちづくり活動をとおして参加住民や地域全体がエンパワメントする過程とその評価手法の研究に取組んでいる。



おうち時間を楽しく健康にすごす知恵「おうちえ」

■ **プロジェクト代表者**

飯島勝矢

■ **参画メンバー**

沖田征也、井上結梨、佐藤雄太、磯本勇人、久保梢、関根伸弘、宮原章子

■ **研究期間**

2020年～

■ **関連予算**

新型コロナウイルス感染症：拡大防止活動基金
（運営：（公財）東京コミュニティー財団、READYFOR株式会社）

■ **研究概要**

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が猛威を振るう中、外出を控える高齢者のフレイルの進行の恐れがある。そのため分野横断型というIOGの特徴を活かして、様々な領域分野のプロフェッショナルが自宅内で楽しみながら健康に過ごす知恵を出し合い、それを集約した知恵集”おうち時間を楽しく健康にすごす知恵「おうちえ」”を発行した。

■ **研究目的**

知恵集は「おいしく食べて健康に（からだ）」「うちですごす時間を豊かに（くらし）」「ちいきで近くで支え合い（きずな）」「えがおでゆとりの心持ち（こころ）」の4つのカテゴリー分けをし、それぞれ自宅内で楽しめる工夫やアイデアを掲載している。2020年9月には「おうちえ」の使用等で問い合わせがあった201団体へ使用状況のアンケートを行い、94団体より回答があった。このアンケート内容をもとに、好事例には更に取材を行う予定である。「おうちえ」を通じて全国のコロナフレイル状況の把握を行い、それの改善案の提案を行っていく。

■ **進捗状況**

2020年9月に「おうちえ」活用団体へのアンケートを実施。全国の様々な団体の「おうちえ活用法」、「コロナ禍における独自の取組み」を確認した。そのなかから独自に抽出したグッドプラクティス（好事例）な取組みを行っていた8団体にインタビューを実施し、取組みの背景や工夫などを教えていただいた。2021年3月、当事例をまとめた「みんなのおうちえ　グッドプラクティス（好事例）集」を発行した。

2021年度は、71団体から活用申請を受理（2022年1月末現在）。また、長引くコロナ禍による「コロナフレイル」を懸念し、健康のために「つながり続ける」ことや「活動を止めない」ことをテーマにおうちえ第二段を作成中。新型コロナウイルス感染状況など社会情勢を見極めて発行予定。

その他の個別研究プロジェクト

プロジェクト名	代表者	研究概要
IARU-国際研究型大学連合： 加齢、長寿と健康に関する研究教育交流	飯島 勝矢	人口高齢化や長寿化に伴う世界的な課題に関する国際共同研究の推進、将来活躍が見込まれる若手研究者の育成及びネットワークの構築。
日台若手研究者共同研究事業	秋山 弘子	Aging in Place（住み慣れた地域で生き、老いることの出来る社会）の実現に向けて、日本と台湾が直面している社会課題の解決を目指す。
北京と東京の都市及び建築に関する比較研究	大月 敏雄	東京を中心とした日本の超高齢社会の諸現象を住宅・都市レベルで把握・分析し、ロンドン・北京・東京の3都市の比較を中期的に行う。
地域包括ケア： 安心ある在宅療養（エビデンスとモデル構築）	飯島 勝矢	IOG発足以来、千葉県柏市をメインフィールドとして在宅医療介護連携の取り組みを推進してきた。特に医師会と行政の二人三脚、かかりつけ医機能、訪問看護機能、多職種連携、病診連携、市民啓発、アドバンス・ケア・プランニングなどを中心に、地域包括ケアシステムのモデル構築を行なっている。さらに、医療レセプトや介護レセプトなど公的データベースを突合後に駆使して、様々な視点で新たなエビデンスを創出している。
豊四季台団地における地域活動館の取り組み	大月 敏雄	高齢者の健康を保つ重要な要素といわれる社会参加について、地域の集いの場である地域活動館を介した効果的な社会参加の方法を模索する。
「食」を作る・整える行動と フレイルセグメント別の効果的なアプローチ	飯島 勝矢	地域在住高齢者を対象とした質的・量的調査の混合研究を行い、エビデンスに基づく「フレイル予防に資する料理習慣10か条(仮)の策定を目指す。
中高年者の健康増進をサポートするアプリ開発	飯島 勝矢	中高年者のフレイル予防のためパーソナルな食・運動・社会参加を促進して健康を管理するAI搭載型アプリケーションを開発し、効果を検証する。
アクアリウムの設置や観賞魚の飼育が 人の心理的なストレスに与える影響の検討	高瀬 麻以	犬や猫など運動機能の維持に好影響を及ぼす哺乳類系ペットの飼育が難しい高齢者に、観賞魚の飼育が生活に与える影響を検証する。
貢献寿命延伸への挑戦！ ～高齢者が活躍するスマートコミュニティの 社会実装～	檜山 敦	元気シニアの地域参加を促進するウェブプラットフォームGBERを活用し、収入を伴う仕事に限らず役割を持って、何歳になっても社会とつながれる地域コミュニティの構築を目指す。
高齢期のwell-beingを拡張するXR	檜山 敦	VRやAR等のXR技術を活用した旅行体験やエンタテインメント等の自発的な身体運動を誘発するシステムを研究開発し、高齢期の運動・認知機能の維持向上に資するセラピープログラムの構築を目指す。
発話障害支援デバイスの開発による 自己表現機能向上のための音声要素に関する研究	藪謙一郎	脳疾患、喉頭がん、筋・神経系疾患等から起こる多様な発話障害について、種別ごとの支援デバイス開発を通じQOL向上をさせる音声機能支援手法を探求する。
視覚障害者に特有な質感知覚特性に基づく 触覚・聴覚拡張技術	伊福部達	高齢者から若年者までを含む視覚障害者に特有な触覚・聴覚で知覚される質感のメカニズム解明とその提示・感覚拡張手法の導出を目的とし、新しい感覚代行手法を模索する。
住宅内移動時転倒のヒトと空間双方からの リスク評価標準化と予防サポートアプリ開発	大月 敏雄	高齢者の身体機能データと住居の物理的な環境データを取得し、それらを踏まえた住宅内移動時の転倒防止策の提示を行うアプリの開発を行う。
次世代住宅地開発研究	大月 敏雄	次世代の日本の住宅地開発計画が備えるべき要件を明らかにし、そのために必要な計画技術を踏まえたデザイン提案を行う。

個別研究プロジェクト

自治体等出向者のコメント

産官学民の共創を実践して、地域住民の生活向上を実現したい
（広島県呉市）…… 59

行政職員の経験や視点を生かして、地域住民との関係を構築
（東京都東大和市）…… 60

「お客様」ではなく「スタッフ」として貢献することが大切
（埼玉県富士見市）…… 61

研究者や他の行政機関、企業から受ける刺激が成長の糧に
（埼玉県春日部市）…… 62

ジェロントロジーから得た2つの視点
（日本年金機構）…… 63

産官学民の共創を実践して、地域住民の生活向上を実現したい

学術専門職員　礒本 勇人（広島県呉市）

2021年4月より広島県呉市役所よりIOGに出向してきて、さまざまな取組を見させていただきましたが、どのプロジェクトにも共通するのは「共創」だと感じました。

私が主に関わらせていただいている鎌倉リビングラボプロジェクトでは、地域住民が望むまちの未来やライフスタイル像をワークショップ等の対話から抽出し、それを叶えうるモノ、サービスを企業や行政、大学等とともに試作し、そのプロトタイプを試用しながら住民の真のニーズを引き出すことにより、生活者目線に立ったモノやサービスの開発・改善につなげる活動を行っています。活動の主役は住民であり、生活の場をLabとして「企画、試作、試用、評価」のPDCAサイクルを繰り返し行うことで、生活者中心のサービスやものづくりを行い、超高齢社会に必要なサービスやモノを産官学民連携で生み出す場を共創しています。

このような、地域住民が主役となって地域の課題を自分事化し、産官学民がお互いの強みを持ち寄り、知恵を出し合い、課題を解決して理想とする暮らしや地域を創りあげるスタイルは、単純なようでなかなか実現が難しいものです。このスタイルを鎌倉リビングラボでは見事に体現しています。多様化する住民ニーズを市役所だけで解決するのは困難であるため、今後は共創スタイルをいろんな事業で取り入れていく必要があると感じています。

市役所は、窓口で戸籍や住民登録などの証明書を発行したり、道路や公園などのインフラ整備を行ったりと、業務内容は地域に密着したものが多く、住民との関係性は深いものとなります。この関係性を強みと捉え、住民の真のニーズを抽出し、産官学民での共創を実践して地域住民の生活を向上していけるよう本市でも取り組みたいと考えています。

行政職員の経験や視点を生かして、地域住民との関係を構築

学術専門職員　久保 梢（東京都東大和市）

IOGにおける活動について

東大和市では2019年度からIOGへの研修派遣を開始し、私で2人目の出向となります。

主な活動としては、本市とIFIが協働して行っているリビングラボ"東大和ライフスタイルラボ"のプロジェクト運営に携わりながら、IOGの一員として鎌倉リビングラボの研究活動に参加しております。

鎌倉リビングラボの研究フィールドの一つである玉縄台地域では、行政課題である「地域の活性化」を目指す中で、コミュニティ内でのデジタルデバイドの解消を手段の一つとして、地域住民に寄り添った活動を鎌倉市行政と連携して進めているところです。

このような他地域における交流・活動を通じて、行政が持つ共通の課題を感じながらも、地域特性を意識しながらどのように課題解決に向けたゴールイメージを共有し、地域や住民の伴走役を担うのか、これまでにない難しさに直面することが多くありました。

その中でも、生活者の身近な存在である行政職員としての経験や視点が、研究活動における地域住民とのコミュニケーションや関係構築に非常に役立ちました。

研究活動を通して

行政とは異なった立場から関わることで、地域のエンパワーメントと住民主体の形成のアプローチの仕方や、地域住民の生の声やアイデアこそが課題解決の糸口となり得ることなど、この研修派遣の中で多くの気づきがありました。

また新たな経験として、ワークショップにおけるプログラムの構築や、住民から自由な発想を引き出すための問いかけ方の工夫など、これまでにない取組みができたことが何よりの学びと感じています。

どの地域においても超高齢化社会を迎える中で、地域住民の繋がりや相互活動の重要性が高まり続けています。

その支援の在り方として、リビングラボの手法に留まらず、これまでの経験や知見を生かしながら、住民の皆さんの健幸の実現を目指していきたいと思います。

「お客様」ではなく「スタッフ」として貢献することが大切

学術専門職員　佐藤 雄太（埼玉県富士見市）

私は埼玉県富士見市から2020年6月よりIOGに出向しています。前任が2018年から2年間出向しており、私が2代目となります。人事部署付けの出向であることから、市として出向させる意図として、人材育成、いわゆる「お勉強」させるという意識が働いていると推測しています。しかし、出向してまず感じたことは、IOGは単に「お勉強」させてもらう場所ではないということです。研究者、企業出向者、自治体出向者等が課題解決に向けて本気でプロジェクトを進めており、「お勉強」感覚でいるとIOGスタッフではなく「お客様」になってしまうと危機感を抱きました。「IOGスタッフとして貢献し、そこから学びを得る」ことを常に念頭に置いて活動しています。

前任が帰任とともにフレイル予防事業を持ち帰り、出向当初の役割としては、IOG側から出向元のフレイル予防事業の導入支援をすることでした。そこから瞬く間に活動規模が広がり、全国の自治体のフレイル予防事業の導入・活動支援を行うこととなりました。全国の自治体職員、サポーターやトレーナーの方々と苦労や感動を共有し、こちらが行った支援に対して感謝いただくことは市職員では味わえない貴重な体験となっております。特に住民の方々と接する距離感は、市役所で勤めている時よりも遥かに近くなっていると実感しています。

出向当初から大きなテーマとなっていることが、「コロナ禍においてどのようにフレイル予防事業を展開するか」です。課題解決の糸口としてオンラインの活用が推進されており、「オンライン型フレイルサポーター養成講座」のシステム作りや、「オンライン型フレイルチェックの開発と地域実装」に関わりました。特にオンライン型フレイルチェックでは、多分野の先生方に関わらせていただき、自分自身の視野を大きく広げることができました。

今後もIOGスタッフとして活動することにより得られる知識や経験を、広く地域に還元していきたいと考えています。

研究者や他の行政機関、企業から受ける刺激が成長の糧に

学術専門職員　関根 伸弘（埼玉県春日部市）

私の出向元である春日部市では、人口減少及び高齢化が進み、さまざまな地域課題への政策形成が急務な状況です。そこで、地域ぐるみのまちづくりに向けた効果的な政策形成を学ぶために、2019年度より、東京大学高齢社会総合研究機構（IOG）へ出向者を派遣しています。

IOGへの出向において、自治体・地域課題に対し、行政職員という立場だけではなく、アカデミアという環境から関わることができたことは、大きな学びや気づき得ることができたと考えています。もちろん、現場を知ってこその住民サービスや地域への取組ということもありますが、業務ごとに細かく分けられた体制が残る行政だけでの議論では、建設的な意見ばかりではありません。IOGでは、エビデンスに基づいた分野横断的な視点を重視するため、地域課題について、行政の視点と寄り添いながら、客観的かつ総合的に議論することが実現できています。また、現在、IOGのプロジェクトにおいて、全国の自治体のフレイル予防の取組や、地域包括ケアのまちづくりに関わらせていただいていることで、先進的な自治体のノウハウに触れる機会も得られています。そして、何よりも、行政職員として、普段の業務では関わることの少ない大学等の研究者・企業職員・他行政職員と仕事ができることの経験が得られています。特に行政や企業からのIOG出向者とは、仕事の進め方や考え方などの刺激を受け、成長できると考えています。

春日部市では、IOGの研究活動によるエビデンスをもとに、2022年度から介護予防事業の一環としてフレイルチェック事業を展開しています。現在、市内において特に高齢化が進む武里団地をモデル地区としてフレイルチェック事業が開始され、フレイル予防を通した地域のまちづくりにむけて動き出しています。IOGで学んだ地域課題の捉え方や先進的な自治体のフレイル予防の取組、地域包括ケアシステムの構築手法を、地域へ還元したいと考えています。

ジェロントロジーから得た2つの視点

学術専門職員　中村 達也（日本年金機構）

公的年金の運営業務を担っている日本年金機構から、2021年10月より東京大学高齢社会総合研究機構（IOG）に出向しています。IOGでは主に「生活支援」「生きがい・就労」「フレイル予防」のプロジェクトに携わっています。私はこれらのプロジェクトを通じて、2つの大きな経験・気づきを得ることができたと感じています。

1つ目は、実際に年金を受給している方と間近に接する機会を得られたことです。私は年金給付部署に所属したことがなく、IOGに出向するまでそういった機会はありませんでした。そのため、年金受給者の方がどのようなことを思い、どのように生活しているかを考えたこともあまりなかったように思います。IOGで多様な地域・年代の高齢者の方と接し、実際の年金生活での困りごと、年金受給後の就労に対する考えなど、多くのことを知りました。日本年金機構が受け取っている書類1枚1枚の向こうにも、様々な方の生活があるということを改めて肌で感じることができました。

2つ目は、超高齢社会において日本年金機構が持てる役割が私なりに少しずつ見えてきたことです。人生100年時代における重要な社会経済インフラである公的年金制度を運営する日本年金機構は、今後ますます地域社会との関わりが重要になってくると思います。特に生活支援プロジェクトにより、日本年金機構が地域社会でどのような役割を持てるのかについて、多くの学びを得ることができました。公的年金は老齢・障害・生計維持者の死亡など人生100年における転機が訪れ、様々な生活支援ニーズが生じる可能性がある方と密接に関係しています。生活支援ネットワークへの繋ぎ役や情報提供等、その中で日本年金機構ができることは決して少なくないと考えます。

IOGでは日本年金機構で経験することができない業務を通し、非常に重要な視点を得ることができています。この経験を踏まえ、今後も日本年金機構の職員として「地域活力と多様性のある超高齢社会の実現」を考えていきたいと思います。

産学連携プロジェクト

IOGの産学連携プロジェクトは、企業とともに研究成果の社会実装を目指す「個別共同研究」、ジェロントロジーの8つの分野を学ぶ「アカデミー」、参加企業とIOGとの交流を目的とした「ネットワーク」の3層構造になっています。飯島機構長と主な参加企業の特別対談や担当教員、企業から出向している方々のコメントを通して、プロジェクトがもたらす価値や今後の取り組みについてお伝えします。

Special Session 産業界×IOG
アカデミアと産業界が共創する高齢社会の未来 …… 65

ジェロントロジー産学連携プロジェクトの活動内容 …… 71

ジェロントロジー産学連携プロジェクト 参加企業 …… 73

産学連携プロジェクトの活動実績 …… 74

担当教員のコメント …… 79
秋山弘子（高齢者就労・生涯現役）
孫 輔卿（フレイル予防／生活支援）
廣瀬通孝（情報システム）
二瓶美里（ジェロンテクノロジー）
樋口範雄（金融関連及び法）
税所真也（金融関連及び法）
大月敏雄（まちづくり）

研究会 …… 82

個別共同研究 …… 88

Special Session 産業界×IOG

アカデミアと産業界が共創する高齢社会の未来

IOGは「“Chōju”と“Ikigai”を自己実現できる新たな価値を感じる地域コミュニティ」をスローガンに掲げて高齢社会の課題解決に取り組んでいます。
地域で行うアクションリサーチにおいても、研究の成果を社会実装する際にも、産業界とのパートナーシップが欠かせません。
アニュアルレポート2020の巻頭特集として、業種の異なる5社の方々をお招きし、それぞれの視点から「個人とまちのフレイル予防」、「IOGおよび他企業との連携への期待」という2つのテーマについて対談していただきました。

参加企業(氏名50音順)

大和ハウス工業株式会社 リブネスタウン事業推進部 東日本統括グループ **瓜坂 和昭** 氏
株式会社マルタマフーズ 副社長 **佐々木 宏** 氏
三井住友信託銀行株式会社 人生100年応援部 **谷口 佳充** 氏
キユーピー株式会社 取締役上席執行役員 **濱千代 善規** 氏
イオン株式会社 顧問 **久木 邦彦** 氏

IOG

機構長 **飯島 勝矢**
副機構長 **大月 敏雄**
客員研究員 **辻 哲夫**

“Chōju”と“Ikigai”のある コミュニティのリ・デザインに挑む

飯島　本日はお忙しい中、ありがとうございます。IOG機構長の飯島です。この対談では、みなさんが産業界の視点から少子高齢社会における課題に対して、どのように活路を見出そうとしているのか。そして、アカデミアや異業種の企業とコラボレーションすることによって生まれる新しい世界への期待についてディスカッションしたいと考えています。まず、ご挨拶を兼ねて、私たちIOGのメンバーからひと言ずつコメントさせていただきます。

大月　IOG副機構長の大月と申します。私は専門分野の建築・都市工学からまちづくりに取り組んでいます。高齢社会の影響について一例をあげると、従来の戸建て住宅は35歳くらいで購入して、終生その家に住み続けるのが当たり前でした。ところが現在は100歳以上の人口が8万人以上に達する長寿社会です。35歳の時に買った家のままで高齢者が快適に暮らすのは難しい。リノベーションや引っ越しが必要になるはずです。同じ高齢者でも75歳と95歳ではかなり違いがありますが、その違いにまちづくりや行政サービスが応えられていません。IOGが多様な高齢社会について産官学で議論し、課題解決を目指す場として機能するのは、とても素晴らしいことだと思います。

飯島　私の専門は老齢医学ですが、75歳、85歳、95歳を高齢者として十把一絡げにはできません。もちろん年齢だけでなく、個人差もあります。これに対して、どのようなエビデンスを出していくのか、産業界を中心にした新しいまちづくりのモデルを構築していくのかは大きな課題です。そこで、長年にわたり厚生労働省で政策に関わり、現在IOGの顧問として私たちと少子高齢化の問題に取り組まれている辻先生から一言お願いします。

辻　人生100年時代は、歴史的にも例のない未知の社会が到来することです。今までの延長線上にあるシステムや意識のままでは乗り切れません。飯島先生がスローガンに掲げられた“Chōju”と“Ikigai”のある社会をつくるのは、高齢社会の先進国である日本に課せられたチャレンジだと思っています。IOGが取り組んでいるテーマの中でも、まちづくりとフレイル予防はその最前線であり、国家的課題といえるでしょう。私たちが進める産学連携は、これからが正念場だと思っています。

飯島　“Chōju”と“Ikigai”を自己実現できる新たな価値を感じる地域コミュニティづくりを簡単にいえば、コミュニティのリ・デザインです。それは簡単ではありませんが、IOGはその先駆者として、産業界のみなさんとともに、アクションリサーチと社会実装を推進していきたいと考えています。続きまして、本日お集まりいただいた企業のみなさんから、ひと言ずつコメントをお願いします。

瓜坂　大和ハウス工業の瓜坂です。私たちは昭和40年代から50年代にかけて、ニュータウンと呼ばれる街を全国61カ所に造ってまいりました。その多くで高齢化が進んでいるため、7年前から横浜市港南台の上郷ネオポリスの再生に取り組んでいます。最近は80歳前後でも元気な方が多いので、再生活動はまちに住む高齢者の方々が中心になって動いていただいているのが実態です。来年から800万人以上といわれる団塊の世代が後期高齢者に突入しますが、その力を活用しながら再生を進めたいと考えています

佐々木　マルタマフーズの佐々木と申します。当社は約1000カ所の病院や介護施設から食事サービスを受託しています。現場を見て感じるのは、この数年の間に私たちがサービスを提供している高齢者の方々のフレイルが重度化して食事を食べられなくなっていることです。また、当社でも介護に携わる社員が急増しており、在宅の高齢者もフレイルが進行していることを痛感しています。私の地元でもコロナ禍で神社のお祭りができずに、外出自粛で商店街のお店もシャッターが閉まっているなど、地域の交流が途絶えてしまいました。こうした状況が高齢者の方々

のフレイルを進めていると思われます。そこで、私たちは地域に住む人たちが一緒に食事をして、元気を分かちあえる場を提供する共食サービスの取り組みを始めました。アカデミアや異業種の方々に学ばせていただきながら、より良いものに進化させたいと思います。

谷口　三井住友信託銀行の谷口と申します。当社は信託を中心に事業を行っている金融機関です。人生100年時代を迎える中で、85歳でも95歳でも100歳になっても自分の意思決定ができることが"Ikigai"に繋がります。また、人生が豊かであることは、選択肢が多いということでもあります。わたしたちは高齢者の方々の豊かな人生を支えるために、後見や信託をはじめ豊富な選択肢をご用意しています。もちろん、認知機能が衰えてきた方の資産をお守りするのも私たちの重要な役割です。できるだけ多くの人に信託銀行の機能を活用していただき、豊かな人生100年時代を実現するお手伝いができればと考えています。

舗という顧客接点を活用しながら、メーカーの方々と一緒に地域のフレイル予防を進めています。数年前に当社の経営層を対象にしたセミナーで辻先生に講演していただき、全員がフレイルに関する認識を新たにしたことも取り組みを加速しました。今はコロナの影響でイベントが開催できませんが、これからも食と運動と社会参加という三位一体のフレイル予防を店頭で実現していきます。

まちのフレイル化を防ぐのは、思い出が紡ぐ物語

飯島　フレイルについては、一人ひとりの体の衰えだけではなく、まちのフレイル化も予防する必要があります。そのためには、住民の方々に何をどう伝えて行動変容を起こしてもらえばいいのか、そして地域がどう変われればフレイル化を防げるのかを

IOG
機構長
飯島 勝矢

IOG
客員研究員
辻 哲夫

濱千代　キユーピーで研究開発と医療事業を担当している濱千代です。昨年から食と健康プロジェクトでフレイル予防に取り組んでいます。私は20数年前に高齢化社会を見据えて、介護食の開発を会社に提案しました。しかし、介護食だけでは足りません。摂食機能の低下を防ぐには、買い物や調理、後片付けまで含めたトータルの取り組みで高齢者の食に関わる問題を解決する必要があります。そこで、日本介護食協会を設立して、多くの食品会社と連携しながら介護食の認知浸透を促し、社会に広めてきました。いま進めているのは、介護食が必要になる手前で摂食機能の低下を防ぐための、サラダと玉子によるフレイル予防です。産学連携のネットワークにより同じ志を持つ企業を募って、高齢者の方に向けて多様性のある食を築きたいと考えています。

久木　イオンの久木です。私たちは地域に根差した小売業として、常にお客様の暮らしへの貢献を考えています。日本全国にショッピングモールやスーパー、ドラッグストアなど数多くの店舗を持っていることは、私たちの大きな強みです。既に、この店

考えなければなりません。たとえば、筋肉の衰えを防ぐには体を動かしてもらう必要がありますが、高齢者の方が運動を日課にするのは至難の業です。でも、近所の知り合いと楽しく過ごしていたら1万歩も歩けた、みんなで食事したらたくさん食べられた、という環境があれば、意識しなくてもフレイルを予防できます。マルタマフーズさんは地域のコミュニティを活性化するために、神社カフェという取り組みを始められたそうですね。

佐々木　地元にある神社と地域住民との繋がりが年々薄れていくのを寂しく感じていました。でも、もともと神社は地域に暮らす人々が安心して自由に出入りできる場所なんです。参道の横にある公園では若いお母さんたちが子どもを遊ばせています。でも、神社にお参りに来る高齢者の方との交流はありません。なんとか繋げられないかという思いから生まれたのが、神社カフェのアイデアでした。地域の経営者の方など、神社を支えている氏子の方々もちょうどフレイル予防の対象者となる年代なので、積極的に協力してくださいました。

飯島　神社という場の着眼点が素晴らしいと思います。こうした活動を通じて、交流の場が広がっていくかもしれませんね。フレイル予防においても食、そして栄養はとても重要な役割を果たします。サラダと玉子で毎日の食事の質を向上させようというキユーピーさんの戦略を聞かせてください。

濱千代　サラダと玉子にフォーカスしたのは、まず野菜が免疫力の向上や血圧などの循環器疾患の改善に貢献するからです。噛むことで嚥下機能の低下も予防できますし、玉子を1日1個摂取すればタンパク質をはじめ不足しがちな栄養素を十分に補えます。この組み合わせはバランスがいいということで、さまざまなメディアでPRしましたが、私たちの思いはなかなか伝わりません。そこで地域を対象にしてマスへと広げるために、一昨年からイオンさんと店舗イベントによる実証実験に取り組んできました。健康プロモーションと商品をセットでお客様に訴求したところ、大きな反響がありました。一方通行のメディア戦略を反省

大和ハウス工業株式会社
リブネスタウン事業推進部
東日本統括グループ
瓜坂 和昭 氏

飯島　店舗で買い物をするだけでなく、運動と社会参加ができるのはいいですね。そうした個々のフレイル予防と合わせて、まちのフレイル化予防において重要なのは若い世代が暮らせるまちにすることです。そのために何をすべきか。まちの再生に取り組んでいる大和ハウスさんにお聞きします。

瓜坂　先程マルタマフーズさんのお話しを聞いて、50年前にニュータウンを造った時に、小さな神社を建てておけばよかったと思いました。昔の村やまちには鎮守の森があって、お祭りなど世代を超えた人々が集まる機会がありましたが、ニュータウンには神社がありません。だから私たちは、人が交流する場ときっかけを作る必要があります。2019年にコンビニエンスストア併設型のコミュニティ施設「野七里（のしちり）テラス」をオープンした時は、多くの住民の方が積極的に運営に参加してくださいました。40

株式会社マルタマフーズ
副社長
佐々木 宏 氏

するとともに、店舗を通じたフレイル予防向け商品の提供に手応えを感じています。いま進めているのは、食肉や水産物、大豆など、さまざまな食品メーカーと提携した新商品の開発です。また、フィットネス系の企業と一緒に、栄養と運動をパッケージにした商品展開も考えています。

飯島　スポーツ・フィットネス系の企業にも、高齢者の栄養と社会参加が充たされる環境を作ってほしいですね。高齢者が運動機能を維持するために、イオンさんが店舗で実施されている取り組みについてお話しください。

久木　はい、まずショッピングセンターで行っているラジオ体操です。朝7時から始まって簡単なエクササイズをした後に、フードコートでゆっくりお茶を飲みながら談笑するのが日課になっている方が大勢いらっしゃいます。毎日続けるうちにコミュニティになるんですね。もう一つがモールウォーキングで、1周歩くと8000歩くらいになるので、天候に関係なく運動できると好評です。ドラッグストアで薬剤師による健康セミナーを開催して生活習慣を変えるきっかけづくりをするなど、店舗に合わせた取り組みを行っています。

年続いた夏祭りがコロナで中止になったので七夕祭りを企画したところ、高齢者の方々が裏山から900本もの笹を切り出してくださって、大いに盛り上がりました。子どもから高齢者まで、生き生きと暮らす姿を見せることが、若い世代の流入に繋がります。今後、リモートで働くことが定着すれば、土地が安く環境がいい郊外で暮らす若い世代が増えるでしょう。ネオポリス上郷から由比ガ浜までは車で15分なので、いつでもサーフィンを楽しめます。新しい暮らし方に対応したまちづくりを実現できれば、フレイル化することはありません。住民の方々にまちづくりへ参加してもらうことが、新しい“Ikigai”にもなります。ネオポリス上郷の再生事業では応援団の方が250名以上いて、私たちがいなくてもまちづくりが進んでいく地盤が生まれつつあります。

大月　いろいろな団地の動向を見ていると、場所によっては独立して出ていった子ども世代が、Uターンして戻ってくることがあります。これは共働き世帯が子どもの面倒を親に見てもらいたいからで、まちのフレイル予防には非常にいいクスリです。引っ越

しを考えるタイミングとして多いのは子どもが小学校や中学校へ入学する時ですが、希望に合う物件が見つからなかった場合に、賃貸という受け皿も必要になります。もう一つ重要なのは、子ども世代が帰ってきたくなるような思い出を持っていることです。そうした条件が満たされれば、若い世代が戻ってくるはずです。

谷口　最近は中古住宅を購入してリフォームする若い方も多いので、金融機関としては資金面をサポートすることで、魅力的なまちづくりに貢献できます。将来的にリバースモーゲージを視野に入れるなら、リフォームは家の資産価値を上げることになります。当社では、住宅ローンをお借入れいただいたお客様に遺言を無料で保管する「ハウジングウィル」というサービスを始めました。日本では、若いうちから遺言を用意するのは一般的ではありませんが、イギリスでは30歳から35歳の間に3分の1の人が遺言状を作成しています。購入した家の相続でトラブルが起きないように、万一に備えることは大切です。これからも金融と

三井住友信託銀行株式会社
人生100年応援部
谷口 佳充 氏

信託を合わせたサービスを開発してお客様の資産を守り、安心して暮らせるまちづくりを実現したいと思います。

辻　みなさんのお話しを聞いて、個人とまちのフレイルを予防して、“Chōju”と“Ikigai”を実現するためには、地域住民と行政、産業界、われわれアカデミアも含めた社会全体の力が必要であることを再認識しました。まちをフレイル化させないためには多様性や人の交流、思い出が必要になる。それを突き詰めると、物語が要るということです。文学的な表現で恐縮ですが、まちの物語を作っていくことが求められているのだと思います。

消費者ではなく、生活者を支援する知の構築へ

飯島　昨年、私が機構長に就任してからIOGの産学連携の仕組みを3層構造にして、より多くの企業の参加と共同研究の活性化を目指しました。コロナの影響を受けながらも、みなさんのおかげで初年度は順調に離陸できたと思っています。それを加速していくために、みなさんがアカデミアや異業種と連携しながら、もっと温かい血の通った知を構築するために考えていること、アカデミアに期待することは何かをお話しください。

瓜坂　以前、横浜市から「ウィル」という電動モビリティをお借りして上郷ネオポリスの住民の方10人に利用していただきました。その結果、「ウィル」は一人乗りですが二人で使うツールという新しい用途が見えてきました。ご夫婦で外出するときに往路と復路で交代に乗れば、疲労は半分で済むので遠くまで行動範囲が広がります。買い物のときには荷物を載せることもできますし、会話しながら移動することでコミュニケーションの機会も増えます。構造や操作性についてご意見をいただくこともできました。いまここにいらっしゃるみなさんの商品やサービスについて、上郷ネオポリスでフィールドリサーチを行っていただければいいと思います。IOGの先生方からの学術的な裏付けがあれ

キユーピー株式会社
取締役上席執行役員
濱千代 善規 氏

ば、高齢者の方々は喜んで協力してくださるでしょう。新しいものを試してみたい方が大勢います。

飯島　まさしく産学連携の醍醐味ですね。上郷ネオポリスをリビングラボとして実証実験を行い、アカデミアが成果をリリースしていくことでスムーズな社会実装を実現できる可能性があります。これからもご協力をよろしくお願いします。

佐々木　私たちは早くから皆さんとコラボさせていただいています。大和ハウス工業さんは兵庫県三木市の緑が丘ネオポリスでも団地再生を進められていて、私たちがお手伝いした地域の交流会でフレイル予防をテーマにした際に、近所のイオンさんで買物をして、キユーピーさんの「サラダクラブ」や介護食の「やさしい献立」をご紹介しました。住民の方々はイオンさんでこういう食品を買えば、フレイル予防できると知って喜んでくださいました。このように、さまざまな場所でみなさんと協業することによって、フレイル予防の必要性を広めていきたいと考えています。当社が進めている「共食サービス」は、これから形成されていく産業の

ため、閉塞的な食品業界においてブルーオーシャンになる可能性があります。新しい商品開発もIOGに集うみなさんと一緒に行えば相乗効果を期待できます。先程お話しした神社カフェのある地域は、三井住友信託銀行さんの営業担当の方が回ってくださっています。安心を求めて神社に参拝する人が増えていますが、多くの方々は信託銀行を知りません。神社カフェのお客様に安心を提供するためにも、ぜひ協業できればと思っています。

谷口　ありがとうございます。当社は支店が少ないので、いかに地域との繋がりを深めて信託を利用していただくかが課題でした。日本で信託法が定められたのは大正12年。今から100年ほど前になります。なぜ信託が必要なのかという問いに対して、判断能力が低下していく人に代わって財産を管理するためだと答えた当時の記録が残っています。そこに私たちの存在意義があり、そこに貢献していくことが使命です。高齢化社会の最先端となった日本で、信託というサービスを提供するために、産学連携のフィールドを生かしたいと考えています。

イオン株式会社
顧問
久木 邦彦 氏

濱千代　どんなにいい商品も、作っただけではその価値は限定的です。フレイル予防の機能を持つ食品も、ただ店頭に並べただけでは買ってもらえません。その価値を求めている人にきちんと提供できるシステムが必要です。しかし、それを産業界だけで構築するのは難しく、時間を要するでしょう。私が開発した介護食も介護食協議会を設立してアカデミアにもサポーターとして入っていただいた結果、大きな市場へと成長しました。IOGのように、産学連携の実績で社会的な信頼を得ている研究機関がリードすることで、より速く、より広く価値を伝えていけると考えています。

久木　最近、自治体の方から高齢者向けに移動販売をしてほしいという要望をいただくことが増えてきました。できる限りお応えするように努力していますが、実際にやってみると高齢者のみなさんがとても喜んでくださいます。移動の手段がなく、ショッピングセンターまで歩けない高齢者の方にとっては、移動販売で買物をするのも運動であり、社会参加なのです。当社は多くの顧客接点を持つ企業としてお客様の生の声に応えて、より良い商品やサービスを提供しなければなりません。それが一方通行にならないように、IOGの産学連携に基づくエビデンスを必要としています。

飯島　私たちが産学連携の場で議論し検討していることが、本当の答えなのかどうかはわかりません。社会実装のためには、しっかりとニーズの掘り起こしをすることが重要だと思います。

大月　お話しを聞いていて、高齢化社会に求められているのは、消費者ではなく生活者を支援するための商品やサービスなのだと感じました。これは企業単独では成立しません。アカデミアも同じです。ある課題のために、この現象のデータを取ってきて理論化するという単線的な発想では、地域を含めた生活者をとらえるのは難しいでしょう。団地や神社やショッピングモールなど、生活者は日常的にさまざまな場所に関わっています。フィールドリサーチの領域を広げて、新たな知を構築していくことが私たちのミッションであることに思い至りました。

IOG
副機構長
大月 敏雄

辻　企業の皆さんが作る優れた商品やサービスを広めることもIOGの役割です。フィールドリサーチで収集したデータでエビデンスを示せば、その優位性を明らかにすることができます。そのために必要なのが標準化と認証制度です。良いものを認証制度により差別化して社会全体に普及させていく。それがIOGの政策提言の土台になります。フレイル予防についても、まちづくりについても、認証制度を作ることがIOGに課せられた任務であると考えています。

飯島　皆さん本日はありがとうございました。この1年間、IOG2.0を標榜して産官学の連携を強化してきました。これからも産業界の方々の期待に応えられるように前進し続けます。卓越性のある総合知を産業界とアカデミアで構築するために、相互に刺激し合って魅力的なアクションリサーチに取り組みましょう。これからもよろしくお願いします。

ジェロントロジー産学連携プロジェクトの活動内容

ジェロントロジー産学連携プロジェクトは、集い・共有する「ジェロントロジー・ネットワーク」、体系的な学び・総合知で深掘りする「ジェロントロジー・アカデミー」、新たな事業開発につなげる「個別共同研究」の３層構造で成り立っています。(➞P6～7)

メンバーが集い・共有するジェロントロジー・ネットワーク

ジェロントロジー・ネットワークは、参加企業とIOGの交流やメンバー同士の討論を通じて、超高齢社会といかに向き合っていくかを学ぶ場です。最新のトピックスやアカデミアの研究など、さまざま情報をキャッチアップしながら自由な討論や意見交換を行い、共有することにより、各企業がどのように自社の強みを生かすべきかを考えます。

■ 2020-2021年度に行った産学交流機会（サロン）とディスカッションテーマ

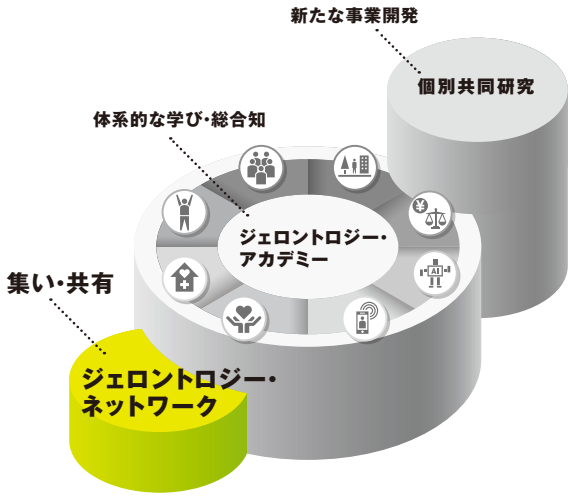
［アクティブヘルス＆ケア］

・自社の強みを生かした産学官連携でのフレイル予防事業を考える
・フレイル予防＝ライフスタイルへの影響、ゼロ次予防は重要

［ライフデザイン］

・3世代で語るライフスタイル
・写真の整理とライフスタイル
・「仕事（はたらく）」について人生のいくつかの節目や未来感

［企業紹介と教員との交流］



レクチャーとグループワークを共同研究に繋げるジェロントロジー・アカデミー

ジェロントロジー・アカデミーは、2020年度からスタートしたジェロントロジー産学連携プロジェクトの中心として位置付けられている活動です。

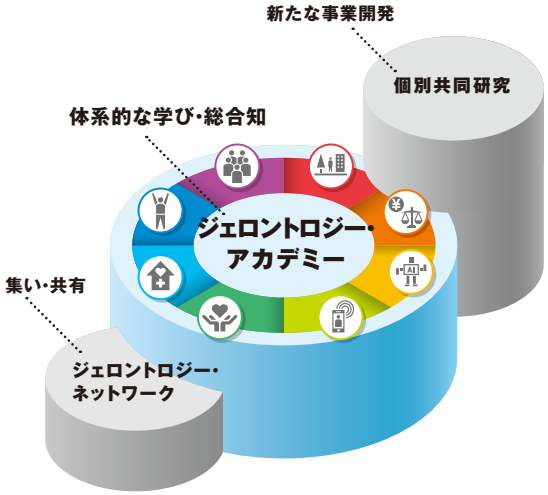
ジェロントロジー・アカデミーでは、8つの領域からテーマを設定し、関連する講演や話題提供を行うレクチャーと、自分事とするためのグループワークの二つの構成で進めています。

アカデミー参加企業は、アカデミーのカリキュラム（前期・後期）、各種研究会、ジェロネットの活動に参加できます。

さらに、アカデミーで学ぶ中で社会実装に向けてテーマを絞り込み、各研究会の立ち上げ、活動をスタートしています。(➞P82～87)

■ 2020-2021年度の研究会

・高齢者就労研究準備会
・地域包括ケアシステム研究会
・食の在り方研究会
・モビリティの在り方研究（移動支援、サービス提供）勉強会
・オーラルフレイル予防研究会
・金融関連および法研究会　勉強会
・生活支援（情報）システム研究会
・まちづくり標準化研究会



高齢者地域就労の仕組みの開発

高齢者就労と生涯現役社会の実現への社会的課題解決に向けたロードマップ作成を目指します。生涯現役社会の新しい働き方を開拓するための具体策について討議します。

フレイル予防産業の創出

東大IOGのエビデンスの蓄積と産学連携の先進事例を学び、各社の強みを生かして国民に向けた啓発を強化し、幅広いフレイル予防産業を展開するための方策を探りながら、健康長寿社会の実現を目指します。

生活支援産業の創生

社会的な需要が高まる高齢者の生活支援サービスのビジネスモデル創出における課題を明らかにし、解決のためのアイデアを具体化します。

地域包括ケアシステムを支える民間事業開発

高齢者が最後まで自分らしい人生を送るために、フレイルの段階に合わせたサービスを地域のインフラとして提供できる地域包括ケアシステムを展望します。

住宅地再生の標準化

老朽化、空き家が問題となっている住宅地を「持続性をもつ住宅、住宅地」に変えるため、フィールド研究や地域課題共有から産官学民で解決の道を探り出します。

金融関連および法

人生100年時代の高齢期には、金融と法に関する継続的かつ包括的な支援体制が不可欠です。成年後見、信託、リバースモーゲージ等を用いた、見守りと生活支援の新しいあり方を構想します。

ジェロンテクノロジーの開発普及

生きがいある自立・自律生活を支え、高齢期のマイナスをプラスに転換する技術やシステムを探求し、経済と生きがいを両立するICTやロボット活用を学びます。

人・まち全体をつなぐ情報システム開発

高齢者の「暮らす・繋がる・働く」などの行動を支えるために、ICTを用いた情報システムが果たすべき産官学民の役割について討議します。

社会実装と新たな事業開発につなげる個別共同研究

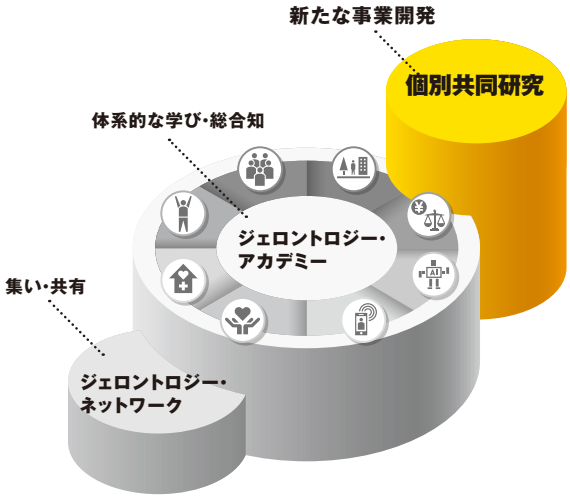
共同研究として、個別の研究課題に取り組み、社会実装を目指します。東京大学への派遣・出向も行い、パートナーシップで課題解決、新たなビジネスモデル創出、そして政策提言も行います（派遣・出向を行う個別共同研究プロジェクト紹介：➡P88〜95）

個別共同研究参加企業は、アカデミー・ネットワークを含む産学連携プロジェクトのすべての活動に参加できます。

産学連携プロジェクトの詳細はホームページでも紹介しています。

▶https://www.iog.u-tokyo.ac.jp/collaboration/

▲パンフレット



参加企業

2020-2021年度

個別共同研究

イオン株式会社
一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会
株式会社ウェルモ
株式会社NTTドコモ
キユーピー株式会社
サンスター株式会社
ジェックスインターナショナル株式会社
株式会社住協
大和ハウス工業株式会社
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
独立行政法人都市再生機構（UR）
株式会社都市DESIGN総研
日本年金機構
株式会社長谷工コーポレーション
株式会社日立製作所
株式会社フードケア
株式会社マルタマフーズ
株式会社三菱ケミカルホールディングス
株式会社ユニマット　リタイアメント・コミュニティ
株式会社ロッテ

ジェロントロジー・アカデミー

エム・シー・ヘルスケア株式会社
株式会社カイゴメディア
京セラ株式会社
ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社
SOMPO ホールディングス株式会社
株式会社竹中工務店
株式会社東急不動産R&Dセンター
株式会社ニチレイフーズ
日清オイリオグループ株式会社
日本医療福祉生活協同組合連合会
はごろもフーズ株式会社
不二製油グループ本社株式会社
ミサワホーム株式会社
三井住友信託銀行株式会社
株式会社ヤクルト本社

ジェロントロジー・ネットワーク

株式会社 AXIVE
アボットジャパン合同会社
株式会社イトーキ
江崎グリコ株式会社
株式会社大塚製薬工場
株式会社かんぽ生命保険
キッコーマン株式会社
株式会社クリニコ
株式会社 JVC ケンウッド・デザイン
相模屋食料株式会社
株式会社ジェイテクト
株式会社スズキ
住友生命保険相互会社
セントラルスポーツ株式会社
東芝データ株式会社
東洋紡株式会社
トヨタ自動車株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社
株式会社長谷工総合研究所
パナソニック株式会社
パラマウントベッド株式会社
芙蓉総合リース株式会社
株式会社ブリヂストン
三井住友海上火災保険株式会社
ヤマハ発動機株式会社

活動実績

2020年度 ※個別研究会は各々開催 ＊敬称略

	全体ミーティング	アカデミー	ネットワーク
5月	ジェロントロジー 産学連携プロジェクト 開講式		
6月		■高齢者就労・生涯現役 **講演:**「全員参加・生涯参加社会をめざして」秋山弘子（東京大学） **話題提供:**「変革期を迎えた日本の労働市場～人生100年時代、企業・個人が取組むべき視点とは」前田展弘（株式会社ニッセイ基礎研究所） **グループワーク**	
7月		■フレイル予防 **講演:**「国家戦略としての『フレイル予防を通した健康長寿まちづくり』～フレイル予防産業活性化への挑戦～」飯島勝矢（東京大学） **話題提供:**「フレイル予防産業活性化の取り組み」イオン株式会社、キユーピー株式会社、株式会社日立製作所 **グループワーク** ■生活支援 **講演:**「地域における生活支援システムの現状と課題」辻哲夫（東京大学） 「リビングラボの取り組みについて」秋山弘子（東京大学） **話題提供①:**「柏プロジェクトの生活支援の取り組み」神谷哲朗（東京大学） ②:「柏市の実践現場からの報告」木村清一（東京大学） ③:「一元的なICTインフラの活用の試み」榊原拓磨（株式会社NTTドコモ） ④:「文京区における居場所づくりの取り組み」浦田愛（文京区社会福祉協議会） **グループワーク**	
8月	ジェロントロジー 産学連携プロジェクト 全社ミーティング	■医療と介護 **講演:**「今後の在宅医療介護システムの課題―特に民間事業者の役割」辻哲夫（東京大学） 「在宅医療（介護連携を含む）の本質」飯島勝矢（東京大学） **話題提供:**「在宅医療を含む多職種連携の実際:柏市の取り組みから」−柏市からの報告 「文京区の在宅ケアに関する考え方と在宅介護看護サービス拠点の運営」 ―文京区及び介護事業者（株式会社グッドライフケアホールディングス、SOMPOホールディングス株式会社） **グループワーク** ■合同研究会	
9月		■ジェロンテクノロジー **講義1:**「高齢社会を豊かにする技術とシステムーJSTのプロジェクトを例にとってー」伊福部達（東京大学） **講義2:**「高齢社会での社会参加支援のための軽労化技術の研究開発とその事業化」田中孝之（北海道大学） 「高齢者の記憶と認知機能低下に対する生活支援ロボットシステムの開発」井上剛伸（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）、大中慎一（日本電気株式会社） 「高齢者の自立を支援し安全安心社会を実現する自律運転知能システム」井上秀雄先生（神奈川工科大学） 「高齢者の経験・知識・技能を社会の推進力とするためのICT基盤『高齢者クラウド』の研究開発」小林正朋（日本アイ・ビー・エム株式会社） **グループワーク** ■情報システム **講演:**「これからの社会とICT」廣瀬通孝（東京大学） **話題提供:**「GBERの今」檜山敦（東京大学） 「移動の制約を乗り越える」光行恵司（株式会社デンソー東京支社） 「ドコモのシニアスマホ教室の取組紹介」榊原拓磨（株式会社NTTドコモ・東京大学） **グループワーク** ■まちづくり **講義1:**「超高齢人口減少社会のまちづくり」辻哲夫（東京大学） **報告①:**「UR団地の地域医療福祉拠点化の取り組み」渡辺直（UR都市機構） ②:「上郷ネオポリスの取り組み」瓜坂和昭（大和ハウス工業株式会社）	

2020年度 ※個別研究会は各々開催 ＊敬称略

	全体ミーティング	アカデミー	ネットワーク
9月		③:「こま武蔵台の取り組み」柳沢弘治(げんきネット武蔵台) ④:「春日部市の取り組み」中島拓(春日部市) **講義2:**「八王子市めじろ台団地の取り組みとまちづくりプロジェクト」中村修(八王子市めじろ台地区まちづくり協議会)、大月敏雄(東京大学)、小泉秀樹(東京大学) **グループワーク**	
10月		**■高齢者就労・生涯現役** **活動報告:**「高齢者就労・生涯現役研究準備会」 **講演:**「シニア就労の事情と日本社会の挑戦」宇佐川邦子(株式会社リクルートジョブズ) **話題提供:**「サービス業(飲食や介護)における高齢者採用とOJT について」 大竹将嗣(ClipLine株式会社) **パネルディスカッション:**「70 歳への就労延長と地域における高齢者雇用:企業と地域社会はどう立ち向かうか」宇佐川邦子、大竹将嗣、 岡本憲之(一般社団法人高齢者活躍支援協議会)、秋山弘子(東京大学) **グループワーク**	**アクティブヘルス&ケア**
11月	**産学連携シンポジウム** 「人生100年時代と ニューノーマル〜強い産学官連携で描く未来〜」		**ライフデザイン** **ハビタット** **ジェロテク** **ライフデザイン**
12月		**■フレイル予防** **グループワーク** **総合ディスカッション:**「異業態同士のコラボ・統合」 **活動報告:**「食の在り方研究会」「オーラルフレイル予防推進研究会」 **■生活支援** **講義1:**「生活支援システム総論」辻哲夫(東京大学) **講義2:**「柏プロジェクトにおける生活支援体制づくり」木村清一(東京大学) 「柏プロジェクトにおけるICT システム構想」神谷哲朗(東京大学) 「柏市豊四季台地域からの声」登壇者:柏市豊四季台地域住民、柏市福祉政策課、柏市社会福祉協議会 **グループワーク**	**アクティブヘルス&ケア** **ライフデザイン**
1月		**■医療と介護** **講義1:**「在宅ケアの理念と構図、最新の動きの概要」辻哲夫(東京大学) **講義3:**「24 時間対応ケアシステムの日本の最前線モデルの紹介」 対馬徳昭(つしま医療福祉グループ) **講義3:**「在宅医療の現場実践」太田秀樹(医療法人アスムス) **パネルディスカッション** **グループワーク** **■情報システム** **講義1:**「森ビルにおけるVR活用とICTに関する社会的課題解決に向けた最新事例」 矢部俊男(株式会社森ビル) **講義2:**「VR法人HIKKYバーチャルマーケットの紹介」舟越靖(株式会社HIKKY) **鼎談:**廣瀬通孝(東京大学)・矢部俊男・舟越靖 **グループワーク**	**ハビタット** **ライフデザイン**
2月		**■ジェロンテクノロジー** **講義1:**「高齢者の社会参加を促し、生活の質を向上させるテクノロジーの普及化に向けて―コミュニケーションロボットを中心に―」伊福部達(東京大学) **講義2:**「生活支援ロボットシステムの現場での活用事例と事業モデルについて」 大中慎一(日本電気株式会社)、渡部幸一(伊豆市役所) **講義3:**「眠りスキャンを活用した介護現場での実証: 眠り科学から再考する長寿」 木暮貴政(パラマウントベッド株式会社) **講義4:**「高齢社会におけるパーソナルモビリティWHILLの活用:社会的フレイル予防へ」 辻阪小百合(WHILL株式会社) **総合討論** **グループワーク** **■まちづくり** **講義1:**「総合知結集の現場としてのまちづくり-各視点からの報告」 **報告①:**「〜住民主体の持続可能なまちづくり〜 上郷ネオポリスでの取組み」 瓜坂和昭(大和ハウス工業株式会社)	**アクティブヘルス&ケア** **ハビタット** **ジェロンテクノロジー**

2020年度 ※個別研究会は各々開催 ＊敬称略

	全体ミーティング	アカデミー	ネットワーク
2月		**報告②:**「FLL（Future Living Lab）～市民・企業・行政連携で考えるSociety5.0の形～」 森木俊臣（株式会社日立製作所） **報告③:**「銀行、信託を通した、高齢者の住まい改善の手法」 谷口佳充（三井住友信託銀行株式会社） **講義2:**「総合知結集の現場としてのまちづくり-八王子市めじろ台団地の取り組みの展開」 中村修（八王子市めじろ台地区まちづくり協議会）、大月敏雄（東京大学） **グループワーク**	
3月	**IOGシンポジウム** 「高齢社会の未来協創 ～総合知で挑む with/postコロナ時代～」 **ジェロントロジー 産学連携プロジェクト 全社ミーティング**	**■アカデミー発表会** **■合同研究会**	**ライフデザイン** **ジェロンテクノロジー** **ライフデザイン**

2021年度

4月	**ジェロントロジー 産学連携プロジェクト 開講式** **基礎講習会**		**ライフデザイン**
5月		**■高齢者就労・生涯現役** **講演:**「『生涯現役サポートビジネス』を考える ～人生100年時代、 個人・社会・企業が求める最適解は?」前田展弘（株式会社ニッセイ基礎研究所） **話題提供1:**「定年3.0時代　自走人生を促す事業開発の視点」 池口武志（一般社団法人定年後研究所） **話題提供2:**「多様な社会に変わる日本とシニアの多様な活躍」 近藤昇（ブレインワークスグループ） **話題提供3:**「高齢者の就労・社会参加の促進に関する取組み（柏市生涯現役促進協議会）」 橋本圭司（柏市） **グループワーク** **■フレイル予防** **レクチャー:** （1）フレイル予防のための3つの柱の重要性とそれを裏付けるエビデンス （2）国家略としてのフレイル予防、その基盤となる産業界の新興 飯島勝矢（東京大学） **産業界からの話題提供:** （1）セントラルスポーツ社の取組み （2）共食支援サービスの取組みについて ～神社カフェ実施報告～マルタマフーズ社 **フレイルサポータ（文京区）:** （1）フレイルサポーターになっての健康観の変化 （2）フレイル予防（食・口腔、運動、社会参加）に資する消費行動変容 **グループワーク** **総合討論**	**企業紹介 アクティブヘルス&ケア ライフデザイン**
6月		**■生活支援** **レクチャー:**「生活支援システム総論～高齢期に生ずる困りごとの概念と位置づけ～」 辻哲夫（東京大学） **困りごと解決のための社会システムの事例:** 「豊四季台生活支援体制整備の取り組み」橋本圭司（柏市） 「豊四季台の取り組みにおけるICTの活用の試み」 榊原拓磨（株式会社NTTドコモ・東京大学） **グループワーク** **■医療・介護** **レクチャー:**「小規模多機能型居宅介護の現状と課題」箕輪忠裕（株式会社ツクイ） 「小規模多機能を軸とした都市型地域包括ケアシステムを目指して」進憲司（文京区） **グループワーク** **総合討論**	**企業紹介** **ライフデザイン**

2021年度 ※個別研究会は各々開催 ＊敬称略

	全体ミーティング	アカデミー	ネットワーク
7月	**トップセミナー** **講演:** 「超高齢人口減少社会とは」 辻哲夫(東京大学) 「長寿社会は イノベーションの宝庫」 秋山弘子(東京大学) 「総合知を実装する 長寿社会のまちづくり」 大月敏雄(東京大学) 「東京大学 IOG の 目指すところ」 飯島勝矢(東京大学) **総合討論:**「産官学民連携で取り組む未来ビジョン」	**■情報システム** **講演:**「自律分散」廣瀬通孝(東京大学) **対談:**廣瀬通孝・辻哲夫(東京大学) **グループワーク** **総合討論** **■ジェロンテクノロジー** **レクチャー:**「ユニバーサルデザイン・アクセシブルデザイン」二瓶美里(東京大学) **話題提供:**「商業施設におけるユニバーサルデザイン」乾裕之(イオン株式会社) 「製品設計におけるユニバーサルデザインの取組」植村和之(キユーピー株式会社) **グループワーク** **総合討論**	**アクティブヘルス&ケア** **ライフデザイン**
8月		**■金融関連及び法** **講義:**「成年後見制度の沿革と課題について」税所真也(東京大学) **話題提供**「介護の現場での事例報告」 ・グループホームでの事例　稲澤菊子(株式会社ツクイ) ・老人ホームでの事例　蓬田幸康(SOMPOホールディングス株式会社 ・健常者型高齢者住宅の事例　田中康夫(東京大学) **講義:**「生活支援と財産管理のオプションの状況、前半のまとめ」 谷口佳充(三井住友信託銀行) **グループワーク** **総合討論** **■まちづくり** **講義:**「日本の空き家の課題と政策」大月敏雄(東京大学) **講義:**「空き家調査及び活用事例紹介」 **事例①:**空き家調査の実態　今泉台の空き家調査 丸尾恒雄(NPO法人タウンサポート鎌倉今泉台) **事例②:**空き家活用の事例　今泉台の継続居住システム構築の試み 李鎔根(東京大学) **事例③:**空き家活用の事例　泉北NT事例　森一彦(大阪市立大学) **グループワーク** **総合討論**	**ジェロンテクノロジー**
9月	**全体ミーティング**	**■合同研究会**	**ライフデザイン** **アクティブヘルス&ケア** **ライフデザイン**
10月			**ライフデザイン**
11月		**■高齢者就労** **講演:**「生涯現役に関する課題・論点整理」前田展弘(株式会社ニッセイ基礎研究所) 「ミドルシニアのための日本版ライフシフト戦略」 木村勝(リスタートサポート木村勝事務所) 「年金の行方と個人の対応策」中嶋邦夫氏(株式会社ニッセイ基礎研究所) **グループワーク** **■フレイル予防** **レクチャー:**フレイル予防における産官学民連携の重要性(最近の動向)」 飯島勝矢(東京大学) **話題提供(フレイル啓発の取り組み):** ①:神奈川県秦野市での取り組み　乾裕之(東京大学)、フレイルサポーター ②:東京都西東京市での取り組み　徳丸剛(西東京市)、フレイルサポーター **グループワーク**	**アクティブヘルス&ケア** **ライフデザイン**
12月		**■生活支援** **レクチャー:**「生活支援システム総論～高齢期に生ずる困りごとの概念と位置づけ～」 辻哲夫(東京大学) 「困りごと(生活支援ニーズ)を解決するための先進事例の紹介」松本小牧(豊明市) 「困りごと解決に向けた社会システム構築の事例紹介」	

2021年度 ※個別研究会は各々開催 ＊敬称略

	全体ミーティング	アカデミー	ネットワーク
12月		「柏市豊四季台地域さんあいネットワーク活動／地域課題について」 佐藤勝次郎（豊四季台地域ふるさと協議会）、石井鏡子（豊四季台西地区民児協会） 「ICTを活用した都市型の生活支援ネットワークに関する調査研究事業の進捗報告」 榊原拓磨（株式会社NTTドコモ・東京大学） **グループワーク** **■医療・介護** **レクチャー:**「小規模多機能型介護のプラットフォームとしての位置づけ ～2040年の在り方を考える あおいけあの取組～」加藤忠相（株式会社あおいけあ） 「機能回復・医療対応型サービス付高齢者向け住宅 「アップルウッド西大寺～在宅でもここまで出来る～」若菜信彦（株式会社YAOKI） **パネルディスカッション:**「在宅ケアを中心にした地域包括ケアシステムの構築と普及に向けて」加藤忠相、若菜信彦、三重野真（日本ホスピスホールディングス株式会社）、辻哲夫（東京大学） **グループワーク**	
1月		**■情報システム** **講演:**「シニアのスマホ利用～シニアの生活をより豊かにするために～」 水野一成（株式会社NTT ドコモ・モバイル社会研究所） **グループワーク** **■ジェロンテクノロジー** **講演:**「認知症ケア　予防と備えの社会学的観察と実践から」井口高志（東京大学） **グループワーク**	**アクティブヘルス&ケア** **ライフデザイン**
2月		**■金融関連及び法** **レクチャー:**「超高齢社会におけるプランニングと企業の役割」樋口範雄（武蔵野大学） 「超高齢社会における金融機関の取組」谷口佳充（三井住友信託銀行株式会社） 「成年後見の限界を念頭においた高齢者の法的問題について」平田厚（明治大学） **対談:**平田厚、谷口佳充、辻哲夫（東京大学） **グループワーク** **■まちづくり** **レクチャー:**「人とサービスの地域移動環境をどう整えるか」大月敏雄（東京大学） 「移動支援テクノロジーの地域コミュニティでの実現」二瓶美里（東京大学） 「高齢者の転倒メカニズム研究と住宅改修支援アプリ開発」 今枝秀二郎（株式会社日建設計総合研究所） **話題提供:**「上郷ネオポリスにおける取組」三鬼健太（大和ハウス工業株式会社） 「こま武蔵台におけるグリスロ実証実験から分かったこと」 加藤哲彦（株式会社東急不動産R&Dセンター） 「八王子めじろ台での取り組み:「みんなのベンチ」設置活動が始まった」 中村修（八王子市めじろ台地区まちづくり協議会） **グループワーク** **総合討論**	
3月	**年度総括** **IOGシンポジウム** 「ジェロントロジー 総合研究が拓く新未来像」 **全体ミーティンング**	**■合同研究会**	**ライフデザイン** **ライフデザイン**

担当教員のコメント

高齢者就労・生涯現役

秋山 弘子

働き方の多様化とDXを追い風にして 高齢者就労支援のビジネスチャンスを見出す。

高齢者の地域における就労について2年間にわたり議論してきましたが、これからは制度設計の政策提言と企業がビジネスとしてどのように関与していけるかを具体的な研究テーマにしたいと考えています。

企業の方々は高齢者が自分の住む地域で働くことに、ビジネスとして関わるのに戸惑うかもしれません。しかし、多くのシニアは機会があれば働き、社会と何らかの形でつながりたいと思っているため、そこにチャンスがあるのです。実際にシニアの方と話すと、自分はただのサラリーマンなので特別なスキルがなく、何ができるかわからない、人生の棚卸しや再就職について相談できるところが欲しいという声をよく耳にします。こうしたニーズに応えるセカンドライフデザインのコンシェルジュやリカレント教育は事業化の可能性があります。

また、農業をはじめとする第一次産業、保育や介護の現場は慢性的な人手不足に悩まされています。高齢者が体力的に無理だと敬遠する仕事についても、ロボットや遠隔操作などのテクノロジーを活用すれば、就労機会を広げることが可能です。テレワークの普及など働き方の多様化が急速に進んだことは、高齢者の就労にとって追い風となっています。今後はシニアのニーズに沿った形で具体的な議論を進めて、解決すべき課題を明確にしていきたいと考えています。

フレイル予防／生活支援

孫 輔卿

アカデミアと産業界の継続的な連携には 目的を共有したWin-Winの関係が必要。

フレイル予防を啓発する戦略に関しては、産学にとどまらず行政や市民の方々も交えながらグループワークを行い、活発に議論する中で異なる立場の意見を聞いて気付かされることが多々ありました。健康観や消費行動において多様なステイクホルダーの意見を聞けたのは、私を含めてアカデミーに参加した方々にとっても、大きなメリットだったと思います。

私個人の収穫は、産学連携で取り組むべき課題と各企業がそれぞれの強みを生かしながら連携する方法について学べたことです。

今後は知見を深めるだけでなく、実践に向けた具体的な計画を立てて実行する力をつけることを目標としています。次年度に期待されているのは、フレイル予防および生活支援のモデルフィールドを作り、予備検討や本検討を進めてアクティブな産学連携の成功例を作ることです。アカデミアと産業界が継続的に連携していくためには、Win-Winの関係構築が欠かせません。そのためには、地域の課題解決に対する短期・長期の目的を共有することが重要です。2021年に柏スタディ第六次調査にご協力いただいた企業の皆様には、深く感謝しています。参加した方々からも想定外の学びがあったと聞きました。地域の高齢者と接する中で提示される課題が産学連携の出発点であり、問題意識やプロセスを共有することが大切だと思っています。

情報システム

廣瀬 通孝

知識を新陳代謝して変化に対応するには 大学の果たす役割がますます大きくなる。

この2年間はコロナ禍によって社会が大きく変動しました。移動が抑制されたことからリモートによる在宅勤務が浸透し、自宅にいながら社会と接点を持てることが高齢者のメリットになった面もあります。また、郊外から長時間かけて大都市へ通勤するといった20世紀を象徴するライフスタイルも転機を迎えています。

こうした変化により、IOGが目指す地域に根差した高齢社会の構築に対するハードルはむしろ低くなったといえるでしょう。お茶の先生をしている友人がリモートで教室を開催したところ、85歳の生徒さんがスマホを使いこなして参加するようになったそうです。また、年に一度しか来日できなかったフランス在住の生徒さんが毎週参加できるようになって喜んでいたと聞きました。ITを活用することによって、従来できなかったことが可能になる。高齢者が感じる日常の不自由さのなかにヒントが隠れています。ある意味アフォーダンス的、身体感覚的な知識について実践を通じて培っていくことも、これからの大きな課題になると思います。

目まぐるしい社会の変化に対応するには、知識をどんどん更新して新陳代謝をはかることが重要です。そのために大学が果たす役割には、非常に大きなものがあると考えています。情報関連のワークショップを担当しながら、私の方が勉強させてもらったと感じています。

ジェロンテクノロジー

二瓶 美里

多くの世代が関わることが、超高齢社会における まちづくりや新しい文化の育成につながる。

今年度は高齢者支援における先進的なテクノロジーの活用というこれまでのテーマと異なり、超高齢社会の社会思想とテクノロジー、アクセシブルデザインなどについて議論を重ねました。その中で、高齢者の生活や移動の支援をする際に行政と本人・家族だけが関与者になっている印象を受けました。関与者に限らず、より多くの世代との接点を増やして地域全体の課題として取り組む工夫が必要です。たとえば、移動支援について学校の送迎と高齢者が利用するバスの共通化、利用最適化のためのトリップデータ活用など、新しいサービスが提案できるかもしれません。また、多世代が交流する中で、それぞれのニーズ、関わり方、支援デバイスの使い方などを日常生活の中で身に着けられるようになれば、高齢者に配慮したまちづくりや文化の育成につながるでしょう。支援の関与者だけではなく、地域住民が共に考えるインクルーシブなテクノロジーの活用やまちづくりの必要性を強く感じています。

今年度の大きな収穫は、企業や自治体職員の方々の中に、高い問題意識を持って超高齢社会に向き合う同士と出会えたことです。今後も多くの方々が参加し、目指すべき社会の在り方をアカデミアの議論から学び、共有し、その思想やエビデンスを実社会に活用・拡張していただくことを期待しています。

金融関連及び法

樋口 範雄

企業とアカデミアの英知を結集して 生きている間の財産活用といざという時の 財産承継を簡易化する仕組みを作りたい。

英米の法では、ある財産の利用の仕方を拘束し、長期間固定した形で凍結することを禁ずるRule Against Perpetuities（永久拘束禁止則）というルールが定められています。財産が長期にわたって凍結されずに、動いていくことが社会的に重要だからです。いま、日本では多くの高齢者が資産を凍結したままで、少しずつ失われていくのにおびえているという状況です。高齢者の認知症や孤立や将来不安によって不動産や金融資産が活用できていないのは、すでに個々人の問題を超えて、日本経済のアキレス腱といえるでしょう。一人ひとりが高齢期をどのように生きるべきか、資産的なプランニングが必要な時代になりました。資産を動かすことは社会参加につながるため、健康寿命を延ばす効果も期待できます。

アメリカではさまざまな業界が高齢者向けのサービスを競い合っています。生命保険や銀行口座を煩雑な手続きなしに、受取人を指名しておくだけで財産を承継できるシステムが実用化され、有価証券や自動車、不動産もこの流れに準じています。日本の専門家は相続法の秩序が損なわれると問題視するかもしれませんが、家族ほか相続人の利便性を重視した結果として、アメリカで定着しているのです。業界が工夫すれば遺言や相続手続（これが紛争のもとです）がなくても財産承継を簡易化できます。そのために民間企業とアカデミアの英知を集め、実現可能なモデルを考えていきたいと思っています。

金融関連及び法

税所 真也

企業が伴走型支援を事業化するためには Dying in Placeまで射程を伸ばす必要がある。

私は文学部の教員で金融や法律が専門ではありませんが、成年後見制度の代替となる社会的支援について取り組んでいることからご縁をいただいて、「金融と法」という新しいプロジェクトに参加しています。

最近、伴走型支援という言葉をよく見聞きします。これは貧困者支援の現場で生まれた概念で、対症療法的な問題解決型の支援ではなく、常に寄り添い伴走する形で支援していこ

うとするものです。成年後見制度の目標も、まさしくそこにあります。成年後見制度というと、認知症が進んだ高齢者が利用するイメージが強いかもしれません。しかし、家族による介護保険の代行契約などを含む、日常のさまざまな契約に関わる幅広い対象に向けた制度であり、その必要性が高まっています。今後のアカデミーにおいては、民間企業が伴走型支援をどのような形でサービスとして事業化できるかという議論を深めていきたいと思います。

アカデミーに参加して感じたのは、多彩な分野から集まっている人々が議論するために、共通の認識が必要だということです。これまではAging in placeでしたが、伴走型支援を考えていくと、その先にあるDying in Placeが見えてきます。住み慣れた土地で安心して生き切ってAging in placeを完結するにはDying in Placeまで射程を伸ばす必要がある。そのためにアカデミーが貢献できればいいと考えています。

まちづくり

大月 敏雄

空き家の予防やモビリティの課題解決には分野や業種を超えた連携が必要になる。

アカデミーで議論してきたまちづくりのテーマの一つが「日本の空き家の課題と政策」です。空き家を地域の「負」動産から「富」動産へ転換するには、空き家の調査から活用までを一つながりの解決方法として取り組んでいくことが必要になります。たとえば、地域における介護予防は相談役であるケアマネージャーが担っています。企業や専門家が空き家のケアマネージャー的な役割を果たすうえで、インスペクションや評価が重要なキーワードになるでしょう。宅建士や税理士、社会福祉士などの専門家の連携に加えて、地域ぐるみで見守ることが空き家の予防につながります。

もう一つは直近のテーマとして取り上げた「人とサービスの地域移動環境をどう整えるか」というモビリティの課題です。各地で盛んに実証実験が行われていますが、パブリックな道路や施設だけでなく、自宅の寝室、廊下、トイレなど室内と玄関や庭、門など住居の外側を含めてシームレスにつないでいくモビリティの在り方がアカデミーにおける議論の中心になっています。高齢者の自室から公共施設までのシームレスなモビリティを実現するには、分野や業種を超えた連携が必要であり、自治体や企業がいかに手を携えて取り組めるかが今後の課題であることがわかりました。アカデミーを通じて、その方法を模索したいと考えています。

産学連携プロジェクト

研究会

食の在り方研究会 …… 83

オーラルフレイル予防推進研究会 …… 84

生活支援システム研究会 …… 85

まちづくり標準化研究会 …… 86

高齢者就労・生涯現役研究準備会 …… 87

食の在り方研究会

文責：内山 奈美（キユーピー株式会社）／ 乾 裕之（イオン株式会社）

産官学民の連携で国民の行動変容を促し
フレイル予防産業が継続できる社会へ。

国家課題であるフレイルをより早期に予防するためには、自助・互助を基本に置いた健康長寿のまちづくりが重要であり、国民が日常生活のなかで行う消費活動がフレイル予防型に繋がる社会を目指す必要があります。当研究会は、アカデミアにおけるフレイル予防の学術研究をベースに複数企業で食の在り方を議論し、フレイルチェックを導入している市区町村や地域住民と連携しながら都道府県や省庁と共に進めています。先日、東大IOGと神奈川県でフレイル対策に関わる覚書を締結して実証実験をスタートしました。神奈川県の未病産業研究会に立ち上げたフレイル分科会についても共同で運営します。

こうした背景のもと、エビデンスと産業を繋ぎ、国民の行動変容を促してフレイル予防が産業として継続できる社会システムの構築を目指します。フレイル予防産業創生については、フレイル予防全国啓発組織の発足（官学）、フレイル予防産業協議会の設立準備、ガイドライン・認証の設計、認証される商品・サービスの条件設計、実証実験、共同研究契約などを進めています。

継続的に実現性と実効性を検証し、
実験の過程でガイドライン化を目指す。

現在、以下の4業態のガイドライン化を目指しています。

A業態　食品(レシピ)と連携したメーカー・小売業態
B業態　サービス提供業態
C業態　コンサルタント業態
D業態　情報業態

ガイドライン化の事例としてA業態では、フレイル予防の三つの柱「栄養」「運動」「社会参画」の三位一体を基本に栄養のエビデンスを整理。フレイル予防サービスの提供を考え、メニューや食べ方の提案も含めて、いかに行動変容や購買行動を喚起していくかを複数の企業が連動して検証しています。

ガイドライン作成には、実現性と実効性の検証が必要です。それには一度限りの実験でなく、実装を目指した継続的な取り組みが重要だと考えています。秦野市のイベントでは、単なる展示にとどまらず簡易フレイルチェック体験会を実施し、食品メーカーと協力してフレイル予防に役立つ食生活の提案まで行いました。アンケートによる年代ごとのフレイル認知度の把握など収穫が大きかった一方で、お客様にお伝えするメッセージが多過ぎたことが反省点になりました。来年度は「食べて元気にフレイル予防」を軸として、定期的にフレイル予防啓発イベントやフレイルチェックを行う予定です。実行体制を整備できたことから、組織的な実証実験を行う過程でガイドライン化を目指します。

オーラルフレイル予防推進研究会

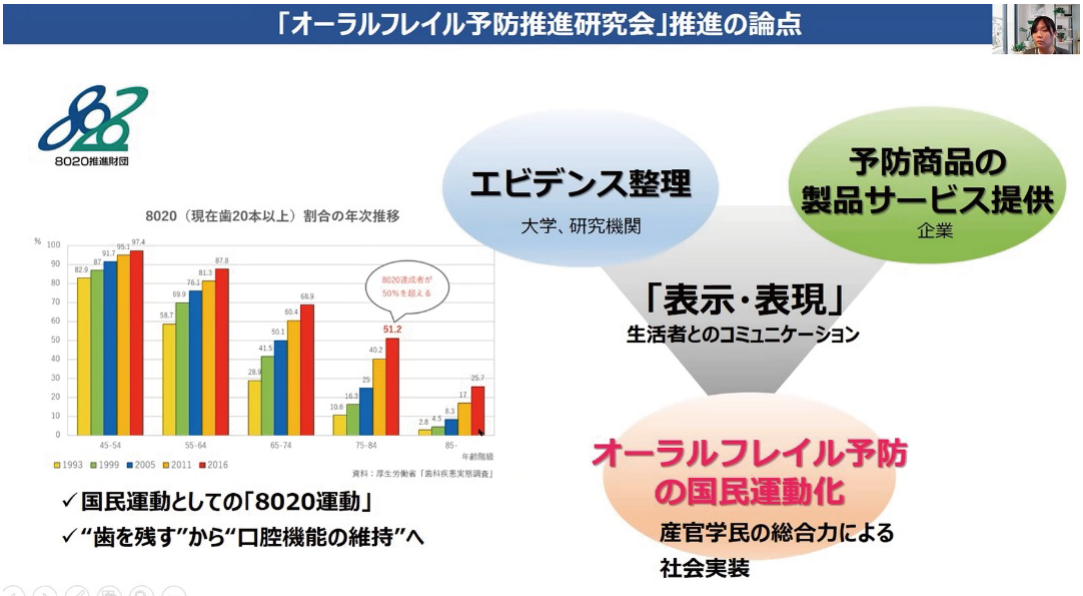
文責：永谷 美幸（サンスター株式会社）／ 川村 淳（株式会社ロッテ）

歯を残す「8020運動」から一歩進んだ
オーラルフレイルの認知浸透を目指す。

お口の健康と聞くと、歯磨きをして虫歯や歯周病を予防するというイメージを持つ人が多いと思います。80歳になっても20本の歯を残そうという「8020運動」は1989年の開始時には2割に満たなかったものの、近年の調査結果では5割に達し、一定の成果を上げてきました。しかし、歯を残すことはお口の健康に関する指標の一つです。自分の口で食べたいものを美味しく食べ続ける。滑舌よく話して周囲とコミュニケーションがとれる。そこまで達成しなければ、お口の健康が維持できているとはいえません。「歯を残す」から一歩進んだお口の健康維持について認知浸透をはかるために本研究会を発足しました。オーラルフレイルは新しい概念なので、アカデミアを中心にエビデンス整理を進めるとともに、産業界からは予防に資する商品・サービスを提供し、産官学民の取り組みにより国民運動化していきたいと考えています。
オーラルフレイルは早期に顕在化するため、その予防はさまざまなフレイルや介護の予防につながります。本研究会では、日常の生活習慣の中で自然にオーラルフレイルを予防できる環境の整備を目指しています。パーソナルケアに特化した、より早期のオーラルフレイルに取り組むことが、健康維持に貢献するからです。予防にはオーラルケアに加えて、お口を動かす筋肉の維持が重要になるため、地域と連携した啓発活動を実施するとともに、オーラルフレイル予防に資する商品を簡単に入手できるような認証制度の策定を目標としています。

商品・サービスの提供を実現すべく
ガイドライン構築と生活様式の提言へ。

本年度は主にエビデンスの整理を目的として、地域高齢者のどのような口腔機能が身体的なアウトカムに繋がっているのか調査しました。その結果、咬合力、咀嚼機能、唾液分泌力、滑舌、嚥下力などお口の健康状態が運動機能低下、フレイル、サルコペニア、要介護といったアウトカムに深く繋がっていることが明らかになってきました。今後は口腔機能改善の介入研究による実証モデルの確立に向けて、さらにエビデンスの整理を進める予定です。
オーラルフレイルはまだ認知率が低いため、改善のための行動をわかりやすく伝える標語や啓発モデルも検討する必要があります。産業界として検討すべきは、オーラルフレイルの予防に資する商品やサービスをいかに提供するのかということです。来年度末に商品・サービスを提供できるように、ガイドラインの構築とオーラルフレイル予防を実現する「健全な生活様式の提言」を行いたいと考えています。



生活支援システム研究会

文責：榊原 拓磨（株式会社NTTドコモ）

高齢者が自宅で生活支援を受けるための
ICT端末を活用した実証実験を実施。

2025年までに「高齢者が住み慣れた自宅で安心して地域の支援を受けられる仕組み」の構築を目標として、市郊外地域に展開可能なICTを活用したモデル作りに取り組みました。
具体的には、令和3年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金の活用事業の枠組みのなかでICTを活用した都市型の生活支援ネットワークに関する先行事例の調査や地域の実態調査、ICT利活用の実証実験を行いました。
2021年12月から2022年2月末の約3カ月間にわたり、ICT活用により生活支援のニーズを持つ高齢者の方々の利便性がどう変化するかについて実証実験を行いました。「オンライン相談」、「相談窓口に来所した高齢者と他の窓口との三者通話」、「情報配信」という3つの利用シーンを設定し、42人の高齢者の方々に専用のICT端末とアプリケーションを提供し、日常生活の中で使ってもらう実証実験です。アプリケーションは煩雑性や分かり難さを避けるため、あえて機能をシンプルに絞りました。端末の利用状況を解析して分かった事は、常にフレッシュな情報を受け取り、気軽に相談できる身近なツールとして活用してもらえるように、地域の支援団体や自治体等が一体的に運用できる情報配信の仕組みを考える必要があることです。

地域住民の抱えるお困り事を
地域のつながりの強化によって解決する。

今回の実証実験では、ICTの導入によって高齢者の行動変容を起こした事例がありました。掃除の依頼や緊急警報システムに関する問い合わせなど3件の相談が寄せられたほか、地域活動館のイベント予定を見て来館された方もいます。インコの飼い主を募集したところ、配信からわずか数分で申し込みがあるなど、地域住民の方々のお困り事を地域の中で解決していく素地を垣間見ることができました。
期間が短かったため相談件数は少なかったものの、模擬相談を体験された方からは、「相手の顔が見えるから安心して相談できる」という声を多数いただきました。ICTは地域のつながり意識を強化し、お困り事の発掘機能により支援機関の生産性向上に寄与する可能性があることが分かりました。また、オンライン相談時の端末画面に高齢者が暮らす自宅の環境が映ることで、ゴミ屋敷化のような発見／申告しにくい状況を早期キャッチするなど、幅広い活用用途の可能性を感じました。
次年度以降の研究会では、第二ステップとしてより地域を巻き込んだ具体的な生活支援サービスのモデル研究や、より幅広い端末に対応可能なICTサービスのモデル研究事業に取り組んで参りたいと考えています。
2025年までに、高齢者が住み慣れた自宅で最後まで暮らし続けられる仕組みの確立を目指すため、この目標を共有し、当研究会の活動や企画に賛同していただける企業様がいらっしゃいましたら、是非ご参加いただけますと幸いです。共に研究の社会実装を目指して、活動を盛り上げていきましょう。

まちづくり標準化研究会

文責：三鬼 健太（大和ハウス工業株式会社）／ 小塚 郁武（UR都市機構）

当研究会は、住宅地域(団地)の急速な高齢化による地域の衰退を防止し、持続可能な団地として再生するマネジメントモデルを認証化して全国に適用することを目的としています。現在、大和ハウスが進める神奈川県の上郷ネオポリスのまちづくりをモデルとして持続可能なまちづくりのあり方を検討しています。また、春日部市にあるUR都市機構の武里団地（S41、約5千戸、最寄：東武スカイツリー線・せんげん台駅)及び周辺の現状把握を行いました。来年度、当研究会では、認証制度の基盤づくりを行っていきたいと考えています。

街の機能強化で認証のゴールを目指す。

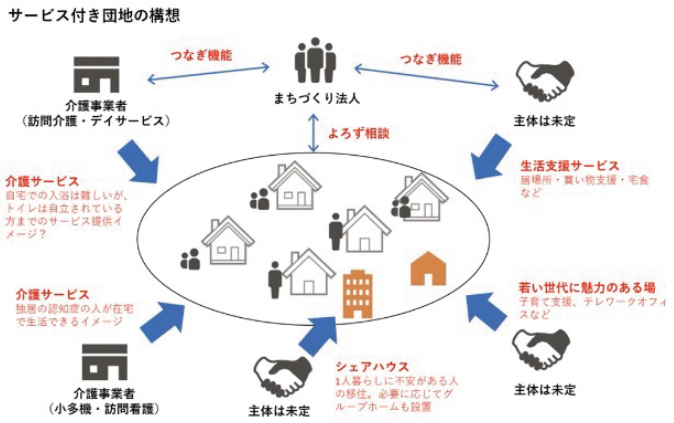
上郷ネオポリスでは、街にどのような機能が備われば認証が妥当かについて検討を進めています。たとえば、地域の住民から介護や生活支援のよろず相談を受けたまちづくり法人が、地域のさまざまな資源につなぐサービス付き団地です。もし介護状態が重くなっても自宅で暮らせるように、小規模多機能型居宅介護につなぎます。さらに、ご夫婦やお一人で暮らせるシェハウスのほか、若い世代にも魅力のある場所も必要です。高齢者就労により街のリソースを活用することも重要でしょう。これらの機能を実現すれば、認証のゴールの一つの形に成り得ると考えています。

いま上郷ネオポリスでは、コンビニエンスストア兼コミュニティ施設の「野七里テラス」を開設し、住民ボランティアが施設を運営しています。ボランティアの報酬として払う地域通貨も発行済みで、住民による宅配サービスなども展開する予定です。TV電話や一人乗り・5人乗りのモビリティも実証段階に入っていますが、生活支援サービスを提供するにはICTの力が欠かせません。今後はさまざまな企業と協力して、まちづくりを進めたいと考えています。

地域医療福祉拠点化について。

UR都市機構では、地域の関係者の方々と連携・協力しながら、豊かな屋外空間を備え、多くの方々が住まう団地を“地域の資源”として活用し、地域に必要な住宅・施設・サービスの整備を推進し、団地を含む地域一体で、“多様な世代が生き生きとくらし続けられる住まい・まち”《ミクストコミュニティ》の実現を目指しています。3つの取組みとして、①地域における医療福祉施設等の充実の推進、②高齢者等多様な世代に対応した居住環境の整備推進、③若者世代・子育て世帯等を含むコミュニティ形成の推進を進めています。

武里団地の特徴的な点として、UR都市機構が上記②の取組みで高齢者と地域の関係者の橋渡し役となる「生活支援アドバイザー」を配置しています。また、2022年1月に銀行跡地に利便性の向上や活性化を図る目的のため、UR都市機構のグループ企業である日本総合住生活(株)がコンビニエンスストアを誘致しました。今後も、UR都市機構は、地域関係者等と連携しながら武里団地の活性化に取組んでいきます。



2022 年度の活動予定は以下の通りです。

・専門分科会の開催
・認証制度の基盤づくり
・異業種の仲間を増やす

高齢者就労・生涯現役研究準備会

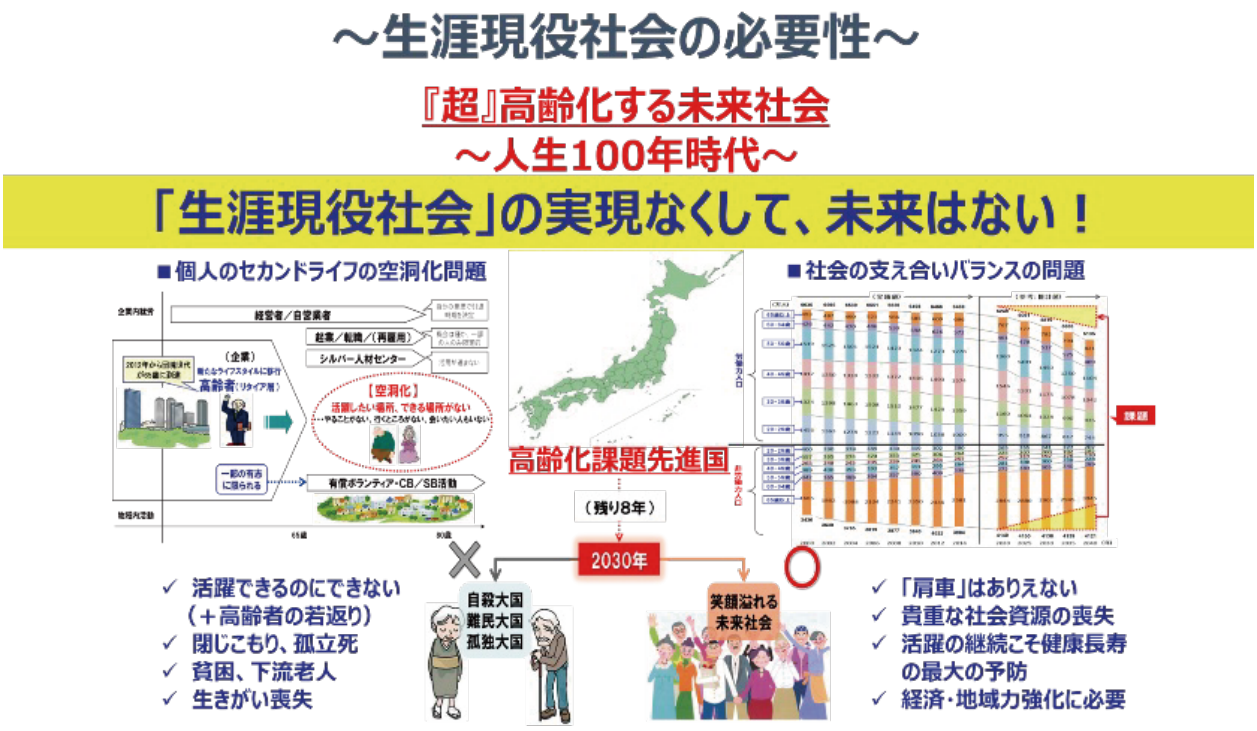
文責：前田 展弘（株式会社ニッセイ基礎研究所）

産業界とともに理想の生涯現役社会へ導く活動を推進

人生100年時代においては、“生涯現役社会の実現”なくして未来はありません。一人ひとりの人生の充実、社会の持続性確保の観点からも、「年齢に関わらずいつまでも活き活きと活躍し続けられる地域社会づくり」が強く求められます。これらのことはもはやスローガンに止めておくわけにはいきません。

このテーマの実現（課題の解決）に向けては、国の政策（雇用・年金・経済等）、企業の人事政策、自治体の地域マネジメント、個人のライフデザインの領域で様々な課題が複雑に絡み合う難解な方程式を解くようなアプローチが必要になりますが、最適解を導く出口も見えつつあります。

当研究準備会では、これまで培ってきた知見等をもとに、国の政策及び企業・自治体・国民の意識と価値観に働きかける活動とともに、これらのことを推進するプラットフォーム（ビジネスモデル）づくりを産業界とともに進めて参ります。そして、国、企業、自治体、個人がwin-winの関係になれる理想の生涯現役社会の実現を目指します。



■高齢者就労・生涯現役社会づくりに向けた課題

<課題>	<現状>	<打開に向けた取組視点＝当研究準備会のテーマ>
高齢者の仕事がない	業務の切り出し（企業に聞くだけ）	社会にとって有益でシニアにとっても魅力的な、**シニアに相応しい仕事の新たな開拓・創出**（自治体関係業務、子育て、生活支援、介護、農業、観光等）
普通の高齢者のマッチングシステムがない	シルバーは限定的生涯現役促進地域連携事業も一部地域のみ	当該マッチング機能を有した**持続可能事業モデルの創造** ※民間事業者の参画のB to Gモデル
文化・価値観の問題（政策含め）	個人・企業・社会ともに生涯現役に向けた価値観の共有不足	人生100年時代・生涯現役社会づくり、**とりわけ高齢者地域就労**に向けたさらなる**政策立案、価値観の共有**に向けた取組みの推進

産学連携プロジェクト

個別共同研究

フレイル予防を基軸に、地域のお客さまのヘルス＆ウエルネスに貢献
イオン株式会社…… 89

ICTが地域をつなぐ架け橋であるために
株式会社NTTドコモ …… 90

「サラダとタマゴ」による食と健康への貢献と、
産学官民総合知でのフレイル予防産業創生に向けた取り組み
キユーピー株式会社…… 91

オーラルフレイル予防により、食やコミュニケーションを支え、
生きる力を守りたい
サンスター株式会社…… 92

ニュータウンの“再耕”に向けて
大和ハウス工業株式会社…… 93

「カムカム健康プログラム」により豊かな食生活をお届けしたい
株式会社フードケア …… 94

「噛むこと」研究やお菓子を通じた高齢者の
オーラルフレイル予防・フレイル予防の仕組みづくり
株式会社ロッテ…… 95

フレイル予防を基軸に、地域のお客さまのヘルス&ウエルネスに貢献

イオン株式会社　共同研究

担当：村瀬義典、乾裕之、堀江直裕

心身ともに健康的なライフスタイルを創造し続ける

イオンは創業以来、「お客さま第一」を実践し、お客さまや地域社会への限りない貢献こそが小売業の使命であるとの信念を貫いてきました。このような価値観のもと、地域になくてはならない存在であり続けるために、必要なサービスや社会資本を充実させて、あらゆる生活シーンで便利さや豊かさを提供していきます。超高齢化の進展やコロナによる健康意識の高まりなど、従来の治療ニーズだけでなく心身ともに健康で自立した生活（ヘルス&ウエルネス）が、豊かなライフスタイルを送るために欠かせない要素となっています。この課題の解決に向け、中期経営計画の柱の一つである「ヘルス&ウエルネスの進化」を掲げ、大学や行政等の地域のパートナーと連携して、これらの早期実現を目指しています。

イオンが有する2万拠点をタッチポイントとして活用

イオンは、フレイル予防の3つの柱「栄養（食・口腔）、身体活動、社会参加」の考え方をヘルス&ウエルネスの活動方針に取り入れるため、2018年度から東大IOGと共同研究を行っています。
フレイル予防への行動変容を引き起こすための重要なポイントは、対策を行えば健常な状態に戻る可能性がある早期の段階の人に、日常生活の動線上で気づきの機会を提供することです。
地域で催される介護予防の教室や運動教室は、そもそも健康志向の高い住民が集まる傾向がありますが、イオンが有する店舗内でのイベントスペースや売り場などの生活者との多くのタッチポイントを活用すれば、無関心層も含めたより広い層へのアプローチが可能となります。
2020年、東大IOGの開発したフレイルチェックについて官民協働実施のガイドラインを整備し、イオンの店舗においても行政と同等の品質を担保してフレイルチェックを実施できるようにしました。
2021年には神奈川県のイオンの店舗従業員への教育を行い、フレイル予防普及啓発活動と商品・サービス提供を継続展開できる体制を構築。同年10月にはイオン秦野店、秦野市、市民サポーターによる簡易フレイルチェック体験会や食の在り方研究会参画企業によるフレイル予防に資する食生活提案を開始しました。
今後も店舗でのフレイル予防を通じて、お客さまのヘルス&ウエルネスに貢献してまいります。

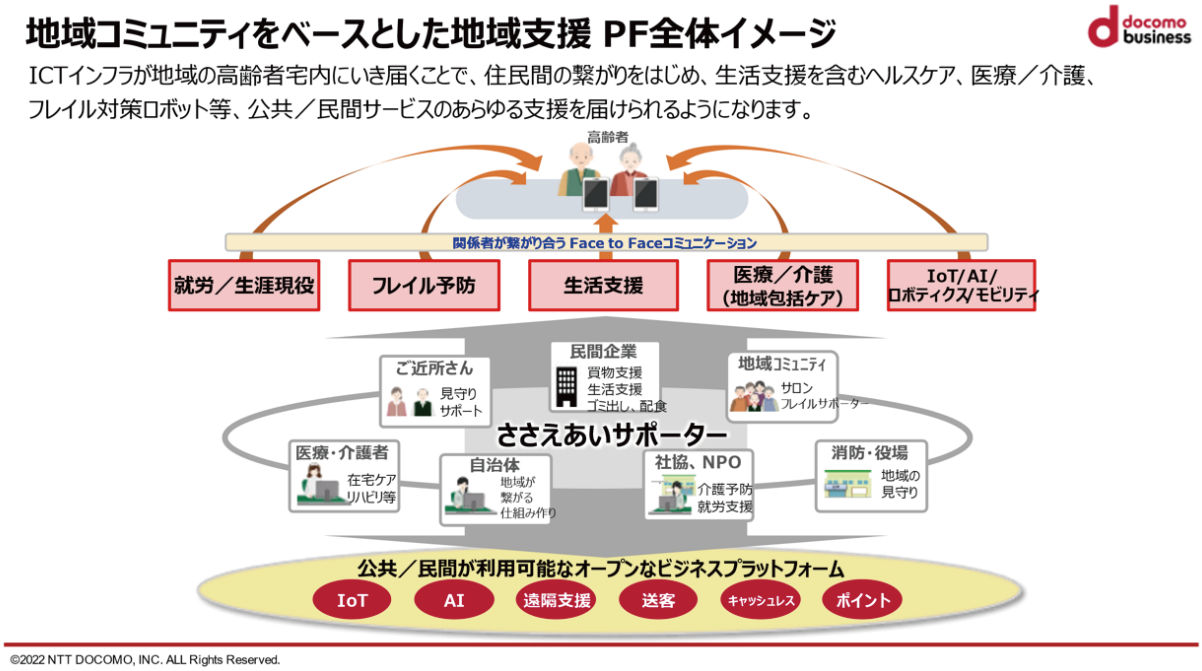
ICTが
地域をつなぐ架け橋であるために

株式会社NTTドコモ　共同研究

担当：榊原拓磨、福留祐太

ICTがもたらすつながり意識の強化と支援機関の効率性向上

当社ではコーポレートスローガン「あなたと世界を変えていく。」を掲げ、これまで作りあげた通信インフラの土台の上に、より新しい生活価値やライフスタイルを生み出し、社会を大きく変えていきたいと考えています。超高齢社会の領域においては、地域の多様な活動主体（行政・市民・団体・企業等）が協働する地域ネットワークの展開／浸透を目指し、あらゆる困りごとやニーズをワンストップかつシームレスに解決する仕組みづくりに取り組んでいます。



IOGとの共同研究は2020年7月からスタートし、主に柏市豊四季台地域での研究事業に参画しています。2021年度は市郊外地域に展開可能なICTを活用したモデル作りを目的とした柏市豊四季台地域での実証事業を実施しました。具体的には、ICT活用により生活支援のニーズを持つ高齢者の方々の利便性がどう変化するか、専用端末を配布しオンライン相談や地域情報配信の仕組みを活用いただくことでの行動変容を調査しました。

オンライン相談を体験された方からは、「相手の顔が見えるから安心して相談できる」という声を多数いただいたほか、端末画面に高齢者が暮らす自宅の環境が映ることで、ゴミ屋敷化のような発見／申告しにくい状況を早期キャッチするなど、幅広い活用用途の可能性を感じました。地域情報配信においては地域活動館のイベント予定を見て来館された方もおり、ICTは地域のつながり意識を強化し、支援機関の生産性向上に寄与する可能性があることが分かりました。

2022年度は、第二ステップとしてより地域を巻き込んだ地域のお困りごと解決のモデル研究や、より幅広い端末に対応可能なICTサービスのモデル研究事業に取り組んで参りたいと考えています。

「サラダとタマゴ」による食と健康への貢献と、産学官民総合知でのフレイル予防産業創生に向けた取り組み

キユーピー株式会社　共同研究

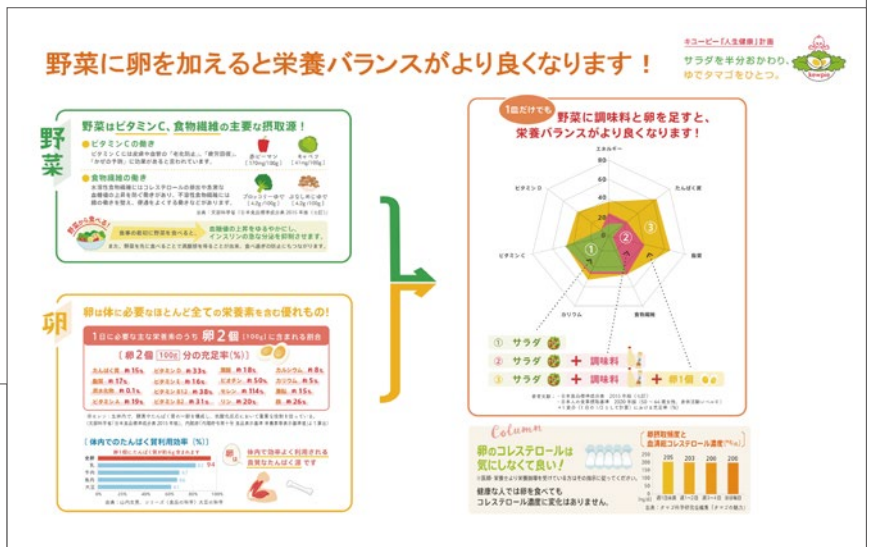
担当：倉田幸治、内山奈美

キユーピーの食と健康への貢献と3つの柱「栄養・運動・社会参加」

キユーピーは、2019年に創業100年を迎えた食品メーカーです。創業当時の日本人は、現在と比べると栄養状態も悪く、体も小さかったため「おいしく、栄養のあるマヨネーズを、生活必需品となるまで広く普及させて、日本人の体格と健康の向上に貢献したい」という想いで、1925年「キユーピー マヨネーズ」を発売するに至りました。
そして、ライフスタイルや食に対する課題が多様化するこれからの時代、国民一人ひとりのくらしに寄り添い、新しい食習慣の形成をめざすには、高い視座が必要になると考えました。そこで、できるだけ早期にフレイル予防の3つの柱「栄養・運動・社会参加」に取り組むことが重要である、という考え方に共感し、サステナビリティ目標の「食と健康への貢献」で健康寿命延伸への取り組みとして掲げています。キユーピーは食品メーカーであるため、特に「栄養」での貢献が軸になりますが、生涯健康でいるためには栄養だけでなく、口腔機能、運動、社会参加も重要となるメッセージも啓発しております。3つの柱の考え方は、企業の枠を超えて様々な地域資源をつなぐ、大きな志と成り得ると考えております。

キユーピーの強み「サラダとタマゴ」と食産業界コンソーシアム「食の在り方研究会」

具体的には、キユーピーが得意とするサラダとタマゴの提案は、日常の食生活の中で自然と摂りやすく、継続しやすい食材・メニューであると考えています。キユーピーグループの長期ビジョン「2030ビジョン」では、サラダとタマゴのリーディングカンパニーをめざしています。キユーピーは長年、野菜を美味しく摂れるサラダメニューを提案してきました。そして卵は、コレステロールの先入観により一時は敬遠されておりましたが、健康な人にとっては、手軽で美味しく、高齢期に特に必要となるたんぱく質を摂取できる優れた食材です。さらに卵はビタミンCと食物繊維以外の体に必要な栄養素がほとんど含まれており、野菜と一緒に摂取することで、より栄養バランスが良くなるという、この栄養価値の啓発を進めております。
以上はキユーピーの一例ですが、フレイル予防においては、民間企業のくらしに溶け込む商品やサービスが果たす役割は大きく、参画している産学連携研究「食の在り方研究会」では、フレイル予防に資する複数の食習慣の提案が、正しい形でフレイル予防の啓発とセットで提供され、日々の暮らしの中で繰り返される産業創生をめざしております。産学官民一体となった総合力・総合知をもって取り組んでまいります。



オーラルフレイル予防により、食やコミュニケーションを支え、生きる力を守りたい

サンスター株式会社　共同研究

担当：永谷美幸、田子森順子

高齢社会の課題解決に企業ならではの役割を果たしたい

当社はオーラルケアを核に事業を展開しており、お口の健康が全身の健康につながっている、という考え方のもと、お口から全身、そして生活空間までといった健康的な生活習慣作りに貢献したいと考えて事業に取り組んでいます。東大IOGと取り組んでいる、オーラルフレイルの予防は、まさに健康寿命を延ばすことを目的としています。2010年に東京大学が高齢社会の課題解決のための産学連携の取り組みを行っているとお伺いし、年齢を重ねても自分らしく、高齢者も若い世代も生き生きと暮らせる社会の実現のために、学の力、自治体や地域住民の皆さまの力、そして企業だからこそ果たせる役割があるとの思いで参画しています。さらに2017年からは、地域住民の皆さまや歯科界への普及啓発に有効なエビデンスを取得し、高齢者のニーズに即したオーラルフレイル予防の提案をめざして、東京大学との共同研究を行っています。

研究成果を社会に還元し、オーラルフレイル予防産業の土台を作る

2020年には、産官学民の連携を強化する事で、オーラルフレイル予防を社会実装するため、「オーラルフレイル予防推進研究会」を設立し、オーラルフレイルの定義や予防の重要性に関するエビデンス整理を実施し、オーラルフレイル予防産業の土台作りに取り組みました。また、2021年の柏スタディでは、オーラルフレイルの研究に参画するとともに、サンスターとしても独自のデータ取得を実施し、解析を進めています。また、その成果は学会発表や論文投稿という形で発信することで、社会に還元させていただいています。引き続き、地域住民の皆さまがオーラルフレイルに早期に気づき、自分事化し、行動変容につながるような効果的な介入手段を見い出し、地域拡大につなげるための啓発方法の確立に向けて、取り組んでいきます。

ニュータウンの“再耕”に向けて

大和ハウス工業株式会社　共同研究

担当：田中紀之、三鬼健太

当社では過去に開発した郊外型住宅団地（ネオポリス）等を再耕する「リブネスタウンプロジェクト」を始めています。これは、住む人とともに、まちの個性を耕し、育て、まちに再び賑わいを取り戻そうとするプロジェクトです。

IOGの先生方とは、前身のジェロントロジー寄付研究部門の頃からお世話になっていますので、すでに15年を超えてお付き合いさせていただいています。出向させていただいたメンバーは、柏や東日本大震災の被災地などといったIOGのフィールドで、先生方と一緒に高齢社会の課題解決に取組むことで、アカデミックなノウハウから現場での行政・住民・事業者等との関わり方のノウハウに至るまで、様々なことを習得させていただいてきました。それらを当社の取組みに活かし、またその活動の状況や成果を先生方と一緒に振り返ることにより、ノウハウがブラッシュアップされていくものと考えています。

現在は、当社の上郷ネオポリス（横浜市）をモデルフィールドとした既存住宅団地における少子高齢化対応手法やまちづくり認証制度に向けたまちづくり評価手法について、先生方とともに検討し、取り組んでいます。具体的には、団地に関するオープンデータを活用したアセスメント手法とその課題について、団地もしくは団地を含む日常生活圏域としての医療介護体制のあり方と既存制度の課題、認証制度の全体イメージの具体化と実現に向けた課題整理、等について進めてきました。認証制度については、地域団体やそれらをサポートする事業者等にとっては、手間もかかるものですが、それに見合うだけのメリットも必要となると考えており、行政の制度や施策等と結びついた仕組みとできるかどうかは、今後の課題の1つと考えています。

写真：上郷ネオポリス

「カムカム健康プログラム」により豊かな食生活をお届けしたい

株式会社フードケア　共同研究

担当：泉綾子、小川康一、高木麻祐子

噛む力を維持することが、料理の美味しさや食事の楽しさに繋がる

当社は、病院・介護施設向けの介護医療食品を開発・販売している従業員数60名(2022年6月現在)の企業です。経営理念に「おいしい、もぐもぐ、ごっくん。私たちは食べる喜びを支え笑顔を創り続けます。」を掲げており、食べる意欲、食べる喜びをいつまでも持ち続けたいと願う全ての方へ、その想いを食品、機器、情報、サービスを通じてサポートし続けることを目指しています。
近年、フレイルやオーラルフレイルに対する関心が高まる中、当社が専門とする領域(要介護状態のご高齢者の栄養・食事)で得た知見が、これらの予防において貢献できる可能性を鑑み、2017年より戦略的国際共同研究プログラム(SICORP,JPMJSC1813)の共同研究チームに参画し、研究・活動を進めてまいりました。現在は、栄養・噛み応えのある食事をしっかり「噛んで」食べ、口の健康を保ち、運動や社会参加を組み合わせることをコンセプトとした「カムカム健康プログラム」の開発を経て、社会実装を行うべく、普及・啓発活動を行っています。この健康プログラムは、口腔機能や身体機能の改善効果があることがわかってきております。
IOGとの共同研究では、住民主体のカムカム健康プログラムの実装を視野に入れた介入試験を開始しております。これは、フレイルチェック後に「カムカム教室(フレイルサポーターによる食と口腔に重きを置いた教室)」に参加いただき、口腔リテラシーや行動などへの変化について調査です。試験は現在も継続中であり、終了次第、結果解析予定です。
噛むことを意識することは、噛む力を鍛えるだけでなく、食材自体の味もしっかり感じられ、また食感を加えることでより料理の美味しさが引き立ち、食の楽しさにもつながるのではと感じております。「カムカム健康プログラム」を通して、より豊かな食生活に貢献していきたいと考えております。

1. Kito N, et al.: Positive effects of physical and oral exercises combined with “textured lunch” gatherings on physical and oral function in older individuals: a cluster randomized controlled trial. J Nutr Health Aging. 23(7):669-676. 2019.
2. Matsuo K, et al.: Effects of textured foods on masticatory muscle activity in older adults with oral hypofunction. 47:180–186. 2020.
3. Matsuo K, et al.: Improvement of oral hypofunction by a comprehensive oral and physical exercise program hincluding textured lunch gatherings. J Oral Rehabil. 2020.

「噛むこと」研究やお菓子を通じた高齢者のオーラルフレイル予防・フレイル予防の仕組みづくり

株式会社ロッテ　共同研究

担当：川村 淳

「噛むこと」と高齢者の健康のエビデンス構築を目指して

「よく噛んで食べなさい」。昔から言われてきたこの言葉ですが、現在、医学や科学の進歩によって、「噛むこと」の必要性や、様々な効果が明らかになってきています。その中には、口腔に対する影響だけではなく、脳や心、体にまで多大な影響を及ぼす効果も期待されています。そこで弊社は「噛むこと」の研究に取り組んでまいりました。
近年、加齢によるお口の些細な衰えであるオーラルフレイルが、フレイルの中でも早期に顕在化して、要介護や死亡のリスク因子となることが明らかになっています。一方で、現在のオーラルフレイルの対策としては失った歯の補綴など、重度な状況での治療的な行為が大半となっています。
そのため、産官学が共同して研究を行うIOGの取り組みを通して、初期のオーラルフレイルの対策として、「噛むこと」の意識や行動がどのような影響を与えるかについて、共同研究を行っております。この研究を通して、エビデンスに基づいた初期のオーラルフレイル予防法を模索し、高齢社会の課題解決を行うことを目指しています。

産官学での口腔の健康チェックイベントと通じて

加齢によるお口の衰えの最も怖いところとしては、「少し硬い物が噛めなくなった」という些細な衰えが、あまり意識に上がらないことや、仕方がないこととしてとらえられているところだと考えています。
そこで、秦野市の行政の方と、イオン株式会社の方とともに、オーラルフレイルについてのイベントを行いました。イベント当日は実際に咀嚼能力を客観的に判断できるアイテムを使って測定し、オーラルフレイルについての情報を紹介させていただきました。参加者の95%の人が咀嚼能力の測定は初めてで、お口の健康の重要性について感じていただけました。
このような取り組みなどを通じて、お口の機能を意識していただくことで、健康寿命の延伸やQOLの向上に貢献できればと考えています。

IOGの業績

教員・研究員の業績

2020−2021年度におけるIOGメンバーの研究論文や学会発表など、研究活動の業績を紹介します。

飯島 勝矢

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】
【2020年】

1. Tanaka T, Kawahara T, Aono, H, Yamada, S, Ishizuka S, Takahashi K, Iijima K. A comparison of sarcopenia prevalence between former Tokyo 1964 Olympic athletes and general community-dwelling older adults. The Journal of Cachexia, Sarcopenia and Muscle. 2021 doi: 10.1002/jcsm.12663. 査読有
2. Cherbuin N, Iijima K, Kalula S, Malothra R, Rasmussen LJ, Chan A, Lafortune L, Harper S, Zheng X, Lindeman D. Societal need for interdisciplinary ageing research. An International Association of Research Universities “Ageing, Longevity, and Health” Stream (IARU-ALH) position statement. Biomed Hub. 2021 Jan-Apr; 6(1): 42–47. Published online 2021 Feb 25. doi: 10.1159/000513513. 査読有
3. Umeda-Kameyama U, Kameyama M, Tanaka T, Son BK, Kojima T, Fukasawa M, Iizuka T, Ogawa S, Iijima K, Akishita M. Screening of Alzheimer's Disease by Facial Complexion Using Artificial Intelligence. Aging (Albany, NY). 2021 Jan 25; 13(2): 1765-1772. doi: 10.18632/aging.202545. Epub 2021 Jan 25. 査読有
4. Kuzuya M, Aita K, Katayama Y, Katsuya T, Nishikawa M, Hirahara S, Miura H, Yanagawa M, Arai H, Iijima K, Okochi J, Kozaki K, Yamaguchi Y, Rakugi H, Akishita M. The Japan Geriatrics Society Consensus Statement “Recommendations for older persons to receive the best medical and long-term care during the COVID-19 outbreak—considering the timing of Advance Care Planning implementation. Geriatr Gerontol Int. 2020 Dec; 20(12): 1112-1119. doi:10.1111/ggi.14075. 査読有
5. Makizako H, Nishita Y, Jeong S, Otsuka R, Shimada H, Iijima K, Obuchi S, Kim H, Kitamura A, Ohara Y, Awata S, Yoshimura N, Yamada M, Toba K, Suzuki T. Trends in prevalence of frailty in Japan: A meta-analysis from the ILSA-J. The Journal of Frailty & Aging. Published online December 22, 2020, http://dx.doi.org/10.14283/jfa.2020.68. 査読有
6. Lim WS, Liang CK, Assantachai P, Auyeung TW, Kang L, Lee WJ, Lim JY, Sugimoto K, Akishita M, Chia SL, Chou MY, Ding YY, Iijima K, Jang HC, Kawashima S, Kim M, Kojima T, Kuzuya M, Lee J, Lee SY, Lee Y, Peng LN, Wang NY, Wang YW, Won CW, Woo J, Chen LK, Arai H. COVID-19 and Older People in Asia: AWGS Calls to Actions. Geriatr Gerontol Int. 2020 May 4; 547-558. doi: 10.1111/ggi.13939. 査読有
7. Nomura K, Eto M, Ogawa S, Kojima T, Iijima K, Nakamura T, Araki A, Ouchi Y, Akishita M. Association between low muscle mass and metabolic syndrome in elderly Japanese women. PLoS One. 2020; 15(12): e0243242. Published online 2020 Dec 3; doi: 10.1371/journal.pone.0243242. 査読有
8. Suzuki M, Okochi J, Iijima K, Murata T, Kume H. Nationwide survey of continence status among elderly residents living in long-term care facilities in Japan: the prevalence and associated risk factors of incontinence and effect of comprehensive care on continence status. Geriatr Gerontol Int. 2020 Apr; 20(4): 285-290. doi: 10.1111/ggi.13872. Epub 2020 Jan 28. 査読有
9. Takahashi K, Murayama H, Tanaka T, Takase M, Suthutvoravut U, Iijima K. A qualitative study on the reasons for solitary eating habits of older adults living with family. PLoS One. 2020; 15(6): e0234379. Published online 2020 Jun 8; doi: 10.1371/journal.pone.0234379. 査読有
10. Murakami M, Iijima K, Watanabe Y, Tanaka T, Iwasa Y, Edahiro A, Ohara Y, Motokawa K, Shirobe M, Hirano H. Development of a simple method to measure masseter muscle mass. Gerodontology. 2020; 37(4): 383-388. doi:10.1111/ger.12487. 査読有
11. Suzuki T, Nishita Y, Jeong S, Shimada H, Otsuka R, Kondo K, Kim H, Fujiwara Y, Awata S, Kitamura A, Obuchi S, Iijima K, Yoshimura N, Watanabe S, Yamada M, Toba K, and Makizako H. Are Japanese Older Adults Rejuvenating? Changes in Health-Related Measures Among Older Community Dwellers in the Last Decade. Rejuvenation Research. 2021 Feb;24(1):37-48. doi: 10.1089/rej.2019.2291. Epub 2020 Jul 8. 査読有
12. Shimada K, Iijima K. Implementation of guidelines-based medications after the discharge of older adults undergoing percutaneous coronary intervention in a city of Japan: A cohort study using claims data. Tohoku J.Exp.Med. 2020 Oct;252(2):143-152. doi: 10.1620/tjem.252.143. 査読有
13. Tsuchiya-Ito R, Ishizaki T, Mitsutake S, Hamada S, Yoshie S, Iijima K, Tamiya N. Association of household income with home-based rehabilitation and home help service utilization among long-term home care service users. BMC Geriatrics. 2020; 20:314. 査読有
14. Fujisaki-Sueda-Sakai M, Takahashi K, Yoshizawa Y, Iijima K. Frailty checkup Supporters' intentions to participate in human-resource development and training activities. The Journal of Frailty & Aging. 2020; 9(4): 238-243. http://dx.doi.org/10.14283/jfa.2020.6. 査読有
15. 西本美紗、田中友規、高橋競、Suthutvoravut U、藤崎万裕、吉澤裕世、飯島勝矢　オーラルフレイルと食事の満足度の関連:　地域在住高齢者による横断検討（柏スタディ）、日本老年医学会雑誌、2020; 57

(3): 273-281. 査読有
16. 北村智美、飯島勝矢　高齢慢性閉塞性肺疾患患者の呼吸リハビリテーションの利用実態：医療介護レセプトデータ分析、日本老年医学会雑誌、2020; 58(1): 111-118. 査読有
17. 片江田由佳、櫛間大二郎、井本俊之、高倉孝、飯島勝矢、辻哲夫、藤﨑万裕　ソーシャル・インパクト・ボンドを活用した飯塚市フレイル予防実証事業、保健師ジャーナル、2020.9.10; 76(9): 713-763. 査読無
18. 永谷美幸、飯島勝矢　歯周病・口腔機能と認知機能低下との関係（特集 認知予備力と認知症予防）、2020.5; 49(5): 665-671. 査読無
19. 内山瑛美子、高野渉、中村仁彦、今枝秀二郎、孫輔卿、松原全宏、飯島勝矢　転倒・骨折者へのインタビューデータを用いた転倒実態調査手法の検討、日本ロボット学会誌,　2021.3.24;　39(2):　189-192. https://doi.org/10.7210/jrsj.39.189. 査読有

【2021年】

1. Tanaka T, Hirano H, Ohara Y, Nishimoto M, Iijima K. Oral Frailty Index-8 in the risk assessment of new-onset oral frailty and functional disability among community-dwelling older adults. Arch Geront Geriatr.　May-Jun 2021; 94: 104340. doi: 10.1016/j.archger.2021.104340. Epub 2021 Jan 19. 査読有
2. Son BK, Akishita M, Yamanaka T, Toyoshima K, Tanaka T, Suthutvoravut U, Iijima K. Association between inflammatory potential of the diet and sarcopenia/its components in community- dwelling older Japanese men. Arch Gerontol Geriatr Nov-Dec;97:104481. doi: 10.1016, 2021. 査読有
3. Ito T, Mori T, Takahashi H, Shimafuji N, Iijima K, Yoshie S, Tamiya N. Prevention services via public long-term care insurance can be effective among a specific group of older adults in Japan. BMC Health Services Research. 2021. 査読有
4. Handa N, Mitsutake S, Ishizaki T, Nakabayashi T, Akishita M, Tamiya N, Yoshie S, Iijima K. The associations of co-prescribed medications for chronic co-morbid conditions in very older adults with clinical dementia: A retrospective cohort study using insurance claims data. BMJ Open. 2021; 11(7): e043768. Published online 2021 Jul 15. doi: 10.1136/bmjopen-2020-043768. 査読有
5. Nakamura M, Okajima K, Matsumoto Y, Tanaka T, Iijima K, Nihei M. Effectiveness of Continuous Grip Strength Measurement using Social Assistive Robots on Older adults at Home. Journal of Robotics and Mechatronics. Vol.33 No.4　pp. 719-729 doi: 10.20965/jrm.2021.p0719. 査読有
6. Iijima K, Arai H, Akishita M, Endo T, Ogasawara K, Kashihara N, Hayashi K. Y, Yumura W, Yokode M, Ouchi Y, Toward the development of a vibrant, super-aged society: The future of medicine and society in Japan, Geriatr Gerontol Int. 2021.5 DOI: 10.1111/ggi.14201. 査読有
7. Shirobe M, Watanabe Y, Tanaka T, Hirano H, Kikutani T,　Nakajo K, Sato T, Furuya J, Minakuchi S, Iijima K,　Effect of an Oral Frailty Measures Program on Community-Dwelling Elderly People: A Cluster-Randomized Controlled Trial, Gerontology, DOI: 10.1159/000516968, 2021.7.9. 査読有
8. Tanaka T, Son BK, Iijima K Poor health behaviors among housebound Japanese community-dwelling older adults due to prolonged self-restraint during the first COVID-19 pandemic: A cross-sectional survey. J Frailty Aging 2022 Mar 17: 1–5. doi: 10.14283/ jfa.2022.20. 査読有
9. Son BK, Imoto T, Inoue T, Nishimura T, Tanaka T, Iijima K. Social detachment influenced muscle mass and strength during the COVID-19 pandemic in Japanese community-dwelling older women J Frailty Aging　2022 Jan 25:1-5doi:10.14283/jfa.2022.4. 査読有
10. Yoshizawa Y, Tanaka T, Takahashi K, Fujisaki M, Son BK, Iijima K. Impact of health literacy on the progression of frailty after 4 years among community-dwelling older adults. Int J Env Res Pub Health 2022 Jan;19(1): 394.doi: 10.3390/ijerph19010394. 査読有
11. Nishimoto M, Tanaka T, Iijima K. Is oral frailty related to meal satisfaction? J Aging Science. 2021. 査読有
12. Iwasaki M, Ohara Y, Motokawa K, Hayakawa M, Shirobe M, Edahiro A, Watanabe Y, Awata S, Okamura T, Inagaki H, Sakuma N, Obuchi S, Kawai H, Ejiri M, Ito K, Fujiwara Y, Kitamura A, Nofuji Y, Abe T, Iijima K, Tanaka T, Son BK, Shinkai S, Hirano H. Population-based reference values for tongue pressure in Japanese older adults: a pooled analysis with over 5,000 participants J Prosthodont Res. 査読有
13. 光武 誠吾, 石崎 達郎, 土屋瑠見子, 吉江 悟, 飯島 勝矢, 田宮菜奈子, 介護保険サービス限度額内で通所リハビリテーションの利用が難しい外来維持期リハビリテーション患者の実態と特性、（ 1 ）医療と社会 J Health Care Soc 31: 573-582, doi：10.4091iken. 2021. 004. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

【2020年】

1. 飯島勝矢　季刊誌「消防防災の科学」新型コロナウイルス感染症による高齢者の生活不活発を基盤とするフレイル化・健康二次被害、142: 32-36、2020.10.
2. 飯島勝矢　広報誌「埼玉の国保」論説：高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施「重症化予防の強化」及び「社会的処方」の重要性、307、2020.8.
3. 飯島勝矢　機関紙「国保ひょうご」　人生100年時代を生き抜くために−フレイル予防を通した健康長寿まちづくり、646: 4-7、2020.
4. 飯島勝矢　機関紙「国保ひょうご」　新型コロナウイルス感染症による高齢者の生活不活発を基盤とするフレイル化・健康二次被害、645: 16-20、2020.
5. 飯島勝矢　機関紙「国保ひょうご」　一体的実施の考え方、国の動き等について、644: 14-18、2020.
6. 飯島勝矢　月刊ガバナンス　11月号　特集/「誰一人取り残さない」地域共生社会へ　コロナ禍で進む高齢者の生活不活発を基盤とするフレイル化・健康二次被害、235: 20-25、2020.11.
7. 飯島勝矢　「日立評論」10月号特集　人生100年時代の中でおハイブリッド型コミュニティ想像、102(5): 18-19、2020.10.
8. 飯島勝矢　「Gノート増刊」　後期高齢者の質問票（フレイル健診）、7(6): 140-151、2020.9.
9. 飯島勝矢　臨床栄養　臨時増刊号　オーラルフレイル総論、137(4): 524-528、2020.9.
10. 飯島勝矢　老年内科　フレイル健診、2(1): 62-68、2020.7.
11. 飯島勝矢　BIO Clinica　6月臨時増刊号　超高齢社会の地域・医師会の取り組み、35(10): 22-27、2020.
12. 飯島勝矢　老年内科　はじめに：with/afterコロナ社会を見据えての3つの「守る」、3(1): 1-3, 2021.
13. 飯島勝矢　老年内科　連載　老年病専門医講座　老年病専門医のための模擬テスト13、3(1): 100、2021.
14. 飯島勝矢　老年内科　連載　老年病専門医講座　老年病専門医のための模擬テスト13−解答と解説−、3(2): 242-243、2021.

15. 飯島勝矢　月刊シニアビジネスマーケット　特集　有識者・オピニオンリーダーに聞く　テーマ13フレイル予防　フレイル予防は「総合知」によるコミュニティのリ・デザイン　産学官民連携のまちづくりで臨む、199: 28、2021.2.
16. 孫輔卿、飯島勝矢　月刊BIO　INDUSTRY　フレイル対策の実践、38(1): 4-8、2021.1.
17. 田中友規、飯島勝矢　月刊BIO INDUSTRY　社会的フレイル、38(1): 78-86、2021.2.
18. 飯島勝矢　長寿科学振興財団　令和2年度の研究業績集「フレイル予防・対策：基礎研究から臨床、そして地域へ」　序論「さらなる健康長寿社会への挑戦」、9-15、2021.3.
19. 飯島勝矢　長寿科学振興財団　令和2年度の研究業績集「フレイル予防・対策：基礎研究から臨床、そして地域へ」　各論4「1.高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施：フレイル健診への期待」、253-261、2021.3.
20. 飯島勝矢　長寿科学振興財団　令和2年度の研究業績集「フレイル予防・対策：基礎研究から臨床、そして地域へ」　各論4「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とフレイル対策　③新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による高齢者の生活不活発を基盤とするフレイル化・健康二次被害」、303-310、2021.3.
21. Nishimoto M, Tanaka T, Iijima K. Is oral frailty related to meal satisfaction? J Aging Science. 2021; Vol.9 Iss.1 No:245.

【2021年】

1. 飯島勝矢　月刊「社労士」　高齢者の健康の現状と課題－フレイルの視点から－、57(6): 24-27、2021.6
2. 飯島勝矢　日本老年医学会雑誌　フレイル健診　COVID-19流行の影響と対策：「コロナフレイル」への警鐘、58(2): 228-234、2021.4
3. 飯島勝矢　Geriatric　Medicine（老年医学）　特集　COVID-19と老年医学　COVID-19による高齢者の生活不活発を基盤とするフレイル化・健康二次被害－ポストコロナ社会を見据えた新たな地域像とは－、59(5): 431-436、2021.5
4. 飯島勝矢　日本サルコペニア・フレイル学会誌　Covid-19による高齢者の健康二次被害：「コロナフレイル」への警鐘、5(1): 34-40、2021
5. 飯島勝矢　臨床雑誌　整形外科　I章-5.地域包括ケア、72(6): 524-530、2021.5増刊
6. 飯島勝矢　国際歯科学士会（ICD）日本部会雑誌　超高齢社会での歯科医師の重要性－”オーラルフレイル”対策から－、52(1):　42-48、2021.7
7. 飯島勝矢　医学のあゆみ　COVID-19禍におけるフレイル・認知症予防、279(5):　525-530、2021.10.30
8. 飯島勝矢　日本栄養士会雑誌　フレイル予防を通した健康長寿まちづくり～管理栄養士に求められること～、64(8): 20-23、2021.8
9. 吉澤裕世、飯島勝矢　WOC　Nursing　サルコペニアを見つける、9(7): 13-18、2021.7
10. 飯島勝矢　老年内科　特集　日本における高齢者コホート研究の成果と現状　「柏スタディ」、4(4): 338-344、2021.10.28
11. 飯島勝矢　日本抗加齢医学会雑誌「アンチ・エイジング医学」　健康長寿・アンチエイジングの鍵は”食力”－人生100年時代におけるオーラルフレイル予防－、18(1): 6-10、2022.2
12. 飯島勝矢　WOC　Nursing　コロナ禍でのフレイルの特徴　医学出版　9(11): 6-13

【著書、編著】

【2020年】

1. 飯島勝矢. シンポジウム　高齢者の自立と日本経済　21世紀政策研究所新書 86　発行　編集：21世紀政策研究所、2020.10.12
2. 飯島勝矢. 地域包括ケアのまちづくり:　老いても安心して住み続けられる地域を目指す総合　監修：辻哲夫、発行：東京大学出版会　2020.9.30
3. 飯島勝矢. 日本サルコペニア・フレイル学会認定　サルコペニア・フレイル指導士テキスト　オーラルフレイル、日本サルコペニア・フレイル学会編、（株）新興医学出版社、2020.4.10

【2021年】

1. 飯島勝矢. ポストコロナ時代の高齢者ケア　第2章-2フレイル予防の包括的アプローチ、発行：第一法規（株）　2021.5.10
2. 飯島勝矢. 地域で取り組む高齢者のフレイル予防　第1章第1節フレイルとは何か、第2章第2節介護予防の制度②：保険事業と介護予防の一体的な実施、第2章第3節地域づくりの視点、発行：中央法規出版　2021.4.25
3. 飯島勝矢. 別冊「きょうの健康」

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

【2020年】

1. Iijima K. Symposium 1: Definition and implication of oral frailty, The 6th Asian Conference for Frailty & Sarcopenia 2020, 2020.10.30, Web開催. 査読無
2. Fujisaki M, Takahashi K, Yoshizawa Y, Tanaka T, Suthuvoravut U, Nishimoto M, Iijima K. Investigation of frail prevention strategy by community assessment using data of frailty checkup. 6thInternational Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science . Osaka, Japan, ,2020. 2. 28-29. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

【2020年】

1. 小宮山潤、岩上将夫、吉江悟、飯島勝矢、石崎達郎、田宮菜奈子　高齢の虚血性心疾患術後におけるリハビリテーション実施状況：心リハ施設基準の有無による検討、第26回心臓リハビリテーション学会学術集会　福岡　オンライン開催、2020.7.18-19. 査読有
2. 吉澤裕世、藤崎万裕、田中友規、高橋競、飯島勝矢　通いの場におけるフレイルチェックによるアウトリーチ体制構築に向けた課題－サービス・クオリティ・ギャップモデルを用いて－（ポスター発表）、第79回日本公衆衛生学会総会　京都　オンライン開催、2020.10.20-22. 査読有
3. 高橋競, 田中友規, 藤﨑万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢　地域在住高齢者の活動能力に夜間頻尿が及ぼす影響―混合研究法による分析（ポスター発表）第79回日本公衆衛生学会総会　京都　オンライン開催、2020.10.20-22. 査読有
4. 片田江由佳、櫛間大二郎 、井本俊之、藤﨑 万裕、飯島勝矢　ソーシャル・インパクト・ボンドを活用したフレイル予防実証事業の多面的展開と評価（ポスター発表）第79回日本公衆衛生学会総会　京都　オンライン開催、2020.10.20-22. 査読有
5. 田中 友規、孫 輔卿、呂 偉達、飯島 勝矢　COVID-19パンデミックに伴う外出自粛要請とフレイル新規発症の関連―柏スタディ―、第27回日本未病学会学術総会　　東京　オンライン開催、2020.10.31-11.1. 査読有
6. 藤﨑万裕、吉澤裕世、高橋競、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢　フレイルチェックデータを用いた地域アセスメントによるフレイル予防戦略の検討、第27回日本未病学会学術総会　東京　オンライン開催、2020.10.31-11.1. 査読有
7. 孫輔卿、秋下雅弘、豊島弘一、田中友規、スタッヴォラヴットアンヤポーン、呂偉達、飯島勝矢　食事の炎症誘導能がサルコペニア有病率および血中hsCRP値に及ぼす影響 －食事性炎症指数を用いた検討

－、第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会　東京　オンライン開 2020.11.14-15. 査読有
8. 田中友規、佐藤麻美、孫輔卿、飯島勝矢　新型コロナウイルス感染症流行による生活・健康状態の変化とサルコペニアとの関連：神奈川県平塚市在住高齢者における前向き調査（ポスター発表）、第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会　東京　オンライン開催、 2020.11.14-15. 査読有
9. 吉澤裕世、藤崎万裕、田中友規、吉田みどり、浅野美穂子、ザーリッチ陽子、伊藤佳央里、高橋競、飯島勝矢　通いの場でのアウトリーチ支援によるフレイル高リスク者の日常生活　行動の変化－事例検討を通して－（ポスター発表）、第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会　東京　オンライン開催、 2020.11.14-15. 査読有
10. 高橋競、孫輔卿、田中友規、藤崎万裕、吉澤裕世、呂偉達、飯島勝矢　フレイルサポーターによる地域活動に関する混合研究（ポスター発表）、第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会　東京　オンライン開催、 2020.11.14-15. 査読有
11. 藤崎万裕、吉澤裕世、高橋競、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢　フレイルチェック事業導入自治体における参加者フォローアップ体制の実態（ポスター発表）、第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会　東京　オンライン開催、 2020.11.14-15. 査読有
12. 呂偉達、田中友規、孫輔卿、秋下雅弘、飯島勝矢　地域在住高齢者におけるフレイル新規発症の検討～食習慣や身体活動、人とのつながりとの関連性～（ポスター発表）、第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会　東京　オンライン開催、 2020.11.14-15. 査読有
13. 亀山祐美、亀山征史、深澤誠、飯塚友道、飯島勝矢、田中友規、矢可部満隆、小島太郎、小川純人、秋下雅弘　Deep learningを用いた顔写真face AI scoreからのアルツハイマー病弁別能（ポスター発表）、第39回日本認知症学会　名古屋、 2020.11.26-28. 査読有
14. 鈴木愛、金雪瑩、伊藤智子、小宮山潤、吉江悟、飯島勝矢、石崎達郎、田宮菜奈子　軽度要介護者の認定調査による機能・行動特性と2年間の要介護度重度化の関連、第31回日本疫学会学術総会　オンライン開催、2021.1.27-29. 査読有

【2021年】

1. 吉澤裕世、高橋競、藤崎万裕、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢、複数の文化活動への参加とフレイルとの関連、第8回日本サルコペニア・フレイル学会,大阪, 2021. 11.6-7. 査読有
2. 御子柴正光、平健人、石丸美穂、吉江悟、飯島勝矢、石崎達郎、田宮菜奈子、自治体の医療・介護レセプトを用いた介護老人福祉施設入居者の歯科受診の実態、第80回日本公衆衛生学会総会　東京、2021,12.21-23. 査読有
3. 鈴木愛、金雪瑩、伊藤智子、吉江悟、石崎達郎、飯島勝矢、田宮菜奈子　軽度要介護者における要介護認定調査項目の変化と要介護度重度化に関する記述研究、第80回日本公衆衛生学会総会　東京、2021.12.21-23. 査読有
4. 高橋競、田中友規、吉澤裕世、藤崎万裕、飯島勝矢、地域高齢者における夜間頻尿・フレイルの重複とポリファーマシーとの関連、第80回日本公衆衛生学会総会　新宿区・文京区、2021. 12. 21-23. 査読有
5. 永谷美幸、田中友規、孫輔卿、川村淳、平野浩彦、飯島勝矢、地域高齢者のオーラルフレイルは軽度認知機能低下の予測因子である：柏スタディ、第8回日本サルコペニア・フレイル学会大会　大阪、2021.11.6-7. 査読有
6. 吉澤裕世、高橋競、藤崎万裕、田中友規、飯島勝矢、高齢者における居住地周辺の環境とフレイル及び地域活動との関係、第80回日本公衆衛生学会総会、東京、2021. 12.21-23. 査読有

2. 受賞歴

【2020年】

1. 2020年3月「John Morley Award (JAMDA journal) 」(Chen LK, Woo J, Assantachai P, Auyeung TW, Chou MY, Iijima K, Jang HC, Kang L, Kim M, Kim S, Kojima T, Kuzuya M, Lee JSW, Lee SY, Lee WJ, Lee Y, Liang CK, Lim JY, Lim WS, Peng LN, Sugimoto K, Tanaka T, Won CW, Yamada M, Zhang T, Akishita M, Arai H. Asian Working Group for Sarcopenia: 2019 Consensus Update on Sarcopenia Diagnosis and Treatment.)

【2021年】

1. 2021年2月「遠山椿吉記念 第7回 健康予防医療賞」(飯島勝矢. フレイル予防を軸とした新しい介護予防実現のための官民協働システム構築)

大月 敏雄

1. 論文等

【学術雑誌等】

1. 井本 佐保里, 筒井 健介, 大月 敏雄. 伊豆大島土砂災害後の住まいの選択とその要因に関する研究-被災世帯の有する資源に着目して- . 日本建築学会計画系論文集, 2021年 86 巻 787 号 査読有
2. 久野 遼, 大月 敏雄, 李 鎔根 . 寒冷地における高齢者居住施設での「越冬プラン」の取組の意義と課題. 日本建築学会技術報告集, 2021年 27 巻 66 号 査読有
3. 小山 晴也, 大月 敏雄. 長野県原村別荘地地区への移住プロセスにおける段階的な拠点形成に関する研究. 日本建築学会技術報告集, 2021年 27 巻 66 号 査読有
4. 尾﨑 雄太, 大月 敏雄, 李 鎔根. 日本最初期のワンルームマンションとしての中銀カプセルタワービルの変遷に関する研究. 日本建築学会技術報告集, 2021年 27 巻 66 号 査読有
5. 小山 晴也, 大月 敏雄. 長野県原村原山エリアにおける別荘地の定住地としての変容過程
－県による開発計画発表から住民自治組織の発足まで－日本建築学会技術報告集2021年 27 巻 65 号 査読有
6. 石塚 禎幸, 李 鎔根, 大月 敏雄, 小泉 秀樹. 市街化区域内農地の住宅系用途転用が居住者人口構造に及ぼす影響に関する研究-東京都練馬区大泉地区を対象として. 都市計画論文集2020年 55 巻 3 号 査読有
7. 水上 俊太, 井本 佐保里, 新山 雅人, 大月 敏雄, 西出 和彦. 建設型応急仮設住宅団地におけるサポート拠点利用の変遷に関する研究－岩手県釜石市平田地区サポートセンターを対象として－, 日本建築学会計画系論文集2020年 85 巻 774 号査読有
8. 今枝 秀二郎, 孫 輔卿, 内山 瑛美子, 田中 友規, スタッヴォラヴット アンヤポーン, 角川 由香,馬場 絢子, 田中 敏明, 飯島 勝矢, 大月 敏雄, 転倒・大腿骨近位部骨折で入院した高齢者の環境移行事例から見た多職種による建築的な転倒予防対策の検討＜1＞：自宅内の転倒原因となる建築的要因の解明, 日本建築学会計画系論文集2020年 85 巻 773 号査読有
9. 深井 祐紘, 矢吹 愼, 大月 敏雄, 李 鎔根. 岐阜県可児市桜ケ丘ハイツを対象とした郊外戸建住宅団地における近居と家族類型に関する研究－ライフステージを考慮した家族類型に基づく分析を通して－, 日

本建築学会計画系論文集2020年 85 巻 770 号査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 大月敏雄「戸建て住宅団地の持続性という課題への取り組み」『住宅』日本住宅協会2021年7月
2. 大月敏雄、李鎔根「人口減少傾向自治体における住生活基本計画」『住宅』日本住宅協会2020年9月
3. 大月敏雄「居住支援政策を考える〜「住宅」政策から「居住」政策へ〜」『住宅』日本住宅協会2020年5月

【著書、編著】

1. 大月敏雄. 井鎔根. めじろ台まちづくり 活動報告. 大月敏雄・井鎔根「めじろ台まちづくり 活動報告」『郊外未来デザインラボプロジェクトレポート2019.10-2021.03』2021.03: pp60-63.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Toshio Otsuki. Space Design for Aging Community, “ Sustainable Aging”, IARU Course for International and National Students, UNI, VERSI T Y OF COPENHAGEN FACUL TY OF HEAL TH AND MEDICAL SC I ENCES, the 14th of April 2021. 査読無
2. Sota Adachi, Toshio Otsuki, Naohiro Taniguchi, Atsuko Yasutake, Taisaku Hashimoto, EFFECT OF COLLIERY COMPANY ON TRANSFORMATION OF COAL MINING CITIES AFTER CLOSING A MINE IN OMUTA CITY, FUKUOKA PREFECTURE. 26TH CONFERENCE, INTERNATIONAL ASSOCIATION PEOPLE -ENVIRONMENT STUDIES, QUEBEC CITY, CANADA, 2020査読有
3. 13. Shiori Suzawa, Toshio Otsuki, Mari Sotoyanagi, Nobuyuki Arai, Saori Imoto, POST-DISASTER RECOVERY IN JAPAN: A STUDY ON CHANGING HOUSEHOLD COMPOSITIONS AND HOUSING SUPPORT SYSTEM AFTER CROSS-BOUNDARY RELOCATION TO MORIOKA CITY, 26TH CONFERENCE, INTERNATIONAL ASSOCIATION PEOPLE-ENVIRONMENT STUDIES, QUEBEC CITY, CANADA, 2020査読有
4. Lee Yunjeong, Nishide Kazuhiko, Otsuki Toshio, Matsuda Yuji, FORMATION OF IBASHO BY THE USING BEHAVIOR ON BENCHES: A CASE STUDY OF SHOPPING STREETS IN TOYO-SHIKIDAI HOUSING COMPLEX. 26TH CONFERENCE, INTERNATIONAL ASSOCIATION PEOPLE-ENVIRONMENT STUDIES, QUEBEC CITY, CANADA, 2020査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 大月敏雄（講演）「最後まで住みこなせる町と住まいをつくる」自由民主党住宅土地・都市政策調査会2022年3月17日
2. 大月敏雄（パネリスト）「東京都住生活シンポジウム2021」東京都住宅政策本部2022年1月1日
3. 大月敏雄（取材記事）「賃貸住宅の役割や在り方探る（あしたの賃貸シンポジウム）」『住宅新報』2021年12月21日
4. 大月敏雄（講演）「転換期の建築協定の運営」『建築協定連絡協議会秋の勉強会』横浜市建築協定連絡協議会 2021年22月27日
5. 大月敏雄（講演）「まちを住みこなす」『第10 回ホームホスピス全国合同研修会』 一般社団法人 全国ホームホスピス協会2021年11月20日

2. 受賞歴

1. 「住居集合地域の長期的住環境運営に関する一連の建築計画研究」で2019年日本建築学会賞（論文）

祐成 保志

1. 論文等

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 古橋広樹, 祐成保志. 多文化共生都市・浜松市の取り組み. 都市住宅学, 2020; 110: 45-50. 査読無
2. 祐成保志, 山道拓人, 千葉元生, 西川日満里. インフォーマルな場のつくり方. 新建築, 2021; 96(2): 37-41. 査読無
3. 祐成保志. 居場所を支える多様なアセット. DIO, 2021; 34(9): 14-18. 査読無
4. 祐成保志. 変化に抗する都市. 建築雑誌, 2021; 1756: 9-10. 査読無
5. 祐成保志. 復興過程における居住の社会学的研究の課題：討論者コメントに代えて. 社会学年誌, 2022; 63: 未定. 査読無

【著書、編著】

1. Sukenari Y. Ageing and the concept of fair housing in the Japanese context. Bruce Judd, Kenichi Tanoue, Edgar Liu eds. Ageing in Place: Design, Planning and Policy Response in the Western Asia-Pacific. Edward Elgar, 2000: pp180-193.
2. 祐成保志. 社会政策としての住宅政策・再考. 上村泰裕, 金成垣, 米澤旦（編）. 福祉社会学のフロンティア. ミネルヴァ書房, 2021: pp139-155.
3. 祐成保志. コミュニティを統治する：ハウジングの社会調査史. 赤川学, 祐成保志（編）. 社会の解読力〈歴史編〉. 新曜社, 2022: pp177-200.

二瓶 美里

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Nakamura M, Ikeda K, Kawamura K, Nihei M. Mobile, Socially Assistive Robots Incorporating Approach Behaviour: Requirements for Successful Dialogue with Dementia Patients in a Nursing Home. Journal of Intelligent & Robotics Systems, 2021; 45: 103. 査読有
   https://doi.org/10.1007/s10846-021-01497-w
2. Constantini H, Nihei M, Ueno T. ‘Care literacy’ in super aging Japan. Open Research Europe, 2021; 27 Jul: 1-85. 査読有
   https://doi.org/10.12688/openreseurope.13853.1
3. Nakamura M, Okajima K, Matsumoto Y, Tanaka T, Iijima K, Nihei M. Effectiveness of Continuous Grip Strength Measurement using Social Assistive Robots on Older adults at Home. Journal of Robotics and Mechatronics, 2021; 33(4): 719-729. 査読有
   https://doi.org/10.20965/jrm.2021.p0719
4. Mizuno J, Sadohara K, Nihei M, Ohnaka S, Nishiura Y, Inoue T.

The application of an information support robot to reduce agitation in an older adult with Alzheimer's Disease living alone in a community dwelling: A case study. Hong Kong Journal of Occupational Therapy, 2021. 査読有
https://doi.org/10.1177/15691861211005059
5. Mizuno J, Saito D, Sadohara K, Nihei M, Ohnaka S, Suzurikawa J, Inoue T. Effect of the Information Support Robot on the Daily Activity of Older People Living Alone in Actual Living Environment. Int. J. Environ. Res. Public Health, 2021; 18(5): 2498. 査読有
https://doi.org/10.3390/ijerph18052498
6. Nishiura Y, Nihei M, Takaeda K, Inoue K. Comprehensible Instructions from Assistive Robots for Older Adults with or without Cognitive Impairment. Assistive Technology, 2021; Feb.22. 査読有
https://doi.org/10.1080/10400435.2021.1893236
7. Nakamura M, Nihei M, Kato N, Inoue T. Impact of the introduction of a verbal socially assistive robot on the relationship between older people and their caregivers in a nursing home. SN Applied Sciences, 2020; 2: 1657. 査読有
https://doi.org/10.1007/s42452-020-03434-2
8. Nihei M, Nakamura M, Ikeda K, Kawamura K, Yamashita H, Kamata M. Approaching Behavior Analysis for Improving a Mobile Communication Robot in a Nursing Home. HCI International 2020 -Late Breaking Papers: Universal Access and Inclusive Design, 2020; 679-688. 査読有
https://doi.org/10.1007/978-3-030-60149-2_51
9. 塩田祐也, 二瓶美里, 長尾朋紀, 玉井顕, 永見豊, 中川浩, 後藤誠, 松本和也, 田村勇二. ドライビングシミュレータ実験による逆走ドライバーの視行動の特徴に関する分析. 交通工学論文集 特集B, 2020; 6(2): 29 -36. 査読有
https://doi.org/10.14954/jste.6.2_B_29

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 室町泰徳, 稲垣具志, 二瓶美里, 福岡孝則, 村山顕人.「みんなの」モビリティ新時代. 都市計画, 2021; 353, 70(6): 48-55. 査読無
2. 二瓶美里, 高速道路の逆走. 高速道路と自動車, 2021; 64(10), 7.査読無
3. 二瓶美里, 移動支援技術の進展と可能性(特集 移動支援機器). 新ノーマライゼーション, 2021; 8: 2-3. 査読無
4. 二瓶美里,中村美緒. 特集 認知症−最近の動向 認知症高齢者の支援機器開発. Current Therapy, 2021; 39(7), 55-59. 査読無
5. 二瓶美里, 玉井顕, 永見豊, 鎌田実. Hot Topics: 高齢者や軽度認知障害有病者の特性に配慮した高速道路逆走対策の取り組み. 自動車技術, 2021; 75(2): 68-73. 査読無
6. 二瓶美里, 長寿社会と生活支援機器(特集:社会を支える福祉・リハビリテーション工学とその設計技術). 設計工学, 2020; 55(10): 616-606. 査読無
7. 二瓶美里. 2) Gerontechnology(高齢者支援テクノロジー)の新知見まちの機能や支援の充実. 老年内科, 2020; 1(3): 329-337. 査読無
8. 菅原育子, 二瓶美里. 地域に暮らす90歳以上の暮らしの実態調査 話題. 老年内科, 2020; 1(3): 369-378. 査読無

【著書、編著】

1. 菅原育子, 二瓶美里, 檜山敦, 畑中綾子, 土屋裕子, 小舘尚文, 木村篤信. 国立国会図書館 科学技術に関する調査プロジェクト2020報告書 高齢者を支える技術と社会的課題, 2021; 3.
https://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/document/index.html

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Nishiwaki Y, Nakamura M, Nihei M. A novel method of evaluating changes in intrinsic motivation during cognitive rehabilitation. 43rd Annual International Conference of the IEEE EMBS, 2021; 2095-2099. 査読有
DOI: 10.1109/EMBC46164.2021.9630738
2. Hattori T, Nakamura M, Kawamura K, Nihei M. Determining Possible Risks of Introducing Socially Assistive Robots with Mobility Functions to Aged Care Facilities. In: Gao Q., Zhou J. (eds) Human Aspects of IT for the Aged Population. Technology Design and Acceptance. HCII 2021. Lecture Notes in Computer Science, 2021; 12786. 査読有
https://doi.org/10.1007/978-3-030-78108-8_11

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 中村美緒, 服部智也, 二瓶美里. 移動機能を持つSocially Assistive Robots を高齢者介護施設に導入する際に想定されるリスクの抽出. 第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 SI2021, 2021. 査読有
2. 早坂涼哉, 中村美緒, 二瓶美里. ニオイセンサを用いた生活空間における常在臭のモニタリング手法の提案 −常在臭と瞬間臭の識別−. 第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 SI2021, 2021. (SI2021 優秀講演賞) 査読有
3. 服部智也, 中村美緒, 二瓶美里. 認知症高齢者とSARの会話分析に基づく話題提供の要件. 第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会SI2021, 2021. (SI2021 優秀講演賞) 査読有
4. 中村美緒, 清水雄一郎, 玉井顕, 鎌田実, 二瓶美里. 運転能力評価システムを用いた加齢に伴う認知機能低下と認知症による機能低下の操作特性の比較. 第5回安全運転・医療研究会, 2021. 査読有
5. 五十嵐宙之, 嶋彩花, 中村美緒, 二瓶美里, 松本吉央. アシスト歩行器を用いたアシストの有無が与える歩行器歩行戦略に関する研究. 第42回バイオメカニズム学術講演会, 講演論文集, 2021. 査読有
6. 八木達也, 菅原雄介, 武田行生, 呂 超, 二瓶美里. 高齢者向けモビリティのためのペダリング運動負荷システム(楕円軌道ペダル軌道の制御法と性能評価,第42回バイオメカニズム学術講演会, 講演論文集, 2021. 査読有
7. 早坂涼哉, 中村美緒, 二瓶美里, ニオイセンサを用いた生活空間における常在臭のモニタリング手法の提案−生活機能低下と常在臭の関係について−, LIFE2020-2021, 講演論文集, 2021.(バリアフリー財団奨励賞ファイナリスト)査読有
8. 呂 超, 西脇佑理, 菅原雄介, 二瓶美里. 協調学習操作系を用いたハンズフリーモビリティの協調学習機能の有効性評価, LIFE2020-2021, 講演論文集, 2021. 査読有
9. 金子宗平, 衛然, 中村美緒, 檜山敦, 水野純平, 二瓶美里. 認知リハビリテーション領域に適用できるVRを用いた主体感を付与した視行動誘導手法の提案. 第26回バーチャルリアリティ学会大会論文集, 2021. 1C2-8, 4.
http://conference.vrsj.org/ac2021/program/doc/1C2-8.pdf 査読有
10. 嶋彩花, 濱田佳歩, 二瓶美里,中村美緒, 登嶋健太, 檜山敦. VRを用いた高齢者の自律神経活動調整のための基礎的検討:ベースラインを統制した若年健常者での検証実験. 第26回バーチャルリアリティ学会大会論文集, 2021. 2B2-6, 4.
http://conference.vrsj.org/ac2021/program/doc/2B2-6.pdf 査読

有
11. 高木薫, 権藤恭之, 二瓶美里. 高齢者の独居生活を支援する手書きコミュニケーションツールの提案. 第21回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2020), 2020. 4. 査読有
12. 五十嵐宙之, 二瓶美里, 松本吉央. アシスト歩行器を用いた遠隔生活リハビリシステム −コンセプトの提案と歩行サイクルの検出−. 第21回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2020), 2020. 4. (SI2020優秀講演賞) 査読有
13. 濱田佳歩, 二瓶美里, 中村美緒, 檜山敦, 登嶋健太. VRを用いた高齢者の自律神経活動調整のための基礎検討. 第25回バーチャルリアリティ学会大会論文集, 2020. 1C3-5. 4. http://conference.vrsj.org/ac2020/program/doc/1C3-5_PR0178.pdf 査読有
14. 衛然, 二瓶美里, 水野純平, 檜山敦. 視行動誘導により行為主体感を付与した遂行機能無誤学習VRシステムの提案. 第25回バーチャルリアリティ学会大会論文集, 2020. 2B2-1. 2. http://conference.vrsj.org/ac2020/program/doc/2B2-1_PR0168.pdf 査読有
15. 服部智也, 西畑智道, 二瓶美里, 鎌田実, 菅原雄介, 松浦大輔, 武田行生, 遠藤央, 金天海. 移動支援機器の協調学習操作系における人の学習習熟を評価する手法の提案. 日本機械学会ロボティクスメカトロニクス講演会2020, 2020. 2. 査読有

2. 受賞歴

1. 2021年12月　SI2021優秀講演賞(早坂涼哉, 中村美緒, 二瓶美里. ニオイセンサを用いた生活空間における常在臭のモニタリング手法の提案 −常在臭と瞬間臭の識別−. 第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会SI2021, 2021
2. 2021年12月　SI2021優秀講演賞(服部智也, 中村美緒, 二瓶美里. 認知症高齢者とSARの会話分析に基づく話題提供の要件. 第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会SI2021, 2021.)
3. 2021年9月　LIFE2021バリアフリー財団奨励賞ファイナリスト(早坂涼哉, 中村美緒, 二瓶美里, ニオイセンサを用いた生活空間における常在臭のモニタリング手法の提案−生活機能低下と常在臭の関係について−, LIFE2020-2021, 講演論文集, 2021.)
4. 2020年12月　SI2020　優秀講演賞(五十嵐宙之, 二瓶美里, 松本吉央. アシスト歩行器を用いた遠隔生活リハビリシステム −コンセプトの提案と歩行サイクルの検出−. 第21回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2020),)

松田 雄二

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Matsuda Y, Kawauchi A, Motooka N. Gazing behavior exhibited by people with low vision while navigating streets. Journal of Asian Architecture and Building Engineering, 2021; 20(4): 414-427. 査読有
2. 林 瑞紀, 安藤 凛乃, 松田 雄二. 障害者支援施設における新型コロナウイルス感染症対策に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 2022; 第87巻, 第791号: 33-42. 査読有
3. 荒川 実緒子, 松田 雄二. 障害者支援施設の支援と建築構成の実態, 日本建築学会計画系論文集. 2021; 第86巻, 第787号: 2234-2245. 査読有
4. 亀屋 恵三子, 大野 真太郎, 松田 雄二. 救護施設における空間特性と利用者の生活環境に関する研究(その1)　新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大期(緊急事態宣言下)における諸室の使われ方や過ごし方の変化. 日本建築学会計画系論文集, 2021; 第86巻, 第787号: 2223-2233. 査読有
5. 松田 雄二, 飛松 嵩人, 藤井 里咲. 障害者グループホームの建築と運営実態に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 2021; 第86巻, 第783号: 1387-1397. 査読有
6. 吉田 聖, 松田 雄二. スウェーデン・ヨーテボリ市における重度障害者を対象とするグループホームの建築的状況に関する研究. 日本建築学会技術報告集, 2021; 第27巻, 第65号: 315-320. 査読有
7. 柳澤 壮一郎, 松田 雄二, 井上 由起子, 西出 和彦. 社会福祉施設の施設整備費および大規模修繕等費用に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 2020; 第85巻, 第778号: 2563-2572. 査読有
8. 後藤 啓太, 松田 雄二. 団地再生事業に伴う高齢住民の交流活動と交流意欲の変化に関する研究. 都市住宅学, 2020; 第111号: 117-123. 査読有
9. 神門 侑子, 松田 雄二, 鷲野 史佳, 大野 真太郎, 亀屋 恵三子. 救護施設に求められる機能と施設構成に関する研究. 地域施設計画研究, 2020; 第38号: 11-16. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 松田 雄二. 住まいの場としての障害者支援施設の現状と課題. さぽーと. 日本知的障害者福祉協会. 2021: 17-19. 査読無
2. 松田 雄二. 障害者グループホームにおける居住支援. 住宅. 日本住宅協会. 2020; vol. 69: 40-43. 査読無
3. 松田 雄二. 救護施設における居住支援. 住宅. 日本住宅協会. 2020; vol. 69: 44-47. 査読無

【著書、編著】

1. 原 利明, 伊藤 納奈, 太田 篤史, 船場 ひさお, 松田 雄二, 矢野 喜正(編). ユニバーサルデザインの基礎と実践 ひとの感覚から空間デザインを考える. 鹿島出版会, 2020: pp. 30-35, pp. 68-73

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kando Y, Matsuda Y, Washino F, Ono S, Kameya E. Required Functions and Environments for Future Relief Facilities. The 26th Conference of the International Association of people-Environment Studies, Quebec City (virtual conference), 2020.6査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 後藤 啓太, 松田 雄二. COVID-19の感染拡大に伴う集合住宅における在宅勤務の実施実態と課題に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 名古屋(オンライン開催), 2021.9: 65-66. 査読無
2. 松田 雄二. 居住支援法人の居住支援の実態に関する基礎調査. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 名古屋(オンライン開催), 2021.9: 217-218. 査読無
3. 林 瑞紀, 大嶽 有加, 松田 雄二. 共生型等グループホームにおける建物形態と開設理由および運営実態に関する研究 −全国に所在する高齢者と障害者の共同生活住居を対象として−. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 名古屋(オンライン開催), 2021.9: 667-668. 査読無
4. 鷲野 史佳, 亀屋 恵美子, 松田 雄二 . 養護老人ホームの入居者・ケア

の実態と建築の状況. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 名古屋(オンライン開催), 2021.9: 745-746. 査読無
5. 安藤 凜乃, 林 瑞紀, 松田 雄二. 障害者支援施設における新型コロナウイルス感染症対策に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 名古屋(オンライン開催), 2021.9: 753-754. 査読無
6. 中冨 彩奈恵, 大野 真太郎, 亀屋 恵三子, 松田 雄二. 救護施設における利用者の生活環境に関する研究 その3. 緊急事態宣言下における居室や外出の変化. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 名古屋(オンライン開催), 2021.9: 759-760. 査読無
7. 大野 真太郎, 鷲野 史佳, 神門 侑子, 松田 雄二, 亀屋 恵三子. 救救護施設における利用者の生活環境に関する研究 その4. 利用者の作業活動に着目して. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 名古屋(オンライン開催), 2021.9: 761-762. 査読無
8. 吉田 聖, 松田 雄二. スウェーデン・ヨーテボリ市における障害者グループホームの空間利用に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 千葉, 2020.9: 203-204. 査読無
9. 後藤 啓太, 松田 雄二. 地再生事業に伴う高齢住民の交流活動と交流意向の変化に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 千葉, 2020.9: 253-254. 査読無
10. 松田 雄二, 荒川 実緒子. 障害者支援施設における利用者の生活環境に関する全国調査 その1 全国の障害者支援施設の運営状況と利用者の実態について. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 千葉, 2020.9: 705-706. 査読無
11. 荒川 実緒子, 松田 雄二. 障害者支援施設における利用者の生活環境に関する全国調査 その2 全国の障害者支援施設の施設計画の状況について. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 千葉, 2020.9: 707-708. 査読無
12. 鷲野 史佳, 神門 侑子, 大野 真太郎, 松田 雄二, 亀屋 恵三子. 救護施設における利用者の生活環境に関する研究 その1:利用者特性と地域移行支援の実態. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 千葉, 2020.9: 713-714. 査読無
13. 大野 真太郎, 鷲野 史佳, 神門 侑子, 松田 雄二, 亀屋 恵三子. 救護施設における利用者の生活環境に関する研究 その1:行動調査による利用者の行為と場所. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 千葉, 2020.9: 715-716. 査読無

2. 受賞歴

1. 2020年9月「Japan Architectural Review 2019 Best Paper Award」(Matsuda Y, Hara T, Kashiwase M, Nishide K. A study on the eye movement in people with low vision - A case study in an eye clinic)

菅原 育子

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Cherbuin N, Iijima K, Kalula S, Malhotra R, Rasmussen LJ, Chan A, Lafortune L, Harper S, Zheng X, Lindeman D, Walsh E, Hussain R, Burns RA, Kristiansen M, Sugawara I, Son B, Tanaka T, Buckner S, Hoffman J, & Combrinck M. Societal need for interdisciplinary ageing research:An International Alliance of Research Universities “Ageing, Longevity and Health” Stream(IARU-ALH) position statement. Biomedical Hub, 2021; 6:42-47. Doi:10.1159/000513513. 査読有
2. Kobayashi E, Sugawara I, Fukaya T, Okamoto S, & Liang J. Retirement and social activities in Japan: Does age moderate the association? Research on Aging. 2022: 44(2), 144-155. doi: 10.1177/01640275211005185. 査読有
3. Murayama H, Sugawara I. Can online relationships in social networking services supplement offline relationships during the COVID-19 pandemic? Asia-Pacific Journal of Public Health, 2021: doi:10.1177/10105395211054960. 査読有
4. Fukuzawa, A, Sugawara, I. Social support and participation as factors relating to Ikigai and life satisfaction in lonely older Japanese. Ageing International. 2022; Doi:10.1007/s12126-022-09486-6. 査読有
5. 福沢愛・繁桝江里・菅原育子. 文化的自己観と幸福感との関連について:日本人を対象とした年代別比較. 老年社会科学. 2021; 42(4), 327-336. 査読有
6. 菅原育子・荻野亮吾・久保田治直・堀薫夫. 地域コミュニティにおけるコミュニティ・エンパワメント評価手法の検討. 西武文理大学サービス経営学部研究紀要, 2021; 38, 77-90. 査読無

【著書、編著】

1. 菅原育子・秋山弘子・前田展弘. 生きがい就労の推進. 東京大学高齢社会総合研究機構(編)地域包括ケアのまちづくり:老いても安心して住み続けられる地域を目指す総合的な試み. 東京大学出版会. 2020年:pp59-69.
2. 菅原育子・西澤亮太・長島洋介・吉田涼子・秋山弘子. 社会技術の視点から見た生活支援のシステム化と横展開. 東京大学高齢社会総合研究機構(編)地域包括ケアのまちづくり:老いても安心して住み続けられる地域を目指す総合的な試み. 東京大学出版会. 2020年:pp172-184.
3. 菅原育子・二瓶美里・畑中綾子・檜山敦・土屋裕子・小舘尚文・木村篤信. 高齢者を支える技術と社会的支援(国立国会図書館科学技術に関する調査プロジェクト2020報告書). 国立国会図書館. 2021年.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Sugawara I, Takayama M, Ishioka Y. Companionship with family, friends, and neighbors in later life. The Gerontological Society of America 2020 Annual Scientific Meeting, Online, USA, 2020.11. 4-7. 査読有.
2. Takayama M, Ishioka Y, Sugawara I. Physical and social neighborhood environments and well-being. The Gerontological Society of America 2020 Annual Scientific Meeting, Online, USA, 2020.11. 4-7. 査読有.
3. Yoshioka D, Kogami H, Kang SI, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT-Setting Method Among Senior Citizens in Japan. 24th International Conference on Human-Computer Interaction, 2021. 7. 26. 査読有
4. Sugawara I. Neighborhood relationship matters for whom?: Interaction with family structure and functional conditions. The Gerontological Society of America 2021 Annual Scientific Meeting, Online, USA, 2021.11.10-14. 査読有
5. Iida M, Okamoto S, Sugawara I, Kobayashi E. Transition to widowhood: Trajectories of depressive symptomatology among Japanese older adults. The Gerontological Society of America

2021 Annual Scientific Meeting, Online, USA, 2021.11.10-14. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 菅原育子・今城志保.　中高年者における転職意向の関連要因. 日本老年社会科学会第62回大会(老年社会科学会 42(2),p130), 札幌市(紙面開催), 2020.6.6-7.査読有.
2. 福沢愛・菅原育子. 認知的方略と老後に向けた努力との関連:社会人学生対象の調査結果. 日本老年社会科学会第62回大会(老年社会科学会　42(2),p114). 札幌市(紙面開催), 札幌市(紙面開催へ移行), 2020.6.6-7.査読有.
3. 岡本翔平・小林江里香・村山洋史・深谷太郎・菅原育子・新開省二. 退職による主観的幸福感の変化:JAHEAD男性サンプルにおける分析. 日本老年社会科学会第62回大会(老年社会科学会 42(2),p126), 札幌市(紙面開催), 2020.6.6-7.査読有.
4. 福沢愛・菅原育子・神山祥子・小林謙次郎. 認知的方略と心身の健康を維持する努力との関連:中高年の日本人の間での検討. 日本心理学会第84回大会(発表抄録集　p37),東京(オンライン開催) 2020.9.8-11.2. 査読有
5. 菅原育子・村山洋史. 中高年者のおけるSNSをとおしたソーシャルサポートの受領期待とその関連要因:SNS上の交流と対面交流との比較から. 日本老年社会科学会第63回大会(抄録集P23). 名古屋市(オンライン開催). 2021. 6. 12-27. 査読有.
6. 村山洋史・菅原育子.　中高年者が持つSNS上でのつながりと社会的ネットワーク、社会的サポートとの関連. 日本老年社会科学会第63回大会(抄録集P24). 名古屋市(オンライン開催). 2021. 6. 12-27.査読有.
7. 小林江里香・岡本翔平・菅原育子・深谷太郎.　子どもへの経済的・非経済的支援と趣味・学習活動とのコンフリクト:well-beingとの関連による検討. 日本老年社会科学会第63回大会(抄録集P26), 名古屋市(オンライン開催). 2021. 6. 12-27.査読有.
8. 細萱一立・伊藤研一郎・藤崎万裕・三浦貴大・藪謙一郎・菅原育子・伊福部達・秋山弘子(2021)COVID-19流行による高齢者の地域交流活動への影響. 日本老年社会科学会第63回大会(抄録集P46). 名古屋市(オンライン開催). 2021. 6. 12-27.査読有.
9. 中野航綺・吉崎れいな・湖上碩樹・小川景司・吉岡大介・カンスイン・櫻井友理希・藤崎万裕・伊藤研一郎・菅原育子. 高齢者主体の地域活動におけるIT技術導入・普及過程の分析. 日本老年社会科学会第63回大会(抄録集P052), 名古屋市(オンライン開催). 2021. 6. 12-27.査読有.
10. 菅原育子(2021)コロナ禍におけるオンライン社会参加活動の開始に至る経路の心理社会的分析:中高年SNS利用者インタビューから. 日本心理学会第85回大会, 東京都(オンライン開催). 2021. 9. 1-8.査読有.

孫 輔卿

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Kasajima M, Kusaka S, Matsui H, Tanaka T, Son BK, Iijima K, Goda K, Kitsuregawa M, Eggleston K, Bhattacharya J, Hashimoto H. Frailty and dementia in Japan's ageing population: projected needs and economic costs of care. The Lancet public health (in press) 査読有
2. Tanaka T, Son BK, Lyu W, Iijiam K. The impact of social engagement on the development of sarcopenia among community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study Geriatr Gerontol Int (in press) 査読有
3. Yoshizawa Y, Tanaka T, Takahashi K, Mahiro Fujisaki-Sueda-Sakai M, Son BK, Iijima K. Impact of Health Literacy on the Progression of Frailty after Four Years among Community-dwelling Older Adults. Int J Env Res Pub Health 2022 Jan;19(1): 394.
doi: 10.3390/ijerph19010394 査読有
4. Iwasaki M, Ohara Y, Motokawa K, Hayakawa M, Shirobe M, Edahiro A, Watanabe Y, Awata S, Okamura T, Inagaki H, Sakuma N, Obuchi S, Kawai H, Ejiri M, Ito K, Fujiwara Y, Kitamura A, Nofuji Y, Abe T, Iijima K, Tanaka T, Son BK, Shinkai S, Hirano H. Population-based reference values for tongue pressure in Japanese older adults: a pooled analysis with over 5,000 participants J Prosthodont Res 2022 Jan 27. doi: 10.2186/jpr.JPR_D_21_00272. Online ahead of print. 査読有
5. Son BK, Imoto T, Inoue T, Nishimura T, Tanaka T, Iijima K. Social detachment influenced muscle mass and strength during the COVID-19 pandemic in Japanese community-dwelling older women J Frailty Aging 2022 Jan 25:1-5doi:10.14283/jfa.2022.4 [Epub ahead of print] 査読有
6. Tanaka T, Son BK, Iijima K. Poor health behaviors among housebound Japanese community-dwelling older adults due to prolonged self-restraint during the first COVID-19 pandemic: A cross-sectional survey. J Frailty Aging 2022 Mar 17: 1–5. doi: 10.14283/ jfa.2022.20 [Epub ahead of print] 査読有
7. Son BK, Akishita M, Yamanaka T, Toyoshima K, Tanaka T, Suthutvoravut U, Iijima K. Association between inflammatory potential of the diet and sarcopenia/its components in community- dwelling older Japanese men. Arch Gerontol Geriatr 2021;97:104481. doi: 10.1016査読有
8. Umeda-Kameyama Y, Kameyama M, Tanaka T, Son BK, Kojima T, Fukasawa M, Iizuka T, Ogawa S, Iijima K, Akishita M. Screening of Alzheimer's disease by facial complexion using artificial intelligence. Aging (Albany NY). 2021;13(2):1765-1772 doi: 10.18632
9. Cherbuin N, Iijima K, Kalula S, Malhotra R, Rasmussen L, Chan A, Lafortune L, Harper S, Zheng X, Lindeman D, Walsh E, Hussain R, Burns R, Kristiansen M, Sugawara I, Son BK, Tanaka T, Buckner S, Hoffman J, Combrinck M. SOCIETAL NEED FOR INTERDISCIPLINARY AGEING RESEARCH An International Association of Research Universities "Ageing, Longevity, and Health" Stream (IARU-ALH) position statement. Biomed Hub 2021;6:42-47査読有
10. 藤﨑万裕, 吉澤裕世, 高橋競, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢. フレイルチェックデータを用いた地域アセスメントに基づくフレイル予防戦略の検討. 日本未病学会雑誌プロシーディング, 2021査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 孫輔卿. COVID-19とフレイル対策:コロナフレイルの警鐘 Current Therapy 2022;40(5):1-5. 査読無
2. 孫輔卿. コロナフレイルと with コロナ地域社会の在り方. Medical View Point. 2022年1月10日査読無
3. 孫輔卿, 飯島勝矢. サルコペニア・フレイルと認知症の関わり. 日本骨

粗鬆症学会雑誌2021;7:97-101. 査読無
4. 孫輔卿. 各論3まちづくりを通してのフレイル予防・対策：(1)フレイル予防に資する栄養管理とそのアプローチ. フレイル予防・対策：基礎研究から臨床、そして地域へ. 長寿科学進行財団, 2021. 査読無
5. 孫輔卿, 飯島勝矢 「オーラルフレイル”の考え方でトータルな口腔機能向上を」ALmedia 2020. 査読無
6. 孫輔卿.「特集／2040 年を見据えた超高齢社会対策とは」4)転倒骨折予防：身体と空間のジェロントロジー総合研究. 月刊『老年内科』第1巻第3号, 2020.査読無
7. 孫輔卿.「老化制御への挑戦～食品成分・漢方薬の科学的根拠～」漢方薬による老化制御 −Ginsenoside Rb1による血管老化病態石灰化の抑制作用機序−基礎老化研究誌, 44:29-36, 2020. 査読無

【著書、編著】

1. 孫輔卿, 飯島勝矢. 第1章：フレイル対策の実践. フレイル予防と予防医学―諸研究分野の視点から「フレイル予防」及び「予防医学」を考える―監修：矢澤一郎 シーエムシー出版2021:pp 3-7.
2. 孫輔卿, 飯島勝矢. 日本のAge-friendly city政策および関連事業（医療・福祉分野）：韓国語翻訳. A study on an Age-friendly living environment for the improvement of Architecture and Urban police in Korea. 韓国建築空間研究院（報告書）2021. 12.31発行
3. 孫輔卿. 1章3節市民活力のエンパワーメント―仕掛けから継続的な実践までー, 2章6節フレイルハイリスク者へのアウトリーチ体制.「地域で取り組む高齢者のフレイル予防」編者：辻哲夫・飯島勝矢・服部真治 中央法規 2021年4月25日発行

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Nanao-Hamai M, Son BK, Komuro A, Oura M, Toyoshima K, Zehan S, Ogawa S, Akishita M. Inhibitory effects of estrogen against abdominal aortic aneurysm formation in ovariectomized mice model. The 14th International Symposium on Atherosclerosis, online&Kyoto, Japan. 2021.10.24-27. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 孫輔卿. ［シンポジウム:高齢者診療の性差におけるニューノーマル］フレイルの性差：身体的側面と社会的側面から. 第15回日本性差医学・医療学会. Online 2022.2.20-21.
2. 呂偉達、田中友規、孫輔卿、秋下雅弘、飯島勝矢. 地域在住高齢者のフレイル・サルコペニア有病率との横断的検討 −食生活・身体活動・社会性の重複の有効性−第28回日本未病学会学術総会. 大阪2021.11.21-11.22. 査読有
3. 孫輔卿. ［シンポジウム: 血管・臓器障害とフレイル］血管炎症による神経・運動器の機能低下とそのメカニズム. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会. 大阪 2021. 11. 6-7
4. 孫輔卿、井本俊之、井上智博、西村天利、田中友規、飯島勝矢. コロナ禍での外出自粛による心身機能低下（コロナフレイル）の検討：体幹筋量の低下と地域活動維持による握力の低下抑制効果. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会. 大阪 2021. 11. 6-7. 査読有
5. 孫輔卿、三浦貴大、角川由香、藪謙一郎、田中友規、呂偉達、金東律、楊映雪、張俊華、佐藤雄太、榊原拓磨、徳丸剛、池田一智、飯島勝矢.. 地域住民同士の双方向オンライン型フレイルチェック開発と地域実装―対面とオンラインの持続的フレイル予防システムを目指して―. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会. 大阪 2021. 11. 6-7. 査読有
6. 永谷美幸、田中友規、孫輔卿、川村淳、平野浩彦、飯島勝矢. 地域高齢者のオーラルフレイルは軽度認知機能低下の予測因子である：柏スタディ. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会. 大阪. 2021. 11. 6-7. 査読有
7. 大浦美弥、孫輔卿、豊島弘一、七尾道子、小川純人、秋下雅弘.運動による筋力および筋機能の改善機序：筋内テストステロン産生とそのパラクリン作用の可能性. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会. 大阪. 2021. 11. 6-7. 査読有
8. 吉澤裕世、高橋競、藤崎万裕、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢. 複数の文化活動に参加することはフレイル予防につながる可能性. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会. 大阪. 2021. 11. 6-7. 査読有
9. 貞清香織、佐藤麻美、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢. 活動自粛による高齢者の生活・健康状態の変化～主観的歩行速度の違いによる比較～. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会. 大阪. 2021. 11. 6-7. 査読有
10. 小室絢、孫輔卿、七尾道子、大浦美弥、豊島弘一、小川純人、秋下雅弘. 高リン食は炎症を惹起して大動脈瘤形成を促進する：マウスモデルを用いた検討. 第53回日本動脈硬化学会2021.10.23-24. オンライン&京都. 査読有
11. 七尾道子, 孫輔卿, 豊島弘一, 大浦美弥, 小室絢, 小川純人, 秋下雅弘. 内因性エストロゲンは腹部大動脈瘤の形成を抑制する：卵巣摘出マウスを用いた検討. 第53回日本動脈硬化学会2021.10.23-24. オンライン&京都. 査読有
12. 孫輔卿.［シンポジウム:老年医学研究成果の実装ー健康長寿社会を目指して］コロナフレイル予防のためのハイブリッド型住民主体活動へのチャレンジ. 第63回日本老年医学会 2021.6.13 online.
13. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域在住高齢者の食・身体活動・社会的ネットワークとフレイル新規発症との縦断的検討. 第63回日本老年医学会 2021.6.13 online. 査読有
14. 大浦美弥、孫輔卿、豊島弘一、七尾道子、小川純人、秋下雅弘. 精巣摘出による骨格筋量・運動機能の低下―筋分解系および炎症の関与―：マウスモデルを用いた検討. 第63回日本老年医学会 2021.6.13 online. 査読有
15. 七尾道子, 孫輔卿, 豊島弘一, 大浦美弥, 小室絢, 小川純人, 秋下雅弘. エストロゲン欠乏による大動脈瘤形成の亢進作用−卵巣摘出マウスモデルを用いた検討 −.第63回日本老年医学会. 2021.6.13 online. 査読有
16. 七尾道子, 孫輔卿, 秋下雅弘. ［シンポジウム:サルコペニア・フレイル］フレイル・サルコペニアの性差と漢方. 第14回日本性差医学医療学会. オンデマンド配信
2021.2.7.
17. 七尾道子, 孫輔卿, 豊島弘一, 大浦美弥, 小室絢, 小川純人, 秋下雅弘. 卵巣摘出は大動脈瘤形成と局所炎症を促進する：マウスモデルを用いた検討（最優秀演題賞）. 第14回日本性差医学医療学会. オンデマンド配信. 2021.2.7. 査読有
18. 大浦美弥, 孫輔卿, 七尾道子, 小川純人, 秋下雅弘. 精巣摘出による筋量低下と炎症関連
因子の発現上昇：マウスモデルを用いた検討. 第14回日本性差医学医療学会. オンデマンド配信. 2021.2.7. 査読有
19. 田中友規, 呂偉達, 孫輔卿, 飯島勝矢. 地域在住高齢者におけるフレイル発症の予測因子としての社会的要因の探索と性差の検討―柏スタディ―. 第14回日本性差医学医療学会. オンデマンド配信. 2021.2.7. 査読有
20. 孫輔卿, 秋下雅弘, 豊島弘一, 田中友規, スタッヴォラヴットアンヤポーン, 呂偉達, 飯島勝矢. 食事の炎症誘導能がサルコペニア有病率および血中hsCRP値に及ぼす影響-食事性炎症指数を用いた検討-（優秀演題賞）. 第7回日本サルコペニア・フレイル学会. オンデマンド配信. 2020.11.11. 査読有
21. 高橋競、孫輔卿、田中友規、藤崎万裕、吉澤裕世、呂偉達、飯島勝矢.

フレイルサポーターによる地域活動に関する 混合研究. 第7回日本サルコペニア・フレイル学会. オンデマンド配信. 2020.11.11. 査読有
22. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 秋下雅弘, 飯島勝矢. 地域在住高齢者におけるフレイル新規発症の検討～食習慣や身体活動、人とのつながりとの関連性～第7回日本サルコペニア・フレイル学会. オンデマンド配信. 2020.11.11. 査読有
23. 藤﨑万裕, 吉澤裕世, 高橋競, 孫輔卿, 田中友規, 飯島勝矢.　フレイルチェック事業導入自治体における　参加者フォローアップ体制の実態.　第7回日本サルコペニア・フレイル学会.　オンデマンド配信. 2020.11.11. 査読有
24. 孫輔卿「シンポジウム：オーラルフレイルから考える早期未病対策」オーラルフレイルと栄養－慢性炎症に着目して－. 第27回日本未病学会学術総会. オンライン. 2020.10.31-11.1
25. 田中友規、孫輔卿、呂偉達、飯島勝矢：COVID-19パンデミックに伴う外出自粛要請とフレイル新規発症の関連―柏スタディ―.　第27回日本未病学会学術総会. オンライン. 2020.10.31-11.1
26. 藤﨑万裕、高橋競、吉澤裕世、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢：フレイルチェックデータを用いた地域アセスメントによるフレイル予防戦略の検討（優秀演題賞）.　第27回日本未病学会学術総会.　Online. 2020.10.31-11.1
27. 孫輔卿「シンポジウム:　フレイル予防への多面的アプローチ」慢性炎症に基づく高齢者食の評価とフレイル予防食・食環境の提案.　第62回日本老年医学会. オンライン. 2020.8.4-6.
28. 孫輔卿「シンポジウム:　動脈硬化性疾患の予防と治療における性差」性ホルモンの血管保護作用：基礎研究の最新知見. 第52回日本動脈硬化学会. オンライン. 2020.7.17-31.

2. 受賞歴

1. 2020年10月31日. 第27回日本未病学会学術総会. 優秀演題賞
藤﨑万裕、高橋競、吉澤裕世、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢：フレイルチェックデータを用いた地域アセスメントによるフレイル予防戦略の検討
2. 2020年11月11日. 第7回日本サルコペニア・フレイル学会. 優秀演題賞
孫輔卿, 秋下雅弘, 豊島弘一, 田中友規, スタッヴォラヴットアンヤポーン, 呂偉達, 飯島勝矢. 食事の炎症誘導能がサルコペニア有病率および血中hsCRP値に及ぼす影響-食事性炎症指数を用いた検討-
3. 2021年2月7日第14回日本性差医学医療学会、最優秀演題賞
七尾道子, 孫輔卿, 豊島弘一, 大浦美弥, 小室絢, 小川純人, 秋下雅弘. 卵巣摘出は大動脈瘤形成と局所炎症を促進する：マウスモデルを用いた検討

田中敏明

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】すべて　査読有

1. 今枝秀二郎, 孫輔卿, 内山瑛美子, 田中友規, スタッヴォラヴットアンヤポーン, 角川由香, 馬場絢子,　田中敏明, 飯島勝矢, 大月敏雄, 転倒・大腿骨近位部骨折で入院した高齢者の環境移行事例から見た多職種による建築的な転倒予防対策の検討 <1>: 自宅内の転倒原因となる建築的要因の解明,　日本建築学会計画系論文集,　85(773):1387-1395, 2020.
2. Toshiaki Tanaka, Norio Kato, Tomoya Miyasaka, Yusuke Maeda, Takashi Izumi. The effects of trunk sensory stimulation training on standing balance performance in the elderly.2021, International Journal of New Technology and Research.7(1):1-7.2021.
3. Ken-Wei Chang, Chih-Ming Lin, Chen-Wen Yen,Chia-Chi Yang,-Toshiaki Tanaka and Lan-Yuen Guo The Effect of Walking Backward on a Treadmill on Balance, Speed of Walking and Cardiopulmonary Fitness for Patients with Chronic Stroke: A Pilot Study. Int. J. Environ. Res. Public Health.18(5):1-11,2021.
4. Toshiaki Tanaka, Ryo Matsumura, Norio Kato, Nobuya Hashimoto. The Influence on the Walking Ability by the Different Load Support with a Robot Suit for Clinical Application of Robot Therapy. International Journal of New Technology and Research (IJNTR).7(4):31-34, 2021. https://doi.org/10.31871/IJNTR.7.4.7
5. Toshiaki Tanaka , Norio Kato, Mizuki Yagi , Nobuya Hashimoto, Akira Kudo, Syunichi Sugihara. Preliminary Study on the Assessment of Patients with Impaired Visuospatial Ability in Three-Dimensional Space Using a New Head Mounted Display System with Virtual Reality Technology. International Journal of New Technology and Research (IJNTR).7(4):63-68, 2021. https://-doi.org/10.31871/IJNTR.7.8.13
6. 川邉真歩, 三浦理佳, 小島愛子, 江刺尚美, 中島康博, 田中敏明. 乗馬療法が地域在住高齢者のQuality of Life（QOL）と身体機能へ及ぼす効果－2年間の経時的変化－, 作業療法の実践と科学, in press.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】：査読付き

1. Rika Miura, Maho Kawabe, Aiko Kojima, Naomi Esasi, Yasuhiro Nakajima, Norio Kato, Toshiaki Tanaka. A kinematic analysis of dynamic sitting balance ability during horse assisted therapy in elderly people. World Physiotherapy Congress 2021.論文番号632, Dubai, UAE, 2021.4.
2. Rika MIURA, Maho KAWABE, Aiko KOJIMA, Naomi ESASI, Atsushi MITANI, Norio KATO, Yasuhiro NAKAJIMA, Toshiaki TANAKA. Development of a device for retaining good posture of elderly people. 17th HETI International Congress. Seoul, Korea.2021.6. 論文番号ABST-000062.
3. Maho Kawabe, Rika Miura , Aiko Kojima , Naomi Esashi, Yasuhiro Nakajima, Toshiaki Tanaka. Effects of horseback riding for preventive care on the quality of life, the physical function, and the mental health of community-dwelling elderly. 17th HETI International Congress. Seoul, Korea.2021.6. 論文番号ABST-000046.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 田中敏明. 杉原俊一. ロボットと理学療法, PTジャーナル, 医学書院、453-459, 2021.

【著書、編著】

1. 広瀬通孝、伊福部達、鎌田実、田中敏明、他. ジェロテクノロジー、分担執筆（第10章）、2021年

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 記田くるみ, 加藤士雄,中島康博,田中敏明. VRを用いた体幹機能アセスメント・トレーニングコンテンツの開発日本バーチャルリアリティ学会, 2020,9 査読有
2. 八木泉樹, 加藤士雄,中島康博,工藤章, 杉原俊一,田中敏明.　VRを用

いた視空間認知障害向けの評価ツールの開発,日本バーチャルリアリティ学会,2020,9査読有
3. 記田くるみ, 加藤士雄, 田中敏明, 中島康博. 仮想現実を用いた体幹機能評価・トレーニングコンテンツの提案令和2年度日本人間工学会北海道支部大会, 2020,11.査読有
4. 松村亮, 加藤士雄, 田中敏明. ロボットスーツによる支援負荷の違いが歩行に与える影響,令和2年度日本人間工学会北海道支部大会. 2020,11. 査読有
5. 今枝秀二郎、内山瑛美子、孫輔卿、角川由香、田中敏明、 三浦貴大、松田雄二、飯島勝矢、大月敏雄：転倒骨折後の住宅改修に携わる職種と退院後の再転倒事例の分析、日本転倒予防学会 第8回学術集会, 8 (2) :127, 2021.10. 査読有
6. 工藤章, 田中敏明, 神田亮, 杉原俊一, 加藤士雄, 八木泉, 藤原雄介. 半側空間無視患者のバーチャルリアリティ技術を用いた抹消課題中の前頭皮質活動の検討, 日本リハビリテーション医学会, 2021年11月13日, 名古屋市)査読有

田中 友規

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Tanaka T, Son BK, Lyu W, Iijima K. Impact of social engagement on the development of sarcopenia among community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2022. 査読有
2. Tanaka T, Kawahara T, Aono H, Yamada S, Ishizuka S, Takahashi K, Iijima K. A comparison of sarcopenia prevalence between former Tokyo 1964 Olympic athletes and general community-dwelling older adults. J Cachexia Sarcopenia Muscle. 2021; 12(2):339-349. 査読有
3. Tanaka T, Hirano H, Ohara Y, Nishimoto M, Iijima K. Oral Frailty Index-8 in the risk assessment of new-onset oral frailty and functional disability among community-dwelling older adults. Arch Gerontol Geriatr. 2021; 94: 104340. 査読有
4. Tanaka T, Son BK, Iijima K. Poor Health Behaviors among Housebound Japanese Community-Dwelling Older Adults Due to Prolonged Self-Restraint during the First COVID-19 Pandemic: A Cross-Sectional Survey. J Frailty Aging. 2022:1–5. 査読有
5. Son BK, Imoto T, Inoue T, Nishimura T, Tanaka T, Iijima K. Social Detachment Influenced Muscle Mass and Strength during the COVID-19 Pandemic in Japanese Community-Dwelling Older Women. J Frailty Aging. 2022;11(2):231-235. 査読有
6. Shirobe M, Watanabe Y, Tanaka T, Hirano H, Kikutani T, Nakajo K, Sato T, Furuya J, Minakuchi S, Iijima K: Effect of an Oral Frailty Measures Program on Community-Dwelling Elderly People: A Cluster-Randomized Controlled Trial. Gerontology 2021. 査読有
7. Iwasaki M, Ohara Y, Motokawa K, Hayakawa M, Shirobe M, Edahiro A, Watanabe Y, Awata S, Okamura T, Inagaki H, Sakuma N, Obuchi S, Kawai H, Ejiri M, Ito K, Fujiwara Y, Kitamura A, Nofuji Y, Abe T, Iijima K, Tanaka T, Son BK, Shinkai S, Hirano H. Population-based reference values for tongue pressure in Japanese older adults: A pooled analysis of over 5,000 participants. J Prosthodont Res. 2022. 査読有
8. Yoshizawa Y, Tanaka T, Takahashi K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Son BK, Iijima K. Impact of Health Literacy on the Progression of Frailty after 4 Years among Community-Dwelling Older Adults. Int J Environ Res Public Health. 2021;19(1):394. 査読有
9. Son BK, Akishita M, Yamanaka T, Toyoshima K, Tanaka T, Suthutvoravut U, Iijima K, Association between inflammatory potential of the diet and sarcopenia/its components in community-dwelling older Japanese men, Archives of Gerontology and Geriatrics, 97, 2021. 査読有
10. Nakamura M, Okajima K, Matsumoto Y, Tanaka T, Iijima K, Nihei M. Effectiveness of Continuous Grip Strength Measurement Using Social Assistive Robots on Older Adults at Home. J Robotics and Mechatronics 33(4):719-729. 2021. 査読有
11. Umeda-Kameyama Y, Kameyama M, Tanaka T, Son BK, Kojima T, Fukasawa M, Iizuka T, Ogawa S, Iijima K, Akishita M. Screening of Alzheimer's disease by facial complexion using artificial intelligence. Aging (Albany NY). 2021;13(2):1765-1772. 査読有
12. Cherbuin N, Iijima K, Kalula S, Malhotra R, Rasmussen LJ, Chan A, Lafortune L, Harper S, Zheng X, Lindeman D, Walsh E, Hussain R, Burns R, Kristiansen M, Sugawara I, Son BK, Tanaka T, Buckner S, Hoffman J, Combrinck M. Societal Need for Interdisciplinary Ageing Research: An International Alliance of Research Universities "Ageing, Longevity and Health" Stream (IARU-ALH) Position Statement. Biomed Hub. 2021; 25;6(1):42-47. 査読有
13. Nishimoto M, Tanaka T, Iijima K. Is oral frailty related to meal satisfaction? J Aging Sci. 2020; 9: 245. 査読有
14. Murakami M, Iijima K, Watanabe Y, Tanaka T, Iwasa Y, Edahiro A, Ohara Y, Motokawa K, Shirobe M, Hirano H. Development of a simple method to measure masseter muscle mass. Gerodontology. 2020; 37(4):383-388. 査読有
15. Takahashi K, Murayama H, Tanaka T, Takase M, Suthutvoravut U, Iijima K. A qualitative study on the reasons for solitary eating habits of older adults living with family. PLoS One. 2020;15(6): e0234379. 査読有
16. Suthutvoravut U, Takahashi K, Murayama H, Tanaka T, Akishita M, Iijima K. Association Between Traditional Japanese Diet Washoku and Sarcopenia in Community-Dwelling Older Adults: Findings from the Kashiwa Study. J Nutrition, Health & Aging, 2020; 24: 282–289. 査読有
17. 西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut U, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢：オーラルフレイルと食事の満足感の関連：地域在住高齢者による横断検討(柏スタディ) 日本老年医学会雑誌 2020. 57(3): 273-281. 査読有
18. 中村美緒, 岡島宏樹, 松本吉央, 田中友規, 飯島勝矢, 鎌田実, 二瓶美里：在宅高齢者の健康管理を目的としたロボットを用いた握力測定行動継続支援システムの提案―クロスオーバー実験によるコミュニケーションロボット導入の効果― ロボティクス・メカトロニクス講演会講演概要集 2020. 1P2-E17. 査読有
19. 今枝秀二郎, 孫輔卿, 内山瑛美子, 田中友規, スタッヴォラヴット アンヤポーン, 角川由香, 馬場絢子, 田中敏明, 飯島勝矢, 大月敏雄：転倒・大腿骨近位部骨折で入院した高齢者の環境移行事例から見た多職種による建築的な転倒予防対策の検討<1>：自宅内の転倒原因となる建築的要因の解明 日本建築学会計画系論文集 2020. 85(773): 1387-1395. 査読有
20. 泉綾子, 田中友規, 西本美紗, 徳丸剛, 森千夏, 田代紫織, 飯島勝矢：地域在住75歳以上高齢者の低栄養リスク (GLIM基準) の有病率と

咀嚼機能低下の自覚との関連 - 東京都N市における悉皆調査 - 日本未病学会雑誌 26(2): 65-69, 2020. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 田中友規　社会的フレイルの性差　Geriatric Medicine(老年医学) 59(1): 63-66, 2021.査読無
2. 田中友規　災害支援とリハビリテーション栄養(6)ウィズコロナ社会におけるリハビリテーション栄養的支援の必需性.　リハビリテーション栄養学会誌 4(2), 189-192. 2020. 査読無
3. 田中友規　オーラルフレイルの疫学.　臨床栄養　137(4):　529-533, 2020. 査読無
4. 田中友規　骨格筋量の評価法とスクリーニング法　Medical Practice 37(5): 695-700, 2020. 査読無査読無
5. 田中友規　フレイル予防に資する社会参加を軸とする地域づくり. 公益財団法人長寿科学振興財団.令和2年度業績集. 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Tanaka T. Validity of community-based frailty check-up by volunteers for predicting adverse health outcomes. MIRAI 2.0 Digital Research and Innovation Week. 2021/6/7-11. 査読無
2. Tanaka T, Son BK, and Iijima K. Lengthening of self-restraint life due to COVID-19 pandemic leads to housebound status and poor health behaviors in community-dwelling older adults. Healthy ageing: research, strategies and actions IARU graduate student virtual conference2020. 9.30-10.2査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 田中友規　歯周病への対応から始まるフレイル予防：オーラルフレイルの視点から.第64回秋季日本歯周病学会学術大会. 2021/10/15-16 名古屋.(ランチョンセミナー) 査読無
2. 田中友規　オーラルフレイルへの対応の視点「地域で支えるオーラルフレイル」.第8回日本サルコペニア・フレイル学会学術集会　2021/11/6-7　大阪.(シンポジウム)　査読無田中友規　地域を巻き込むオーラルフレイル対策.第30回日本有病者歯科学会. 2021/7/3-4. 東京.(シンポジウム) 査読無査読無
3. 田中友規　フレイル予防の視点をもった地域づくりの必要性～住民主体の地域活動「フレイルチェック」を中心としたフレイル予防の地域づくり～ 第62回日本老年医学会学術集会 2020/8/4-6　オンライン開催(シンポジウム)
4. 田中友規　孫輔卿　呂偉達　飯島勝矢.　COVID-19パンデミックに伴う外出自粛要請とフレイル新規発症の関連―柏スタディ― 第27回日本未病学会学術総会　2020/10/31-11/1　オンライン開催査読無
5. 田中友規　　住民主体の地域活動「フレイルチェック」を中心としたフレイル予防の地域～ウィズコロナ社会における筋肉量や身体機能評価の重要性～　第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会 2020/12/1-15 オンライン開催(シンポジウム) 査読無
6. 田中友規　呂偉達　孫輔卿　飯島勝矢.　地域在住高齢者のフレイル発症に関連する社会的要因の性差：柏スタディより　第14回　日本性差医学・医療学会学術集会 2020/2/6-7. オンライン開催　査読無
7. 田中友規　佐藤麻美　孫輔卿　飯島勝矢. 新型コロナウイルス感染症流行による生活・健康状態の変化とサルコペニアとの関連 神奈川県平塚市在住高齢者における前向き調査.第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会 2020/12/1-15 オンライン開催　査読無
8. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 秋下雅弘, 飯島勝矢.　地域在住高齢者のフレイル・サルコペニア有病率との横断的検討－食生活・身体活動・社会性の3つの重複の有効性－. 第25回日本未病システム学会学術総会 2021/11/20-21. 大阪. 査読無
9. 貞清香織, 佐藤麻美, 田中友規, 孫輔卿, 飯島 勝矢. 活動自粛による高齢者の生活・健康状態の変化～主観的歩行速度の違いによる比較～. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会学術集会 2021/11/6-7 大阪. 査読無
10. 孫輔卿, 三浦貴大, 角川由香, 藪謙一郎, 田中友規, 呂偉達, 金東律, 楊映雪, 張俊華, 佐藤雄太, 榊原拓磨, 徳丸剛, 池田一智, 飯島勝矢. 地域住民同士の双方向オンライン型フレイルチェック開発と地域実装―対面とオンラインの持続的フレイル予防システムを目指して―. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会学術集会　2021/11/6-7　大阪. 査読無
11. 孫輔卿,　井本俊之, 井上智博, 西村天利, 田中友規, 飯島勝矢. コロナ禍での外出自粛による心身機能低下(コロナフレイル)の検討：体幹筋量の低下と地域活動維持による握力の低下抑制効果.　第8回日本サルコペニア・フレイル学会学術集会　2021/11/6-7　大阪.　査読無
12. 永谷美幸, 田中友規, 孫輔卿, 川村淳, 平野浩彦, 飯島勝矢. 地域高齢者のオーラルフレイルは軽度認知機能低下の予測因子である：柏スタディ.　第8回日本サルコペニア・フレイル学会学術集会 2021/11/6-7　大阪. 査読無
13. 吉澤裕世, 高橋競, 藤崎万裕, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢. 複数の文化活動に参加することはフレイル予防につながる可能性　第8回日本サルコペニア・フレイル学会学術集会 2021/11/6-7　大阪. 査読無
14. 高橋競,田中友規, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 地域高齢者における夜間頻尿 フレイルの重複とポリファーマシーとの関連. 第80回日本公衆衛生学会総会. 2021/12/21-23. 東京. 査読無
15. 吉澤裕世, 高橋競, 藤崎万裕, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢. 高齢者における居住地周辺の環境とフレイル及び地域活動との関係.　第80回日本公衆衛生学会総会. 2021/12/21-23. 東京. 査読無
16. 佐々木裕伊, 浜田将太, 孫輔卿, 田中友規, 土屋瑠見子, 北村智美, 飯島勝矢.地域在住高齢者におけるうつ傾向・精神的ウェルビーイングとフレイルとの関連：柏スタディ. 第32回日本疫学会学術総会. 2022/1/26-28. 千葉. 査読無
17. 孫輔卿,秋下雅弘, 豊島弘一, 田中友規, スタッヴォラヴットアンヤポーン, 呂偉達, 飯島勝矢. 食事の炎症誘導能がサルコペニア有病率および血中hsCRP値に及ぼす影響-食事性炎症指数を用いた検討-第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会 2020/12/1-15 オンライン開催. 査読無
18. 高橋競, 孫輔卿, 田中友規, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 呂偉達, 飯島勝矢. フレイルサポーターによる地域活動に関する混合研究(ポスター発表)第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会　2020/12/1-15　オンライン開催 査読無
19. 高橋競, 田中友規, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. 地域在住高齢者の夜間頻尿による活動能力への影響に関する混合研究(ポスター発表)第79回日本公衆衛生学会総会 2020/10/20-22. オンライン開催. 査読無
20. 吉澤裕世, 藤崎万裕, 田中友規, 高橋競, 飯島勝矢. 通いの場におけるアウトリーチ体制構築に向けた課題-SERVQUALを用いて-(ポスター発表)第79回日本公衆衛生学会総会　2020/10/20-22.　オンライン開催. 査読無

2. 受賞歴

1. 2020年3月「John Morley Award (JAMDA journal) 」(Chen LK, Woo

J, Assantachai P, Auyeung TW, Chou MY, Iijima K, Jang HC, Kang L, Kim M, Kim S, Kojima T, Kuzuya M, Lee JSW, Lee SY, Lee WJ, Lee Y, Liang CK, Lim JY, Lim WS, Peng LN, Sugimoto K, Tanaka T, Won CW, Yamada M, Zhang T, Akishita M, Arai H. Asian Working Group for Sarcopenia: 2019 Consensus Update on Sarcopenia Diagnosis and Treatment.

2. 2021年5月「第28回日本老年医学会 優秀論文賞」(西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvravut Unyaporn, 藤﨑万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルと食事の満足感の関連:地域在住高齢者による横断検討(柏スタディ))
3. 2020年11月「第3回2019年度日本未病学会最優秀論文賞プロシーディングの部」(西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvravut Unyaporn, 藤﨑万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルは残存歯数減少よりも口腔関連QOLと強く関連する:地域在住高齢者による横断検討(柏スタディ))

高瀬 麻以

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Takahashi K, Murayama H, Tanaka T, Takase M, Suthutvoravut U, Iijima K. A qualitative study on the reasons for solitary eating habits for older adults living with family. PLoS One, 2020; 15(6): e0234379. 査読有
2. Takase M, Ogino R, Yoshida K, Kusu H, Kenmochi T, Goto J. Qualitative Research on the Primary Effect of Fish Pet Ownership Using the Bottleium, a Bottle-Type Aquarium, on Community Dwelling Older Adults in Japan: A Potential Preventive Measure Towards Social Isolation. Geriatrics, 2021; 6(1). 査読有
3. 高瀬麻以、ホネイン カリム、阿部浩子、工藤正美、小山内豪、石塚佳久、丸山道生. BCAA配合飲料を飲用した回復期リハビリテーション病棟入院患者の身体項目の変化. 日本臨床栄養代謝学会 JSPEN誌, 2021; 3(5). 査読有
4. 渡邉彩、村山洋史、高瀬麻以、杉浦圭子、藤原佳典. 高齢期における就労と主観的健康感の横断的関連:システマテックレビュー. 日本公衆衛生学会誌, 2021. (早期公開中) 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Matsuoka Y, Zhang J, Lyu W, Aoyagi K, Takase M, Ogino R, Goto J. The Association of Early-Morning Eating Habits With High Nutrient Intake by Older Japanese Adults Living Alone. GSA 2020 Annual Scientific Meeting Online, 2020. 11. 4. 査読有
2. Kazembe N, Kim H, Wang C, Higuma S, Yang Y, Kim T, Ogino R, Takase M. Impact of COVID-19 pandemic on senior-to-senior social engagement activities at a community space in Japan. GSA 2020 Annual Scientific Meeting Online, 2020. 11. 4. 査読有
3. Takase M, Ogino R, Yoshida K, Kusu H, Kenmochi T. The Effect of Bottleium, a Bottle-Type Aquarium Ownership on Community-Dwelling Older Adults. GSA 2020 Annual Scientific Meeting Online, 2020. 11. 4. 査読有
4. Kim D, Masuda S, Higuma Y, Yang Y, Terasawa S, Takase M, Ogino R, Goto J. A Community Space with Diverse Activities Support Older Adults Social Participation and Sustain Social Connection. GSA 2020 Annual Scientific Meeting Online, 2020. 11. 4. 査読有
5. Takase M, Ogino R, Nitanai R, Goto J. Child support group by older adults successfully hosted on-line event during the COVID-19 pandemic. GSA 2021 Annual Scientific Meeting Online, 2021. 11.12. 査読有
6. Takase M, Takahashi K, Ogino R, Tanaka T, Goto J, Iijima K. Older adults with low friend network at baseline resulted in low level of functional capacity 2-years later. GSA 2021 Annual Scientific Meeting Online, 2021. 11.12. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 高瀬麻以, 村山洋史, 渡邉彩, 西中川まき, 藤原佳典, “就労と認知機能低下、認知症発症の関連:高齢者と対象としたシステマティックレビュー”, 第79回日本公衆衛生学会総会, オンライン開催, 2020.10.20.
2. 村山洋史, 高瀬麻以, 渡邉彩, 西中川まき, 藤原佳典, “就労と死亡の関連:高齢者を対象としたシステマティックレビュー, 第79回日本公衆衛生学会総会, オンライン開催, 2020.10.20.
3. 高瀬麻以、ホネインカリム、阿部浩子、工藤正美、河原崎崇雄、小山内豪、上坂英二、石塚佳久、中村岳雪、丸山道生:BCAA配合飲料が運動機能リハビリテーションの効果に及ぼす影響の検討. 第36回日本臨床栄養学会学術集会, オンライン 2021.7.21.
4. 六藤陽子, 村山洋史, 相良友哉, 杉浦圭子, 高瀬麻以, 中本五鈴, 東憲太郎, 藤原佳典. 高年齢介護助手の全国での導入実態:介護老人保健施設の全国調査(第1報). 第80回日本公衆衛生学会大会, 東京, 2021.12.21-23.
5. 相良友哉, 村山洋史, 杉浦圭子, 高瀬麻以, 中本五鈴, 六藤陽子, 東憲太郎, 藤原佳典. 高年齢介護助手導入への施設の態度や考え方:介護老人保健施設の全国調査(第2報). 第80回日本公衆衛生学会大会, 東京, 2021.12.21-23.
6. 高瀬麻以, 村山洋史, 相良友哉, 杉浦圭子, 中本五鈴, 六藤陽子, 東憲太郎, 藤原佳典. 高年齢介護助手の雇用と介護職員の情緒的消耗:介護老人保健施設の全国調査(第3報). 第80回日本公衆衛生学会大会, 東京, 2021.12.21-23.
7. 杉浦圭子, 村山洋史, 相良友哉, 六藤陽子, 高瀬麻以, 中本五鈴, 東憲太郎, 藤原佳典. 高年齢介護助手の業務内容とメリットとの関連:介護老人保健施設の全国調査(第4報). 第80回日本公衆衛生学会大会, 東京, 2021.12.21-23.
8. 中本五鈴, 村山洋史, 相良友哉, 杉浦圭子, 六藤陽子, 高瀬麻以, 東憲太郎, 藤原佳典. 高年齢介護助手の情緒的消耗感の関連要因:介護老人保健施設の全国調査(第5報). 第80回日本公衆衛生学会大会, 東京, 2021.12.21-23.
9. 野中久美子, 村山洋史, 村山幸子, 杉浦圭子, 高瀬麻似, 渡邉彩, 斎藤みほ. 「プロボノ」を入り口に若中年世代を地域活動へ誘導する可能性の検討. 第80回日本公衆衛生学会大会, 東京, 2021.12.21-23.
10. 渡邉彩, 村山洋史, 高瀬麻以, 杉浦圭子, 藤原佳典:高齢期における就労と主観的健康感の縦断的関連:システマティックレビュー. 第80回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2021.12.21-23.
11. 六藤陽子, 村山洋史, 高瀬麻以, 中本五鈴, 野中久美子, 桜井良太, 藤原佳典. 高齢期の就労およびその理由と社会的孤立の関連. 第32回日本疫学会学術総会, 千葉, 2022.1.26-28.
12. 村山洋史, 佐々木周作, 髙橋勇太, 高瀬麻以, 田口敦子. ナッジ・メッセージは高齢期の社会参加活動を促進するか?第80回日本公衆衛生学会大会, 東京, 2021.12.21-23.

2. 受賞歴

1. ポスター賞
村山洋史, 高瀬麻以, 渡邉彩, 西中川まき, 藤原佳典, “就労と死亡の関連：高齢者を対象としたシステマティックレビュー， 第79回日本公衆衛生学会総会, オンライン開催, 2020.10.20.

中村美緒

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Approaching Behavior Analysis for Improving a Mobile Communication Robot in a Nursing Home
Misato Nihei, Mio Nakamura, Kohei Ikeda, Kazuki Kawamura, Hiroki Yamashita, Minoru Kamata
2. Impact of the introduction of a verbal socially assistive robot on the relationship between older people and their caregivers in a nursing home
Mio Nakamura, Misato Nihei, Noriko Kato, Takenobu Inoue
SN Applied Sciences 2(1657) 2020年9月.査読有
3. A case of effective usage of a weighted blanket for a person with severe dementia
Mio Nakamura, Nodoka Yamauchi
Psychogeriatrics 2021年1月 .査読有
4. Determining Possible Risks of Introducing Socially Assistive Robots with Mobility Functions to Aged Care Facilities
Tomoya Hattori, Mio Nakamura, Kazuki Kawamura, Misato Nihei
Lecture Notes in Computer Science 145-155 2021年 .査読有
5. Effectiveness of Continuous Grip Strength Measurement Using Social Assistive Robots on Older Adults at Home
Mio Nakamura, Kohki Okajima, Yoshio Matsumoto, Tomoki Tanaka, Katsuya Iijima, Misato Nihei
Journal of Robotics and Mechatronics 33(4) 719-729 2021年8月20日 .査読有
6. Mobile, Socially Assistive Robots Incorporating Approach Behaviour: Requirements for Successful Dialogue with Dementia Patients in a Nursing Home
Mio Nakamura, Kohei Ikeda, Kazuki Kawamura, Misato Nihei
Journal of Intelligent & Robotic Systems 103(45) 2021年9月 .査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 在宅高齢者の健康管理を目的としたロボットを用いた握力測定行動継続支援システムの提案-クロスオーバー実験によるコミュニケーションロボット導入の効果-
中村美緒, 岡島宏樹, 松本吉央, 松本吉央, 田中友規, 飯島勝矢, 鎌田実, 二瓶美里
日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会講演論文集(CD-ROM) 2020 2020年
2. 特別な配慮を要する保育園児に対するWeighted Blanketの効果
木村まり子, 山内閑子, 中村美緒
日本作業療法学会抄録集(CD-ROM) 54th 2020年
3. 中途覚醒を呈する自閉スペクトラム障害児のWeighted Blanketの使用効果
中村美緒, 木村まり子, 山内閑子
日本作業療法学会抄録集(CD-ROM) 54th 2020年
4. 介護老人福祉施設での夜間の困りごとに対する介護者支援の取組み-作業療法士による人とモノを介した環境調整マネジメント-
渡邉聡, 中村美緒, 山内閑子
日本作業療法学会抄録集(CD-ROM) 54th 2020年
5. VRを用いた高齢者の自律神経活動調整のための基礎的検討
浜田佳歩, 二瓶美里, 中村美緒, 檜山敦, 登嶋健太
日本バーチャルリアリティ学会大会論文集(CD-ROM) 25th 2020年
6. 認知症-最近の動向 認知症高齢者の支援機器開発
二瓶美里, 中村美緒
カレントテラピー 39(7) 2021年
7. ニオイセンサを用いた生活空間における常在臭のモニタリング手法の提案 生活機能低下と常在臭の関係について
早坂涼哉, 中村美緒, 二瓶美里
LIFE講演概要集(CD-ROM) 2020/2021 2021年

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. VRを用いた高齢者の自律神経活動調整のための基礎検討
濱田佳歩, 二瓶美里, 中村美緒, 檜山敦, 登嶋健太
第25回バーチャルリアリティ学会大会論文集, 1C3-5, 4 pages, 2020年

藪 謙一郎

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Yoshioka D, Kogami H, Kang SI, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT-Setting Method Among Senior Citizens in Japan, Lecture Notes in Computer Science, 2021;12786:278-292. 査読有
2. Miura T, Ogino R, Nishino A, Yabu K, Kimata M, Okata J, Ifukube T. Lesson Learned from the Cases Utilizing Information Systems in Support Sites for Seniors in Japan: Helping Caregivers on Information Sharing by ICT and Seniors on Vitalizing Their Life by IoT. Lecture Notes in Computer Science, 2021;12786:203-212. 査読有
3. Yabu K, Miura T, Segawa T, Murakami Y, Nakahashi T. Designing Local Assessment Workshops and Web-Mobile Applications for Facilitating the Workshop: Based on the Schemes of Problem/Project-Based Learning (PBL) and ADDIE Model. Lecture Notes in Computer Science, 2021;12786:114-125. 査読有
4. Miura T, Matsuo M, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. GAME: Game As a Measurement Environment: Scheme to Evaluate Interfaces and Game Contents Based on Test Theories. Proceedings of the ACM on Interactive, Mobile, Wearable and Ubiquitous Technologies, 2020;4(4), Article No. 166:1-30. 査読有
5. Matsuo M, Miura T, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. Inclusive Action Game Presenting Real-time

Multimodal Presentations for Sighted and Blind Persons. Proceedings of the 2021 International Conference on Multimodal Interaction (ICMI'21), 2021:62-70. 査読有

6. Takeuchi M, Ahn J, Lee K, Takaki K, Ifukube T, Yabu K, Takamichi S, Ueha R, Sekino M. Hands-free wearable electrolarynx using linear predictive coding residual waves and listening evaluation. Advanced Biomedical Engineering, 2022; 11: 68–75. 査読有
7. 三浦貴大, 鈴木淳也, 藪謙一郎, 上田一貴, 伊福部達. 視覚障害者のための二次元パタンを音提示するスピーカマトリクス. 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, 2020; 25(3): 228-231. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Ito K, Kogami H, Kang S, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Yoshioka D, Wu J, Fujisaki M, Sugarawa I, Miura T, Yabu K, Ifukube T. Configuring interface for IoT: Natural user interface study on senior adults in Japan. IEEE 3rd Global Conference on Life Sciences and Technologies (LifeTech). 2021.3.9-11. 査読有
2. Yoshioka D, Kogami H, Kang SI, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT setting method among senior citizens in Japan. 7th International Conference, ITAP 2021, Held as Part of the 23rd HCI International Conference, HCII 2021, Virtual Event, 2021.7.24–29. 査読有,
3. Miura T, Ogino R, Nishino A, Yabu K, Kimata M, Okata J, Ifukube T. Lesson learned from the Cases Utilizing Information Systems in Support Sites for Seniors in Japan: Helping Caregivers on information sharing by ICT and Seniors on Vitalizing Their Life by IoT. 7th International Conference, ITAP 2021, Held as Part of the 23rd HCI International Conference, HCII 2021, Virtual Event, 2021.7.24–29. 査読有
4. Yabu K, Miura T, Segawa T, Murakami Y, Nakahashi T. Designing Local Assessment Workshops and Web-Mobile Applications for Facilitating the Workshop. 7th International Conference, ITAP 2021, Held as Part of the 23rd HCI International Conference, HCII 2021, Virtual Event, 2021.7.24–29. 査読有,
5. Kang S., Yoshizaki R., Kogami H., Nakano K., Sakurai Y., Yoshioka D., Wu J., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura T., Yabu K., Ito K., Akiyama H., Otsuki T., Ifukube T. Preliminary evaluation of an IoT setting method for universal design. International Conference on Design and Concurrent Engineering 2021 & Manufacturing Systems Conference 2021, Virtual. 2021. 9. 3-4. 査読有.
6. Miura T, Matsuo M, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. GAME: Game As a Measurement Environment: Scheme to Evaluate Interfaces and Game Contents Based on Test Theories. ACM UbiComp 2021, Online, 2021.9.21-26. 査読有
7. Matsuo M, Miura T, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. Inclusive Action Game Presenting Real-time Multimodal Presentations for Sighted and Blind Persons. 2021 International Conference on Multimodal Interaction (ICMI '21). 2021.10.18-22. 査読有
8. Kang SI, Ito K, Yoshizaki R, Kogami H, Nakano K, Yoshioka D, Sakurai Y, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ifukube T. Enriching IoT Web Application Experience by Integrating Containerized Edge Resource. 2022 IEEE 4th Global Conference on Life Sciences and Technologies, Osaka, Japan . 2022. 3. 7-9. 査読有.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 西野亜希子, 荻野亮吾, 藪謙一郎, 三浦貴大. 高齢者の地域継続居住に求められる施設配置と提供サービスに関する研究：福岡県大牟田市の地域交流拠点とその運営母体の取り組みを事例として. 日本福祉のまちづくり学会第23回大会, オンライン, 2020.10.18. 査読無
2. 竹内雅樹, 安在帥, 松藤圭亮, 李根学, 小笠原佑樹, 高木健, 伊福部達, 藪謙一郎, 高道慎之介, 上羽瑠美, 関野正樹, 小野寺宏. LPC 残差波を用いて自然発声に近い音声を得るハンズフリー型電気式人工喉頭の開発. 電気学会マグネティックス研究会, オンライン. 2020. 11. 19. 査読無(優秀論文発表賞 受賞)
3. 竹内雅樹, 安在帥, 松藤圭亮, 李根学, 小笠原佑樹, 高木健, 伊福部達, 藪謙一郎, 高道慎之介, 上羽瑠美, 関野正樹, 小野寺宏. LPC 残差波を用いたハンズフリー型電気式人工喉頭の開発及び従来型の電気式人工喉頭との音声比較. 日本生体医工学会関東支部若手研究者発表会 オンライン, 2020. 12. 12. 査読無(優秀論文発表賞 受賞)
4. 藪謙一郎. (招待講演)重度身体障害者のオンライン会議ツール活用の工夫からみる音声支援. 日本音響学会2021年春季研究発表会, オンライン, 2021. 3. 10-12. 査読無
5. 藪謙一郎, 伊福部達. 簡易声質維持機能を持つウェアラブルな構音障害支援システムの音声処理装置の検討. 日本音響学会2021年春季研究発表会, オンライン. 2021. 3. 10-12. 査読無
6. 細萱一立, 伊藤研一郎, 藤﨑万裕, 三浦貴大, 藪謙一郎, 菅原育子, 伊福部達, 秋山弘子. COVID-19 流行による高齢者の地域交流活動への影響-情報機器への適応に伴う暮らしと地域交流活動の変化-. 日本老年社会科学会第63回大会, オンライン, 2021. 6. 12 -27. 査読無
7. 藪謙一郎, 伊福部達. 重度障害者の視線入力によるライブ演奏を目指した音楽インタフェースアプリの開発. 日本音響学会2021年秋季研究発表会, 3-10-1, オンライン, 2021.9.7-9. 査読無
8. 孫輔卿, 三浦貴大, 角川由香, 藪謙一郎, 田中友規, 呂偉達, 金東律, 楊映雪, 張俊華, 佐藤雄太, 榊原拓磨, 徳丸剛, 池田一智, 飯島勝矢. 地域住民同士の双方向オンライン型フレイルチェック開発と地域実装―対面とオンラインの持続的フレイル予防システムを目指して―. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会, Web開催, 2021. 11. 6-7, 査読無

秋山 弘子

【2020年度講演】

1. 9月23日ケンブリッジ特別カンファレンス(日経主催)
2. 11月14日北海道公衆衛生学会講演
3. 11月5日関西経済同友会・KANSAI未来都市委員会講演
4. 11月25日デジタル多摩シンポジウム@日立中央研究所
5. 12月9日ジェロントロジー推進シンポジウム@伊藤国際
6. 12月17日高齢者 自立生活支援ICT サービス研究会
7. 3月9日外務省講師派遣事業トロント領事館講演
8. 3月18日外務省講師派遣事業ロサンゼルス総領事館講演
9. 3月26日講演@船橋こひつじ園
10. 3月31日講演@アイオーシニアジャパン

【2021年講演】

1. 5月20日布施学術基金公開講演会
2. 6月10日日中韓フォーラム
3. 9月12日群馬県南牧村フォーラム
4. 9月27日ストックホルム大学群シンポジウム
5. 10月7日大阪ガスセミナー
6. 10月25日講演：茨城県シルバー令和3年度女性役員による会員拡大検討会
7. 11月7日老年応用学会シンポジウム
8. 11月10日AAG基調講演
9. 11月18, 19日第3回地域共生社会推進全国サミットinかまくら
10. 12月22日日経セミナー
11. 2月28日JSOL社研究会講演
12. 3月3日武蔵野大学シンポジウム
13. 3月11日ベルリン講師派遣事業講師
14. 3月17日ポートランドシンポジウム

【執筆等】

1. 提言「全員参加・生涯参加」,日本労働研究雑誌,独立行政法人労働政策研究・研修機構,2021.9.1
2. 「貢献寿命」の延伸を,Aging&Health,長寿科学振興財団,2021.10.13
3. New Possibilities for an Aging Society高齢社会の新たな可能性, Highlighting JAPAN 2021,PUBLIC RELATIONS OFFICE GOVERNMENT OF JAPAN,2021.2.7
4. 日本は幸福な長寿社会モデルの先駆けになれる,賢人論。,みんなの介護,2021.10.25

【取材】

1. 2021.2.07 政府広報誌Highlighting JAPAN 2021 New Possibilities for an Aging
   Society 外務省
2. 2021.12.11The Economist On the front line The Economist

伊福部 達

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Yoshioka D, Kogami H, Kang SI, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT-Setting Method Among Senior Citizens in Japan, Lecture Notes in Computer Science, 2021;12786:278-292. 査読有
2. Miura T, Ogino R, Nishino A, Yabu K, Kimata M, Okata J, Ifukube T. Lesson Learned from the Cases Utilizing Information Systems in Support Sites for Seniors in Japan: Helping Caregivers on Information Sharing by ICT and Seniors on Vitalizing Their Life by IoT. Lecture Notes in Computer Science, 2021;12786:203-212. 査読有
3. Miura T, Matsuo M, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. GAME: Game As a Measurement Environment: Scheme to Evaluate Interfaces and Game Contents Based on Test Theories. Proceedings of the ACM on Interactive, Mobile, Wearable and Ubiquitous Technologies, 2020;4(4), Article No. 166:1-30. 査読有
4. Matsuo M, Miura T, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. Inclusive Action Game Presenting Real-time Multimodal Presentations for Sighted and Blind Persons. Proceedings of the 2021 International Conference on Multimodal Interaction (ICMI'21), 2021:62-70. 査読有
5. Takeuchi M, Ahn J, Lee K, Takaki K, Ifukube T, Yabu K, Takamichi S, Ueha R, Sekino M. Hands-free wearable electrolarynx using linear predictive coding residual waves and listening evaluation. Advanced Biomedical Engineering, 2022; 11: 68–75. 査読有
6. 三浦貴大, 鈴木淳也, 藪謙一郎, 上田一貴, 伊福部達. 視覚障害者のための二次元パタンを音提示するスピーカマトリクス. 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, 2020; 25(3): 228-231. 査読有

【著書、編著】

1. 伊福部達, 感覚・コミュニケーションの支援. 廣瀬通孝(編), 伊福部達(編), ジェロンテクノロジー —高齢社会を支える情報通信技術の展開（シリーズ超高齢社会のデザイン).東京大学出版会, 年：2021, 全256頁

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Ito K, Kogami H, Kang S, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Yoshioka D, Wu J, Fujisaki M, Sugarawa I, Miura T, Yabu K, Ifukube T. Configuring interface for IoT: Natural user interface study on senior adults in Japan. IEEE 3rd Global Conference on Life Sciences and Technologies (LifeTech). 2021.3.9-11. 査読有
2. Yoshioka D, Kogami H, Kang SI, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT setting method among senior citizens in Japan. 7th International Conference, ITAP 2021, Held as Part of the 23rd HCI International Conference, HCII 2021, Virtual Event, 2021.7.24–29. 査読有,
3. Miura T, Ogino R, Nishino A, Yabu K, Kimata M, Okata J, Ifukube T. Lesson learned from the Cases Utilizing Information Systems in Support Sites for Seniors in Japan: Helping Caregivers on information sharing by ICT and Seniors on Vitalizing Their Life by IoT. 7th International Conference, ITAP 2021, Held as Part of the 23rd HCI International Conference, HCII 2021, Virtual Event, 2021.7.24–29. 査読有
4. Kang S., Yoshizaki R., Kogami H., Nakano K., Sakurai Y., Yoshioka D., Wu J., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura T., Yabu K., Ito K., Akiyama H., Otsuki T., Ifukube T. Preliminary evaluation of an IoT setting method for universal design. International Conference on Design and Concurrent Engineering 2021 & Manufacturing Systems Conference 2021, Virtual. 2021. 9. 3-4. 査読有.
5. Miura T, Matsuo M, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. GAME: Game As a Measurement Environment: Scheme to Evaluate Interfaces and Game Contents Based on Test Theories. ACM UbiComp 2021, Online, 2021.9.21-26. 査読有
6. Matsuo M, Miura T, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. Inclusive Action Game Presenting Real-time Multimodal Presentations for Sighted and Blind Persons. 2021 International Conference on Multimodal Interaction (ICMI '21). 2021.10.18-22. 査読有
7. Kang SI, Ito K, Yoshizaki R, Kogami H, Nakano K, Yoshioka D,

Sakurai Y, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ifukube T. Enriching IoT Web Application Experience by Integrating Containerized Edge Resource. 2022 IEEE 4th Global Conference on Life Sciences and Technologies, Osaka, Japan. 2022. 3. 7-9. 査読有.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 竹内雅樹, 安在帥, 松藤圭亮, 李根学, 小笠原佑樹, 高木健, 伊福部達, 藪謙一郎, 高道慎之介, 上羽瑠美, 関野正樹, 小野寺宏. LPC 残差波を用いて自然発声に近い音声を得るハンズフリー型電気式人工喉頭の開発. 電気学会マグネティックス研究会, オンライン. 2020. 11. 19. 査読無(優秀論文発表賞 受賞)
2. 竹内雅樹, 安在帥, 松藤圭亮, 李根学, 小笠原佑樹, 高木健, 伊福部達, 藪謙一郎, 高道慎之介, 上羽瑠美, 関野正樹, 小野寺宏. LPC 残差波を用いたハンズフリー型電気式人工喉頭の開発及び従来型の電気式人工喉頭との音声比較. 日本生体医工学会関東支部若手研究者発表会 オンライン, 2020. 12. 12. 査読無(優秀論文発表賞 受賞)
3. 藪謙一郎, 伊福部達. 簡易声質維持機能を持つウェアラブルな構音障害支援システムの音声処理装置の検討. 日本音響学会2021年春季研究発表会, オンライン. 2021. 3. 10-12. 査読無
4. 細萱一立, 伊藤研一郎, 藤﨑万裕, 三浦貴大, 藪謙一郎, 菅原育子, 伊福部達, 秋山弘子. COVID-19 流行による高齢者の地域交流活動への影響-情報機器への適応に伴う暮らしと地域交流活動の変化-. 日本老年社会科学会第63回大会, オンライン, 2021. 6. 12 -27. 査読無
5. 藪謙一郎, 伊福部達. 重度障害者の視線入力によるライブ演奏を目指した音楽インタフェースアプリの開発. 日本音響学会2021年秋季研究発表会, 3-10-1, オンライン, 2021.9.7-9. 査読無

【その他(査読なし)】

1. 伊福部達, 第1話 JSTの国家的プロジェクト「高齢社会(略称)」が始動するまで. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2020/10/30, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog1
2. 伊福部達, 第2話 高齢化の推移を直視する. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2020/12/01, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog2
3. 伊福部達, 第3話 進化の過程から考える寿命. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2020/01/25, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog3
4. 伊福部達, 第4話 延び続ける平均寿命. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2021/03/12, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog4
5. 伊福部達, 第5話 脳の進化、コンピュータの進化. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2021/04/07, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog5
6. 伊福部達, 第6話 デジタル社会はヒトの脳にどのような影響を与えるのか. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2021/04/30, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog6
7. 伊福部達, 第7話 高齢社会のワクチン騒動を考える,. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2021/06/23, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog7
8. 伊福部達, 第8話 多様化するコミュニティの中、その1「コミュニケーション・ロボット」の出番. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2021/08/31 , https://blog.bitis.co.jp/column2-blog8
9. 伊福部達, 第9話 多様化するコミュニティの中、その2「ポケモンGO」の出番. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2021/10/01, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog9
10. 伊福部達, 第10話 「サイバー」って何だろう、高齢社会にどのように関わるのか?, . (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2021/10/29, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog10
11. 伊福部達, 第11話 人工心肺(ECMO)からコミュニティにおけるサイバネティックスへ. (株)ビーティス, Bitis ブログ-コラム-高齢社会を豊かにするテクノロジーを求めて. 2021/11/29, https://blog.bitis.co.jp/column2-blog11
12. 伊福部達, ピウスツキ蝋管と緊急地震速報チャイム. 北海道ポーランド協会誌, 2021年6月, http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE103.pdf
13. 伊福部達,『聴く、話す、見る』を助けるテクノロジー, 大分合同新聞社特別講演, 2021年6月25日
14. 伊福部達, 心と体に届く福祉工学の知恵 -命を守る音-. パシフィック・ミュージック・フェステバル協会誌, vol.82, 2021年11月
15. 伊福部達, 心と体に届く福祉工学の知恵-音の福祉工学-. パシフィック・ミュージック・フェステバル協会誌, vol. 83 2021年12月
16. 伊福部達, 聴覚を知り、暮らしを助ける. XD MAGAZINE VOL.03, 株式会社プレイド, pp.30-33, 2021年12月
17. 伊福部達, 福祉工学から共用品へ. 情報誌インクル, vol.136, 公益財団法人 共用品推進機構, 2022年1月
18. 伊福部達, つながり方が変わる予感. 日経新聞(取材記事), 2022年3月27日

辻 哲夫

1. 著作等

【著書】

1. 「地域包括ケアのまちづくり」 東京大学高齢社会総合研究機構 編 東大出版社 2020

【論文】

1. 「グループホームを取り巻く地域の変容ー柏プロジェクトからの報告」『令和 ゆったり』 創刊150号記念.5・6月 公益社団法人 日本認知症グループホーム協会pp12-13 2020
2. 「地域包括ケアの先に目指すもの:テクノロジーを活用したコンパクトなまちづくり」『JOURNAL AUTOMOTIVE ENGINEERS』 Vol.74.公益社団法人自動車技術会 pp27-33 2020
3. 「単身高齢者のメンタルヘルス～地域包括ケアの現状と課題～」『Pharma Medica』 Vol.38 No.8 メディカルレビュー社 pp57-61 2020
4. 「フレイル予防の新たなる展開に向けて ソーシャル・インパクト・ボンドを活用した 飯塚市フレイル予防実証事業」『保健師ジャーナル』 Vol.76. No.9 医学書院 PP.713-763 2020
5. 「地域包括ケア政策から医療への問いかけー最期まで食べ続けることの支援」『ニューダイエットセラピー日本臨床栄養協会誌』Vol.35 No.4 日本臨床栄養協会 pp.21-28 2020
6. 「超高齢・人口減少社会に期待される 新しい看護の形」『看護 日

本看護協会機関誌』Vol.72　No.3　公益社団法人　日本看護協会　pp.48-55 2020
7. 「超高齢・人口減少社会に期待される　新しい看護の形」『コミュニティケア』Vol.22 No.3 日本看護協会　pp.55-58 2020
8. 「地域との連携『千葉県・柏モデル』」　『日本内科学会講演会』Vol.110 No.9 一般社団法人日本内科学会　pp2075-2078　2020
9. 「地域包括ケアシステム・地域共生社会と在宅医療」『Medical Practice』Vol.38　No.1　文光堂pp.20-27　2021

内山瑛美子

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Kawaguchi K, Taketomi S, Mizutani Y, Uchiyama E, Ikegami Y, Tanaka S, Haga N, Nakamura Y, “Sex-Based Differences in the Drop Vertical Jump as Revealed by Video Motion Capture Analysis Using Artificial Intelligence”, The Orthopaedic Journal of Sports Medicine, 2021; 9(11): 23259671211048188. 査読有
2. 今枝 秀二郎, 孫 輔卿, 内山 瑛美子, 田中 友規, スタッヴォラヴット アンヤポーン, 角川 由香, 馬場 絢子, 田中 敏明, 飯島 勝矢, 大月 敏雄, 「転倒・大腿骨近位部骨折で入院した高齢者の環境移行事例から見た多職種による建築的な転倒予防対策の検討<1>：自宅内の転倒原因となる建築的要因の解明」, 日本建築学会計画系論文集, 2020; 85(773): p. 1387-1395. 査読有
3. 内山 瑛美子, 高野 渉, 中村 仁彦, 今枝 秀二郎, 孫 輔卿, 松原 全宏, 飯島 勝矢, 「転倒・骨折者へのインタビューデータを用いた転倒実態調査手法の検討」, 日本ロボット学会誌, 2021; 39(2): p. 189-192. 査読有
4. 田島怜奈, 尾崎正明, 内山瑛美子, 西田佳史, 山中龍宏, ”保育所適合型見守り支援を可能にする疫学と現場観察双方からの事故状況分析”, 日本ロボット学会誌, 2022 (In Press). 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Uchiyama E, Suzuki H, Ikegami Y, Nakamura Y, Taketomi S, Kawaguchi K, Mizutani Y, Doi T, “Muscle Cooperation Analysis Using Akaike Information Criteria for Anterior Cruciate Ligament Injury Prevention”, 42nd Annual International Conferences of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society in conjunction with the 43rd Annual Conference of the Canadian Medical and Biological Engineering Society, Online, 2020.7.20-24. 査読有
2. Suzuki H, Murai A, Ikegami Y, Uchiyama E, Yamamoto K, Yamada A, Mizutani Y, Kawaguchi K, Taketomi S, Nakamura Y, “Muscle Activity Estimation at Drop Vertical Jump Landing Using Passive Muscle Mechanical Model”, 2021 43rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine & Biology Society (EMBC), Online, 2021.11.1-5. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 内山瑛美子, 鈴木比奈子, 池上洋介, 中村仁彦, 武冨修治, 川口航平, 水谷有里, “スポーツ外傷予防のための筋張力時系列データ解析手法の検討”, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会, オンライン開催, 2020.5.28-29. 査読無
2. 内山瑛美子, 高野渉, 中村仁彦, 今枝秀二郎, 孫輔卿, 松原全宏, 飯島勝矢, 「転倒・骨折者へのインタビューデータを用いた転倒実態調査手法の検討」, 第38回ロボット学会学術講演会, オンライン開催, 2020.10.9-11. 査読無
3. 内山瑛美子, 「分野横断型高齢者転倒予防研究の取り組み」, 東京工業大学リサーチフェスティバル(Tokyo Tech Research Festival) 2020, オンライン開催, 2020.12.8-10. 査読無
4. 尾崎正明, 糸井丈晴, 内山 瑛美子, 西田佳史, 「状況介入デザインを可能とする分散表現に基づくベイズ状況リスク分析」, 第21回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, オンライン開催, 2020.12.16-18. 査読無
5. Ozaki M, Uchiyama E, Nishida Y, "Relative Risk Among Home Injury Situations," Proceedings of the 8th UK-Japan Engineering Education Workshop (UKJEEL), Online, 2021.2.26. 査読無
6. 水谷有里, 武冨修治, 川口航平, 内山瑛美子, 池上洋介, 中村仁彦, 芳賀信彦, “アメリカンフットボール選手のハムストリング肉ばなれのリスク―UTSSIスポーツ損傷予防プロジェクト第3報―”, JOSKAS/JOSSM meeting 2021(第13回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会/第47回日本整形外科スポーツ医学会学術集会), 北海道, 2021.7.17-19. 査読無
7. 小森健人, 西崎実穂, 内山瑛美子, 西田佳史, "発達行動統計と画像処理に基づく在宅乳幼児発達行動診断：Denver II発達判定法の画像処理化と在宅データを用いた検証," ロボティクス・メカトロニクス講演会, オンライン開催, 2021.6.6-8. 査読無
8. Emiko Uchiyama, “Study on depth perception dependency on stumbles of elderly people”, Digital Poster Presentations, MIRAI 2.0 Research and Innovation Week 2021, Online, 2021.6.7-11. 査読無
9. 尾﨑正明, 内山瑛美子, 西田佳史, ”状況のリスク比分析-分散表現に基づく状況の包括的分析-”, 第35回人工知能学会, オンライン開催, 2021.6.8-6.11. 査読無
10. 田島怜奈, 内山瑛美子, 西田佳史, 山中龍宏, “動画を利用した保育園児の見守り状況の定量的時空間分析,” 第68回日本小児保健協会学術集会, オンライン開催, 2021.6.18-20. 査読無
11. 田島怜奈, 尾崎正明, 内山瑛美子, 西田佳史, 山中龍宏, ” 保育所適合型見守り支援を可能にする疫学と現場観察双方からの事故状況分析”, 第39回日本ロボット学会学術講演会,オンライン開催, 2021.9.8-11. 査読無
12. 尾﨑正明, 内山瑛美子, 西田佳史, ”状況R-Map分析-学校遊具の事故状況の典型化と優先づけ-”, 日本子ども安全学会, オンライン開催, 2021.9.25. 査読無
13. 今枝秀二郎、孫輔卿、内山瑛美子、三浦貴大、角川由香、田中敏明、飯島勝矢、大月敏雄, ”転倒骨折後の住宅改修に携わる職種と退院後の再転倒事例の分析”、転倒予防学会, 愛知県, 2021.10.23-24. 査読無
14. 尾﨑正明, 内山瑛美子, 西田佳史, ” ビックデータを用いた状況リスク比およびR-Map分析に基づく介入デザイン支援”, 日本リスク学会第34回年次大会,オンライン開催, 2021.11.20-21. 査読無

荻野 亮吾

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Ito K, Ogino R, Hiyama A, Hirose M. Evaluating Seniors’ Virtual Reality Experience Performed at a Local Community Event in

Japan. HCII 2020: Human Aspects of IT for the Aged Population. Healthy and Active Aging; 2020: 609-621. 査読有
2. Takase M, Ogino R, Yoshida K, Kusu H, Kenmochi T, Goto J. Qualitative Research on the Primary Effect of Fish Pet Ownership Using the Bottleium, a Bottle-Type Aquarium, on Community Dwelling Older Adults in Japan: A Potential Preventive Measure Towards Social Isolation. Geriatrics, 2021; 6(1): 17. 査読有
3. Takahiro M, Ogino R, Nishino A, Yabu K, Kimata M, Okata J, Ifukube T. Lesson Learned from the Cases Utilizing Information Systems in Support Sites for Seniors in Japan: Helping Caregivers on Information Sharing by ICT and Seniors on Vitalizing Their Life by IoT. HCII 2021: Human Aspects of IT for the Aged Population. Technology Design and Acceptance, 2021: 203-212. 査読有
4. 中川友理絵, 荻野亮吾. 日本の高等教育における地域と連携した学習(Community-Based Learning)の研究動向. 日本地域政策研究, 2020; 25: 34-43. 査読有
5. 荻野亮吾. Withコロナ時代における地域のつながりづくりの方法. 日本公民館学会年報, 2020; 17: 57-65. 査読有
6. 荻野亮吾, 八木信一. 自治の質量とまちづくりの飯田モデル:地域自治(運営)組織への示唆として. 佐賀大学教育学部研究論文集, 2020; 5: 193-212. 査読無
7. 似内遼一, 荻野亮吾, 梅本大輔, 松村優, 櫻井理加, 細萱一立, 遠藤良顕. 郊外住宅地に住む高齢者の外出を維持する地域戦略のあり方に関する一考察, 2021; 22paper: 23-34. 査読有
8. 荻野亮吾, 中川友理絵. 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要. 2021; 5: 117-135. 査読無
9. 菅原育子, 荻野亮吾, 久保田治助, 堀薫夫. 地域コミュニティにおけるコミュニティ・エンパワメント評価手法の検討. 西武文理大学サービス経営学部研究紀要, 2021; 38: 77-90. 査読無
10. 荻野亮吾, 似内遼一, 深谷麻衣, 高瀬麻以. 地域づくり分野と都市計画分野におけるコミュニティ・エンパワメント手法の比較. 佐賀大学教育学部研究論文集, 2021; 6(1): 121-156. 査読無
11. 八木信一, 荻野亮吾.『飯田市公民館活動記録』の分析:地域自治組織設立後を対象として―. 経済学研究, 2021; 88(4): 69-135. 査読無
12. 高瀬麻以, 荻野亮吾, 似内遼一, 深谷麻衣. 地域コミュニティを対象にしたアクション・リサーチ論のレビュー. 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要, 2022: 6. 査読無

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. Kazembe N, Wang C, Kim T, Higuma S, Kim H, Yang Y, Gandy CS, Ogino R, Takase M. Effects of the COVID-19 Pandemic on Activities of Toyoshikidai's Community Space. ライフ・レジリエンス学, 2021; 1: 8. 査読無
2. 荻野亮吾. 公民館の事業構想: 地域のソーシャル・キャピタルを育む拠点として. 社会教育, 2020; 887: 14-20. 査読無
3. 高橋競, 高瀬麻以, 荻野亮吾, 後藤純, 飯島勝矢. 年齢が社会的健康に及ぼす影響. ライフ・レジリエンス学; 2021: 1: 8. 査読無
4. 荻野亮吾, 高瀬麻以, 似内遼一, 後藤純. 社会的活動性を維持・向上させる場の運営方法:「地域活動館」方式の開発と実装を通じて. ライフ・レジリエンス学; 2021: 1: 23. 査読無
5. 荻野亮吾. 地域自治と教育福祉の再編下における高齢者学習支援. 社会教育学研究, 2021; 57: 51-53. 査読無
6. 荻野亮吾, 西野亜希子, 三浦貴大, 藪謙一郎. 成熟社会に向けた地域交流拠点の役割と運営方法: 市民社会組織を対象にした調査結果から. 社会教育, 2021; 906: 18-25. 査読無

【著書、編著】

1. 荻野亮吾. 民間非営利団体との連携・協働. 山本珠美, 熊谷愼之輔, 松橋義樹(編). 社会教育経営の基礎. 学文社, 2021: pp139-151.
2. 荻野亮吾. 地域社会のつくり方:社会関係資本の醸成に向けた教育学からのアプローチ. 勁草書房, 2022.
3. 荻野亮吾. 地域における高齢者学習. 堀薫夫(編). 教育老年学. 放送大学教育振興会, 2022: pp 213-229.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kim D, Masuda T, Higuma S, Yang Y, Terazawa S, Takase M, Ogino R, Goto J. A Community Space with Diverse Activities Support Older Adults' Social Participation and Sustain Social Connection. GSA 2020 Annual Scientific Meeting, Online, 2020. 11.4. 査読有
2. Nitanai R, Ogino R, Umemoto D, Matsumura Y, Sakurai R, Hosogaya K, Endo T, Goto J. Differences in Characteristics Associated with Mobility in Older Dwellers of a Hillside Residential Community. GSA 2020 Annual Scientific Meeting, Online, 2020. 11.4. 査読有
3. Takase M, Ogino R, Yoshida K, Kusu H, Kenmochi T. The Effect of Bottleium, a Bottle-Type Aquarium, Ownership on Community-Dwelling Older Adults. GSA 2020 Annual Scientific Meeting, Online, 2020. 11.4. 査読有
4. Kazembe N, Kim T, Wang C, Higuma S, Yang Y, Kim T, Ogino R, Takase M Impact of COVID-19 pandemic on senior-to-senior social engagement activities at a community space in Japan. GSA 2020 Annual Scientific Meeting, Online, 2020. 11. 6. 査読有
5. Matsuoka Y, Zhang J, Lyu, W, Aoyagi K, Takase M, Ogino R, Goto J. The Association of Early-Morning Eating Habits with High Nutrient Intake by Older Japanese Adults Living Alone. GSA 2020 Annual Scientific Meeting, Online, 2020. 11. 6. 査読有
6. Nitanai R, Ogino R, Umemoto D, Goto J, Okata J. Environmental Features Supporting Non-transportation Walking in Older Dwellers in a Hilly Neighbourhood . GSA 2021 Annual Scientific Meeting, Online, 2021. 11. 10-13. 査読有
7. Nishino A, Ogino R, Miura T, Yabu K, Tsutsumi K, Okata J, Nishide K, Ifukube T. Role of community centers in promoting sustainable regional life of community-dwelling older adults with frailty. GSA 2021 Annual Scientific Meeting, Online, 2021. 11. 10-13. 査読有
8. Takase M, Ogino R, Nitanai R, Goto J. Development of Online Child Support Activities by Older Adults; an Action Research During the COVID-19 Pandemic. GSA 2021 Annual Scientific Meeting, Online, 2021. 11. 10-13. 査読有
9. Takase M, Takahashi K, Ogino R, Tanaka T, Goto J, Iijima K. Low Friend Connection Leads to Low Functional Capacity of Older Adults: Findings from a 2-year Longitudinal Study. GSA 2021 Annual Scientific Meeting, Online, 2021. 11. 10-13. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 中山莉子, 佐藤浩, 秋月優里, 坂井愛理, 荻野亮吾, 後藤純. 高齢者サークルにおける会話が生じる過程の映像分析:「当てどころのない発話」を中心に. 日本老年社会科学会大会, 誌上発表, 2020. 査読有
2. 荻野亮吾. 地方創生下のコミュニティをめぐる「協働」論理の変容.日本教育社会学会第72回研究大会, オンライン発表, 2020. 9. 5. 査読無
3. 荻野亮吾. 地域自治と教育福祉の再編下における高齢者学習支援. 日本社会教育学会第67回研究大会, オンライン発表, 2020.9.11. 査

読無

4. 西野亜希子, 荻野亮吾, 藪謙一郎, 三浦貴大. 高齢者の地域継続居住に求められる施設配置と提供サービスに関する研究：福岡県大牟田市の地域交流拠点とその運営母体の取り組みを事例として. 日本福祉のまちづくり学会第23回大会, オンライン発表, 2020. 10. 18. 査読無

木全 真理

1. 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Sakurai R, Inagaki A, Komazawa Y, Kimata M, Goto J. The Factors Associated With Daily Life Support for Single Older Adults to Remain at Their Home. The Geological Society of America 2020 Annual Meeting, Online, 2020.10.26-30. 査読有
2. Kimata M, Nakayama Y. Issues in Public Health Nursing of Achieving Outing to Patients in Need of Home Nursing Care. 6th International Conference Global Network of Public Health Nursing. Osaka, Japan, 2022.01.08-09. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 木全真理, 細萱一立, 小林寛範, 後藤純. 要介護期の高齢者が在宅生活を継続するための生活支援. 第79回日本公衆衛生学会総会.第79回日本公衆衛生学会総会, 京都, 2020.10.20-22. 査読有
2. 木全真理, 後藤純, 小林寛範, 細萱一立. 東日本大震災から復興まちづくりに向けた高齢者の通いの場への参加意欲. 第80回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2021.12.21-23. 査読有

高橋 競

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Yoshizawa Y, Tanaka T, Takahashi K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Son BK, Iijima K. Impact of Health Literacy on the Progression of Frailty after 4 Years among Community-Dwelling Older Adults. International Journal of Environmental Research and Public Health, 2021; 19(1): 394-394. 査読有
2. Tanaka T, Kawahara T, Aono H, Yamada S, Ishizuka S, Takahashi K, Iijima K. A comparison of sarcopenia prevalence between former Tokyo 1964 Olympic athletes and general community-dwelling older adults. Journal of cachexia, sarcopenia and muscle, 2021; 12(2): 339-349. 査読有
3. Takahashi K, Murayama H, Tanaka T, Takase M, Suthutvoravut U, Iijima K. A qualitative study on the reasons for solitary eating habits of older adults living with family. PloS one, 2020; 15(6): e0234379. 査読有
4. 西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルと食事の満足感の関連：地域在住高齢者による横断検討（柏スタディ）. 日本老年医学会雑誌, 2020; 57(3): 273-281. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 高橋競, 飯島勝矢. サルコペニア・フレイルの疫学と介入効果. 糖尿病・内分泌代謝科, 2020; 50(6): 398-402. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 高橋競, 田中友規, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢. 地域高齢者における夜間頻尿・フレイルの重複とポリファーマシーとの関連. 第80回日本公衆衛生学会総会, 新宿区, 2021. 12. 21-23. 査読有
2. 高橋競. フレイル・サルコペニアとLUTS（疫学的観点から）. 第86回日本泌尿器科学会東部総会, ウェブ開催, 2021. 9. 3-4. 査読無
3. 高橋競. 疫学的観点からみたLUTSとフレイル. 第33回日本老年泌尿器科学会, 奈良市, 2020. 9. 11-12. 査読無
4. 高橋競, 孫輔卿, 田中友規, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 呂偉達, 飯島勝矢. フレイルサポーターによる地域活動に関する混合研究. 第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会. ウェブ開催, 2020. 12. 1-15. 査読有
5. 高橋競, 田中友規, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. 地域在住高齢者の活動能力に夜間頻尿が及ぼす影響―混合研究法による分析. 第79回日本公衆衛生学会総会, ウェブ開催, 2020. 10. 21-23. 査読有

藤崎 万裕

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Yoshizawa Y, Tanaka T, Takahashi K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Son B, Iijima K. Impact of health literacy on the progression of frailty after four years among community-dwelling older adults. International Journal of Environmental Research and Public Health. 2022; 19(1): 394 https://doi.org/10.3390/ijerph19010394 . 査読有
2. Fujisaki-Sueda-Sakai M, Takahashi K, Yoshizawa Y, Iijima K. Frailty checkup supporters' intentions to participate in human-resource development and training activities. The Journal of Frailty & Aging. 2020; 9(4): 238-243. 査読有
3. 西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut, Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルと食事の満足感の関連：地域在住高齢者による横断検討（柏スタディ）. 日本老年医学会雑誌. 2020; 57(3): 273-281. 査読有
4. 次郎丸奈美, 藤崎万裕, 加藤たか子, 山本則子. 握力に着目した介護予防事業参加者の特徴把握と事業関係者へのインタビューによる今後の事業展開に関する検討－大学院保健師教育課程における実践的研究－. 保健師教育. 2021; 5(1): 66-74. 査読有
5. 藤崎万裕, 吉澤裕世, 高橋競, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢. フレイルチェックデータを用いた地域アセスメントに基づくフレイル予防戦略の検討. 日本未病学会雑誌. 2021; 27(3): 53-58. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説】

1. 片田江由佳, 櫛間大二郎, 井本俊之, 高倉 孝, 飯島勝矢, 辻 哲夫, 藤崎万裕. フレイル予防の新たなる展開に向けて ソーシャル・インパクト・ボンドを活用した飯塚市フレイル予防実証事業. 保健師ジャーナル. 2020; 76(9): 713-715, 758-763. 査読無
2. 藤崎 万裕, 本田千可子, 加藤たか子, 中山みずほ, 三島直子, 次郎丸奈美, 大谷温子, 篠原真純, 角川由香, 寺本千恵, 岩崎りほ, 成瀬昂, 山

本則子．地域住民・自治体・大学の連携による地域貢献活動「東京大学ふみのみやこ倶楽部」. 保健師ジャーナル. 2021; 77(1): 50-57. 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Fujisaki-Sueda-Sakai M, Takahashi K, Yoshizawa Y, Tanaka T, Unyaporn S, Nishimoto R, Iijima K. A community assessment of frailty prevention strategies using data on frailty checkups. The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, Japan, 2020. Feb28-29. 査読有
2. Iijima K, Tanaka T, Takahashi K, Nishimoto M, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Yoshizawa H, Kozaki K, Akishita M, Toba K. “ACTION RESEARCH” to achieve community-based comprehensive approach for frailty prevention. The International Conference on Frailty & Sarcopenia Research (ICFSR 2020) Toulouse, France, 2020. Mar11-13. 査読有
3. Ito K, Kogami H, Kang S, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Yoshioka D, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ifukube T. Configuring Interface for Internet of Things: Natural User Interface Study on Older Adults in Japan. The 2021 IEEE 3rd Global Conference on Life Sciences and Technologies (LifeTech 2021) Nara, Japan, 2021. March 9-11. 査読有
4. Fujisaki-Sueda-Sakai M, Ito K, Miura T, Yabu K, Sugawara I. Intentions for using ICT/IoT services and related factors among community-dwelling older people in Japan. The 11th APRU population aging. Virtual conference. 2021. April7-8. 査読有
5. Yoshioka D, Kogami H, Kang S, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT setting method among senior citizens in Japan. HCI International 2021. Virtual Conference. 2021. July 24-29. 査読有
6. Kang S, Yoshizaki R, Kogami H, Nakano K, Sakurai Y, Yoshioka D, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Akiyama H, Otsuki T, Ifukube T. Preliminary evaluation of an IoT setting method for universal design: A case study of young adults. International Conference on Design and Concurrent Engineering 2021 & Manufacturing Systems Conference 2021 (iDECON/MS2021). 2021. September 3-4. 査読有
7. Fujisaki-Sueda-Sakai M, Ito K, Miura T, Yabu K, Hosogaya K, Sugawara I. Current usages and intentions of participating in online meetings or chatting among community-dwelling older people in Japan amid COVID-19 pandemic. Global Network of Public Health Nursing (GNPHN) 6th International Conference. Virtual Conference. 2022. January 8-9. 査読有
8. Kang S, Ito K, Yoshizaki R, Kogami H, Nakano K, Yoshioka D, Sakurai Y, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ifukube T. Enriching IoT Web Application Experience by Integrating Containerized Edge Resource 2022 IEEE 4th Global Conference on Life Sciences and Technologies (LifeTech). Osaka, Japan, 2022. March 7-9. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 森下賀子, 佐藤幸子, 岡崎真美, 佐藤重春, 藤崎万裕.住民主体の体操グループリーダーの期待とその後の変化 −東京都T区の実態調査-. 第54回日本作業療法学会. 新潟. 2020.9.25-27. 査読有
2. 高橋競, 田中友規, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢． 地域在住高齢者の夜間頻尿による活動能力への影響に関する混合研究. 第79回日本公衆衛生学会総会. 京都. 2020.10.20-22. 査読有
3. 吉澤裕世, 藤崎万裕, 田中友規, 高橋競, 飯島勝矢. 通いの場におけるフレイルチェックによるアウトリーチ体制構築に向けた課題-サービス・クオリティ・ギャップモデルを用いて-. 第79回日本公衆衛生学会総会. 京都. 2020.10.20-22. 査読有
4. 片田江由佳, 櫛間大二郎 , 井本俊之, 藤﨑 万裕, 飯島勝矢. ソーシャル・インパクト・ボンドを活用したフレイル予防実証事業の多面的展開と評価. 第79回日本公衆衛生学会総会. 京都. 2020.10.20-22. 査読有
5. 藤﨑万裕, 吉澤裕世, 高橋競, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢. フレイルチェック事業導入自治体における参加者フォローアップ体制の実態. 第79回日本公衆衛生学会総会. 京都. 2020.10.20-22. 査読有
6. 吉澤裕世, 藤崎万裕, 田中友規, 吉田みどり, 浅野美穂子, ザーリッチ陽子, 伊藤佳央里, 高橋競, 飯島勝矢. 通いの場でのアウトリーチ支援によるフレイル高リスク者の日常生活行動の変化 -事例検討を通して-. 第7回日本サルコペニアフレイル学会大会． 東京. 2020.11.14-15. 査読有
7. 高橋競, 孫輔卿, 田中友規, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 呂偉達, 飯島勝矢. フレイルサポーターによる地域活動に関する混合研究. 第7回日本サルコペニアフレイル学会大会. 東京. 2020.11.14-15. 査読有
8. 藤﨑万裕, 吉澤裕世, 高橋競, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢. フレイルチェックデータを用いた地域アセスメントによるフレイル予防戦略の検討. 第7回日本サルコペニアフレイル学会大会． 東京. 2020.11.14-15. 査読有
9. 中野航綺, 吉崎れいな, 湖上碩樹, 小川景司, 吉岡大介, カンスイン, 櫻井友理希, 藤﨑万裕, 伊藤研一郎, 菅原育子. 高齢者主体の地域活動におけるIT技術導入過程の分析. 日本老年社会科学会第63回大会, オンライン開催. 2021.6.12-13. 査読有
10. 細萱一立, 伊藤 研一郎, 藤崎 万裕, 三浦 貴大, 藪健一郎, 菅原 育子. COVID-19流行による高齢者の地域交流活動への影響：情報機器への適応に伴う暮らしと地域交流活動の変化. 日本老年社会科学会第63回大会, オンライン開催. 2021.6.12-13. 査読有
11. 吉澤裕世, 高橋競, 藤崎万裕, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢. 複数の文化活動への参加とフレイルとの関連. 第8回 日本サルコペニア・フレイル学会大会. 大阪. 2021.11.6-7. 査読有
12. 森下賀子, 植木絵美, 藤﨑万裕, 岡崎真美, 上野雅子, 新井麻子. 地域在住高齢者の外出自粛生活がフレイルに及ぼす影響. 第80回日本公衆衛生学会総会. 東京. 2021.12.21-23. 査読有
13. 植木絵美, 森下賀子, 藤﨑万裕, 岡崎真美, 上野雅子, 新井麻子. フレイルチェックによる介護予防・生活支援サービス事業対象者の掘り起こしに向けて. 第80回日本公衆衛生学会総会. 東京. 2021.12.21-23. 査読有
14. 高橋競, 田中友規, 吉澤裕世, 藤﨑万裕, 飯島勝矢. 地域高齢者における夜間頻尿・フレイルの重複とポリファーマシーとの関連. 第80回日本公衆衛生学会総会. 東京. 2021.12.21-23. 査読有
15. 吉澤裕世, 高橋競, 藤崎万裕, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢. 高齢者における居住地周辺の環境とフレイル及び地域活動との関係. 第80回日本公衆衛生学会総会. 東京. 2021.12.21-23. 査読有

2. 受賞歴

1. 2021年5月「第28回日本老年医学会 優秀論文賞」(西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルと食事の満足感の関連：地域在住高齢者による横断検討(柏スタディ))

2. 2020年11月「第3回2019年度日本未病学会最優秀論文賞プロシーディングの部」(西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvravut Unyaporn, 藤﨑万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルは残存歯数減少よりも口腔関連QOLと強く関連する:地域在住高齢者による横断検討(柏スタディ))

三浦 貴大

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. 加藤 狩夢, 三浦 貴大, 一刈 良介, 蔵田 武志. 作業発生予測に基づいた時系列訓練データ作成支援ツール ―外食店舗における接客係の作業内容推定を事例として―. 電子情報通信学会論文誌D, 2022;J105-D(1):121-137. 査読有
2. Matsuo M†, Miura T†, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. Inclusive Action Game Presenting Real-time Multimodal Presentations for Sighted and Blind Persons. Proceedings of the 2021 International Conference on Multimodal Interaction (ICMI'21), 2021:62-70. 査読有 †: equally contributed.
3. Yoshioka D, Kogami H, Kang SI, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT-Setting Method Among Senior Citizens in Japan, Lecture Notes in Computer Science, 2021;12786:278-292. 査読有
4. Yabu K, Miura T, Segawa T, Murakami Y, Nakahashi T. Designing Local Assessment Workshops and Web-Mobile Applications for Facilitating the Workshop: Based on the Schemes of Problem/Project-Based Learning (PBL) and ADDIE Model. Lecture Notes in Computer Science, 2021;12786:114-125. 査読有
5. Miura T, Ogino R, Nishino A, Yabu K, Kimata M, Okata J, Ifukube T. Lesson Learned from the Cases Utilizing Information Systems in Support Sites for Seniors in Japan: Helping Caregivers on Information Sharing by ICT and Seniors on Vitalizing Their Life by IoT. Lecture Notes in Computer Science, 2021;12786:203-212. 査読有
6. Miura T, Takahashi K, Ueda M. Acoustic cues in playing volleyball: Effects of the player's characteristics to listen to sounds carefully during the game, Acoustical Science and Technology, 2021;42(3):146-149. 査読有
7. Miura T, Otsuka Y, Idesawa Y, Sakajiri M, Onishi J. Awareness of Recurrent Education on Visually Impaired Workers: A Questionnaire Survey about their Working Conditions and Lifelong Learning Courses. Journal on Technology & Persons with Disabilities, 2021;9:85-109. 査読有
8. Miura T, Matsuo M, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. GAME: Game As a Measurement Environment: Scheme to Evaluate Interfaces and Game Contents Based on Test Theories. Proceedings of the ACM on Interactive, Mobile, Wearable and Ubiquitous Technologies, 2020;4(4), Article No. 166:1-30. 査読有
9. Idesawa Y, Miura T, Sakajiri M, Onishi J. Effective Scheme to Control Multiple Application Windows for Screen Reader Users with Blindness. 2020 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC), 2020:2674-2679. 査読有
10. 一刈 良介, 三浦 貴大, 尾形 邦裕, 大西 正輝, 蔵田 武志. 車いす利用者向けバーチャル着装アプリの社会実装に向けた検証～パラリンピックアスリートのユニフォーム製作への活用とアンケート調査を通して～. 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, 2020;25(3):232-235. 査読有
11. 三浦 貴大, 鈴木 淳也, 藪 謙一郎, 上田 一貴, 伊福部 達. 視覚障害者のための二次元パタンを音提示するスピーカマトリクス. 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, 2020;25(3):228-231. 査読有
12. Onishi J, Miura T, Okamoto T, Matsuo M, Sakajiri M. Online Communication Assistant System for Deafblind Person. ICCHP open access compendium "Future Perspectives of AT, eAccessibility and eInclusion," 2020;1:171-175. 査読有
13. Miura T, Otsuka Y, Matsuo M, Sakajiri M, Okamoto T, Onishi J. Improving Web Browsing Experience Using a Screen Reader for Visually Impaired Persons. ICCHP open access compendium "Future Perspectives of AT, eAccessibility and eInclusion," 2020;1:23-27. 査読有
14. Miura T, Arata M, Sukenari Y, Miura R, Nishino A, Otsuki T, Nishide K, Okata J. Mobile Application to Record Daily Life for Seniors Based on Experience Sampling Method (ESM), Lecture Notes in Computer Science, 2020;12426:660-669. 査読有
15. Matsuo M, Miura T, Ichikari R, Kato K, Kurata T. OTASCE Map: A Mobile Map Tool with Customizable Audio-Tactile Cues for the Visually Impaired. Journal on Technology & Persons with Disabilities, 2020;8:82-103. 査読有
16. Miura T, Izumi T, Matsuo M, Sakajiri M, Okamoto T, Onishi J. Reality Varied by Visions: Requirements of Immersive Virtual Reality Content for Users with Low-Vision, Journal on Technology & Persons with Disabilities, 2020;8:170-195. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 三浦 貴大, 上田 麻理. バレーボール競技の聴覚情報利用. 音響技術, 2022;197:42-46. 査読無(招待有)
2. 荻野 亮吾, 西野 亜希子, 三浦 貴大, 藪 謙一郎. 成熟社会に向けた地域交流拠点の役割と運営方法 ―市民社会組織を対象にした調査結果から―. 社会教育 (日本青年館), 2021;12(906):18-25. 査読無(招待有)
3. 三浦 貴大, 松尾 政輝, 坂尻 正次,大西 淳児. ゴールボールにおける投球音の定位能力を訓練するアプリケーション. 音響技術 2022;197:36-41. 査読無(招待有)
4. 三浦 貴大. 視覚障害者が音で見る世界 ――感覚代行と支援機器――. 日本音響学会誌, 2021;77(3):199-207. 査読無(招待有)

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kang SI, Ito K, Yoshizaki R, Kogami H, Nakano K, Yoshioka D, Sakurai Y, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ifukube T. Enriching IoT Web Application Experience by Integrating Containerized Edge Resource. IEEE LifeTech 2022, Online / Osaka, Japan, 2022.3. 査読有
2. Matsuo M, Miura T, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. Inclusive Action Game Presenting Real-time Multimodal Presentations for Sighted and Blind Persons. Proceedings of the 2021 International Conference on Multimodal Interaction (ICMI'21). Online / Montréal, Canada, 2021.10. 査読有

(論文の欄の1.と対応)

3. Miura T, Matsuo M, Yabu K, Katagiri A, Sakajiri M, Onishi J, Kurata T, Ifukube T. GAME: Game As a Measurement Environment: Scheme to Evaluate Interfaces and Game Contents Based on Test Theories. ACM UbiComp 2021, Online, 2021.9. 査読有(招待有)(論文の欄の8.と対応)
4. Yoshioka D, Kogami H, Kang SI, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT-Setting Method Among Senior Citizens in Japan. HCI International 2021, Online, 2021.7. 査読有 (論文の欄の3.と対応)
5. Yabu K, Miura T, Segawa T, Murakami Y, Nakahashi T. Designing Local Assessment Workshops and Web-Mobile Applications for Facilitating the Workshop: Based on the Schemes of Problem/Project-Based Learning (PBL) and ADDIE Model. HCI International 2021, Online, 2021.7. 査読有 (論文の欄の4.と対応)
6. Miura T, Ogino R, Nishino A, Yabu K, Kimata M, Okata J, Ifukube T. Lesson Learned from the Cases Utilizing Information Systems in Support Sites for Seniors in Japan: Helping Caregivers on Information Sharing by ICT and Seniors on Vitalizing Their Life by IoT. Lecture Notes in Computer Science. HCI International 2021, Online, 2021.7. 査読有 (論文の欄の5.と対応)
7. Miura T, Otsuka Y, Idesawa Y, Sakajiri M, Onishi J. Awareness of Recurrent Education on Visually Impaired Workers: A Questionnaire Survey about their Working Conditions and Lifelong Learning Courses. CSUN AT Conference 2021, Online, 2021.3. 査読有 (論文の欄の7.と対応)
8. Idesawa Y, Miura T, Sakajiri M, Onishi J. Effective Scheme to Control Multiple Application Windows for Screen Reader Users with Blindness. 2020 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC), Online, 2020.10. 査読有 (論文の欄の9.と対応)
9. Onishi J, Miura T, Okamoto T, Matsuo M, Sakajiri M. Online Communication Assistant System for Deafblind Person. ICCHP 2020, Online, 2020.9. 査読有 (論文の欄の12.と対応)
10. Miura T, Otsuka Y, Matsuo M, Sakajiri M, Okamoto T, Onishi J. Improving Web Browsing Experience Using a Screen Reader for Visually Impaired Persons. ICCHP 2020;, Online, 2020.9. 査読有 (論文の欄の13.と対応)
11. Miura T, Arata M, Sukenari Y, Miura R, Nishino A, Otsuki T, Nishide K, Okata J. Mobile Application to Record Daily Life for Seniors Based on Experience Sampling Method (ESM), HCI International 2020, Online, 2020.7. 査読有 (論文の欄の14.と対応)
12. Matsuo M, Miura T, Ichikari R, Kato K, Kurata T. OTASCE Map: A Mobile Map Tool with Customizable Audio-Tactile Cues for the Visually Impaired. CSUN AT Conference 2020, Anaheim, CA, USA, 2020.3. 査読有 (論文の欄の15.と対応)
13. Miura T, Izumi T, Matsuo M, Sakajiri M, Okamoto T, Onishi J. Reality Varied by Visions: Requirements of Immersive Virtual Reality Content for Users with Low-Vision. Anaheim, CA, USA, 2020.3. 査読有 (論文の欄の16.と対応)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 髙橋 隼人, 山口 雄大, 三浦 貴大, 上田 麻理. バレーボール競技におけるポジションごとの聴覚利用状況の検討　-聴覚遮断を用いたミニゲームによるプレーの違い-. 日本音響学会2022年春季大会, Online, 2022.3. 査読無
2. 二村 亮平, 三春 知史, 新田 晃司, 三浦 貴大, 上田 麻理. 野球競技における打球音の音響学的特徴　-外野の守備位置ごとの打球音の違い-. 日本音響学会2022年春季大会, Online, 2022.3. 査読無
3. 大庭 駿平, 小橋 侑生, 三浦 貴大, 土田 義郎, 田中 哲雄, 上田 麻理. 音環境のアノニマス性その3: カフェの文脈における発生音に関する実験的検討. 日本音響学会2022年春季大会, Online, 2022.3. 査読無
4. 松尾 政輝, 出澤 由利, 田中 仁, 坂尻 正次, 大西 淳児, 蔵田 武志, 三浦 貴大. 視覚的な二次元コンテンツの理解を促進する音触マッピングツールの開発　～視覚障害者の行列・分数の学習支援を例にして～. 情報処理学会 第18回アクセシビリティ研究会, Online, 2022.3. 査読無
5. 松尾 政輝, 熊澤 明, 諸熊 浩人, 蔵田 武志, 三浦 貴大. 視覚障害ゲーマーのためのアクセシブルゲームの現況 ～まとめWikiの分析を例に～. 情報処理学会 第18回アクセシビリティ研究会, Online, 2022.3. 査読無
6. 渡邉 大貴, 三浦 貴大, 坂尻 正次, 大西 淳児. 日時調整におけるアクセシビリティ上の課題調査と解決策の提案. 第31回ライフサポート学会フロンティア講演会, Online, 2022.3. 査読無
7. 渡邉 道治, 三浦 貴大, 坂尻 正次, 大西 淳児. ゴールボールの競技状況を網羅的に聴覚訓練するアプリケーションの提案. 第31回ライフサポート学会フロンティア講演会, Online, 2022.3. 査読無
8. 大西 淳児, Erdenesambuu Delgerbayar, 三浦 貴大, 坂尻 正次. 全盲者の音響VR環境の特性について. 電気学会 計測/知覚情報 合同研究会, 高知市文化プラザかるぽーと /Online, 2021.12. 査読無
9. 三浦 貴大. [招待講演] 視覚障害者が音で見る世界と人間拡張への応用. HCGシンポジウム2021, Online, 2021.12. 査読無(招待有)
10. 松尾 政輝, 三浦 貴大, 藪 謙一郎, 片桐 淳, 坂尻 正次, 大西 淳児, 蔵田 武志, 伊福部 達. インクルーシブな開発体制によるアクセシブルアクションRPGの開発　～視覚障害者・晴眼者の共同作業に着目して～, HCGシンポジウム2021, Online, 2021.12. 査読無
11. 孫 輔卿, 三浦 貴大, 角川 由香, 藪 謙一郎, 田中 友規, 呂 偉達, 金 東律, 楊 映雪, 張 俊華, 佐藤 雄太, 榊原 拓磨, 徳丸 剛, 池田 一智, 飯島 勝矢. 地域住民同士の双方向オンライン型フレイルチェック開発と地域実装　―対面とオンラインの持続的フレイル予防システムを目指して―. 第8回日本サルコ ペニア・フレイル学会大会, 千里ライフサイエンスセンター, 2021.11. 査読無
12. 今枝 秀二郎, 孫 輔卿, 内山 瑛美子, 三浦 貴大, 角川由香, 田中 敏明, 飯島 勝矢, 大月 敏雄. 転倒骨折後の住宅改修に携わる職種と退院後の再転倒事例の分析. 日本転倒予防学会 第8回学術集会, ウインクあいち, 2021.10. 査読無
13. 橋本 卓己, 石川 良雅, 三浦 貴大, 小川 喜道, 上田 麻理. 厚木市における防災無線放送の長期観測その2　～悪天候時の音響分析と聴こえ評価～, 日本音響学会2021年秋季研究発表会, Online, 2021.09. 査読無
14. 髙橋 隼人, 三浦 貴大, 上田 麻理. バレーボール競技における聴覚情報の利用に関する実験的検討 ～聴覚遮断によるプレーへの影響～. 日本音響学会2021年秋季研究発表会, Online, 2021.09. 査読無
15. 二村 亮平, 磯川 昇汰, 新田 晃司, 三浦 貴大, 上田 麻理. 野球競技における打球音の音響学的特徴 -守備位置ごとの違い-. 日本音響学会2021年 秋季研究発表会, Online, 2021.09. 査読無
16. 大庭 駿平, 小橋 侑生, 三浦 貴大, 土田 義郎, 田中 哲雄, 上田 麻理. 音環境のアノニマス性その2: カフェの文脈に関する検討. 日本音響学会2021年秋季研究発表会, Online, 2021.09. 査読無
17. 磯川 昇汰, 二村 亮平, 新田 晃司, 三浦 貴大, 春日 秀雄, 上田 麻理. 野球中継動画における打球音の音響的特徴と印象評価. 日本音響学会

2021年秋季研究発表会, Online, 2021.09. 査読無
18. 細萱 一立, 伊藤 研一郎, 藤崎 万裕, 三浦 貴大, 藪 謙一郎, 菅原 育子, 伊福部 達, 秋山 弘子. COVID-19流行による高齢者の地域交流活動への影響:情報機器への適応に伴う暮らしと地域交流活動の変化. 日本老年社会科学会 第63回大会, Online, 2021.06. 査読無
19. 依田 裕雅, 磯川 昇汰, 新田 晃司, 三浦 貴大, 中村 健太郎, 春日 秀雄, 田中 哲雄, 上田 麻理. OpenPoseによる野球の動作解析と音響解析. 日本音響学会2021春季研究発表会, Online, 2021.03. 査読無
20. 二村 亮平, 三浦 貴大, 中村 健太郎, 春日 秀雄, 新田 晃司, 高橋 勝美, 田中 哲雄, 上田 麻理. 球技の聴覚情報利用に関する基礎的検討その2: 試合時の観客有無による競技者・観戦者の音による臨場感, 日本音響学会 2021年春季研究発表会, Online, 2021.03. 査読無
21. 寺島 将隆, 石川 良雅, 三浦 貴大, 小川 喜道, 上田 麻理. 地域連携による防災無線放送の音響的分析: 厚木市子中・荻野地区での実践的検討. 日本音響学会 2021年春季研究発表会, Online, 2021.03. 査読無
22. 小橋 侑生, 三浦 貴大, 田岡 壮平, 松本 一教, 土田 義郎, 上田 麻理. 図書館を題材とした「自分事」化プロジェクトの実践その2: 音環境からみた大学図書館における「アノニマス性」に関する検討, 日本音響学会 2021年春季研究発表会, Online, 2021.03. 査読無
23. 片山 博貴, 三浦 貴大, 坂尻 正次, 大西 淳児. 視覚障害によらず画面操作・設計を行うための触覚/力覚誘導提示方式の開発・評価. 第30回ライフサポート学会フロンティア講演会, Online, 2021.03. 査読無
24. 加藤 狩夢, 三浦 貴大, 一刈 良介, 大隈 隆史, 蔵田 武志. 外食店舗での作業発生予測に基づく時系列ラベル付与ツールの開発・評価. HCGシンポジウム2020, Online, 2020.12. 査読無
25. 松尾 政輝, 三浦 貴大, 一刈 良介, 加藤 狩夢, 蔵田 武志. 聴覚・触覚提示をカスタマイズ可能なモバイル端末用マップビューア『オタスケマップ』～デモ展示における視覚 障害当事者による評価と機能改善～, HCGシンポジウム2020, Online, 2020.12. 査読無
26. 興梠 正克, 一刈 良介, 三浦 貴大, 大隈 隆史. xDR技術に基づく測位・環境推定 -キャリブレーションフリーVDRと路面状態の推定-, HCGシンポジウム2020, Online, 2020.12. 査読無
27. 西野 亜希子, 荻野 亮吾, 藪 謙一郎, 三浦 貴大. 高齢者の地域継続居住に求められる施設配置と提供サービスに関する研究 -福岡県大牟田市の地域交流拠点とその運 営母体の取り組みを事例として-. 第23回日本福祉のまちづくり学会全国大会, Online, 2020.10. 査読無
28. Erdenesambuu Delgerbayar, 三浦 貴大, 松尾 政輝, 坂尻 正次, 大西 淳児. Survey on guidance navigation and control requirements for blind persons. 電気学会 知覚情報研究会. Online, 2020.10. 査読無
29. 小橋 侑生, 寺嶋 将隆, 三浦 貴大, 須藤 康裕, 松本 一教, 上田 麻理. 音環境からみた大学図書館における学生の居場所に関する検討:図書館を題材とした「自分事」化プロジェクトの実践. 日本音響学会 2020年秋季研究発表会. Online, 2020.09. 査読無
30. 二村 亮平, 三浦 貴大, 高橋 勝美, 田中 哲雄, 上田 麻理. 球技の聴覚情報利用に関する基礎的検討 -競技者に対するWebアンケート調査. 日本音響学会 2020年秋季研究発表会, Online, 2020.09. 査読無

2. 受賞歴

1. 2022.03.「奨励賞」(渡邉 大貴, 三浦 貴大, 坂尻 正次, 大西 淳児. 日時調整におけるアクセシビリティ上の課題調査と解決策の提案. 第30回ライフサポート学会フロンティア講演会 の発表に対して)※国内学会・シンポジウム等における発表の6.に対応
2. 2022.03.「奨励賞」(渡邉 道治, 三浦 貴大, 坂尻 正次, 大西 淳児. ゴールボールの競技状況を網羅的に聴覚訓練するアプリケーションの提案. 第30回ライフサポート学会フロンティア講演会 の発表に対して)※国内学会・シンポジウム等における発表の7.に対応
3. 2021.12.「奨励賞」(大西 淳児, Erdenesambuu Delgerbayar, 三浦 貴大, 坂尻 正次, 全盲者 の音響VR環境の特性について, 電気学会 計測/知覚情報合同研究会 の発表に対して) ※国内学会・シンポジウム等における発表の8.に対応
4. 2021.12.「特集テーマセッション賞(視覚障害者支援と人間拡張)」(松尾 政輝, 三浦 貴大, 藪 謙一郎, 片桐 淳, 坂尻 正次, 大西 淳児, 蔵田 武志, 伊福部 達. インクルーシブな開発体制によるアクセシブルアクションRPGの開発. HCGシンポジウム2021) ※国内学会・シンポジウム等における発表の10.に対応
5. 2021.9 「学生奨励賞」(二村 亮平, 磯川 昇汰, 新田 晃司, 三浦 貴大, 上田 麻理. 野球競技における 打球音の音響学的特徴 -守備位置ごとの違い-. 日本音響学会2021年 秋季研究発表会 の発表に対して) ※国内学会・シンポジウム等における発表の15.に対応
6. 2021.3.「奨励賞」(片山 博貴, 三浦 貴大, 坂尻 正次, 大西 淳児. 視覚障害によらず画面操作・設計を行うための触覚/力覚誘導提示方式の開発・評価. 第30回ライフサポ ート学会 フロンティア講演会)※国内学会・シンポジウム等における発表の23.に対応
7. 2020.12. 「特集テーマセッション賞(視覚障害者支援と人間拡張)」(松尾 政輝, 三浦 貴大, 一刈 良介, 加藤 狩夢, 蔵田 武志. 聴覚・触覚提示をカスタマイズ可能なモバイル端末用マップビューア『オタスケマップ』～デモ展示における視覚障害当事者による評価と機能改善～, HCGシンポジウム2020)※国内学会・シンポジウム等における発表の25.に対応

吉江 悟

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Suzuki, A., Jin, X., Ito, T., Yoshie, S., Ishizaki, T., Iijima, K., & Tamiya, N. Predictors of care-level deterioration among older adults with mild and moderate disabilities in Japan: Evidence from the nationally standardized survey for care-needs certification. International Journal of Environmental Research and Public Health, in press. 査読有
2. Mitsutake, S., Ishizaki, T., Tsuchiya-Ito, R., Uda, K.,Jinnouchi, H., Ueshima, H., Matsuda, T., Yoshie, S., Iijima, K., Tamiya, N. The effects of early post-discharge rehabilitation services on care-needs level deterioration in older adults with functional impairment: A propensity score–matched study. Archives of Physical Medicine and Rehabilitation, 2022; doi: 10.1016/j.apmr.2021.12.024. 査読有
3. 光武誠吾, 石崎達郎, 土屋瑠見子, 吉江悟, 飯島勝矢, 田宮菜奈子. 介護保険サービス限度額内で通所リハビリテーションの利用が難しい外来維持期リハビリテーション患者の実態と特性. 医療と社会, 2022; 31: 573-582. 査読有
4. Handa, N., Mitsutake, S., Ishizaki, T., Nakabayashi, T., Akishita, M., Tamiya, N., Yoshie, S., Iijima, K. The associations of co-prescribed medications for chronic co-morbid conditions in very older adults with clinical dementia: A retrospective cohort study using insurance claims data. BMJ Open, 2021; doi: 10.1136/bmjopen-2020-043768. 査読有

5. Ito, T., Mori, T., Shimafuji, N., Iijima, K., Yoshie, S., & Tamiya, N. Prevention services via public long-term care insurance can be effective among a specific group of older adults: A city claim data analysis. BMC Health Services Research, 2021; doi: 10.1186/s12913-021-06495-0. 査読有
6. 北村智美, 五十嵐歩, 吉江悟, 森田光治良, 城大祐, 飯島勝矢, 山本則子. 高齢慢性閉塞性肺疾患患者の呼吸リハビリテーションの利用実態:医療介護レセプトデータ分析. 日本老年医学会雑誌, 2021; 58: 111-118. 査読有
7. Shimada, K., Hamada, S., Sawano, M., Yoshie, S., Iijima, K., & Miyata, H. Guideline-based medications for older adults discharged after percutaneous coronary intervention in a suburban city of Japan: A cohort study using claims data. Tohoku Journal of Experimental Medicine, 2020; 252: 143-152. 査読有
8. Tsuchiya-Ito, R., Ishizaki, T., Mitsutake, S., Hamada, S., Yoshie, S., Iijima, K., & Tamiya, N. Association of household income with home-based rehabilitation or home-help service utilization among long-term care insurance beneficiaries using home care services. BMC Geriatrics, 2020; doi: 10.1186/s12877-020-01704-7. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 吉江悟. (特集: コロナ禍の訪問看護事業所・施設で何が起きたか)訪問看護事業所は今後どうあるべきか. コミュニティケア, 2022; in press. 査読無
2. 吉江悟. 在宅ケアに活かすレセプトデータ解析の方向性. 日本在宅ケア学会誌, 2022; 25(2): 49-52. 査読無
3. 吉江悟. プライマリ・ケアの理論と実践: 多職種連携の必須知識<訪問看護>―医師と訪問看護の連携で回避可能な入院を減らしたい. 日本医事新報, 2021; 5076: 12-13. 査読無
4. 吉江悟. 進むデータの利活用: 市町村保健師によるデータ活用の考え方. 保健師ジャーナル, 2020; 76(6): 434-439. 査読無
5. 吉江悟. 日本在宅ケア学会政策提言検討委員会からの発信: 他分野におけるビッグデータの活用例と訪問看護記録の今後の活用法. コミュニティケア, 2020; 22(5): 66-69. 査読無
6. 福井小紀子, 清崎由美子, 佐藤美穂子, 清水潤一, 長江弘子, 成瀬昂, 藤田淳子, 吉江悟. 日本在宅ケア学会委員会報告: 在宅ケア分野におけるデータベース構築の必要性とそれを具体化するための活動指針の紹介. 日本在宅ケア学会誌, 2020; 23(2): 98-103. 査読無

【著書、編著】

1. 吉江悟. (2022). 世代を超えて近隣住民が集うコミュニティカフェ. In (山崎あけみ, 原礼子編) 看護学テキストNiCE家族看護学: 臨床場面と事例から考える 改訂第3版. Pp133-134. 東京: 南江堂.
2. 吉江悟. (2021). 通いの場や生活支援コーディネーターの機能を活かした地域での看護実践. In (武田裕子編) 格差時代の医療と社会的処方. pp151-162. 東京: 日本看護協会出版会.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 鈴木愛, 金雪瑩, 伊藤智子, 吉江悟, 飯島勝矢, 石崎達郎, 田宮菜奈子. 軽度要介護者における要介護認定調査項目の変化と要介護度重度化に関する記述研究. 第80回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2021.12.21-23. 査読有
2. 山岡巧弥, 杉山雄大, 吉江悟, 飯島勝矢, 石崎達郎, 田宮菜奈子. 後期高齢者医療費自己負担割合と糖尿病診療の質との関連: レセプトデータを用いた調査. 第80回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2021.12.21-23. 査読有
3. 御子柴正光, 平健人, 石丸美穂, 吉江悟, 飯島勝矢, 石崎達郎, 田宮菜奈子. A自治体の医療・介護レセプトを用いた介護老人福祉施設入居者の歯科受診の実態. 第80回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2021.12.21-23. 査読有
4. 藤井朋子, 森隆浩, 吉江悟, 飯島勝矢, 石崎達郎, 田宮菜奈子. 後期高齢大腿骨近位部骨折患者の1年後の骨粗鬆症に対する薬剤治療の有無に関連する要因の検討: 医療・介護レセプトデータの分析. 第23回日本骨粗鬆症学会, 神戸, 2021.10.8-10. 査読有
5. 長嶺由衣子, 吉江悟, 平原優美, 陣内裕成, 目麻里子, 山本則子, 永田智子. 在宅・介護施設COVID-19対応: 感染防護具支援プロジェクトへの応募者の傾向(速報). 第31回日本疫学会学術総会, オンライン, 2021.1.27-29. 査読有
6. 鈴木愛, 金雪瑩, 伊藤智子, 小宮山潤, 吉江悟, 飯島勝矢, 石崎達郎, 田宮菜奈子. 軽度要介護者の認定調査による機能・行動特性と2年間の要介護度重度化の関連. 第31回日本疫学会学術総会, オンライン, 2021.1.27-29. 査読有
7. 北村智美, 五十嵐歩, 吉江悟, 山本則子. 訪問看護を利用する高齢COPD患者における2年間の入院率と死亡率: 医療介護レセプトデータ分析. 第40回日本看護科学学会学術集会, 東京, 2020.12.12-13. 査読有
8. 吉江悟, 北村智美, 二宮英樹, 土屋瑠見子, 浜田将太, 松本佳子, 川越雅弘, 福井小紀子, 石崎達郎, 田宮菜奈子, 飯島勝矢. 要介護高齢者における主観的幸福感ほか各種主観的指標と療養場所との関連. 第79回日本公衆衛生学会総会, 京都, 2020.10.20-22. 査読有
9. 北村智美, 森田光治良, 吉江悟, 飯島勝矢. 高齢COPD患者における在宅医療・介護サービス利用状況と入院との関連. 第79回日本公衆衛生学会総会, 京都, 2020.10.20-22. 査読有
10. 田中亜紀子, 神原咲子, 藤野泰平, 吉江悟. 地域包括ケアでのプライマリ・ケア看護師の先駆的な役割. 第11回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 広島, 2020.5.31. 査読無
11. 小宮山潤, 岩上将夫, 吉江悟, 飯島勝矢, 石崎達郎, 田宮菜奈子. 高齢の虚血性心疾患術後におけるリハビリテーション実施状況: 心リハ施設基準の有無による検討. 第26回心臓リハビリテーション学会学術集会, 福岡, 2020.7.18-19. 査読有

2. 受賞歴

1. 2020年10月「第79回日本公衆衛生学会総会 優秀口演賞」(北村智美, 森田光治良, 吉江悟, 飯島勝矢. 高齢COPD患者における在宅医療・介護サービス利用状況と入院との関連)

吉澤 裕世

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Fujisaki M, Takahashi K, Yoshizawa Y, Iijima K. Frailty checkup supporter's intentions to participate in human-resource development and training activities. The Journal of Frailty & Aging.2020;9(4):238-243.査読有
2. Yoshizawa Y, Tanaka T, Takahashi K, Fujisaki M, Son BK, Iijima K. Impact of health literacy on the progression of frailty after 4 years among community-dwelling older adults. International

journal of environmental research and public health.2022;19 :394. 査読有

3. 西本美紗, 田中友規, 高橋競, Unyaporn Suthutvoravut, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢. オーラルフレイルと食事の満足感の関連：地域在住高齢者による横断検討（柏スタディ）. 2020; 57:273-281.査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 吉澤裕世, 飯島勝矢. サルコペニアを見つける. WOC Nursing; 2021; 9(7): 74-80. 査読無
2. 吉澤裕世.生活習慣病対策とフレイル対策の両立. Medical View Point; 2022,1.査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Fujisaki M, Takahashi K, Yoshizawa Y, Tanaka T, Suthuvoravut U, Nishimoto M, Iijima K. Investigation of frail prevention strategy by community assessment using data of frailty checkup. 6thInternational Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science . Osaka, Japan, ,2020. 2. 28-29. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 吉澤裕世,藤崎万裕,田中友規,高橋競,飯島勝矢:通いの場におけるフレイルチェックによるアウトリーチ体制構築に向けた課題-サービス・クオリティ・ギャップモデルを用いて-. 第79回日本公衆衛生学会総会, 京都,2020.10.20-22. 査読有
2. 高橋競,田中友規,藤崎万裕, 吉澤裕世,飯島勝矢. 地域在住高齢者の夜間頻尿による活動能力への影響に関する混合研究. 第79回日本公衆衛生学会総会,京都, 2020.10.20-22. 査読有
3. 藤崎万裕,高橋競, 吉澤裕世,田中友規,孫輔卿,飯島勝矢.フレイルチェックデータを用いた地域アセスメントによるフレイル予防戦略の検討. 第27回日本未病学会学術総会, 東京, 2020. 10.31-11.1. 査読有
4. 吉澤裕世,藤崎万裕,田中友規,吉田みどり,浅野美穂子,ザーリッチ陽子,高橋競,飯島勝矢:通いの場でのアウトリーチ支援によるフレイル高リスク者の日常生活行動の変化-事例検討を通して-. 第5回日本サルコペニア・フレイル学会, 東京, 2020. 11.14-15 査読有
5. 藤崎万裕, 吉澤裕世,高橋競,孫輔卿,田中友規,飯島勝矢. フレイルチェック事業導入自治体における参加者フォローアップ体制の実態. 第7回日本サルコペニア・フレイル学会,東京, 2020. 11.14-15. 査読有
6. 高橋競, 孫輔卿, 田中友規,藤崎万裕, 吉澤裕世, 呂偉達,飯島勝矢. フレイルサポーターによる地域活動に関する混合研究. 第7回日本サルコペニア・フレイル学会, 東京, 2020. 11.14-15. 査読有
7. 吉澤裕世,高橋競,藤崎万裕,田中友規, 孫輔卿,飯島勝矢:複数の文化活動への参加とフレイルとの関連. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会,大阪, 2021. 11.6-7. 査読有
8. 田端宏樹,大塚光,石嗇),杉本真理,染谷由希,加賀英義,筧佐織,アブドラザク・アブラディ,梅村二葉,内藤仁嗣,木屋舞,田島翼,吉澤裕世,河盛隆造,田村好史. 青年期と高齢期の運動習慣の組み合わせとサルコペニア・ダイナペニアの有病率との関連. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会,大阪,2021.11.6-7.査読有
9. 吉澤裕世, 高橋競,藤崎万裕,田中友規,飯島勝矢. 高齢者における居住地周辺の環境とフレイル及び地域活動との関係. 第80回日本公衆衛生学会総会,東京, 2021. 12.21-23. 査読有
10. 高橋競, 田中友規, 吉澤裕世,藤崎万裕, 飯島勝矢. 地域高齢者における夜間頻尿・フレイルの重複とポリファーマシーとの関連. 第80回日本公衆衛生学会総会,東京, 2021. 12.21-23. 査読有

WINGS-GLAFS

高齢社会総合研究国際卓越大学院

World-leading Innovative Graduate Study Program in Gerontology:
Global Leadership Initiative for Age-Friendly Society
（略称：WINGS-GLAFS）

プログラムの概要 …… 125

プログラム担当教員 …… 129

応募状況と合格者 …… 130

WING-GLAFSの全体像 …… 131

学生の業績 …… 132

プログラムの概要

本プログラムは、日本がリードする人類共通の新課題「高齢社会問題」における、基盤的総合知の習得と、最前線でのフィールド体験を通して、自らの専門領域研究が、どのように高齢社会の諸課題と接続し得るのかを理解し、自らの研究の社会対応力の強化を図ることを目的としています。このため、直接に高齢者を研究対象とする方に限らず、高齢社会の何らかの課題に高い関心を持ち、その解決に貢献する研究に取り組む方を、対象としています。

■1_プログラム参画専攻（2021年度）

本プログラムは、以下の専攻に所属する学生が履修することができます。

【工学系研究科】	全専攻
【人文社会系研究科】	社会文化研究専攻
【教育学研究科】	総合教育科学専攻、学校教育高度化専攻
【法学政治学研究科】	総合法政専攻
【総合文化研究科】	広域科学専攻
【農学生命科学研究科】	生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、水圏生物科学専攻、農業・資源経済学専攻、生物・環境工学専攻、応用動物科学専攻
【医学系研究科】	社会医学専攻、生殖・発達・加齢医学専攻、外科学専攻、国際保健学専攻、健康科学・看護学専攻
【新領域創成科学研究科】	先端エネルギー工学専攻、人間環境学専攻、社会文化環境学専攻、国際協力学専攻
【情報理工学系研究科】	知能機械情報学専攻
【学際情報学府】	学際情報学専攻

■2_カリキュラム

本プログラムでは、多領域連携力の涵養のため、ジェロントロジーが様々な学問領域から構成されることを理解する俯瞰力修得のために必修の概論、特定課題解決時に必ず生じる周辺近接領域の存在・特性・連携の仕方を理解する周辺領域理解力修得のために選択必修の特論、具体の特定課題を実社会の中で解くために必要な社会規範や経済の理解、現場の人間関係への対応、社会に対する説得力あるプレゼン能力等によって構成される社会接続力修得のために選択必修の実習を、それぞれ概論、特論、実習という形で採り入れる。さらに、年に2回の全体発表会を設け、履修生と関連教員全員がそれぞれの研究手法を学び合う場を提供する。

［概論（座学）］　俯瞰力の修得

（必修／2科目4単位履修）

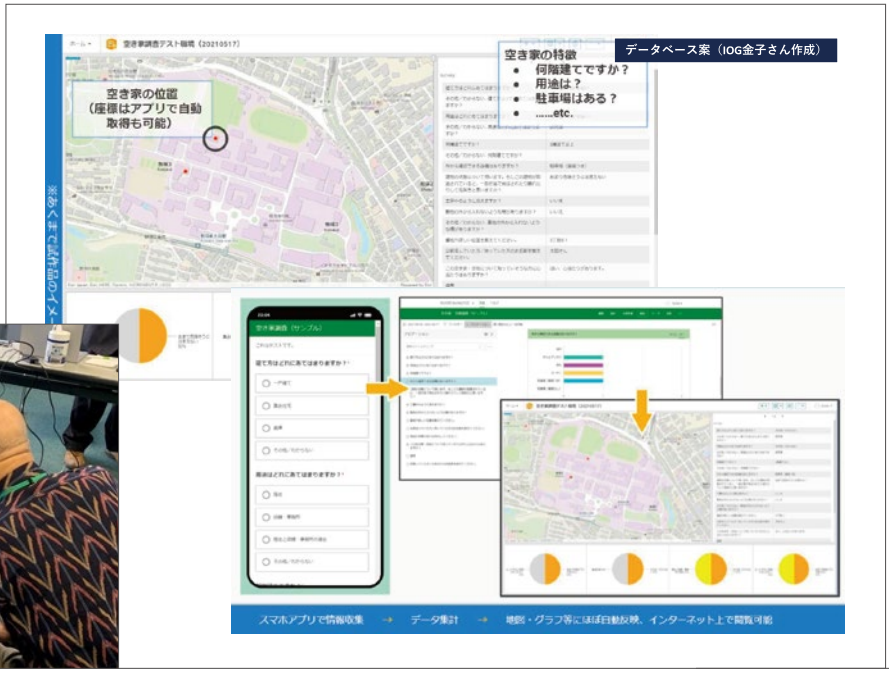
高齢社会における人間の「個」と「社会」という存在形態に依拠した形で、高齢社会に関わる基礎的知の基盤を伝授する。

［特論（座学）］　周辺領域理解力の修得

（選択必修／3科目6単位以上履修※）

高齢社会総合研究学の各専門分野の最前線を示す専門領域

▼ 学生による空き地情報のアプリ開発



▼ スタジオ（高齢社会総合研究学実習）

にかかわる視座を提供する。履修生は、これらの講義群の中から自らの興味と、実社会において実現したい生活場面に関わる、気になる近接領域の最前線を学ぶ。

［実習（フィールド）］　社会接続力の修得

（選択必修／3科目6単位以上履修※）

活力ある超高齢社会を実現するためには、分野横断的専門家のチームと地域住民、行政、企業等による協働的活動を主導し、様々な現場の様々な課題を解決する力を備えた多様な人材が必要であり、上記の座学（概論と特論）に加えて、現場で分野横断的な取り組みに加わり、体験する。複数の実習を履修することを通して、マルチスケールの生活場面への研究成果の社会接続の技量を体験的に学ぶ。集中講義形式で、選択肢の高いカリキュラムとする。

なお、実習は概論において高齢社会の基礎を修得した後に履修するものとする。（概論単位取得済が実習履修要件）

［全体研究発表会］　多領域連携

（実習発表／博士論文研究発表）

実習履修者には、各実習の学期最後の講義として、年に2回の全体研究発表会を設け、本プログラム履修生全員で、それぞれの実習の成果を発表する。加えてこの全体発表会で、博士後期課程及び4年制博士課程の学生は博士論文研究の発表を行う。このことを通して、異分野の研究手法等を学び合う場をつくる。

※ 4年制博士課程と先端学際工学専攻博士後期課程の者については、本頁の修了要件とは異なる点があるので、別途確認すること。

■3_開講科目

2020年度開講科目一覧

2020年度カリキュラム一覧

科目番号	開講科目名称・講義別名	単位数	開講区分	主担当教員名	曜日	時限（開始・終了）	必修選択必修	開講日講義室名その他特記事項
講義（必修）								
3799-220	高齢社会総合研究学概論I 高齢者の体と心：老いとつきあう	2	夏学期（S1S2）	飯島	水	5限 16:50-18:35	必修	4/15～7/15 オンライン
3799-221	高齢社会総合研究学概論II 高齢社会のリ・デザイン	2	冬学期（A1A2）	大月	火	5限 16:50-18:35	必修	9/29～1/5 オンライン
講義（選択必修：6単位以上取得※）								
3799-223	高齢社会総合研究学特論II 超高齢社会の住まい・まちづくり	2	夏学期（S1）	大月	火	6限-7限 18:45-22:25	選択必修	4/7～6/2 オンライン
3799-224	高齢社会総合研究学特論III 人生100年時代のライフコース論	2	夏学期（S1S2）	菅原	木	5限 16:50-18:35	選択必修	4/9～7/9 オンライン
3799-225	高齢社会総合研究学特論IV 高齢社会のケア・サポート・システム	2	夏学期（S2）	飯島 孫	火	5限-6限 16:50-20:30	選択必修	6/9～7/14 オンライン
3799-226	高齢社会総合研究学特論V 地域農業マネジメント	2	冬学期（A2）	八木	火 金	5限 16:50-18:35	選択必修	11/24～（週2回）オンライン
3799-227	高齢社会総合研究学特論VI 高齢者法	2	冬学期（A1A2）	樋口 高橋	木	3限 13:00-14:45	選択必修	9/24～12/17 オンライン
3799-231	高齢社会総合研究学特論X ジェロンテクノロジー	2	冬学期（A1A2）	檜山 二瓶	金	5限-6限 16:50-20:30	選択必修	10/2 オンライン
実習（選択必修：6単位以上取得※）								
3799-234	高齢社会総合研究学実習I	2	通年	各教員	土	集中	選択必修	オンライン
3799-235	高齢社会総合研究学実習II	2	通年	各教員	土	集中	選択必修	同上
3799-236	高齢社会総合研究学実習III	2	通年	各教員	土	集中	選択必修	同上
3799-237	高齢社会総合研究学実習IV	2	通年	各教員	土	集中	選択必修	同上
3799-238	高齢社会総合研究学実習V	2	通年	各教員	土	集中	選択必修	同上
3799-239	高齢社会総合研究学実習VI	2	通年	各教員	土	集中	選択必修	同上
3799-240	高齢社会総合研究学実習VII	2	通年	各教員	土	集中	選択必修	同上
3799-241	高齢社会総合研究学実習VIII	2	通年	各教員	土	集中	選択必修	同上
3799-259	高齢社会総合研究学演習X	1	通年	各教員	土	集中	選択必修	同上

2021年度開講科目一覧

2021年度カリキュラム一覧

科目番号	開講科目名称・講義別名	単位数	開講区分	主担当教員名	曜日	時限（開始・終了）	必修選択必修	開講日講義室名その他特記事項
講義（必修）								
3799-220	高齢社会総合研究学概論I 高齢者の体と心：老いとつきあう	2	夏学期（S1S2）	飯島	水	5限 16:50-18:35	必修	4/21～7/21 オンライン
3799-221	高齢社会総合研究学概論II 高齢社会のリ・デザイン	2	冬学期（A1A2）	大月	水	5限 16:50-18:35	必修	10/6～1/12 オンライン
講義（選択必修：6単位以上取得※）								
3799-224	高齢社会総合研究学特論III 人生100年時代のライフコース論	2	夏学期（S1S2）	大月 菅原	金	2限 10:25-12:10	選択必修	4/9～7/9 オンライン
3799-225	高齢社会総合研究学特論IV 高齢社会のケア・サポート・システム	2	夏学期（S2）	飯島	火	5限-6限 16:50-20:30	選択必修	6/8～7/13 オンライン
3799-226	高齢社会総合研究学特論V 地域農業マネジメント	2	冬学期（A2）	八木	火 金	5限 17:05-18:35	選択必修	11/30～（週2回）オンライン
3799-231	高齢社会総合研究学特論X ジェロンテクノロジー	2	冬学期（A1A2）	檜山 二瓶	木	5限-6限 16:50-20:30	選択必修	10/7～ オンライン
実習（選択必修：6単位以上取得※）								
3799-234	高齢社会総合研究学実習I	2	通年	各教員	–	集中	選択必修	オンライン
3799-235	高齢社会総合研究学実習II	2	通年	各教員	–	集中	選択必修	同上
3799-236	高齢社会総合研究学実習III	2	通年	各教員	–	集中	選択必修	同上
3799-237	高齢社会総合研究学実習IV	2	通年	各教員	–	集中	選択必修	同上
3799-238	高齢社会総合研究学実習V	2	通年	各教員	–	集中	選択必修	同上
3799-239	高齢社会総合研究学実習VI	2	通年	各教員	–	集中	選択必修	同上
3799-240	高齢社会総合研究学実習VII	2	通年	各教員	–	集中	選択必修	同上
3799-241	高齢社会総合研究学実習VIII	2	通年	各教員	–	集中	選択必修	同上
3799-259	高齢社会総合研究学演習X	1	通年	各教員	–	集中	選択必修	同上

※ 2020年度以降に入学の4年制博士課程と先端学際工学専攻博士後期課程の者については、別途修了要件を確認すること。

■4_プログラムの修了要件

本プログラムでは、修士課程（博士前期課程）修了時点のQualifying Examination（QE）並びに博士後期課程修了時のFinal Examination（FE）の2回の審査を行うとともに、各学年進学時には履修状況を確認し、所属専攻の研究活動と並行した本プログラムの活動が円滑かつ計画的に進められているかを、論文指導教員との連絡の下に確認し、必要に応じた履修・研究指導を行う。QE、FE等については、以下の内容とする。

■修士課程修了時 資格審査（QE：Qualifying Examination）

修士課程修了時のQEでは、「単位要件」、「学振要件」、「博士課程進学の確認」によって考査する。ただし、4年制博士課程と先端学際工学専攻博士後期課程の者については、上記に加え、「発表要件」も加味して合否を判定する。

- **単位要件：** 概論（必修）4単位と、特論（選択必修）と実習（選択必修）から6単位以上の、合計10単位以上取得しなければならない。※
- **学振要件：** 日本学術振興会（JSPS）特別研究員（DC1もしくはDC2）に申請しなければならない。申請後すぐに、申請書及び採否通知PDFを提出すること。※
- **博士課程進学の確認：** 面接により博士後期課程進学の確認を行う。※

■博士課程修了時 修了審査（FE：Final Examination）

博士後期課程終了時のFEでは、「単位要件」、「発表要件」、「学振要件」によって考査する。この考査に加え、所属専攻における博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究国際卓越大学院プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授ける博士の学位記に「高齢社会総合研究国際卓越大学院プログラム修了」という認定が付記される。

- **単位要件：** 概論（必修）4単位と、特論（選択必修）6単位以上と、実習（選択必修）6単位以上の、合計16単位以上取得しなければならない。※
- **発表要件：** 博士後期課程在籍期間中の各学期末に、指定された回数の博論研究進捗発表を、全体発表会時に行うこと。※
- **学振要件：** 日本学術振興会（JSPS）特別研究員（DC2）に申請しなければならない。申請後すぐに、申請書及び採否通知PDFを提出すること。※

□日本学術振興会（JSPS）特別研究員（DC1、DC2）への申請

DCに採択されるまで継続して応募し、採択された場合においても本プログラムに引き続き在籍することが必要である。DCに応募しなかった場合には、理由書等で経緯を明らかにすること。理由によっては、プログラム履修の中断や経済的支援（卓越RA）の支給停止を行う場合がある。

□全体発表会における実習発表と博論研究進捗発表

年2回、各学期末に、全体発表会を行う。全体発表会は、実習発表と博論研究進捗発表からなる。実習を履修した者は、実習発表を行うことによって単位が授与される。さらに、博士課程在学中は6回から8回の博論研究進捗発表を行わなければならない。

※4年制博士課程と先端学際工学専攻博士後期課程の者については、本頁の修了要件とは異なる点があるので、別途確認すること。

■5_経済的支援（卓越RA）

経済的支援は、所定の様式にて申請した者に対し、選考委員会で審査し、給付額を決定し、卓越RAとして委嘱します。
修士課程2年次の履修生には月額6万円を上限に、博士後期課程及び4年制博士課程のコース生には月額18万円を上限に支給します。

プログラム担当教員

＊所属・職名は2022年3月末現在

氏名	所属（研究科・専攻等）・職名
染谷 隆夫	工学系研究科・研究科長、電気系工学専攻・教授
大月 敏雄	工学系研究科建築学専攻・教授、高齢社会総合研究機構・副機構長
飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構・機構長／未来ビジョン研究センター・教授
祐成 保志	高齢社会総合研究機構・副機構長／大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・准教授
井口 高志	大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻・准教授
高橋 美保	大学院教育学研究科 総合教育科学専攻・教授
北村 友人	大学院教育学研究科 学校教育高度化専攻・教授
加藤 淳子	大学院法学政治学研究科 総合法政専攻・教授
横山 ゆりか	大学院総合文化研究科 広域科学専攻・教授
福田 大輔	大学院工学系研究科 社会基盤学専攻・教授
松田 雄二	大学院工学系研究科 建築学専攻・准教授
小泉 秀樹	大学院工学系研究科 都市工学専攻・教授
柳澤 秀吉	大学院工学系研究科 機械工学専攻・准教授
鈴木 雄二	大学院工学系研究科 機械工学専攻・教授、工学系研究科・副研究科長
横野 泰之	大学院工学系研究科 機械工学専攻・特任教授
淺間 一	大学院工学系研究科 精密工学専攻・教授
青山 和浩	大学院工学系研究科 システム創成学専攻・教授
小紫 公也	大学院工学系研究科 航空宇宙工学専攻・教授
峯松 信明	大学院工学系研究科 電気系工学専攻・教授
求 幸年	大学院工学系研究科 物理工学専攻・教授
吉田 英弘	大学院工学系研究科 マテリアル工学専攻・教授
山口 和也	大学院工学系研究科 応用化学専攻・教授
伊藤 大知	大学院工学系研究科 化学システム工学専攻／大学院医学系研究科 附属疾患生命工学センター・教授
森本 淳平	大学院工学系研究科 化学生命工学専攻・講師
檜山 敦	大学院工学系研究科 先端学際工学専攻・特任准教授
藤井 康正	大学院工学系研究科 原子力国際専攻・教授
酒井 崇匡	大学院工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻・教授
茂木 源人	大学院工学系研究科 技術経営戦略学専攻・教授
安永 円理子	大学院農学生命科学研究科 附属生態調和農学機構・准教授（同研究科生物・環境工学専攻兼担／生産・環境生物学専攻兼担）
三坂 巧	大学院農学生命科学研究科 応用生命化学専攻・准教授
潮 秀樹	大学院農学生命科学研究科 水圏生物科学専攻・教授
八木 洋憲	大学院農学生命科学研究科 農業・資源経済学専攻・准教授
高橋 伸一郎	大学院農学生命科学研究科 応用動物科学専攻・教授
堀 正敏	大学院農学生命科学研究科 獣医学専攻・教授
橋本 英樹	大学院医学系研究科 公共健康医学専攻・教授（同研究科社会医学専攻兼担／健康科学・看護学専攻兼担）
小川 純人	大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻・准教授
山田 雄太	大学院医学系研究科 外科学専攻・講師
山本 則子	大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻・教授
神馬 征峰	大学院医学系研究科 国際保健学専攻・教授
大崎 博之	大学院新領域創成科学研究科 先端エネルギー工学専攻・教授
二瓶 美里	大学院新領域創成科学研究科 人間環境学専攻・准教授
割澤 伸一	大学院新領域創成科学研究科 人間環境学専攻・教授
岡部 明子	大学院新領域創成科学研究科 社会文化環境学専攻・教授
中田 啓之	大学院新領域創成科学研究科 国際協力学専攻・教授
鳴海 拓志	大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻・准教授
越塚 登	学際情報学府 学際情報学専攻・教授
濱田 健夫	学際情報学府 学際情報学専攻・特任講師
孫 輔卿	未来ビジョン研究センター・特任講師

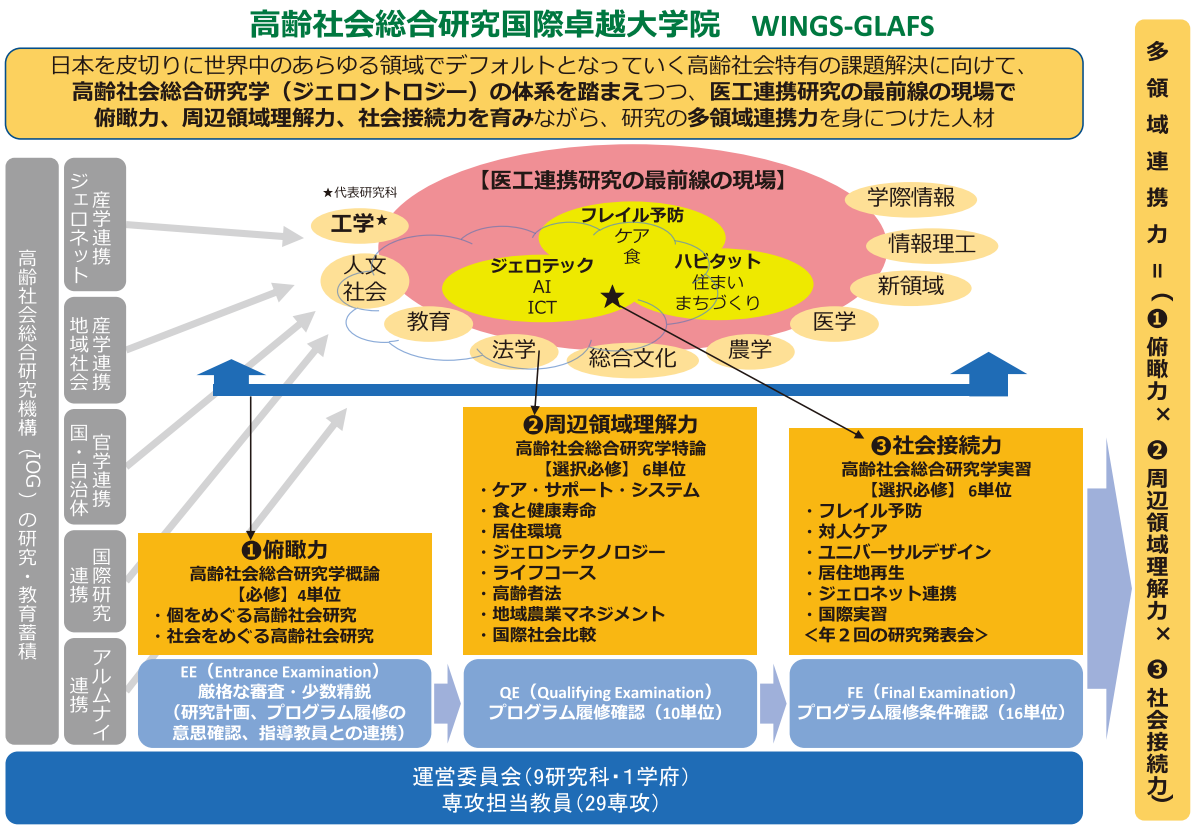
応募状況と合格者

		2020年度	2021年度
プログラム募集定員数	**10人**	**10人**	**14人**
応募学生数		**7人**	**31人**
	うち留学生数	0人	10人
	うち自大学出身者数	2人（0人）	13人（0人）
	うち他大学出身者数	5人（0人）	18人（10人）
	うち社会人学生数	4人（0人）	3人（3人）
	うち女性	3人（0人）	9人（4人）
合格者数		**7人**	**14人**
	うち留学生数	0人	2人
	うち自大学出身者数	2人（0人）	10人（0人）
	うち他大学出身者数	5人（0人）	4人（2人）
	うち社会人学生数	4人（0人）	1人（1人）
	うち女性	3人（0人）	5人（1人）
②のうち受講学生数		**7人**	**14人**
	うち留学生数	0人	2人
	うち自大学出身者数	2人（0人）	10人（0人）
	うち他大学出身者数	5人（0人）	4人（2人）
	うち社会人学生数	4人（0人）	1人（1人）
	うち女性	3人（0人）	5人（1人）
プログラム合格倍率（①応募学生数／②合格者数）（小数点第三位を四捨五入）		**1.00倍**	**2.21倍**
充足率（合格者数／募集定員）		**70%**	**140%**

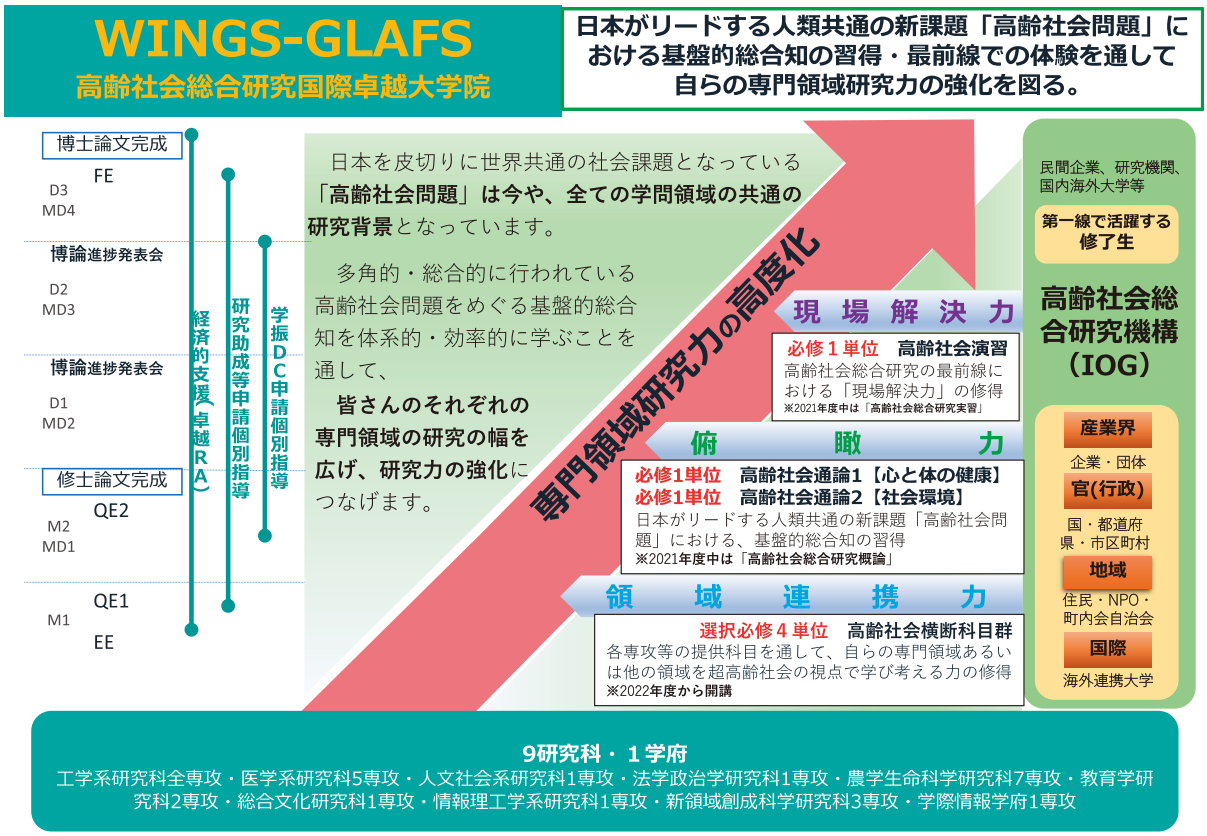
※ 博士入学生　2020年度、2021年度：3年制博士1年次　各1名
※（　）は留学生の人数
※ 2021年度は、2回（4月、9月）募集の合計
※各年度：各年度末現在

WING-GLAFSの全体像

■ 2020年スタート時



■ 2022年度～



学生の業績

GLAFSの学生が2020―2021年度に発表した研究論文や学会発表などの業績について紹介します。

稲垣 安沙

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Eltaybani S, Yasaka T, Fukui C, Inagaki A, Takaoka M, Suzuki H, Maruyama M, Yamamoto-Mitani N. Family-oriented interventions in long-term care residential settings: a scoping review protocol. JBI Evid Synth. 2021 Feb 9. doi: 10.11124/JBIES-20-00289. Epub ahead of print. PMID: 33577233. 査読有
2. Fukui C, Igarashi A, Noguchi-Watanabe M, Sakka M, Naruse T, Kitamura S, Inagaki A, Takaoka M, Yasaka T, Kobayashi H, Yamamoto-Mitani N. Development of Quality Indicators for Evaluating the Quality of Long-term Care. Geriatrics & Gerontology International. 2021 Feb 14. doi: 10.1111/ggi.14138. 査読有
3. Inagaki A, Noguchi-Watanabe M, Sakka M, Yamamoto-Mitani N. Homecare nurses' community involvement activities and preference regarding the place for end-of-life period among single older adults: A cross-sectional study in Japan. Journal of Health and Social Care in the Community. 2020 Dec 14. doi: 10.1111/ggi.14082. Epub ahead of print. PMID: 33319458. 査読有
4. Noguchi-Watanabe M, Yamamoto-Mitani N, Nagami Y, Eltaybani S, Inagaki A, Taniguchi Y. Homecare nurses' length of conversation and intention to remain at the workplace: A multilevel analysis. Journal of Nursing Management. 2020 Nov 11. doi: 10.1111/jonm.13212. Epub ahead of print. PMID: 33179317. 査読有
5. Anezaki S, Sakka M, Noguchi-Watanabe M, Igarashi A, Inagaki A, Tsuno Y, Omori J, Ota A, Yamamoto-Mitani N. Association between participation in hospital-led community activities and sense of security in continued community living among older adults in rural district of Japan: A cross-sectional study. Health and Social Care in the Community. 2020 Oct 21. doi:10.1111/hsc.13191. 査読有
6. 野口麻衣子,姉崎沙緒里, 五十嵐歩,目麻里子,稲垣 安沙,津野陽子,大森純子, 山本則子. Social Community Nursing機能【前編】.コミュニティケア, 2020; 23(4), 29-34. 査読有
7. 稲垣安沙, 高野純子, 野口麻衣子, 山本則子. 地域在住高齢者のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の実施状況と関連要因：横断研究. 日本看護科学会誌. 2020;40:56-64. 査読有
8. 野口麻衣子、山本則子、稲垣安沙、沼田華子、山田享介. 訪問看護事業所における看護実践に焦点を当てたケースカンファレンスの試行と効果. 日本在宅看護学会. 2021; 10(1): 95-102. 査読有
9. 姉崎沙緒里, 野口麻衣子, 五十嵐歩,目麻里子,稲垣 安沙,津野陽子,大森純子, 山本則子. . Social Community Nursing機能【後編】. コミュニティケア. 2021; 23(5): 39-42. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Shinohara M, Sakka M, Inagaki A, Yasaka T, Fukui C, Noguchi-Watanabe M, Igarashi A, Yamamoto-Mitani N.. Association Between Advance Care Planning for Older Adults and Family Caregivers' Sense of Security. GSA 2021 Annual Scientific Meeting. Nov , 202. 査読有
2. Sakka M, Igarashi A, Fukui C, Noguchi-Watanabe M, Inagaki A, Takaoka M, Kobayashi H, Yamamoto-Mitani N. Agreement between proxy-rated and self-report quality of life for persons with dementia. GSA 2020 Annual Scientific Meeting, November 4-7, 2020 USA, Online. 査読有
3. Inagaki A, Igarashi A, Noguchi-Watanabe M, Sakka M, Fukui C, Yasaka T, Shinohara M, Yamamoto-Mitani N. Physical Restraints of Older adults at Home: Preliminary Analysis of a Prospective Cohort Study, GSA 2020 Annual Scientific Meeting, November 4-7, 2020 USA, Online. 査読有
4. Igarashi A, Katayama M, Sakka M, Noguchi-Watanabe M, Fukui C, Kitamura S, Inagaki A, Takaoka M, Yamamoto-Mitani N. Use of homecare nursing and sense of security among family caregivers of older adults. GSA 2020 Annual Scientific Meeting, Online meeting, October 2020. 査読有
5. 稲垣安沙、福井千絵、五十嵐歩、野口麻衣子、目麻里子、北村智美、高岡茉奈美、小林弘美、矢坂泰介、山本則子. 在宅療養中高齢者の療養上の満足感と基本属性の関連. 第40回日本看護科学学会, オンライン開催, 2020年12月12日～12月13日. 査読有
6. 野口 麻衣子,五十嵐 歩,目 麻里子,稲垣 安沙,大森純子, 津野陽子,山本 則子. Social Community Nursesによる活動の定着プロセス. 第40回 日本看護科学学会学術集会. Dec. 12-13, 2020; 東京（Web開催）査読有
7. 福井 千絵、野口 麻衣子、五十嵐 歩、目 麻里子、稲垣 安沙、片山 真登香、山本 則子. 在宅療養高齢者の訪問看護の利用と家族のウェルビーイングとの関連：前向きコホート研究. 日本家族看護学会第27回学術集会；Sep. 12-13、2020：名古屋（Web開催）査読有
8. 野口麻衣子、山花令子、稲垣安沙、山本則子. 訪問看護ステーション管理者が在宅療養者のケアに関して専門性の高い看護師から受けたい支援. 第7回CNS看護学会; June 13, 2020:京都（誌上開催 査読有
9. 野口麻衣子、五十嵐歩、目麻里子、福井小紀子、柏木聖代、池崎澄江、北村智美、稲垣安沙、小林弘美、山本則子. 施設・在宅横断型質指標の開発～VENUS(Visualizing Effectiveness of NUrSing and Long-term care)プロジェクト～第2回日本在宅医療連合学会; June 27-28, 2020: 名古屋（Web開催）査読有

10. 福井千絵、稲垣安沙、五十嵐歩、野口麻衣子、目麻里子、北村智美、高岡茉奈美、小林弘美、矢坂泰介、山本則子. 在宅療養中の高齢者家族における療養生活に関する安心感と属性との関連:横断研究. 日本老年看護学会第25回学術集会; Jun. 20-21, 2020: 島根(誌上開催). 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Inagaki A, Igarashi A, Noguchi-Watanabe M, Sakka M, Fukui C, Yasaka T, Shinohara M, Yamamoto-Mitani N. Physical Restraints of Older adults at Home: Preliminary Analysis of a Prospective Cohort Study, GSA 2020 Annual Scientific Meeting, November 4-7, 2020 USA, Online. 査読有

江藤 人拓

1. 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Etoh H, Omura Y, Kaminishi K, Chiba R, Takakusaki K, Ota J. Proposal of a Neuromusculoskeletal Model Considering Muscle Tone in Human Gait. 2021 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC), Melbourne, Australia, 2021. 10. 17-20. 査読有
2. Etoh H, Omura Y, Kaminishi K, Chiba R, Takakusaki K, Ota J. Proposal of a Computational Simulation that Considers Muscle Tone in Human Standing and Gait. 1st International Symposium on Hyper-Adaptability, 2021. 5. 26-27. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 江藤人拓.　歩行開始動作における先行随伴性姿勢調節の有効性の検証.　2021年度先端ロボット工学合同ワークショップ，オンライン開催, 2021. 12. 11. 査読無
2. 江藤人拓, 尾村優一郎, 上西康平, 千葉龍介, 高草木薫, 太田順. 歩行開始動作における予期的姿勢調節の動作計画 . 第3回(2021年度)超適応全体会議, オンライン開催, 2022. 3. 7-8. 査読無
3. Chiba R, Etoh H, Omura Y, Kaminishi K, Takakusaki K, Ota J.. A Control Model incorporating Physiological Knowledge for Elucidating Postural Control in Human. 第99回日本生理学会大会, 東北大学川内北キャンパス, 2022. 3. 16-18.

2. 受賞歴

1. 2021年5月「2021年度 精密工学会 春季大会学術講演会　ベストプレゼンテーション賞」(江藤人拓, 尾村優一郎, 上西康平, 千葉龍介, 高草木薫，太田順. 脳神経筋骨格シミュレーションによる立位と歩行における筋緊張の影響の解析)
2. 2021年12月「先端ロボット工学合同ワークショップ　3位」(江藤人拓. 歩行開始動作における先行随伴性姿勢調節の有効性の検証.)

王聰

1. 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Wang C, Fushiki Y, Saito K. Impact of credit on vulnerability to poverty: empirical evidence from Nepal. The 10th ASAE (Asian Society of Agricultural Economists) International Conference, Virtual conference, 2021. 12. 6-8. 査読有
2. Wang C, Fushiki Y, Saito K. Determinants of livelihood diversification strategies in Nepal. The 31st International Conference of Agricultural Economists (ICAE 31), Virtual conference, 2021. 8. 17-31. 査読有

小川 景司

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. 小川景司，八木洋憲. 集落営農法人による事業選択の特徴と持続可能性―滋賀県における実態分析―. 農業経営研究，2020年；58(2): 47-52. 査読有

風間 健人

1. 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 風間健人, 高木聡一郎.　越境人材による知識スピルオーバーが企業のイノベーションに与える影響 -越境フリーランスへのインタビュー調査及びSCATによる質的データ分析-, 社会経済システム学会 第40回大会, 2021年10月30日. 査読無
2. 風間健人.　めじろ台スタジオ実習報告~ポスト超高齢化　-ポストコロナのまちづくり運営-,　東京大学高齢社会総合研究機構2021年度シンポジウム, 2022年3月9日. 査読無

金沢 直晃

1. 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 金沢直晃, 北川晋吾, 室岡貴之, 岡田慧, 稲葉雅幸. 調理道具を扱う双腕ロボットによる野菜皮剥き切断操作の認識行動実現システム. 第21回SICEシステムインテグレーション部門講演会,　オンライン, 2020.12.16-18. 査読無
2. 金沢直晃, 岡田慧, 稲葉雅幸. 台車移動型双腕ロボットによるカレー調理行動実行システム. 第39回日本ロボット学会学術講演会, オンライン, 2021.9.8-11. 査読無
3. 金沢直晃, 北川晋吾, 室岡貴之, 岡田慧, 稲葉雅幸. テンプレートマッ

チング認識とプリミティブ動作により状態を考慮した家電操作を行うロボットシステム. 第22回SICEシステムインテグレーション部門講演会, オンライン, 2021.12.15-17. 査読無

2. 受賞歴

1. 2021年12月「第22回 計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会(SI2021) 優秀講演賞」(金沢直晃, 北川晋吾, 室岡貴之, 岡田慧, 稲葉雅幸. テンプレートマッチング認識とプリミティブ動作により状態を考慮した家電操作を行うロボットシステム)

Kang SooIn

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. 森 武俊, カン スーイン, 褥瘡画像のAI 技術による画像処理, 日本創傷・オス トミー・失禁管理学会誌, 2021, 25 巻, 3 号, 490-498, 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kang S.I., Shuhei N, Noguchi H, Takahashi T, Sanada H, Mori T. Development of an Electrical Impedance Tomography Spectroscopy for Pressure Ulcer Monitoring Tool: Preliminary study. 42nd EMB Conference, Montreal, Canada. 2020. 7. 20-24. 査読有.
2. Kang S.I., Mori T. Pressure ulcer segmentation to record wound size using recurrent residual convolutional neural network. The 9th Asia Pacific Enterostomal Therapy Nurse Association Conference, Tokyo, Japan. 2021. 7. 3-5. 査読有.
3. Yoshioka D., Kogami H., Kang S.I., Yoshizaki R., Sakurai Y., Nakano K., Wu J., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura T., Yabu K., Ito K., Ifukube T. Evaluation of IoT-Setting Method Among Senior Citizens in Japan. 24th International Conference on Human-Computer Interaction, Washington DC, USA. 2021. 7. 24-29. 査読有.
4. Kang S.I., Mori T. Segmentation of Pressure Ulcer Images for Estimation of Wound Status Using Residual Convolutional Neural Network. 43rd EMB Conference, Virtual. 2021. 11. 1-5. 査読有.
5. Kang S., Yoshizaki R., Kogami H., Nakano K., Sakurai Y., Yoshioka D., Wu J., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura T., Yabu K., Ito K., Akiyama H., Otsuki T., Ifukube T. Preliminary evaluation of an IoT setting method for universal design. International Conference on Design and Concurrent Engineering 2021 & Manufacturing Systems Conference 2021, Virtual. 2021. 9. 3-4. 査読有.
6. Kang S.I., Ito K., Yoshizaki R., Kogami H., Nakano K., Yoshioka D., Sakurai Y., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura T., Yabu K., Ifukube T. Enriching IoT Web Application Experience by Integrating Containerized Edge Resource. 2022 IEEE 4th Global Conference on Life Sciences and Technologies, Osaka, Japan. 2022. 3. 7-9. 査読有.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Kang S.I., 野寄修平, 野口博史, 高橋聡明, 真田弘, 森武俊. Developing Wound Monitoring System Using Electrical Impedance Tomography Spectroscopy: Preliminary Trial 第29回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会, 奈良県. 2020. 5. 16-17. 査読有.
2. Kang S.I., Shuhei N., Noguchi H., Takahashi T., Sanada H., Mori T. Impedance tomography spectroscopy for simultaneous classification of depth and tissue in pressure ulcers: Preliminary study. ロボティクス・メカトロニクス講演会2020, 金沢, 2020. 5. 27-30. 査読有.
3. Kang S.I., Mori T. Vessel recognition using multi-frequencies of skin impedance and signal similarity of photoplethysmography. ロボティクス・メカトロニクス講演会2021, 大阪, 2021. 6. 6-8. 査読有.
4. 中野航綺, 吉崎れいな, 湖上碩樹, 小川景司, 吉岡大介, カンスイン, 櫻井友理希, 藤崎万裕, 伊藤研一郎, 菅原育子. 高齢者主体の地域活動におけるIT技術導入・普及過程の分析. 第63回日本老年社会科学会, 2021. 6. 12-13. 査読有.
5. Kang S.I., Mori T. Venous blood flow measurement using both electrical impedance tomography and photoplethysmography. 第9回看護理工学会学術集会, オンライン開催, 2021. 10. 22-23. 査読有.
6. Kang S.I., Mori T. Multi-frequency impedance tomography for velocity estimation of vein blood flow. 第61回日本生体医工学会大会 2022, 新潟, 2022. 6. 28-30. 査読有. 採択済.

金東律

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. 金東律, 八木洋憲, 木南章. 営農管理情報システムを用いた情報の取得と活用:水田経営における従事者の職務とコミュニケーションに着目して. 農業経営研究, 2020; 58(3): 27-32. 査読有
2. 八木洋憲, 金東律. 農業法人のスマート農業導入における PDCA による経営改善 (特集 スマート農業は農村に何をもたらすか). 農村計画学会誌, 2021; 40(3): 142-147. 査読無

【著書、編著】

1. 八木洋憲, 金東律. 稲作における農業経営情報システムの導入効果と経営革新. 南石晃明(編). デジタル・ゲノム時代の農業イノベーション. 農林統計出版, 2022(予定).

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Dongyool K, Taichi M, Shuichiro H, Yerim Y, Sayaka T, Mai T, Ryogo O, Jun G. A Community Space with Diverse Activities Support Older Adults' Social Participation and Sustain Social Connection. Gerontological Society of America 2020 Annual Scientific Meeting, Philadelphia, USA, 2020.11.4-8. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 八木洋憲, 金東律, 飯田訓久. 多面的機支払いによる水田経営の支援効果 —数理計画モデルの実態への適用による—. 日本農業経済学会, 茨城, 2021. 3. 28. 査読有
2. 金東律, 八木洋憲, 木南章. 水田経営の情報化が組織内の作業調整に与える影響–農業経営情報システムの導入事例における継続的調査より–. 日本農業経営学会, 鹿児島, 2021. 9. 19. 査読有

日下部 紗伎

1. 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kusakabe S., Katashima T., Akagi Y., Linear viscoelasticity of polyethylene oxide nanocomposites. Annual European Rheology Conference Cyberspace, 2021, Online, 2021. 4. 13-15. 査読無
2. Kusakabe S., Katashima T., Akagi Y., Structure and linear viscoelasticity of PEO-silica composites. Pacifichem, 2021, Online, 2021. 12. 16-21. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 日下部紗伎, 片島拓弥, 中川桂一, 赤木友紀. PEOコンポジットの線形領域におけるレオロジー的検討. 日本レオロジー学会第47年会, 東京, 2020. 5. 13-14. 査読無
2. 日下部紗伎, 片島拓弥, 中川桂一, 赤木友紀. PEO-silica混合系の線形領域におけるレオロジー的検討. 第69回高分子学会年次大会, 福岡, 2020. 5. 27-29. 査読無
3. 日下部紗伎, 片島拓弥, 赤木友紀. PEOコンポジットの線形領域におけるレオロジー的検討. 第68回レオロジー討論会, 福岡, 2020.10. 21-23. 査読無
4. 日下部紗伎, 片島拓弥, 赤木友紀. PEO/silica混合系の線形粘弾性とダイナミクス. 日本化学会 第101春季年会, オンライン, 2021. 3. 19-22. 査読無
5. 日下部紗伎, 片島拓弥, 李响, 小林恵津子, 赤木友紀. PEO/silica混合系の線形粘弾性とミクロな構造. 第70回高分子討論会, オンライン, 2021. 9. 6-8. 査読無
6. 日下部紗伎, 片島拓弥, 李响, 小林恵津子, 赤木友紀. PEO/silicaコンポジットの線形粘弾性とミクロな構造. 第69回レオロジー討論会, オンライン, 2021. 10. 20-22. 査読無

呉江

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Wu J, Shino M. Hip Lift Transfer Assistive System for Reducing Burden on Caregiver's Waist. Sensors, 2021, 21.22: 7548. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Wu J, Dai Y, Li J, Yuan Y. UI/UX Design of Portable Simulation Pet 'KEDAMA' Hairball for Relieving Pressure. 23rd International Conference on Human-Computer Interaction, Washington DC, 2021.7.24-29, p. 215-223. 査読有
2. Wu J, Shino M. Pneumatic Multi-Pocket Elastomer Actuator for Simulating Tendon Driven Human Muscle. 2021 IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics, Sanya, China, 2021.12.27-31, p.143-148. 査読有
3. Wu J, Dai Y, Yuan Y, Li J. UI/UX Design Methodology of Portable Customizable Simulated Pet System Considering Human Mental Health. The 2022 IEEE 4th Global Conference on Life Science and Technologies, Osaka, Japan, 2022.3.7-9, p.488-492. 査読有

2. 受賞歴

2021.9.26 「最優秀賞(学生部門)」,福祉機器コンテスト2021 （呉江. 毛玉(KEDAMA)）

湖上碩樹

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Wang R, An Q, Yang N, Kogami H, Yoshida K, Hamada H, Shimoda S, Yamasaki H, Yokoyama M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Clarify sit-to-stand muscle synergy and tension changes in subacute stroke rehabilitation by musculoskeletal modeling. Frontiers in Systems Neuroscience, 2022 (Accepted). 査読有
2. An Q, Yang N, Yamakawa H, Kogami H, Yoshida K, Wang R, Yamashita A, Asama H, Ishiguro S, Shimoda S, Yamasaki H, Yokoyama M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Kurazume R. Force applied to handrail reflects motor disability of patients with stroke. IEEE Transactions on Neural Systems and Rehabilitation Engineering, 2021; 29: 2399–2406. 査読有
3. Kogami H, An Q, Yang N, Wang R, Yoshida K, Hamada H, Yamakawa H, Tamura Y, Shimoda S, Yamasaki H, Yokoyama M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Analysis of muscle synergy and kinematics in sit-to-stand motion of hemiplegic patients in subacute period. Advanced Robotics, 2021; 35(13–14): 867–877. 査読有
4. Yang N, An Q, Kogami H, Yoshida K, Yamakawa H, Tamura Y, Shimoda S, Yamasaki H, Sonoo M, Itkonen M, Shibata-Alnajjar F, Hattori N, Kinomoto M, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Temporal muscle synergy features estimate effects of short-term rehabilitation in sit-to-stand of post-stroke patients. IEEE Robotics and Automation Letter, 2020; 5(2): 1796–1802. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kang S, Ito K, Yoshizaki R, Kogami H, Nakano K, Yoshioka D, Sakurai Y, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ifukube T. Enriching IoT web application experience by integrating containerized edge resource. Proceedings of the 2022 IEEE 4th Global Conference on Life Sciences and Technologies (IEEE LifeTech 2022), Osaka, Japan, 2022. 3. 7–9 (Accepted). 査読有
2. Mukai A, Hara S, Yamagishi K, Terabayashi R, Shimazoe K, Tamura Y, Woo H, Kishimoto T, Kogami H, Zhong Z, Uenomachi M, Nurrachman A, Takahashi H, Asama H, Ishida F, Ebi H, Takada E, Kawarabayashi J, Tanabe K, Kamada K, Tomita H. Optimization of detector movement algorithm using decision tree analysis for radiation source identification based on 4π gamma imaging. Proceedings of the 2022 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII2022), Online, 2022. 1. 9–12. pp. 1026–1029. 査読有

3. Hara S, Tomita H, Mukai A, Yamagishi K, Ebi H, Terabayashi R, Shimazoe K, Nurrachman A, Zhihong Z, Uenomachi M, Woo H, Kishimoto T, Kogami H, Asama H, Tamura Y, Ishida F, Takada E, Kawarabayashi J, Tanabe K, Kamada K. Measurement protocol optimization using machine learning for radiation source identification based on 4π gamma imaging. Proceedings of the 2021 IEEE Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference (NSS MIC2021), Online, 2021.10. 16–23, N-09-179. 査読有
4. Mukai A, Yamagishi K, Hara S, Terabayashi R, Shimazoe K, Tamura Y, Woo H, Kishimoto T, Kogami H, Zhihong Z, Uenomachi M, Nurrachman A, Takahashi H, Asama H, Ishida F, Ebi H, Takada E, Kawarabayashi J, Tanabe K, Kamada K, Tomita H Development of radiation source identification device based on 4π gamma imaging with LiDAR-SLAM. Proceedings of the 2021 IEEE Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference (NSS MIC2021) , Online, 2021.10. 16–23, N-09-169. 査読有
5. Kang S, Yoshizaki R, Kogami H, Nakano K, Sakurai Y, Yoshioka D, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Okitsu T, Ifukube T. Preliminary evaluation of an IoT setting method for universal design: a case study of young adults. Proceedings of the International Conference on Design and Concurrent Engineering 2021 & Manufacturing Systems Conference 2021 (iDECON/MS 2021), Online, 2021. 9. 3 –4. Paper No. 48, pp. 1–4. 査読有
6. Yoshioka D, Kogami H, Kang S, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Miura T, Yabu K, Ito K, Ifukube T. Evaluation of IoT setting method among senior citizens in Japan. Proceedings of 23rd International Conference on Human-Computer Interaction (HCII 2021), Online, 2021. 7. 24–29. Lecture Notes in Computer Science, Vol. 12786, pp. 278–292. 査読有
7. Ito K, Kogami H, Kang S, Yoshizaki R, Sakurai Y, Nakano K, Yoshioka D, Wu J, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Miura T, Sugawara I, Yabu K, Ifukube T. Configuring interface for IoT: natural user interface study on senior adults in Japan. Proceedings of the 2021 IEEE 3rd Global Conference on Life Sciences and Technologies (IEEE LifeTech 2021), Nara, Japan, 2021. 3. 9–11. 査読有
8. Wang R, An Q, Yang N, Kogami H, Yoshida K, Hamada H, Shimoda S, Yamasaki H, Sonoo M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Muscle tension analysis in stroke patient sit-to-stand motion by joint torque-based normalization, Proceedings of the 5th International Conference on NeuroRehabilitation (ICNR2020), Online, 2020. 10. 13–16 (Best Paper Award). 査読有
8. Yang N, An Q, Kogami H, Yoshida K, Yamakawa H, Tamura Y, Shimoda S, Yamasaki H, Sonoo M, Itkonen M, Alnajjar F, Hattori N, Kinomoto M, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Temporal muscle synergy features estimate effects of short-term rehabilitation in sit-to-stand of post-stroke patients. Proceedings of the 2020 IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA2020), Paris, France, 2020. 5. 31–6. 30. (IEEE Robotics and Automation Letters, Vol. 5, No. 2, pp. 1796–1802, April 2020.) 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 安琪, 山川博司, 湖上碩樹, 吉田和憲, 王若曦, 山下淳, 淺間一, 楊寧嘉, 横山萌香, 下田真吾, Fady Alnajjar, 山崎弘嗣, 石黒周, 服部憲明, 高橋幸治, 藤井崇典, 乙宗宏範, 宮井一郎, 倉爪亮. 起立動作中の縦手すりにかかる力を用いた運動機能の評価. 第36回ライフサポート学会大会講演予稿集(LIFE2020–2021), オンライン開催, 2021. 9. 16–18. pp. 114–116 (OS-7-7). 査読無
2. 中野航綺, 吉崎れいな, 湖上碩樹, 小川景司, 吉岡大介, カンスイン, 櫻井友理希, 藤崎万裕, 伊藤研一郎, 菅原育子. 高齢者主体の地域活動におけるIT技術導入・普及過程の分析. 日本老年社会科学会第63回大会, オンライン開催, 2021. 6. 12–27 (演題No. 28). 査読有
3. 湖上碩樹,安琪, 吉田和憲, 王若曦, 山川博司, 楊寧嘉, 山崎弘嗣, Fady Shibata-Alnajjar, 園尾萌香, 下田真吾, 服部憲明, 高橋幸治, 藤井崇典, 乙宗宏範, 宮井一郎, 田村雄介, 山下淳, 淺間一. リハビリテーションにおける片麻痺患者の起立動作の改善過程の解明滑らかさと安定性による評価―滑らかさと安定性による評価―. 計測自動制御学会システム・情報部門学術講演会2020講演予稿集(SSI2020), オンライン開催, 2020. 11. 15–17. pp. 570–573 (GS3-1-2). 査読無
3. Qi An, 山川博司, 湖上碩樹, 吉田和憲, 王若曦, 山下淳, 淺間一, 石黒周, 下田真吾, 楊寧嘉, 山崎弘嗣, 園尾萌香, Fady Shibata-Alnajjar, 服部憲明, 高橋幸治, 藤井崇典, 乙宗宏範, 宮井一郎, 倉爪亮. 片麻痺患者の起立動作中の手すりにかかる力を用いた運動障害の度合の分類. 第38回日本ロボット学会・学術講演会講演予稿集(RSJ2020), オンライン開催, 2020. 10. 9–11. pp. 1–3 (RSJ2020AC2H2-02). 査読無

2. 受賞歴

1. 2020年10月「Best paer Award」(Wang R, An Q, Yang N, Kogami H, Yoshida K, Hamada H, Shimoda S, Yamasaki H, Sonoo M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Muscle tension analysis in stroke patient sit-to-stand motion by joint torque-based normalization, Proceedings of the 5th International Conference on NeuroRehabilitation (ICNR2020), Online, 2020. 10. 13– 16. 国際学会8と同じ.)

櫻井友理希

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Yuriki Sakurai, Kyungmin Baeg, Andy Y. W. Lam, Keisuke Shoji, *Yukihide Tomari, *Hiro-oki Iwakawa. Cell-free reconstitution reveals the molecular mechanisms for the initiation of secondary siRNA biogenesis in plants. Proceedings of the National Academy of Sciences 118(31) e2102889118-e2102889118. 2021年8月3日 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 櫻井 友理希1、Baeg Kyungmin1,2,3、Andy Y.W. Lam 1、庄司佳祐1,5、吉川 学4、泊 幸秀1、岩川 弘宙1,6 (1東京大学、2基礎科学研究院、3ソウル大学、4農研機構、5宇都宮大学、6JST PRESTO) 植物における二次的小分子RNA生成経路の試験管内再現。第22回日本RNA学会年会2019年7月7-9 演題番号P-29 (ポスター)

2. 受賞歴

1. 新領域創成科学研究科 メディカル情報生命専攻 令和3年度ERA（Excellent Research Award）優秀賞 2022年2月

島田啓太郎

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Shimada K, Inada Y, Ishijima A, Nakagawa K. Optical design of a laser wavefront sensor applicable under strong diffraction effects by irreproducible microscale high-density plasma. Measurement Science and Technology. 2022; 33(5): 055403. 査読有
2. 島田啓太郎, 石島歩, 佐伯峻生, 佐久間一郎, 稲田優貴, 中川桂一. 二波長帯伸長パルスによるシングルショット透過光分光イメージング. レーザー研究, 2021; 49(4): 240-244. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 島田啓太郎, 佐伯峻生,稲田優貴, 中川桂一. 超高速イメージングを多様化するSTAMP技術. フォトニクスニュース, 2021; 7(2): 80-84. 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Shimada K, Inada Y, Ishijima A, Saiki T, Sakuma I, Nakagawa K. Electron density imaging of ultrafast plasma dynamics with two-color STAMP. OPIC OPTICS & PHOTONICS International Congress 2021, Online, 2021. 4. 19. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 西田享平, Song H, 月原弘之, 石島歩, 佐伯峻生, 島田啓太郎, 原一晃, 佐久間一郎, 小林英津子, 中川桂一. 手術時に発生する微粒子動態解析のためのレーザーシート走査型3次元速度分布計測システムの開発. 日本生体医工学会関東支部若手研究者発表会, オンライン, 2021. 12. 11. 査読有
2. 西田享平, Song H, 月原弘之, 石島歩, 佐伯峻生, 島田啓太郎, 原一晃, 佐久間一郎, 小林英津子, 中川桂一. レーザーシート走査型微粒子3次元速度計測システムによる組織切開時の微粒子動態解析. 第31回 ライフサポート学会フロンティア講演会, オンライン, 2022. 3. 7-8. 査読有
3. 瀬川拓未, 石島歩, 佐伯峻生, 島田啓太郎, Song H, 山口哲志, 佐久間一郎, 横谷明徳, 武次徹也, 小川美香子, 小林英津子, 中川桂一. サブ回折限界バブルダイナミクス解析のための超高速レーザ回折法の提案. 2021年度衝撃波シンポジウム, オンライン, 2022. 3. 9-11. 査読有

2. 受賞歴

1. 2022年3月「東京大学工学系研究科バイオエンジニアリング専攻専攻長賞」

鄭世暻

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

鄭世暻・具度完, 日本カネミオイル事件の社会的構成：食中毒か食品公害か, 韓国環境社会学会誌, 2020; 24(1): 225-261. 査読有

【著書、編著】

訳書

鄭世暻 . 망고와 수류탄(マンゴーと手榴弾: 生活史の理論). 두번째테제(secondthesis), 2021年

鈴木はるの

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Eltaybani S, Yasaka T, Fukui C, Inagaki A, Takaoka M, Suzuki H, Maruyama M, Yamamoto-Mitani N. Family-oriented interventions in long-term care residential settings: a scoping review protocol. JBI Evid Synth. 2021 Feb 9. doi: 10.11124/JBIES-20-00289. Epub ahead of print. PMID: 33577233. 査読有

【著書、編著】

1. 鈴木はるの, 松本博成. 第3章 1）地域包括支援センターにおける認知症支援の実際. 近藤尚己. 五十嵐歩（編）. 認知症plus地域共生社会. 日本看護協会出版会. 2022. pp37-47.
2. 鈴木はるの, 五十嵐歩. 第2章 1）当事者が参加する「認知症にやさしいまちづくり」―本人ミーティング―. 近藤尚己. 五十嵐歩（編）. 認知症plus地域共生社会. 日本看護協会出版会. 2022. pp92-99.
3. 田中滋, 山本則子, 大森純子, 堀川尚子, 西山千秋, 五十嵐歩, 津野陽子, 野口麻衣子, 目麻里子, 稲垣安沙, 姉崎沙緒里, 増田有葉, 岩田友里, 鈴木はるの, 丸山美幸, 山田亨介. Social Community Nursing機能の定着要件の探求 報告書. 一般社団法人オレンジクロス. 2020.
4. 山本則子. 五十嵐歩. 野口麻衣子. 目麻里子. 福井千絵. Sameh Eltaybani. 稲垣安沙. 竹内由則. 北村智美. 高岡茉奈美. 松本博成. 矢坂泰介. 久貝波留菜. 沼田華子. 増田有葉. 篠原真純. 片山真登香. 鈴木はるの. 要介護高齢者等に対する看護介入による効果検証事業 報告書. 令和2年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業. 2021.

田中萌子

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 令和2年度 東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 修士論文集

   Moeko Tanaka. Sedentary behavior during pregnancy and its related factors: A cross-sectional observational study in Japan,

2021.1. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 春名めぐみ、田中萌子、中野恵子、西原菜帆、笹川恵美、米澤かおり、臼井由利子、疋田直子、藤田愛. COVID-19禍での妊娠期から産後のコホート調査：J-PEACH Studyの取り組み. DOHaD研究 第10巻 第1号.2021 . 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Akiko NISHINO, Yoritaka HARAZONO, Moeko TANAKA, Kazunori YOSHIDA, Toko FUNAKI, Ryosuke TAKADA, Takenori NASU, Taketo TOBIMATSU. Role of Home-Modification Training for Care Managers. THE GERONTOLOGICAL SOCIETY OF AMERICA: GSA 2021 Annual Scientific Meeting. (Poster). NOVEMBER 10-14. PHOENIX, AZ (transitioning to an online format) 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 国内学会セミナー（WEB開催）
   春名めぐみ、田中萌子、中野恵子、西原菜帆、藤田愛、柴田愛. 妊娠各期の至適体重増加とそれに関連する健康行動・心理社会的要因：コホート研究. 第32回日本DOHaD学会寺子屋 -疫学セミナー、寺子屋、若手の会/ASTRO 合同研究会-.日本DOHaD学会分科会 寺子屋研究会事務局. 2020.10.3
   国内シンポジウム
   田中萌子. 実践型教育WINGS-GLAFSから：「コロナで学んだ高齢社会総合研究～スタジオ体験を通じて」.東京大学ジェロントロジー産学連携プロジェクトオンラインシンポジウム2022: ジェロントロジー総合研究が拓く新未来像. 東京, 2022.3.9. (活動報告予定)

寺澤さやか

1. 論文等

1. 寺澤さやか. 不妊治療を受ける女性の職場経験. ソシオロゴス, 2020; 44号: 123-140. 査読有

【著書、編著】

寺澤さやか. 第8章 不妊治療と仕事の両立の葛藤をめぐる計量テキスト分析. 松永伸太郎, 園田薫, 中川宗人（編著）. 21世紀の産業・労働社会学. ナカニシヤ出版, 2022: ppxxx-xxx. (3月刊行予定)

田 子健

1. 論文等

【国内学会・シンポジウムにおける発表】

1. 田子健, 岸山健, 陳姿因, 広瀬友紀, 幕内充. 幼児の描画課題におけるチャンキング傾向の考察.電子通信情報学会思考と言語研究会, オンライン, 2021年9月18日. 査読無
2. 田子健, 岸山健, 陳姿因, 広瀬友紀, 幕内充. 言語・発達段階における描画の階層性～機械学習の特徴量を用いたパターン分析～. 共創的コミュニケーションのための言語科学第10回領域全体会議, オンライン, 2022年2月23日. 査読無
3. 田子健, 門倉悠真, 開一夫. 乳幼児のテレビ視聴における「観察者効果」～保護者の役割とカメラの影響～. シナ.ぷしゅ研究会, 日本静岡県熱海, 2022年3月28日. 査読無

仲川 久礼亜

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Nakagawa K, Miyazaki Y, Mitsuishi N, Sakano M, Yokouchi T, Ishizaka K, Shiomi Y. Enhanced Thermopower in the Antiferromagnetic Phase of Mn2-xCrxSb. Journal of Physical Society of Japan, 2020; 89: 124601. 査読有
2. Hashizume M, Yokouchi T, Nakagawa K, Shiomi Y. Anisotropic magneto-Seebeck effect in antiferromagnetic semimetal FeGe2. Physical Review B, 2021; 104: 115109. 査読有
3. Nakagawa K, Yokouchi T, Shiomi Y. Reconfigurable single-material Peltier effect using magnetic-phase junctions. Scientific Report, 2021; 11: 24216. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. ○仲川久礼亜, 宮崎優, 三石夏樹, 坂野昌人, 石坂香子, 塩見雄毅. Mn2-xCrxSb 反強磁性相における熱電効果の増大. 日本物理学会第 76 回年次大会, 2021. 3. 12-15. 査読無
2. ○青野快, 仲川久礼亜, 宮崎優, 三石夏樹, 坂野昌人, 塩見雄毅, 石坂香子. 熱電特性の増大を伴うフェリ・反強磁性体Mn2-xCrxSbにおける電子構造の解明. 日本物理学会 第 76 回年次大会, 2021. 3. 12-15. 査読無
3. ○橋都みのり, 横内智行, 仲川久礼亜, 塩見雄毅. 反強磁性体 FeGe2 における異方性磁気ゼーベック効果. 日本物理学会 第 76 回年次大会, 2021. 3. 12-15. 査読無
4. ○仲川久礼亜, 横内智行, 塩見雄毅. Mn2-xCrxSbにおける磁気相転移を用いた単一物質ペルチェ効果の観測. 日本物理学会 2021年秋季大会, 2021. 9. 14-17. 査読無

2. 受賞歴

1. 2022年3月 「一高記念賞」（研究テーマ「磁気相転移を利用した新規熱電物性の観測」）

中野航綺

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 中野航綺. 「相談」の民間委託とその影響：地域包括支援センター・在宅介護支援センターの民間委託の経緯と特徴に注目して（中野航綺）. 社会政策. 2022. 13(3). 査読有.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 中野航綺. 健康で文化的な生活とは：第4回民医連調査と全生連調査

の自由回答について. 民医連医療. 2021. 592. pp.44-45. 査読無.

【著書、編著】

1. 福祉図書文献学会. 伝えたい福祉図書文献 ： 学会名称変更20周年記念誌. 学術研究出版, 2021, pp.235-240.
2. 中野航綺. 自由回答にみる生活の現実：I.健康で文化的な生活を構成する要素とその阻害要因―調査の自由回答の分析から. 浜岡政好, 唐鎌尚義, 河合克義(編). 「健康で文化的な生活」をすべての人に―憲法第25条の探求―. 自治体研究社. 2016.: pp.78-

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Yoshioka D,, Kogami H., Kang S., Yoshizaki R., Sakurai Y., Nakano K., Wu J., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura M., Yabu K., Ito K., & Ifukube T., “Evaluation of IoT-Setting Method Among Senior Citizens in Japan.” 24th International Conference on Human-Computer Interaction, Online, 2022. 07. 26, Oral presentation,査読有り
2. Kang S., Yoshizaki R., Kogami H., Nakano K., Sakurai Y., Yoshioka D., Wu J., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura T., Yabu K., Ito K., Akiyama H., Otsuki T., Ifukube T. Preliminary evaluation of an IoT setting method for universal design. International Conference on Design and Concurrent Engineering 2021 & Manufacturing Systems Conference 2021, Virtual. 2021. 9. 3-4. 査読有.
3. Kang S.I., Ito K., Yoshizaki R., Kogami H., Nakano K., Yoshioka D., Sakurai Y., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura T., Yabu K., Ifukube T. Enriching IoT Web Application Experience by Integrating Containerized Edge Resource. 2022 IEEE 4th Global Conference on Life Sciences and Technologies, Osaka, Japan. 2022. 3. 7-9. 査読有.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 中野航綺, 吉崎れいな, 湖上碩樹, 小川景司, 吉岡大介, カンスイン, 櫻井友理希, 藤崎万裕, 伊藤研一郎, 菅原育子. 高齢者主体の地域活動におけるIT技術導入・普及過程の分析. 第63回日本老年社会科学会, 2021. 6,12-13. 査読有.
2. 中野航綺. 社会福祉士制度を巡る論争: 小野−京極論争に注目して. 第23回福祉図書文献学会. 2021.9.11. 査読無.
3. 中野航綺. 「地域福祉計画」策定過程におけるアクター像はどのように捉えられてきたか.第143回社会政策学会. 2021.10.16. 査読無.
4. 宮地俊介, 中野航綺. コロナ禍における地域活動はいかにして持続可能か−高齢者を中心とする体操グループを対象として. 第94回日本社会学会.2021.11.13-14. 査読無.

2. 受賞歴

2021年11月 公益財団法人 生協総合研究所「2021年度生協総研賞・第19回助成事業」(中野航綺 「地域福祉計画策定過程における住民参加の実態調査:「参加」のバリエーションとその背景に着目して」)

中山莉子

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. 山下真理・岡村毅・宇良千秋・杉山美香・中山莉子・宮前史子・小川まどか・稲垣宏樹・枝広あや子・多賀努・津田修治・井藤佳恵・粟田主一. 認知機能低下を抱えた地域在住高齢者のインフォーマル・サポートと精神的健康に関する質的研究　認知症ケア学会誌, 2022;20(4):000-000. 査読有
2. Nakayama R, Sugiyama M, Ura C, Taga T, Tsuda S, Yamashita M, Miyamae F, Edahiro A, Inagaki H, Ogawa M, Okamura T, Awata S. The relationship between cognitive decline and well-being: investigation in older community-dwelling people with moderately impaired cognition. Psychogeriatrics, 2021;21(5):841-843. doi:10.1111/psyg.12742 査読有
3. Okamura T., Ura C., Sugiyama M, Miyamae F, Edahiro, A, Taga, T.,Tsuda, S., Nakayama R, Ito K, Awata S. Factors associated with inability to attend a follow-up assessment, mortality, and institutionalization among community-dwelling older people with cognitive impairment during a 5-year period: evidence from community-based participatory research. Psychogeriatrics, Early view; doi.org/10.1111/psyg.12816 査読有
4. 高橋美保・馬場絢子・中山莉子.　マインドフルネスが高齢者のwell-beingに及ぼす影響:マインドフルネスを導入した介入プログラムの試み　マインドフルネス研究, 2021;6(1):9-21. 査読有
5. Edahiro A, Okamura T, Motohashi Y, Takahashi C, Sugiyama M, Miyamae F, Taga T, Ura C, Nakayama R, Yamashita M, Awata S: Oral health as an opportunity to support isolated people with dementia: useful information during coronavirus disease 2019 pandemic. Psychogeriatrics. 2021;21(1):140-141. doi: 10.1111/psyg.12621. 査読有
6. Ura C, Okamura T, Sugiyama M, Miyamae F, Yamashita M, Nakayama R,...Awata S . Living on the edge of the community: Factors associated with discontinuation of community living among people with cognitive impairment. BMC Geriatrics 21, 2021; 131: https://doi.org/10.1186/s12877-021-02084-2. 査読有
7. 中山莉子・佐藤浩. 高齢者の社会参加を促すサークル活動の映像分析−習字サークルにおける「会話に入りにくい参加者」に着目して−　ライフ・レジリエンス学, 2021;1:1-9. 査読無
8. 中山莉子・加藤明日香・和智遥香・野村佳申・隅田玲・高橋美保. コロナ(COVID-19)禍による大学講義のオンライン化にともない、学生間の雑談様式はどのように変化したか　――講義前後のやりとりに着目して――　東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2021;44:65-73. 査読無

【著書、編著】

中山莉子. 変化の5つの要素　高橋美保 (監訳) マインドフルネス認知療法を教えるということ　実践の体現と瞑想的対話 (インクワイアリ) 北大路書房, 2021. (Woods, S. L., Rockman, P., & Collins, E. (2019). Mindfulness-Based Cognitive Therapy――Embodied Presence and Inquiry in Practice. Oakland, CA: New Harbinger Publications, Inc.)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 中山莉子・佐藤浩・秋月優里・坂井愛理・荻野亮吾・後藤純. 高齢者サークルにおける会話が生じる過程の映像分析――「当てどころのない発話」を中心に―― 老年社会学第62回大会. 誌上発表. 2020. 査読有
2. 岡村毅, 宇良千秋, 杉山美香, 中山莉子, 山下真里, 宮前史子, 小川まどか, 稲垣宏樹, 枝広あや子, 粟田主一. 大都市団地で認知機能低下と共に暮らす高齢者の体験世界を知る 本人の語りに基づいた、本人の生活世界の探究. 認知症ケア学会第21回大会, 誌上発表, 2020. 査読有
3. 山下真里, 岡村毅, 宇良千秋, 杉山美香, 中山莉子, 宮前史子, 小川まどか, 稲垣宏樹, 枝広 あや子, 粟田主一. 大都市団地で認知機能低下と共に暮らす高齢者の体験世界を知る 地域生活の体験と主観的QOLの関連. 認知症ケア学会第21回大会, 誌上発表, 2020. 査読有
4. 宇良千秋, 岡村毅, 杉山美香, 中山莉子, 山下真里, 宮前史子, 小川まどか, 稲垣宏樹, 枝広 あや子, 粟田主一. 大都市団地で認知機能低下と共に暮らす高齢者の体験世界を知る 生活拠点の変化と属性の違いについて. 認知症ケア学会第21回大会, 誌上発表. 2020. 査読有
5. 中山莉子・多賀努・岡村毅・杉山美香・宇良千秋・山下真里・宮前史子・枝広あや子・粟田主一. 地域拠点において認知症とともに生きる独居高齢者の安心感を醸成するには? 第22回日本認知症ケア学会, オンライン, 2021.6.5.-10.5.査読有
6. 中山莉子. 認知症とともに生きる高齢者のコミュニケーション体験 ――認知症をもつ本人の安心感はいかに形成されるのか?―― 第三回日本老年臨床心理学会 , 東京, 2021.3.20-3.21. 査読有

野沢恭介

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Iida M, Watanabe K, Imamura K, Sakuraya A, Asaoka H, Sato N, Nozawa K, Kawakami N. (2021). Development and validation of the Japanese version of the team job crafting scale for nurses. Research in Nursing & Health, 44(2), 329-343. 査読有
2. Komase Y, Watanabe K, Hori D, Nozawa K, Hidaka Y, Iida M, Imamura K, Kawakami N. (2021). Effects of gratitude intervention on mental health and well-being among workers: A systematic review. Journal of Occupational Health, 63(1), e12290. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Nozawa K, Imamura K, Watanabe K, Sawada, U, Asaoka H, Kotake R, Morita Y, Miyamoto Y. Factorial validity of the Japanese version of the Revised Publication Pressure Questionnaire (PPQr). 21st WPA World Congress of Psychiatry 2021 Oct 18-21 Virtual Congress. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 駒瀬優, 日高結衣, 野沢恭介, 渡辺和広, 川上憲人. 労働者を対象とした感謝法の効果:無作為化比較試験の系統的レビュー. 第93回産業衛生学会 2021年5月15日 北海道(オンライン).
2. 高野歩, 平岩千明, 及川江利奈, 冨川明子, 野沢恭介. Substance Use Stigma Mechanism Scale日本語版の信頼性・妥当性の検討. 第31回日本精神保健看護学会学術集会 2021.06.06 オンライン
3. 野沢恭介, 平岩千明, 及川江利奈, 冨川明子, 高野歩. Self-Efficacy in Seeking Mental Health Care 日本語版の因子的妥当性の検討. 第31回日本精神保健看護学会学術集会 2021.06.06 オンライン
4. 高野歩,大野昴紀,野沢恭介,篠崎智大. 飲酒状況セルフモニタリングアプリの有効性検証:ランダム化比較試験プロトコル. 第56回日本アルコール・アディクション医学会学術総会 2021.12.19 三重、オンライン
5. 高野歩,大野昴紀,野沢恭介,松本俊彦,松下幸生,湯本洋介,小貫真希,妙☒園香苗,佐藤牧人,瀬々潤. モバイルデバイスを用いたアルコール・薬物使用リアルタイムデータ収集と介入プログラムの開発. 第56回日本アルコール・アディクション医学会学術総会 2021.12.18 三重、オンライン

原薗陛正

1. 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Harazono Y, Kasahara M. Toward lifting human genome annotation. MBSJ, 2021.査読無

日隈脩一郎

1. 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. 日隈脩一郎. 行為から陶冶へ ―吉田熊次の学問構想に関する一考察―. 研究室紀要, 2021; (47): 159-169. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. Kazembe N, Wang C, Kim T, Higuma S, Kim H, Yang Y, Gandy SC, Ogino R, Takase M. Effects of the COVID-19 Pandemic on Activities of Toyoshikidai's Community Space. Life Resilience Research, 2021; 1:1-30. 査読無
2. 日隈脩一郎. 〈書評キャンパス〉香月孝史著『乃木坂46のドラマトゥルギー』. 週刊読書人, 2020; (3350): 14. 査読無
3. 日隈脩一郎. 「心を縦に考へる」――初期倉橋惣三の自然主義と保育学構想. 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 若手研究者育成プロジェクト採択者ワーキングペーパー, 2021; (1): 44-57. 査読無
4. 谷川みらい, 笠松和也, 上西晴也, 辻本侑生, 日隈脩一郎, 児玉光栄. 水道問題と民主主義を考える――岸本聡子『水道、再び公営化! 欧州・水の闘いから日本が学ぶこと』を題材に. 人文×社会, 2021; 1(3): 1-3. 査読無
5. 日隈脩一郎. 移動の制限と「疎開」. もうひとつの一高:戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち パンフレット, 2022: 14-16. 査読無
6. 日隈脩一郎. 拝啓 藤木先生――戦争のなかの日常. もうひとつの一高:戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち パンフレット, 2022: 17-18. 査読無

【著書、編著】

1. 日隈脩一郎. 香月孝史著『乃木坂46のドラマトゥルギー：演じる身体／フィクション／静かな成熟』. 大学生と「週刊読書人」編集部(編). 書評キャンパスat読書人. 読書人, 2021: pp40-41.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kazembe N, Wang C, Kim T, Higuma S, Kim H, Yang Y, Gandy SC, Ogino R, Takase M. Effects of the COVID-19 Pandemic on Activities of Toyoshikidai's Community Space. Life Resilience Research,Impact of COVID-19 pandemic on senior-to-senior social engagement activities at a community space in Japan. GSA 2020 Annual Scientific Meeting Online, U.S. 2020. 11. 6. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 宇野瑞木, 高原智史, 宋舒揚, 日隈脩一郎, 横山雄大. 新出資料「藤木文書」の紹介――戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち. 松本市立博物館分館 旧制高等学校記念館. 第25回夏期教育セミナー, オンライン, 2021. 8. 27-31. 査読無
2. 日隈脩一郎. 賀川豊彦のベルクソン：「開かれた社会」概念を手がかりに. 第33回賀川豊彦学会大会, オンライン, 2021. 10. 23. 査読無
3. 日隈脩一郎. 城戸幡太郎の教育学批判――児童研究所創設を手がかりとして. 幼児教育史学会 第17回大会, オンライン, 2021. 12. 4. 査読無
4. 日隈脩一郎. 2010年代日本におけるメディアの上の哲学――サイエンスコミュニケーションの再検討のために. 科学技術社会論学会 第20回年次研究大会, オンライン, 2021. 12. 5. 査読有

前田一歩

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 前田一歩. 街のなかの子育てと夫婦 ――団地居住者生活実態調査(1965)の二次分析. 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブセンター リサーチペーパーシリーズ. 2020年12月; 75号: pp.73-97. 査読無
2. 前田一歩. 社会問題史としての都市公園史を描く――計量テキスト分析による都市公園史研究の視点提起. 都市公園. 2021年12月; 233号: pp.54-57. 査読有

【著書、編著】

1. 前田一歩. 新聞記事にみる近代東京・都市公園の話題変遷――長期・記事見出しデータへのトピックモデルの適用. 左古輝人(編). テキスト計量の最前線――データ時代の社会知を拓く. ひつじ書房, 2021年: pp.71-93.
2. 前田一歩. 第5章 メディアとクレイム. ジョエル・ベスト(著), 赤川学(監訳). 社会問題とは何か――なぜ、どのようにして生じ、なくなるのか. 筑摩書房, 2020年: pp. 143-178.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 前田一歩. 都市公園における〈遊び〉の問題化：1920-30年代東京における児童指導員事業に着目して. 日本社会学会第 93回大会. 松山, 2020.10.31. 査読有
2. 前田一歩. 父親の育児参加をめぐる生活時間調査の二次分析： テキストマイニングを用いた自由記述回答の再コーディングを通して. ソーシャル・コンピュテーション学会 第12回研究例会.東京, 2020.12.5. 査読無
3. 前田一歩. 戦前期東京・都市公園の「浮浪者」対策：「社会」を語りはじめる造園家とその公園管理諸実践の分析. 日本社会学会第 94回大会.東京, 2021.11.13. 査読有
4. 前田一歩. 家族をみる窓としての児童公園：高度成長期の団地居住者生活時間データの分析から. 東京大学社会科学研究所付属社会調査・データアーカイブセンター 課題公募型二次分析研究「戦後福祉国家成立期の福祉・教育・生活をめぐる調査データの二次分析」成果報告会, 東京, 2022.3.18. 査読無

2. 受賞歴

1. 2021年7月. 第56回東京都公園協会賞 論文の部 奨励賞

前田啓介

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Maeda K, Habara M, Kawaguchi M, Matsumoto H, Hanaki S, Masaki T, Sato Y, Matsuyama H, Kunieda K, Nakagawa H, Shimada M. FKBP51 and FKBP52 regulate androgen receptor dimerization and proliferation in prostate cancer cells. Mol oncol. 2021; Epub ahead of print.査読有
2. Hanaki S, Habara M, Masaki T, Maeda K, Sato Y, Nakanishi M, Shimada M. PP1 regulatory subunit NIPP1 regulates transcription of E2F1 target genes following DNA damage. Cancer Sci. 2021 ;112(7):2739-2752. 査読有
3. Masaki T, Habara M, Sato Y, Goshima T, Maeda K, Hanaki S, Shimada, M. Calcineurin regulates the stability and activity of estrogen receptor α. Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America, 2021; 118(44), e2114258118. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 前田啓介, 花木駿介, 正木貴弘, 佐藤悠紀, 羽原誠, 島田緑. プロリン異性化酵素によるがん細胞の増殖制御機構の解明 第164回日本獣医学会学術集会, オンライン, 2021, 9. 7-13. 査読有
2. 前田啓介, 安藝翔, 土田里香, 関元昭, 大澤毅. 低pH腫瘍微小環境におけるがん抑制因子の同定 第80回日本癌学会学術総会, 神奈川, 2021, 9.29-10.1 査読有
3. 花木駿介, 羽原誠, 正木貴弘, 前田啓介, 佐藤悠紀, 島田緑. PP1脱リン酸化酵素を介した転写調節機構の解明 第10回日本プロテインホスファターゼ研究会学術集会, オンライン, 2022, 1. 21-22. 査読なし
4. 羽原誠, 正木貴弘, 佐藤悠紀, 前田啓介, 花木駿介, 島田緑. カルシニューリンはエストロゲン受容体αの安定性および活性を制御する 第10回日本プロテインホスファターゼ研究会学術集会, オンライン, 2022, 1.21-22 査読なし

2. 受賞歴

1. 2021年10月「第80回日本癌学会学術総会JCA若手研究者ポスター賞」(前田啓介, 安藝翔, 土田里香, 関元昭, 大澤毅. 低pH腫瘍微小環境におけるがん抑制因子の同定)

増田桃佳

1. 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 増田桃佳, 水野佑紀, シンディ・ラーマン・アイシャー, 岩本晃明, 山﨑一恭, 内田将央, 猪鼻達仁, 仮屋ふみ子, 小西祥子. 精子ミトコンドリアDNAコピー数と精液所見の関連:IITEFプロジェクト. 第92回日本衛生学会学術総会, 西宮, 2022. 3. 21-23. 査読無
2. 増田桃佳, 水野佑紀, 後藤千穂, 吉永淳, 小西祥子, 梅崎昌裕, 今井秀樹. 日本の女子大生における食事性炎症指数とテロメア長の関連. 第92回日本衛生学会学術総会, 西宮, 2022. 3. 21-23. 査読無

松浦慎太朗

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Shintaro M. How to Explain the Mechanism of Metalinguistic Dispute. Proceedings of the Eighteenth International Workshop of Logic and Engineering of Natural Language Semantics 18 (LENLS18), 2021; 17-30. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Shintaro M. How to Explain the Mechanism of Metalinguistic Dispute. Logic and Engineering of Natural Language Semantics 18 (LENLS18), Online, 2021. 11. 13-15. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 松浦慎太朗. メタ言語的論争とスタルネイカーの主張理論. 2021年度哲学若手研究者フォーラム, オンライン, 2021. 9. 11-12. 査読無

松岡洋子

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Sato K, Sakata R, Murayama C, Yamaguchi M, Matsuoka Y, Kondo N. Changes in work and life patterns associated with depressive symptoms during the COVID-19 pandemic: an observational study of health app (CALO mama) users. Occupational & Environmental Medicine, 2021 Sep; 78(9): 632-637. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Matsuoka Y, Zhang J, Lyu W, Aoyagi K, Takase M, Ogino R, Goto J. The Association of Early-Morning Eating Habit with High Nutrient Intake by Older Japanese Adults Living Alone. GSA 2020 Annual Scientific Meeting Online, Philadelphia, The United States, 2020. 10. 26-30. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 松岡洋子, 長谷田真帆, 金森万里子, 佐藤豪竜, 雨宮愛理, 尾島俊之, 高木大資, 花里真道, 近藤尚己.熊本地震後の転居がグループ参加の変化を通じて高齢者の精神的健康に与える影響:住宅形態別の比較. 第32回日本疫学会学術総会, 千葉県浦安市, 2022. 1. 26-28. 査読有

松本博成

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Matsumoto H, Igarashi A, Hagiwara Y, Yamamoto-Mitani N. Relational Design for Dementia and Job Significance (ReDeSign): Study protocol for a randomized controlled trial of an online dementia training for retail workers. Contemporary Clinical Trials Communications, 2022; 26: 100896.査読有.
2. Matsumoto H, Maeda A, Igarashi, A, Weller C, Yamamoto-Mitani N. Dementia education and training for the general public: a scoping review. Gerontology & Geriatrics Education, 2021; 1-31. 査読有.
3. Matsumoto H, Kawagoe M, Hotta S. Older Adults Used Fewer Home Care Services during the COVID-19 Pandemic: Findings from a Secondary Analysis of an Urgent Survey in Japan. Annals of Geriatric Medicine and Research, 2021; 25(4), 286. 査読有.
4. Naruse T, Tuckett A. G, Matsumoto H, & Yamamoto-Mitani N. Measurement Development for Japanese Clients' Experiences during Adult Day Care Service Use (The J-AdaCa Tool). Healthcare, 2020; 8(4),363. 査読有.
5. Matsumoto H, Kageyama M, Yamamoto-Mitani N, & Nagata S. The use of a public space in a public housing complex by senior citizens: A qualitative study. Journal of Aging and Environment, 2020; 35(2), 107-124. 査読有.
6. Matsumoto H, Igarashi A, Suzuki M, & Yamamoto-Mitani N. Dementia education is the first step for cooperation: An observational study of the cooperation between convenience stores and community general support centers. Geriatrics & Gerontology International, 2020; 20(10), 956-960. 査読有.
7. Igarashi A, Matsumoto H, Takaoka M, Kugai H, Suzuki M, & Yamamoto-Mitani N. Educational program for promoting collaboration between community care professionals and convenience stores. Journal of Applied Gerontology, 2020; 39(7), 760-769. 査読有.

丸山美幸

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Eltaybani S, Yasaka T, Fukui C, Inagaki A, Takaoka M, Suzuki H, Maruyama M, Yamamoto-Mitani N. Family-oriented interventions in long-term care residential settings: a scoping review protocol. JBI Evid Synth. 2021; doi: 10.11124/JBIES-20-00289. Epub ahead of print. PMID: 33577233. 査読有

【その他】

1. 田中滋, 山本則子, 大森純子, 堀川尚子, 西山千秋, 五十嵐歩, 津野陽子, 野口麻衣子, 目麻里子, 稲垣安沙, 姉崎沙緒里, 増田有葉, 岩田友里, 鈴木はるの, 丸山美幸, 山田亨介. Social Community Nursing機能の定着要件の探求. 2020. 査読無

山下港

1. 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Yamashita M, Hattori K, Chen X, Goda Y, Ota S. 3D Imaging Flow Cytometry for Adherent Cell Retaining Adherent State. 第一回システム生物医学研究会, 東京, 2021. 12. 17. 査読無

楊映雪

1. 論文等

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 楊映雪, 劉夢思, 詹瞻, 倪琳林. 終身教育分科会報告: 終身教育視角下探索学習的本質—以中日両国実践為例. 中日教育論壇, 2022.(in press)
2. 楊映雪, 劉夢思, 詹瞻, 倪琳林. 10周年記念シンポジウム報告: 人生100年時代に向けた教育—中日教育交流の回顧と展望. アジア教育文化ジャーナル, 2022.3(4):110-120.
3. 鈴木繁聡, 堀本暁洋, 松尾有美, 末光翔, 林忠賢, 野村一貴, 金亨善, 松本奈々子, 楊映雪. 2020年社会教育研究の動向. 社会教育学研究, 2021(57):104-112.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. [accepted]Yang Y. The Relationship between School Education and Community Education in China from the Perspective of Lifelong Learning. The Comparative Education Society of Hong Kong (CESHK) 2022 Spring Annual Conference, Online, 2022.3.18-19. 査読有
2. Yang Y. What is social participation? Rethinking the social role of the elderly in knowledge-based society from a perspective view of lifelong learning in Japan. WERA 2021 Virtual Focal Meeting Participant. 2021.7.7-9. Spain. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 楊映雪, 劉夢思, 詹瞻, 倪琳林. ラウンドテーブル・生涯教育：生涯にわたる学びのあり方。 中日教育研究学会10周年記念シンポジウム, 2021.9.26.
2. 孫輔卿, 三浦貴大, 角川由香, 藪謙一郎, 田中友規, 呂偉達, 金東律, 楊映雪, 張俊華, 佐藤雄太, 榊原拓磨, 徳丸剛, 池田一智, 飯島勝矢. 地域住民同士の双方向オンライン型フレイルチェック開発と地域実装: 対面とオンラインの持続的フレイル予防システムを目指して. 第8回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 2021.

横峰真琳

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Fukuda Y, Yokomine M, Kuroda D, Tsumoto K, Morimoto J, Sando S. Peptoid-based reprogrammable template for cell-permeable inhibitors of protein–protein interactions. Chemical Science, 2021; 12(40) :13292–13300. 査読有
2. Yokomine M, Morimoto J, Fukuda Y, Shiratori Y, Kuroda D, Ueda T, Takeuchi K, Tsumoto K, Sando S. Oligo(N-methylalanine) as a Peptide-Based Molecular Scaffold with a Minimal Structure and High Density of Functionalizable Sites. Angewandte Chemie International Edition, 2022; DOI:10.1002/anie.202200119. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 横峰真琳, 福田泰啓, 黒田大祐, 津本浩平, 森本淳平, 山東信介. N置換ペプチドを足場とするMDM2リガンドの設計. 日本化学会第101春季年会, オンライン 2021. 3. 19. 査読無
2. 横峰真琳, 黒田大祐, 上田卓見, 竹内恒, 津本浩平, 森本淳平, 山東信介. Oligo(N-methylalanine) as a molecular scaffold for designing protein ligands. 第58回ペプチド討論会. 日本ペプチド学会. オンライン. 2021. 10. 20. 査読無

吉岡大介

1. 論文等

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 吉岡大介、中村貴紀、武川睦寛、“ストレス顆粒形成による生命機能制御と疾患”、廣瀬哲郎、加藤昌人、中川真一 (編)、実験医学増刊 相分離 -メカニズムと疾患-、2021:39(10), pp93-101. 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Yoshioka D., Kogami H., Kang S., Yoshizaki R., Sakurai Y., Nakano K., Wu J., Fujisaki-Sueda-Sakai M., Sugawara I., Miura T., Yabu K., Ito K., & Ifukube T., “Evaluation of IoT-Setting Method Among Senior Citizens in Japan.” 24th International Conference on Human-Computer Interaction, Online, 2022. 07. 26, Oral presentation, 査読有

吉田和憲

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Yoshida K, An Q, Hamada H, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H. Artificial neural network that modifies muscle activity in sit-to-stand motion using sensory input. Advanced Robotics 2021; 35: 858–66. 査読有
2. Kogami H, An Q, Yang N, Wang R, Yoshida K, Hamada H, Yamakawa H, Tamura Y, Shimoda S, Yamasaki H, Yokoyama M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Analysis of muscle synergy and kinematics in sit-to-stand motion of hemiplegic patients in subacute period. Advanced Robotics 2021; 35: 867–77. 査読有
3. An Q, Yang N, Yamakawa H, Kogami H, Yoshida K, Wang R, Yamashita A, Asama H, Ishiguro S, Shimoda S, Yamasaki H, Yokoyama M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Kurazume R. Classification of Motor Impairments of Post-Stroke Patients Based on Force Applied to a Handrail. IEEE Transactions on Neural Systems and Rehabilitation Engineering 2021; 29: 2399–406. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Wang R, An Q, Yang N, Kogami H, Yoshida K, Hamada H, Shimoda S, Yamasaki H, Sonoo M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Muscle Tension Analysis in Stroke Patient Sit-to-Stand Motion by Joint Torque-Based Normalization. 5th International Conference on NeuroRehabilitation (ICNR2020), Virtual format, 2020. 10. 13–16. 査読有
2. Yoshida K, Harazono Y, Funaki T, Nishino A. “Care Managers Have Few Options for Home Modification Because They Are Not Specified in Architecture,” Innovation in Aging, 2020; 4 (Supplement_1): 198, in GSA2020 Annual Scientific Meeting, Online, 2020. 11. 4–7. 査読有
3. Yoshida K, An Q, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H. Effect of Tilted Ground on Muscle Activity in Human Sit-to-Stand Motion: Preliminary Result. 16th international conference on Intelligent Autonomous Systems (IAS-16), Singapore (Online): 2021, p. 300–8, 2021. 7. 22–25. 査読有
4. Nishino A, Harazono Y, Tanaka M, Yoshida K, Funaki T, Takada R, Nasu T, Tobimatsu T. Role of Home-Modification Training for Care Managers. Innovation in Aging 2021; 5: 783–783, in GSA2021 Annual Scientific Meeting, Online, 2021. 11. 10–13.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. An Q, 山川博司, 湖上碩樹, 吉田和憲, 王若曦, 山下淳, 淺間一, 石黒周, 下田真吾, 楊寧嘉, 山崎弘嗣, 園尾萌香, Alnajjar F, 服部憲明, 高橋幸治, 藤井崇典, 乙宗宏範, 宮井一郎, 倉爪亮. 片麻痺患者の起立動作中の手すりにかかる力を用いた運動障害の度合の分類. 第38回日本ロボット学会学術講演会予稿集, 2020; 1–3, Online, 2020. 10. 9–11. 査読無
2. 湖上碩樹, 安琪, 吉田和憲, 王若曦, 山川博司, 楊寧嘉, 山崎弘嗣, Alnajjar F, 園尾萌香, 下田真吾, 服部憲明, 高橋幸治, 藤井崇典, 乙宗宏範, 宮井一郎, 田村雄介, 山下淳, 淺間一. リハビリテーションにおける片麻痺患者の起立動作の改善過程の解明 ～滑らかさと安定性による評価～. 計測自動制御学会システム・情報部門学術講演会2020講演論文集, 2020; 570–3, Online, 2020. 11. 15–17.

2. 受賞歴

1. 2020年10月「ICNR2020 Best Paper Award 」(Wang R, An Q, Yang N, Kogami H, Yoshida K, Hamada H, Shimoda S, Yamasaki H, Sonoo M, Alnajjar F, Hattori N, Takahashi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Muscle Tension Analysis in Stroke Patient Sit-to-Stand Motion by Joint Torque-Based Normalization.)

呂偉達

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Weida Lyu, Huijuan Jia, Chuanzong Deng, Kenji Saito, Seigo Yamada, Hisanori Kato.
“Zeolite-containing mixture alleviates microbial in dextran sodium sulphate induced colitis in mice.” Food Sci. Nutr. (2020)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 呂偉達, 田中友規, 徳丸剛, 森千夏, 田代紫織, 飯島勝矢.行動変容ステージと心身機能低下リスクの関連性について：食事、運動、社会参加と口腔ケアの4つの面からの横断的分析.日本老年医学会, 2020.
2. 呂偉達、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢.　地域在住高齢者におけるフレイル新規発症の検討～食習慣や身体活動、人とのつながりとの関連性～第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 2020.
3. 高橋競、孫輔卿、田中友規、藤崎万裕、吉澤裕世、呂偉達、飯島勝矢フレイルサポーターによる地域活動に関する混合研究。第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 2020.
4. 孫輔卿、秋下雅弘、豊島弘一、田中友規、スタッヴォラヴットアンヤポーン、呂偉達、飯島　勝矢食事の炎症誘導能がサルコペニア有病率および血中hsCRP値に及ぼす影響-食事性炎症指数を用いた検討.第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 2020.
5. 田中友規、孫輔卿、呂偉達、飯島勝矢.　COVID-19パンデミックに伴う外出自粛要請とフレイル新規発症の関連―柏スタディー第7回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 2020.
6. しての社会的要因の探索と性差の検討：―柏スタディ―第14回日本性差医学・医療学会学術集会, 2020.
7. 孫輔卿, 三浦貴大, 角川由香, 藪謙一郎, 田中友規、呂偉達, 金東律, 楊映雪, 張俊華, 佐藤雄太, 榊原拓磨, 徳丸剛, 池田一智, 飯島勝矢.地域住民同士の双方向オンライン型フレイルチェック開発と地域実装―対面とオンラインの持続的フレイル予防システムを目指して―第8回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 2021.
8. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 飯島勝矢地域在住高齢者のフレイル・サルコペニア有病率との横断的検討－食生活・身体活動・社会性の3つの重複の有効性－第28回日本未病学会学術総会, 2021.

林忠賢

1. 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 林忠賢. 芸術教育プログラムの社会的転移効果についての考察及び可能性. 生涯学習基盤経営研究; 2022年: 第46号. 印刷中. 査読有
2. 林忠賢. 大正期・戦前の図画教育における鑑賞教育の展開：全国訓導協議会の記録『教育研究』増刊号の検討から. 2021年度東京大学大学院教育学研究科紀要; 第61 巻: 2022年. 印刷中. 査読無
3. 林忠賢. 台湾の生涯学習・この一年―「学習社会白書 2.0」からみる台湾が目指す生涯学習社会―. 東アジア社会教育研究; 2021年: 第26号. pp. 180−188. 査読無

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 鈴木繁聡, 堀本暁洋, 松尾有美, 末光翔, 林忠賢, 野村一貴, 金亨善, 松本奈々子, 楊映雪. 2020年社会教育研究の動向. 社会教育学研究; 2021年: 第57巻. pp. 104-112. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 林忠賢. 大正時期・戦前の図画教育における鑑賞教育の展開―全国訓導協議会の記録『教育研究』増刊号の検討から―. 第60回 大学美術教育学会山形大会, 山形, 2021. 9. 25-26. 査読無

インフォメーション

イベントカレンダー …… 147

メディア情報 …… 149

出版物 …… 150

沿革・組織図 …… 151

イベントカレンダー

	2020年度
4月	高齢社会総合研究国際卓越大学院　WINGS-GLAFS　2020年度開講式 ジェロントロジー産学連携プロジェクト「ジェロントロジー・アカデミー」 2020年度開講式
5月	おうち時間を楽しく健康にすごす知恵 「おうちえ」 リリース
10月	柏キャンパス　オンライン一般公開2020 **オンライン特別講演会** 「人生100年時代を元気で乗り切るために－健康長寿 鍵は“フレイル予防”－」 （高齢社会総合研究機構・機構長 兼 未来ビジョン研究センター教授：飯島勝矢） **オンライン講演会** 「高齢者の社会参加を考える-千葉県柏市にある地域活動館の事例から-」 （高齢社会総合研究機構・特任研究員：高瀬麻以）"
11月	東京大学ジェロントロジー産学連携 Webシンポジウム 「人生100年時代とニューノーマル～強い産学官連携で描く未来～」開催のお知らせ Challenge to develop “New Normal” in the 100-year-life －New era picture by Industry-Academia-Government collaboration－
3月	Webシンポジウム 「高齢社会の未来協創～総合知で挑むwith/postコロナ時代～」開催のお知らせ Collaborative creation in future super-ageing society/community – New challenges targeting “with/post CORONA Era” with comprehensive knowledge- 第4回全国フレイルチェックの集い（Zoomによるオンライン開催） 「コロナに負けるな!フレイルチェックで地域をつなぐ」開催のお知らせ The 4th Nationwide meeting of community-dwelling older adults related to frailty check program -Don’t lose to COVID-19. Let’s link communities with frailty check program- ジェロントロジー産学連携プロジェクト「ジェロントロジー・アカデミー」 2020年度修了式 高齢社会総合研究国際卓越大学院　WINGS-GLAFS　2020年度修了式

イベントカレンダー

	2021年度
4月	高齢社会総合研究国際卓越大学院　WINGS-GLAFS　2021年度開講式 ジェロントロジー産学連携プロジェクト「ジェロントロジー・アカデミー」　2021年度開講式
10月	柏キャンパス　オンライン一般公開2021 オンライン講演会 【東京大学柏キャンパス一般公開2021】のIOG企画イベントとして、YouTubeライブ配信講演 【ウイズ・ポストコロナ社会でのフレイル予防～コロナに負けない！住民主体活動の創意工夫～】 （高齢社会総合研究機構・機構長 兼 未来ビジョン研究センター特任講師：孫輔卿）
11月	第1回 次世代まちづくりシンポジウム「地域包括ケアの深化～ポストコロナを展望して～」
3月	東京大学高齢社会総合研究機構 2021年度シンポジウム vol.2「ジェロントロジー総合研究が拓く新未来像」 第5回全国フレイルチェックの集い -フレイルサポーター主体の地域フレイル予防活動 -「フレイルサポーター活動のさらなる広がりと深化～ポストコロナを展望して～」 第4回全国リビングラボネットワーク会議「社会変革を実現するリビングラボ」 ジェロントロジー産学連携プロジェクト「ジェロントロジー・アカデミー」　2021年度修了式 高齢社会総合研究国際卓越大学院　WINGS-GLAFS　2021年度修了式

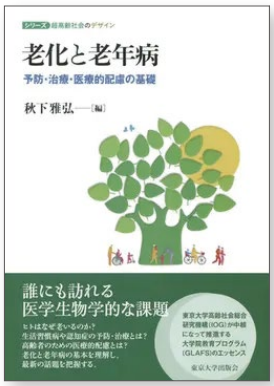
メディア情報

発売日・出演日	媒体名	記事・特集名	執筆・出演者
2020/4/6	東京新聞	外出制限イライラ発散 代行買い物生中継	飯島勝矢
2020/4/18	NHK総合	ガッテン!「新型コロナの今こそ! “ハッピーホルモン”で不安ストレス撃退」	飯島勝矢
2020/4/21	読売新聞	こもる高齢者 孤立を防げ	飯島勝矢
2020/4/22	NHK総合	新型コロナウイルス 医師が伝えたいこと「高齢者・フレイルの方へ」	飯島勝矢
2020/4/22	朝日新聞	シニア世代 健康保つには	飯島勝矢
2020/4/24	産経新聞	ご当地体操で介護予防	飯島勝矢
2020/5/12	ジャパンFM	OH! HAPPY MORNING「外出自粛の中、高齢者のフレイルを防ぐために」	飯島勝矢
2020/5/20	毎日新聞	高齢者 在宅続き虚弱状態も	飯島勝矢
2020/5/29	東京新聞	人生100年時代を生きる① フレイル予防	飯島勝矢
2020/6/13	朝日新聞 be	おうちえ	飯島勝矢
2020/7/15	朝日新聞 Reライフ	外出控えが長引くいま、東大がシニアに伝えたい健やかに過ごす知恵	飯島勝矢
2020/9/16 (12月30日アンコール放送)	NHK総合	きょうの健康「特集 老化!骨・関節が衰えると、」	飯島勝矢
2020/10/29	NHK総合	所さん!大変ですよ「はコロナ!? シニアの健康がピンチ」(VTR出演)	飯島勝矢
2020/10/31	東京新聞	高齢者細る心身	飯島勝矢
2020/12/14	BS日テレ	深層news「コロナ禍の外出自粛で忍び寄るフレイル恐怖 心と体健康保つ裏ワザ」	飯島勝矢
2020/12/21	読売新聞	社会保障 安心の設計「地域包括ケアシステム」現状と課題	辻哲夫
2021/1/29	読売新聞	長野市フレイル予防に力	飯島勝矢
2021/2/6	朝日新聞	長引く自粛で衰えないために	飯島勝矢
2021/3/10	東京新聞	コロナ禍での健康維持へ、オンライン版フレイルチェック研修スタート	孫輔卿
2021/3/29	デーリー東北	ネットでフレイル防止	孫輔卿
2021/3/29	山口新聞	ネットでフレイル防止 高齢者の交流の場にも コロナ対策から新常識へ	孫輔卿
2021/4/1	宮崎日日新聞	フレイル防止ネット活動	孫輔卿
2021/4/1	神戸新聞	ネットで交流フレイル防止	孫輔卿
2021/4/1	徳島新聞	ネットで気軽に交流 高齢者の心身虚弱防止	孫輔卿
2021/4/1	茨城新聞	ネットで交流、虚弱防止	孫輔卿
2021/4/2	熊本日日新聞	オンライン交流でチェック	孫輔卿
2021/4/5	愛媛新聞	オンラインで衰えチェック	孫輔卿
2021/4/9	高知新聞	フレイルネットで防止	孫輔卿
2021/4/11, 18	東京新聞	4/11介護予防「老い」を見える化 4/18コロナフレイル「コロナ禍ではや1年 改めて「人とのつながり」を	飯島勝矢
2021/4/14	ラジオNIKKEI第一	明日の健康「人生100年時代のフレイル対策」	飯島勝矢
2021/4/14	佐賀新聞	ネットでフレイル防止 高齢者の交流の場にも	孫輔卿
2021/4/19	山梨日日新聞	フレイル防止ネットで	孫輔卿
2021/5/9	MBSラジオ	ネットワーク1・17「1280回 コロナ禍で高齢者の体力低下〜"フレイル"を防ぐには」	飯島勝矢
2021/6/15	読売新聞	医療ルネサンス 詠んで生きる フレイル、コロナ下でも社会参加	飯島勝矢
2021/11/23	TVQ九州放送	健康特番「田中ウルヴェ京と学ぶ健康寿命100年講座」 テーマ:フレイル	飯島勝矢
2021/11/26	NHKEテレ	あしたも晴れ! 人生レシピ「しっかりした体に対策!コロナフレイル」	飯島勝矢
2021/12/11	The Economist On the front line The Economist	Japan is searching for the secrets to healthy old age	秋山弘子
2022/1/7	日経新聞	私見卓見 高齢者のフレイルを防ぐには	飯島勝矢
2022/1/19,26	NHKラジオ	ラジオ深夜便「わたし終(じま)いの極意『のばそう!“貢献”寿命』」	秋山弘子
2022/2/20	韓国MBCテレビ	MBCドキュプライム「あなたの筋肉はお元気ですか」	飯島勝矢
2022/3/17	婦人公論	【558人のアンケート読み解き】 人生100年時代を楽しく生きるコツは〈働く・学ぶ・遊ぶ・休む〉のさじ加減 老年学の専門家がセカンドライフ設計をアドバイス	秋山弘子

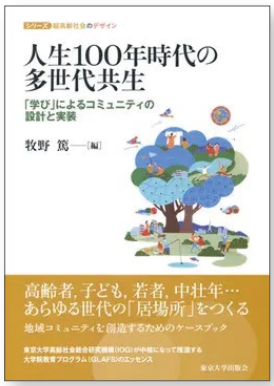
出版

シリーズ〈超高齢社会のデザイン〉

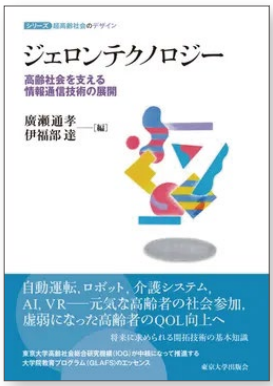
GLAFS講義をもとにジェロントロジーという学問の体系化を目指すシリーズ本刊行中（2022年度以降も続刊予定）



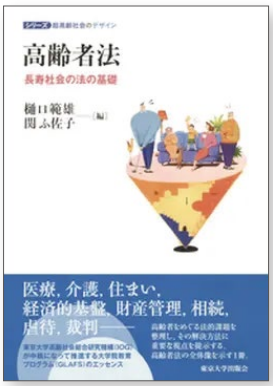
老化と老年病
予防・治療・医療的配慮の基礎
秋下雅弘編　東京大学出版会
2020年2月



人生100年時代の多世代共生
『学び』によるコミュニティの
設計と実装
牧野篤編　東京大学出版会
2020年9月



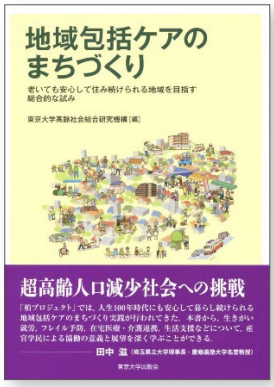
ジェロンテクノロジー
高齢社会を支える
情報通信技術の展開
廣瀬通孝・伊福部達編
東京大学出版会　2021年11月



高齢者法
長寿社会の法の基礎
樋口範雄・関ふ佐子編
東京大学出版会　2019年8月

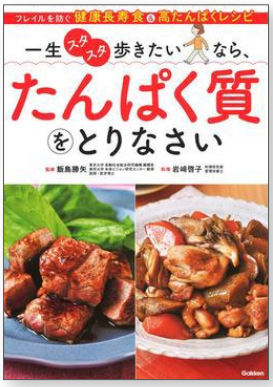
IOGメンバーの著書

今日からできるフレイル対策
在宅時代の落とし穴
飯島勝矢著　KADOKAWA
2020年8月



地域包括ケアのまちづくり
老いても安心して住み続けられる
地域を目指す総合的な試み
東京大学高齢社会総合研究機構編
東京大学出版会　2020年10月

地域で取り組む
高齢者のフレイル予防
辻哲夫・飯島勝矢・服部真治編著
中央法規出版　2021年4月



一生スタスタ歩きたいなら，
たんぱく質をとりなさい
フレイルを防ぐ健康長寿食
＆高たんぱくレシピ
飯島勝矢監修　学研プラス
2021年6月

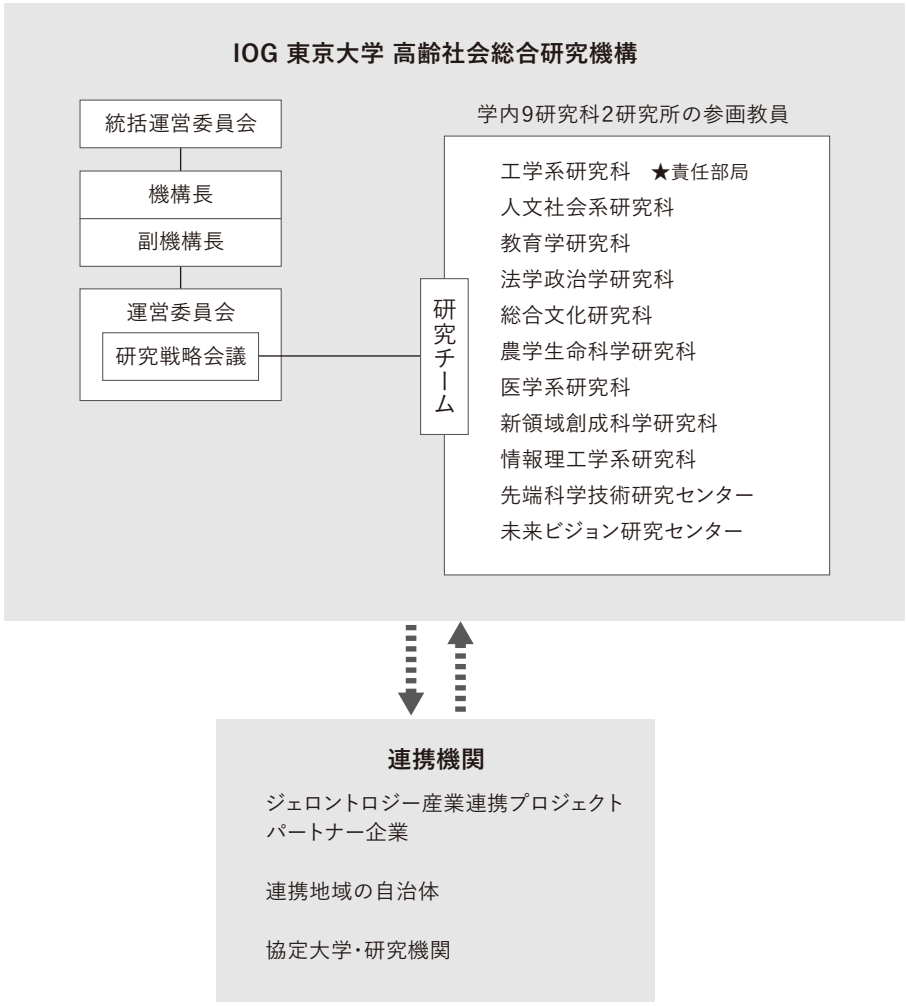
地域社会のつくり方
社会関係資本の醸成に向けた
教育学からのアプローチ
荻野亮吾著　勁草書房
2022年1月

口トレ・脚トレで“若返り”！
老化のもと「フレイル」を防ぐ
（別冊NHKきょうの健康）
飯島勝矢監修　NHK出版
2022年2月

沿革

2006年 4月	**ジェロントロジー寄附研究部門　設置** （平成18年4月に、総長室総括プロジェクト機構の活動の一つとして、日本生命保険相互会社、セコム株式会社、大和ハウス工業株式会社の3社からの寄附金により設置）
2008年 4月	**学部横断型ジェロントロジー教育プログラム　開講**
2009年 4月	**総長室総括プロジェクト機構・高齢社会総合研究機構　設置** **産学連携ジェロントロジーコンソーシアム　設立**
2009年 6月	**柏市豊四季台地域高齢社会総合研究会　発足** （柏市、東京大学高齢社会総合研究機構、独立行政法人都市再生機構の3者による共同研究会）
2010年 11月	**東京大学柏キャンパス第2総合研究棟　竣工**
2011年 4月	**産学ネットワーク「ジェロントロジー」　設立**
2011年 5月	**東京大学柏キャンパス第2総合研究棟　稼働開始**
2014年 4月	**博士課程教育リーディングプログラム** **「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」（GLAFS）　開講**
2020年4月	**連携研究機構・高齢社会総合研究機構に改組** **ジェロントロジー産学連携プロジェクトに組織変更** **国際卓越大学院教育プログラム（WINGS-GLAFS）　開講**

組織図



IOG 活動報告書 2020−2021
東京大学高齢社会総合研究機構
Institute of Gerontology, The University of Tokyo

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 工学部８号館７階
TEL.03-5841-1662（代表） / FAX.03-5841-1662
E-mail：info@iog.u-tokyo.ac.jp

発行　2022年8月

Editor/Writer 香川志帆（オフィスブライシング合同会社）
松嶋一人（株式会社シンカ）
Designer 相馬丈晴（株式会社グローブグラフィック）

http://www.iog.u-tokyo.ac.jp/

東京大学 高齢社会総合研究機構
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 工学部8号館713号
TEL./FAX. 03-5841-1662